山岳

XLVIII

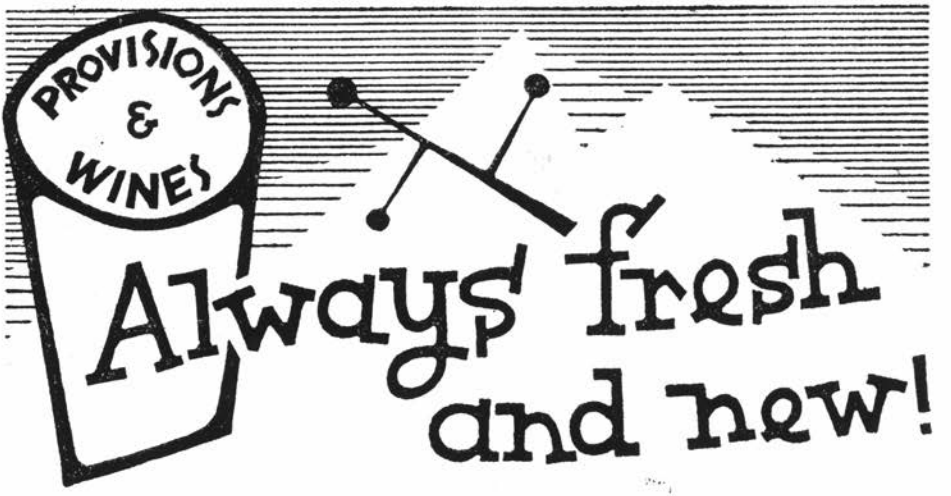
東洋レーヨンの
ナイロン

テント・スリーピングバック・アノラック
ジャンパー・ザイル・シール・etc.

マナスル登山隊のナイロン製品
はすべて東洋レーヨンのナイロンです

東洋レーヨン株式会社

ニッサン石鹸
ニッサン
マーガリン
日本油脂



誰にも喜ばれる　世界の味

明治屋の和洋酒・食料品

東京　横浜　鎌倉　名古屋　京都　大阪　神戸　岡山　広島　門司　福岡　小倉　熊本　佐世保　金沢　福井　富山　新潟　仙台　函館　札幌

本社・東京都中央区京橋二丁目四番地
電　話　(56)　6111～6118

MEIDI-YA

Manaslu, 26,658ft., from near Bimtakhoti

（マナスルウ、8125m.—ビムタコーチ附近より）

山岳

第四十八年

山岳　第四十八年　目次（一九五三年度）

アンナプルナとマナスルウ……今西錦司…一
「ツェルマットのクラブ室」を中心として……成瀬岩雄…六〇
冬の知床半島の山々……A・A・C・K京都大學山岳部…一〇一
木曾御嶽の夏（赤川谷と傳上川）……新井清…一一九
ヘルヴェチア・ヒュッテと秩父宮殿下……山崎春雄…一三〇
セガンチニの跡を訪ねて……津田正夫…一三六
ヒマラヤ遠征と英國の人々……島田巽…一四三
追悼　秩父宮殿下（槇有恒・松方三郎）……一四八
ヒマラヤン・ノーツ　スイス隊のエヴェレスト（田中榮藏）……一五二
Annapurna and Manaslu, 1952（英文）……巻末一
確保論……金坂一郎…三

圖版

マナスルウ（八一二五m）―ビムタコーチ附近より……巻頭
アンナプルナ第三峯……對頁六
一九五二年先遣隊々員……七
ブラガの部落……一二
チョルーの五八五〇mに於けるキャンプとアンナプルナ第三峯・同じキャンプとアンナプルナ第四峯の夕景……一三
マナスルウの西面……二〇
マルシャンデイ源流地帶から見たアンナプルナ第三峯……二一
アンナプルナ・ヒマール山群……二八
ラルキヤ峠の西側からヒムルン・ヒマールを望む……三六
チベット國境に近い無名の七千米峯……三七
ラルキヤ峠の東麓から見たマナスルウ……四四
ラルキヤ・バザール……四五
マナスルウの東尾根にて……五四
マナスルウの東尾根へ向つて……五四
マナスルウ氷河とナイケ……五五
"The Club-Room of Zermatt" 1864……六八
An "Off-Day" in Monte Rosa Hotel……六九
羅臼岳頂上より硫黄山を望む（寺本巖）……一〇六
冬の知床半島の山々（寺本巖）……一一一
知床半島カモイウンベ沖にて（依田孝喜）……一一三
知床岳第二キャンプ（依田孝喜）……一一三
サヴオニン時代のセガンチニ……一一八
アルコの公園にあるセガンチニ記念像……一一八
「耕作」製作中のセガンチニと彼の妻……一二九
マロヤのセガンチニの墓……一三九
秩父宮雍仁親王殿下……一四八
立山御登山の折の殿下とその一行……一四九

挿圖

A Sketch Map of Central Nepal Himalaya……對五八
"The Club-Room of Zermatt" 1864 説明圖……六八
知床半島概念圖……對一〇七
木曾御岳濁川概念圖……一二四
赤川地獄谷見取圖……一二五

（表紙　佐藤久一朗）

アンナプルナとマナスルウ

——ティルマンの足跡をたどつて——

今西錦司

マルシャンディ

九月一四日、カトマンズ出發の日。王様の離宮のある、樹木のよく茂つた丘のすそまで、ダルシャン君やクリシュナ君が自動車で送つてくれた。それから一粁もゆかぬ中にもう渡渉がはじまる。あきれたものだ。これからさきの道の悪さが思いやられる。

雨が降つてきた。火山の裾野を開拓したような地形。出發がおそかつたので、カカニ Kakani まではむずかしい。山麓のファスマニフェディ Fashumanifedi という街村で、茶店に一泊することになつた。中尾が、この雨ではポーターの到着は九時か一〇時ごろになるだろうと得意になつて予言していたら、三〇分とおくれないで彼らは續々とやつてきた。サルキ Sarki が道のまん中に立ちふさがつて、われわれの個人用装備を背負つたものは右側の茶店へ、そうでないものは左側の物置へ、荷物を運びこむように指圖している。

七四名のポーターに、一人の若いポーター頭がついている。彼は蝙蝠傘を片手にさげているだけで荷物をかついで

いない。ポーターたちは荷物をおろしてしまつたら、あとは自分の好きなところへ行つて好きなように泊ればよいのだが、このポーター頭だけは荷物置場でねていた。

朝。どこにも便所がない、どこへ行つてもたれ流してある。村のまん中にある水くみ場のまわりに、いくつも石の祠が並んでいて、手水をつかいにきた連中が、いちいち禮拜してゆく。子供がやつてきて祠に刻んである佛さんの顔をなで、その手で自分の顔をなでている。通譯のディリー君が木の枝をかんでいる。齒ブラシのかわりだという。どんな木をつかつているのか、持つてこいといつたらムクゲの枝をもつてきた。

カカニはなかなか遠い。いつまで登つても、ふりかえるとカトマンズの町が見えている。水牛を三〜四〇頭も追つてくるのに出あつた。大きな蛭のくつついているのがいた。二〇〇〇米あたりから、シャクナゲが多くなつた。

カカニへ來たが、霧がさまよつている。ヒマラヤは見えない。晝食をとつているとまた雨。降路は登路以上にけわしく、溝のようにくぼんでいて、そこを雨水がじやあじやあ流れている。途中の一軒屋の軒先には、ポーターたちが雨宿りしているので、われわれは、かたわらに植えたボダイ樹の木蔭を求めて水牛の乳をのんだ。見すぼらしい家だつたが、女の子が小屋から追いだすところをみていたら水牛の雌が四頭と普通の牛の子が一頭出てきた。

その夜は、煉瓦づくりの無料宿泊所にねた。戸のない入り口から外を眺めていると、螢の光りが、すーつと通つてゆく。外へ出たらボダイ樹の梢一面にちかちかと、螢の光りが明滅していた。向う側にもう一軒宿泊所があつてポーターたちが泊つていたが、そこからはおそくまで歌聲が聞こえてきた。

誰かが山が見える、という。急いで外にでると、なるほど雲の上に白い雪の山が出ている。正面にひとかたまりと、ずつと西の方にもうひとかたまり、その方はおそろしく尖つている。正面がガネッシュ・ヒマール Ganesh Himal, 7406 m で、西の方の尖つた山はヒマールチュリ Himalchuli, 7864 m だ。ヒマールチュリの右に一段と奥まつて、さむざむとした白い山が顔をだしている。これこそマナスルウ Manaslu, 8125 m であつた。

山を下りきつて川ぞいの平地へ出た。どこもかも青々とした稲田である。ところどころで灌漑水が、道を横切つたり道にあふれたりしている。はだしで歩いているポーターたちには、いつこう差しつかえないが、靴をはいたわれわれにとつてはネパールの田圃道は苦手である。

やがて道はリク・コーラ Likhu Khola 沿いに山鼻をまわりながら、立派な吊り橋のあるところへでた。對岸の村落へはいつて晝食にしようとしたところ、今日はランチがつくつてない、という。シェルパもネパール人も二食でよいのかも知らないが、われわれ日本人は晝食抜きでは我慢できない。さつそくパンシー Pansy に村中さがさしたが、ノーエッグ・ノーチキンである、仕方ないから梱包をといてベーコン一鑵とチーズ一鑵とを拾いだし、これを晝食のかわりにした。

村の連中が人垣をつくつて、われわれを見物にくるのに閉口して、とある物置小屋の二階に避難した。そこにはトウモロコシの收穫が、うず高く積んであつた。湯をわかさせ、それでコーヒーをつくつて飲んだら、とたんに汗が瀧のようにでてきた。

田圃をつき切つて、ナワコット Nawakot へ、赤土の道を登つていつた。咽喉がかわくけれども生ま水はのまないことにした。ナワコットには印度兵が駐在していた。村の外れまでくると、道の兩側にぎつしりと家の並んだトリスリ・バザール Trisuli Bazar が、眼の下に見えた。明日越えようという峠の上には黑い夕立雲があつまり、その下から夕日がななめに射しこんで丘の斜面に生えた三葉松を照らしている。

最後の勇をふるつてトリスリ河のほとりまで下りた。チベットから流れてくる川だけあつて、たいした水量であり、また水勢である。ヒマラヤの川なるかなと思つた。橋をわたつたところで印度兵から直立不動の姿勢で敬禮された。案内をたのむ。今夜はどこかで舍營するのだろうと思つていたのに、バザールをはなれてゆく。向うの森の中にテントが見えた。日はまさに暮れようとしてセミがひとしきり鳴いた。

むやみに水がのみたい。紅茶よりもプレーン・ホット・ウォターがのみたい。バナナ一本と湯を三〜四杯のんだら、どうやらすこし元氣をとりもどした。しかしパンシーの料理は半分ぐらいしか食えなかつた。水をのみすぎた田口、中尾もまた食慾減退で、田口が半分のこしたというのは珍らしいことであつた。

こういう苦しさは一日だけですんだ。翌日から、もつと水分をとるようにしたからである。ただわれわれは、なんと思つてもポーターたちのように田圃の水をのむ氣にはなれなかつた。それで道みち茶店のあるごとに茶やら牛乳やらをのんだが、たまたま上流に田圃のない谷川でも見つけようものなら、ばく進していつて、その水を思う存分がぶ飲みしたものである。

もう一つは暑さあたりを避ける工夫として、日中ときどき川の中につかつて、身體を冷やすようにしたことであつて、われわれはこれをバファロウイング——水牛遊び——と名づけたが、これをもつとも愛用したのは田口である。彼は歩いているかと思うと、すぐまた水につかつて、シャツもパンツも、いつもずくずくのままであつた。

トリスリ河畔のトリスリ・バザールから、ブリ・ガンダキ Buri Gandaki 河畔のアルガート・バザール Arughat Bazar までゆくには、三つの峠を越さねばならない。最初の峠がサムリ・バンジャン Samri Bhanjyang、高さ一三〇〇米。つぎは峠越えというよりも、むしろ山越えといいたいところ、尾根傳いにだいぶ手間どる。下り口に近くカトンゼ Katunje と云う村がある。この山越えの最高點は一五〇〇米ぐらい。

トリスリ・バザールからわれわれはサムリ・バンジャン一泊、カトンゼ一泊と、山の上でばかり泊るようになつた。それがちょうど一日行程にも當るのだが、また山の上はアノフェレス（マラリアをうつす蚊）がすくなく、健康地であるため聚落はかえつて山の高いところに發達する傾向がある、ということも否定できない。

そういうことがあつてか、耕地もまたずいぶん高いところまで登つている。カトンゼへの山越え道から谷一つへだてた對岸の山などは二〇〇〇米はあるだろうが、谷底から八合目ぐらいまでのあいだ階段狀をなして並んだ水田に埋

めつくされていて、じつに見事なものであつた。なおよくみると中腹に何軒かの家がかたまつている。あの村の人たちが、この勞作に從事しているのであろう。

山越えの尾根道の途中に一個所休み場があつて、そこに酒をひさぐ女が何人か出張していた。酒を飲ませる店は道中至るところで見うけたが、ここは掛け小屋さえ設けてない。ポークーたちがあつまつて酒を注文している。女は黒いもろみのようなものを壺に入れ、そこへ水をさして棒でこねてから、それを椀にうつして差しだす。シコクビエからつくつたいわゆるドブロクである。われわれは米を蒸溜してつくつた、もつと透明な酒（これをロキシー raksi という）を味わつてみた。なかなか野趣があつてネパールの旅もすてたものではない。

晴れていたらカトンゼの村外れは山を眺めるのにあつらえ向きのところだが、相かわらず曇つていて雲の間からガネッシュの氷河がちらと見えたきり。どんどん山をおりてアンク・コーラ Ankhu Khola の吊り橋まできたら、橋畔の家に魚がとつてあつた。サハールという魚で大きなのは六〇糎もある。さつそく大きそうなのを一匹買つて、河原におりて石の上で刺身をつくりレモンをその上にしぼつて食つた。

午後はアンク・コーラの川沿いに歩いた。氷河から出てくる水をたたえて、アンク・コーラもトリスリ河のように白く濁つて冷たい。しかし、かえりに――十二月に――通つたときには、川の水がきれいに澄んで川底の石には藻が繁殖していた。水牛や山羊の放牧された、きれいな草地をすぎて圓礫ばかりからできた丘にさしかかる。これが第三の峠である。峠へは出ないで右手に樹林のあいだを登ると、ぱつと眼界がひらけて草でおおわれた高臺の上に出た。キャンプには絶好の場所、ここはサレンタール Sallentar の一角であつた。

昨日は珍らしく雨が降らなかつたと思つていたら、いつ頃から降りだしたものか、さかんにテントをたたく雨の音がする。ちようど六日間行軍をつづけたことだし、一日休養するのもよかろう。ただし、休養日に休養できぬのは、お醫者さんの林である。患者が續々とつめかけてくるから。また休養といつても、日が射してくるとテントの中には

いたたまれぬぐらい暑くなる。低地用テントのデザインを、もうすこし考えておくべきであつた。

サレンタールからアルガート・バザールまでは、わずか一時間半の道のりであつた。バザールは、ブリガンダキ河の吊り橋を渡つた右岸の崖の上にあつて、煉瓦づくりで藁屋根の家が立ちならび、トリスリ・バザールの賑かさはないが古びておちついた感じを與えた。店屋も食料品や日用品を商う家の多いトリスリ・バザールにくらべて、ここでは呉服屋や仕立屋の多いのが眼をひいた。

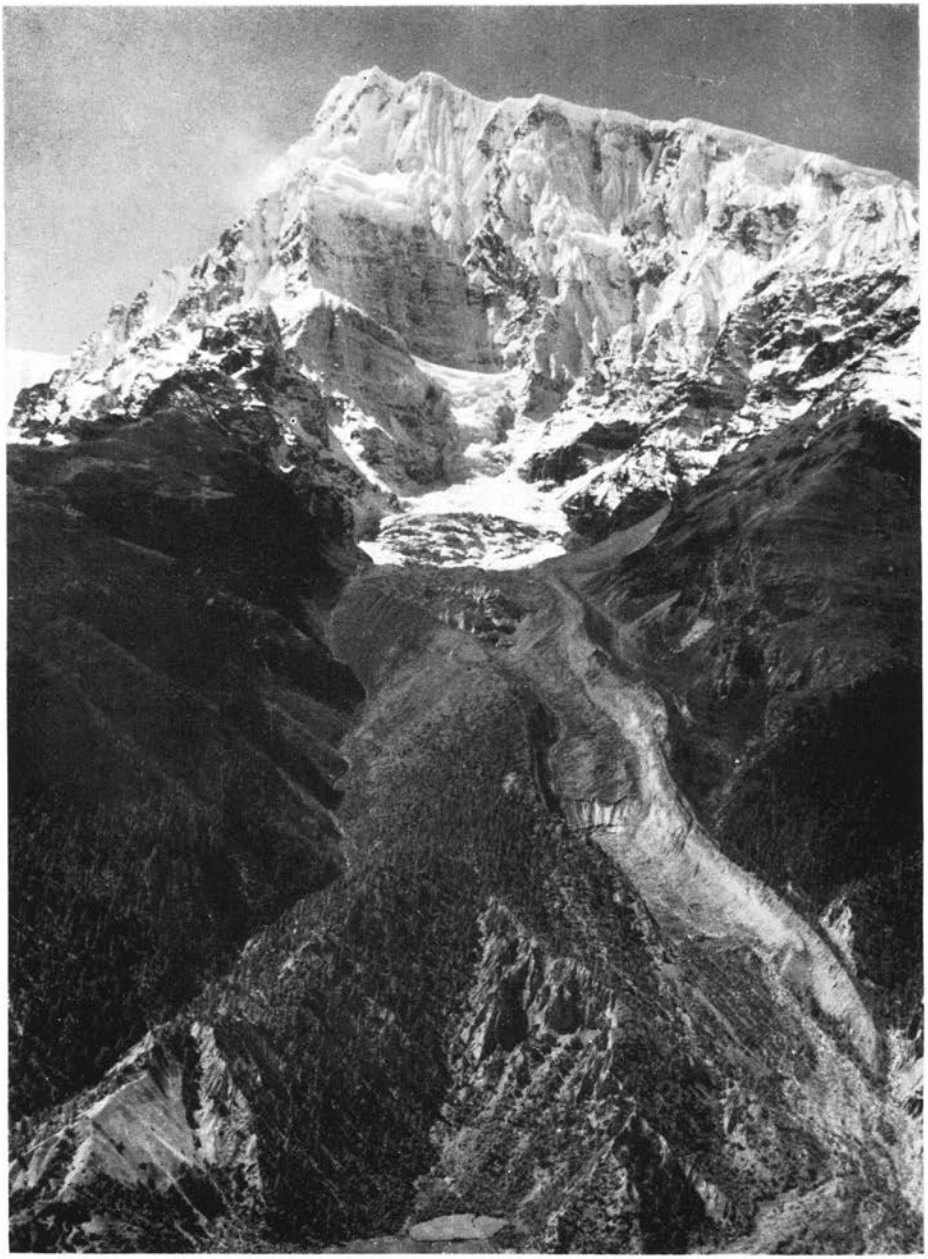
バザールの家は煉瓦づくりで都會風だけれども、この邊の一般の農家は二階建て、藁屋根で壁には土をぬつている。白壁の家も赤壁の家もあつた。おも家に附屬した物置きなどになると、もうすこし粗末になつて壁が石でたたんであつたり、屋根は藁のかわりにクリによく似た穀斗科の植物の葉で葺いたものが多い。

ブリ・ガンダキの水もやはり灰色に濁り、水面を波立たせながら流れている。マナスルウを一周すれば、いつの日か、この水とともにここにかえつてくることであろう。雲が低くたれて水かみの山は見えなかつた。

バザールを出はずれたところで休んでいると、頭の上のボダイ樹の枝に大きなサルがいるではないか。三頭もいた。それからふと對岸の岩壁をみると、そこにもいる。岩壁からおりてきて、しまいに河原の上まで出てきた。二〜三〇頭の群れである。人がそばを通つても、ちつとも逃げようとしない。いじめないことを知つているからであろうか。いじめないだけでなくて、バザールの人たちは、あるいは彼らに食物まで惠んでやつているのでないだろうか。

ネパールの首都カトマンズと第二の都ポカラ Pokhara とを結ぶ街道といえば、わが國でならさしずめ東海道というところである。それだけに交通量も多くて、カトマンズ出發以來の四〜五日というものは、ひんぱんに通行人とすれちがつた。その多くはカトマンズへ物資を運ぶ運中だが、とりわけニワトリを籠に入れて背負つてゆくものが多かつたので、まるで「ニワトリ街道」じやないか、と戯談をいつた。

それがカトマンズを遠ざかるにしたがい次第に通行人がへつてきて、もうニワトリをかついでゆくものも、ほとん



Annapurna III

(アンナプルナ第三峰)

Members of The Reconnaisssance Expedition, 1952.

（1952年先遣隊々員）

Back row: Anno, Pansy, Sarki, Gyalzen, Dako, Angtsering,

Front row: J. Taguchi, M. Takagi, K. Imanishi, S. Nakao, K. Hayashi.

ど見られなくなつた。それとともに道もたしかに悪くなつた。アルガート・バザールからカンツォ Khanchok への登りや、カンツォからグランディ・コーラ Darondi Khola への降りは谷沿い道だが、渡渉の連續で、靴をぬらすまいと思つて、はだしで歩いてみたり、最後にはとうとう日本から行李に忍ばせていつた草鞋を着用に及んだりした。

グランディ・コーラはルピナ・ラ Rupina La から出てくる、堂々とした川である。その吊り橋を右岸に渡つたところで晝食にしていたら、變な甲高い叫び聲がする。なにかと思つたら、渡渉中の二頭の水牛を激勵する聲であつた。渡渉といつてももちろん水牛は泳いでわたるのである。一頭は對岸までこぎつけたが、もう一頭は水勢に抗しきれず流されて中洲にあがつてしまつた。

グランディ・コーラについて、下つていつた。對岸の繁みにはクコノキがたくさん生えている。白い穗をつけた背の高い草が一面に生えたところを通る。ちよつとススキを思わすがサトウキビの一種である。激流が河岸をどんどん浸蝕するので、この間まであつた道がもうなくなつてしまつている。ジャングルの中に新たにつくつた切開けをたどる。雨は降つている。宿泊豫定地のコプラン Khoplang は、どの邊にあるのだろうと思つていたら、やはり尾根の上にあつた。

翌日も雨、道は泥んこ、ポーターたちは出しぶつている。田口、高木、林はおしきせのビニロンのマントを着ているが、身體にべちゃべちゃひっつくうえに暑苦しくて、かえつて汗を餘計流すようなことになるらしい。今西と中尾はポナペ島以來、熱帶用には蝙蝠傘をさしているが、けつきよくこの方が快適でもあり實用的でもある。

レンテル・バンジャン Lentel Bhanjyang で、うまいパパイアを食つた。青物といつてはお化けのように大きな胡瓜があるだけだつたが、そのかわりバナナ・パパイア・ライムなどという果物なら、ふんだんにとることができた。雨の日はボダイ樹の木蔭もぬれているので、道ばたにたててある、床の高い見張り小屋のようなものにあがつて

休んだ。

すべりやすい坂路のくだりで下からシェパードが一匹やつてきた。えらいものが出てきた。しかし、ここはネパールではないか。おかしいなと思つていたら、やがてその持ち主である若い男女が現われた。普通の百姓ならはだしであるのに靴をはいている。シェパードは吠えようか吠えまいかと二度ほど主人の方を振りかえつたが、とうとう吠えずに行きすぎた。曰くありげな行人だから「ナマスティ」と挨拶だけはかわしておいたが、あとで聞いたらそれはポカラ縣の知事夫妻であつた。

雨にくもつてよくわからないが丘のようなところばかり歩いていて、マルシャンディ Marsyandi までの間には、もう山らしい山はなさそうである。道の両側はシャボテンによく似て、とげとげのあるユーホルビアの垣根、それは水牛が作物を荒さぬためにつくつたものであろう。けれどもそのため水牛の通る道も人の通る道も一つになつてしまつて、泥濘はいよいよはなはだしい。

クルクガート・バザール Tarkughat Bazar までと思つていたが、行程はかどらずしてバハラ・フィルケ Bahara firke という、ちつぽけな村で泊ることになつた。宿泊所などあるわけではないから、ポーター並みに街道に面したあけつぱなしの小屋で我慢した。ティルマンと同じ日程で前進できないことが、いささか不滿である。

サーダーのガルチェン Gyalzen にいわせると、ティルマン H.W. Tilman のときはリエゾン・オフィサーのマラア大佐のほかに、カトマンズから大佐についてきた五人のネパール兵がいて、それが始終ポーターの尻をたたいたから行程がはかどつたのであるという。なおその他に三人の巡査がいてゆく先きさきで驛傳式に變わりながら、ポーターの徵集や物資の補給に當つていた、というのである。

だから、ガルチェンとディリーとが相談して、これからさきはわれわれにも巡査がいる、といいだした。そこでディリーの書いた手紙を持つて、ポーター頭が明日の早朝ここを發つてクンチャ Kuncha に走り、巡者を三名つれて

くることになつた。荷物をもたないポーター頭でも役に立つことがあるものだ。

顔を洗いに出ていつたら行手に眞つ白な山が見える。マルシャンディの向うだから、アンナプルナ Annapurna の續きであるにちがいない。出發してしばらく行くと、こんどは右手にものすごく立派な山がでた。どう見ても手の出しようがない山だ。これはヒマールチュリだつた。雲が動いてきて見ているうちに山々をかくしてしまつた。

クルクガート・バザールは、トリスリ・バザールやアルガート・バサールとは比較にならぬぐらい田舍じみていた。マルシャンディにかかつた吊り橋を渡つたところで道が二つにわかれる。上にあがつてゆくのがクンチャ Kuncha を經てポカラへゆく道、川に沿つたのがマルシャンディの上流へ行く道。その小道を重い荷物を背負つて、急ぎ足で過ぎゆく男がある。われわれも明日はいよいよ街道をはなれて、あの道にのるのかと思うとうれしい。マルシャンディ入りを祝つて山羊を一頭ほふつた。

翌朝、マルシャンディをしばらく登つたところで、向うからわけのわからぬ男が大聲でわめいてくるのに出あつた。ネパール語だからわからないが、なにか重大なことをいつているらしい。ボダイ樹の木の下にガルチュンとパンシーが休んでいたから聞いてみると、その男は巡査で、マルシャンディは道がこわれて交通杜絶しているから、ポカラ——ムクチナート Muktinath——マナングボット Manangbhot という道をえらべ、といつているのだそうである。ポーターたちの顔にもすこし動揺の色が見える。とにかくディリーの來るのを待つことにした。

彼は、ディリーが頼んでやつた、クンチャの三人の巡査の一人であつた。ディリーはまず、巡査の證明書を見せろ、といつている。それから、いろいろと聞き糺したところ、マルシャンディは困難であるというだけで、べつに橋が落ちたのでも、道がこわれたのでもない。だい一、この巡査はまだマルシャンディを歩いたことがないのである。これはおそらく二日後にせまつたお祭りを棒にして、われわれについてゆくのがいやなため打つた拙い芝居にすぎなかつたであろう。

せつかくマルシャンディに入つたのに、やつぱり田圃の中を歩くことが多い。暑くてやりきれないから「水牛」をしていたら下の方にほんとうの水牛がいた。人のよさそうなネパール人が二人立ちどまつて、いつまでもわれわれの水遊びをみている。また夕立でもしそうになつてきた。ヒマールチュリから出てくるドルディ・コーラ Dordi Khola についたら、もうテントが張られていて例によつて人だかりである。甲狀線腫にかかつているものが多い。一〇歳ぐらいの子供で、もうすこしふくれかけたのもいる。チベットから來る鹽には沃度がないため、おこる病氣であるというが、眞僞のほどはわからない。林が診療をはじめるといつたら見物人は一人のこらず、そつちの方へいつてしまつた。

五時半、山が見えるという聲に驚ろいて起きるとマナスルウ三山がすつかり出ている。カカニの下りに見たときとちがつて、マナスルウはヒマールチュリの左になり、その間に P二九 Peak XXIX 7835 m がはさまれている。マナスルウの頂上から、まず日が射しはじめる。瞬間まつかに染まる。ついで P二九 も、すごく尖つている。ヒマールチュリの方がこゝから見ると幅ができて、かえつてとがつていない。P二九 とヒマールチュリの稜線から雪煙がたなびいている。

マナスルウは、ここからまだ六〇粁もはなれている。五萬分の一の地圖にすれば四枚もさきにあるのだ。それがこのようにはつきりと見えるのだから、八〇〇〇米という高さがいかに高いものであるか、わかるであろう。

今日はクディ Khudi まで四コース、トリスリ・バザールまでの日に匹敵する强行軍である。ところで、ネパールでいう一コースとは、距離の單位であるにはちがいないが、どれだけの距離を指したものかはつきりしない。人によつて、それは歩いているうちに、水にぬらした手拭いが乾くまでの距離だともいうし、また手に持つた木の枝の葉がしおれるまでの距離だとも聞いた。

だいぶ歩いてから、振りかえつておどろいた。われわれの入つてきたところがわからない。河がどこへ流れでてゆ

くのか、わからない。山また山が、それも低い前山が、重なり合つていて、雪をいただいた山や河の流れが見えないかぎり――そしてそのときはどちらも見えなかつたので――どつちが上流で、どつちが下流だか見當がつかないのである。地形だけで判斷すれば、上流を向きながら、むしろ下流を見ているようでもあつた。ヒマラヤでは、われわれのもつている地形學が役に立たないという經驗の、ほんの一例をあげたにすぎない。

明日からお祭りというので、どこの村でも太鼓をどんどこたたいている。女、子供は、額に米つぶを七つも八つもくつつけている。お祭りの御馳走に水牛の肉を賣買しているところもある。ウシを食つてはならないヒンヅー教徒も、水牛やヤクの肉ならかまわないのであろう。山羊を引つぱつてゆくものもあつた。

日暮れどきに、やつとクディ・コーラの吊り橋まで來た。キャンプは對岸の河原の巨石のあいだに設けてあつた。また六日間歩いたことでもあり、これからいよいよマルシャンディの峽谷入りになるので明日は滯在して休養しよう。それにポーターたちにとつても明日は祭日であるから。

しかし、カトマンズのポーターたち、なんだかおだやかでない。もうここから歸えりたいというのであるらしい。クディのヘッドマンにも相談してみたが、なにしろ祭りのことだからポーターに出ようというものがない。やつと二人約束ができたので、足をいためている二人だけをここから歸えすことにした。

向う岸を、山の上の村から死人をかついだ行列がおりてくる。棺にもいれないで、布でつつんだままを棒にくくつて、その棒を一行中の二人がかついでいるのだが、布につつんでも人間の形をしていて氣味が悪い。今日はお祭りなんだが、かえつて吉日というので葬式しているのかもしれぬ。やがて下流の方で人をやく煙りが立ちのぼるのを見た。しかしヒンヅー教徒は、火葬でなくて最後は水葬にするということであつた。葬列に參加しているのは男ばかりであつた。

マルシャンディの峽谷部へはいつた。日なたを歩いているときは相かわらずさかんに汗がでるが、日蔭にはいると

ばかに涼しい。秋風らしいものが吹いている。右岸ばかりをつたい、最後にひた登りに登つて一四〇〇米でキャンプ。こんな高い所に案外村がある。水田はこの邊でも一五〇〇米まではつくつている。

カトマンズのポーターたちは着のみ着のままだから、朝夕の寒さがこたえるらしい。また歸りたいとレジスタンスをはじめた。しかし、テグリン Tagring までゆけば先行した二人の巡査がポーターの用意をしているというので、もう一日辛抱してもらうことにする。

河のそばへおりるとマルシャンディの白濁した水は、巨岩のあいだをものすごい勢いで流れている。水溫も正午で攝氏一二度だから、この流れだけはヒマラヤの氷河の面影を宿しているけれども、川の岸には木性羊齒が生えている。パピリオ（アゲハチョウの類）が、るり色の派手な紋をつけて飛んでいる。

巨岩の下でキャンプしていたらテグリンのポーターたちが、黑縞のはいつた手製の毛布を頭からかぶつて、續々と現われはじめた。これをみてカトマンズのポーターたちは一齊にわーつと歡聲をあげた。よほどうれしかつたのにちがいない。これでもうポーターのことを心配せずにベース・キャンプまで行けるようになつた。

峽谷部へはいつて三日目の晝まえ、ジャガート Jagat 通過。柑橘類はもうここが最後だろうと思つて買いこむ。ジャガートというのは、「何かくれ」という意味だそうである。道理でここは、貧しく、もうほとんど水田をつくつていない。それにかわるものはシコクビエである。

四日目になつてはじめて竹製の吊り橋を渡つて左岸へうつつた。テグリンのポーターたちは、すぐ竹をそいで巾一糎ぐらい、長さ二米ぐらいのものをつくるが、これが彼らにとつては繩の役目をするのであつて、ものもしばるし、また吊り橋の材料にもなるのである。

兩岸の岩壁が見あげるばかり高くなつてきた。その岩壁の上にはマツも生えているが、しかしまだヤシが生えている。すこし傾斜のゆるいところには、野性のバナナも生えていた。峽谷のもつともせまつたところで、右岸から大き

Braga village with 'La Grande Barrière' in the background

（ブラガの部落——遠景はアンナプルナのグランド・バリエール）

(*Above*) *Camp at the height of 5850m on Chulu.*

Annapurna III (チョルーの5850mに於けるキャンプとアンナプルナ第三峰)

(*Below*) *Same camp and Annapurna IV.* (同じキャンプとアンナプルナ第四峰の夕景)

な支流がはいる。その奥をみると瀧の連續であつた。

本流はというと、これもこのせばまつたあたりで急に落差を増して、下から見たところでは瀧でもありそうだつたが、近づいてみると巨岩が累々とつみ重なつているだけで、水はその下にもぐつてしまつているから、なんのことはない、一種のから瀧をつくりだしているのである。ここもちよつと首をかしげさす地形であつた。

その部分を乘りこしてしまうと、河相が一變してマルシャンディはひろい河原を、ゆるやかに蛇行しながら流れている。梓川の河原のようだ、といつたものもあつた。河べりに家が一軒あつて、屋根のない小屋に、まつ赤に實のつたトウモロコシが干してあつた。家のまわりの畑にはアマランサスが葉鷄頭のように美しかつた。河原におりて晝食していたら、水きわの石にセキレイがとまつて尻尾をふつていつた。

トンゼ Thonje までもう一～二時間というところまで行つてキャンプ。五〇米ほどへだたつた岩の上に、ひと群れのラングールがいる。顏は漆黑で、頭も顏のまわりも、ふさふさとまつ白な毛でおおわれた大きなサルである。尻尾がたいへん長くて、そのさきがちよつとライオンの尻尾のように、ふくれている。親ザルも仔ザルもいる。仕ぐさはマカカ――アルガート・バザールでみたサルや、ニホンザルはマカカである――と、そうちがつてはいない。

朝食に、はじめてバターがかたくなつていた。右岸にわたる。もう水量が少なくなつているので、吊り橋でなくて板橋（ランドンの本に寫眞の出ているカンティレバー・ブリッヂ Cantilever bridge）である。異様な動物が草を喰つている。それが、ウシとヤクとの雜種、ゾー dzo であつた。ブチア Bhutia の女が、毛糸をつむぎつつ通つてゆく。われわれはいまや、チベット人の住む地域に足をふみ入れたのである。

對岸から支流が入つている。兩岸の岸壁が切りたつた上に、ひどく接近しているものだから、まるで戸のすき間をのぞいているような感じがするばかりでなく、のぞいたところも晝なおくらい神祕めいた谷であつた。そのすぐさきに數軒の家がかたまつていて、ここをグラパニ Darapani という。物資の集散地で、にぎやかである。米、ニワト

リ、鶏卵などを買いこんだ。われわれのテグリンのポーターたちは歸えりがけに、ここで鹽を仕入れてかえるつもりらしい。

トンゼは左岸にあるので、中尾とディリーとガルチェンの三人だけがヘッドマンに會いにいつた。この邊までくるとコインでなくては通用しなくなつたので、われわれのもつている紙幣をコインに換えてもらえないものか、相談にいつたのである。しかしこの交渉は思いどおりにはゆかなかつた。

松林のあいだを通りぬけて、怪しげな石門をくぐると、荒凉としたチベット風の村が現われた。石をつみ重ねて壁がわりにした、四角な家、平らな屋根、その屋根の上に旗竿をたてて、大名行列に出てくるような縱に長い白い旗がつけてある。背景に雪のついた尾根が雲の間からすこし出ていたが、晴れていたらここから、アンナプルナ第二峰 Annapurna II, 7937 m が望めるはずである。村の名前はバガルチャップ Bagarchap。ここで久しぶりにウマを見た。蒙古馬に劣らず小さいチベッタンポニーであつた。

それから山道にさしかかつたところで、はじめて森林らしい森林にぶつかつた。カシが多く、針葉樹ではツガとピセア（トウヒの類）がまじつている。蘚苔が木の幹にも木の葉にもくつついている。なんだか南九州の山を歩いているような氣がする。

そこへ、聖地巡禮の一行が通りかかつた。ムクチナートの歸えりである。男五人女二人。その中のリーダー格らしい、品のよい爺さんが、土産にとつてきたビャクシンをわれわれにも一枝づつわけてくれた。

登りつめて草地に出た。小屋が一軒たつている。牛が草を喰んでいる。さきについたポーターたちが、ジャガイモ畑で堀りのこしをあさつている。きれいな小川。四周を森林でとりまかれた、ひろびろとしたキャンプ地。うしろの山には、森林つづきにカールらしいものが見える。マルシャンディをへだてて前にそびえる山は岩山で草つきが多く、高いところはすでに紅葉している。そして下流の方をみると谷いつぱいに、マナスルウから P二九 へつづく氷

の峯が、そらの色のように青くうかび出ている。ツグディカダカ Chugudikhadaka という地名は、なんべん聞いても覺えられぬが、ヒマラヤにしては珍らしい多元的な構成の風景を味わわせるところであつた。

夜明けにぱらぱらと雨の音。山の上はうつすらと新雪がついたが、日が射したらすぐ消えてしまつた。また石の門をくぐつてタンザ Thangja にはいる。門はどうも、村の下流側だけにあつて上流側にはないようだ。チベット人の意識には、下流が村の表口で上流は裏口といつた區別があるのかも知れない。ソバの畑。屋根にたてた白い旗が風にはためいている。屋根の上には南瓜がいくつも干してある。

谷一つ越えると、タンチョ Thanchock である。松林、ピセアの林、落葉のしきつめた道をゆく。ナウル・コーラ Naur Khola の出合には屏風のような大岩壁がたつていた。ほんとうにまつすぐ立つているのだから、かなわない。チャモィ Chame の手前で左岸にうつる。岩壁に彩色したお經のほりものがある。左岸をすこしもどつたところに溫泉が湧いているというので行つてみたが、あつすぎて長くははいつていられなかつた。

村の近くにはまだイラクサが多い。中尾にいわせると、イラクサはヒマラヤが本場であるそうだ。われわれはもつと山ビルに惱まされるだろうと思つて、その方の用意はしていたが、さいわいヒルには一度もつかれたことがなかつた。しかしイラクサには毎日惱まされた。イラクサにさされたときつける、なにかよい藥がないだろうか。

そのさきは、しばらく村がない。左岸の岩壁の下を谷沿いにすすんで、道ばたのせまくるしいところにテントを張つた。近くによい水が得られたからである。ティルマンが見つけたテント場だというのでわれわれはこを、「ティルマンのキャンプ」と名づけた。あたりにはイチイが多かつた。

知らぬ間に登つて、もう三〇〇〇米になつた。モミ（モミといつてもアビエスの一種ということであつて、日本のモミと同種ではない。ツガという場合もそうである）やカンバが出はじめた。ダケカンバによく似ている。谷がひと曲りすると前方左岸に、尾根から谷底までぶつとおして、てらてらに磨きをかけたような見事な圏谷狀の地形が現われた。マルシ

ャンディを登りつつ、どこまで行ったら氷蝕地形に出あうのだろうかと、待ちあぐんでいるときだったから、これこそ正眞正銘の氷蝕地形だと、こおどりして喜んだのも無理はない。

右岸を一〇〇米ばかり登って臺地のうえに出た。もう十月で、花らしい花はどこにも咲いていないのに、リンドウの花だけが咲きのこっていた。對岸の氷蝕地形が正面に見えるところに休み場があって、そこには倒れないように根もとを石で支えた、枝つきの木が何本も立ててあった。われわれのポーターたちも木をとってきて立てている。サーブも加われ、という。石を一つ根もとに積んだ。それからそのまわりを、みんなしておどって廻った。

臺地の上はマツの疎林で、すてきに氣持ちのよいところであった。そこをすぎると景色がすっかり一變した。兩岸の山が後退して、そのあいだにひろびろとして谷がひらけている。マルシャンディは、もはや峽谷でなくて、高原を刻んで流れる川といった方がよい。マツとビャクシンの疎林、點々とちらばった池、そのまわりの草原には、ウシ、ウマ、ヒツジ、ヤギといった家畜が放牧されて悠々と草をくっていた。

しかし、一般にいって草の生え方がわるく、地表面が出ている。周圍の山も茶色い地肌の出ているところが多くなった。峽谷部を歩いているあいだは、しめっぽくて困っていたのに、ここまでくると、歩いていてほこりがたつ。ティルマンがセミ・デザートと形容したのは、まさしく當っている。

いままでは植物にしても蝶々にしても見馴れぬもののみ多かったが、ここには蒙古を思いださせるスティパ（ハネガヤの類）やカラガナやタマリスクが、ところえ顔に生えている。飛んでいる蝶も、ペルナシウス（ウスバシロチョウの類）、コリアス（ミヤマモンキチョウの類）、アージィニス（ヒョウモンチョウの類）、リケーナ（ベニシジミの類）などと、なじみの深いものばかりである。

左手に見える山はなんだろう、なかなか手ごわい山だと思って眺めていたが、それがアンナプルナ第二峰だと知ったときは、もうそんなに近くまできていたのかとおどろいた。右手に見える山は、地圖に出ている六〇一七米にちが

いない。六〇〇〇米を越えているくせに、この山、帽子をかぶせたように頂上だけしか氷雪におおわれていない。ヒマラヤの主脈をこえると、その北側では降水量がすくなく、したがつて乾燥しているということの、これも一つの證據になるであろう。

六〇一七米峯のふもとにピサン Pisang という村がある。中尾はここで、まだ取り入れてない夏作の麥畑を見つけて大よろこび。村はずれの、アンナプルナ第二峰を鼻さきに仰ぎみるところでキャンプ。チベット人地帶へはいつてから、大根とかぶらとからし菜が手に入るようになつた。

ピサンのさきに、ちよつとした峠があつて、それを越えるとまた平坦な高原狀のところが、ずつと奥までつづいている。もう一ばん奥に、カリ・ガンダキとの分水嶺の山が見えてきた。山すそにバッドランド地形が現われて、景色は一段と荒凉さを增した。

壹まえに何氣なく、アンナプルナ側から出てくる谷を一つ渡つた。すこしゆくと田口と高木が望遠鏡を出して、その谷の奥を見ている。なにを熱心に見ているのか、すぐわかつた。『アルパイン・ジアーナル』の寫眞で見覺えのある、アンナプルナ第四峰 Annapurna IV, 7525 m の頂上が、そこから見えているのだ。それは同時に、われわれがベース・キャンプを張るべき場所に到着したことを知らすものであつた。

ベース・キャンプは、ただちにマツの疎林のあいだに張られた。かたわらに、エメラルド色をした池があつて、きれいな水がこんこんと湧きだしていた。十月五日、カトマンズ出發から二十二日目である。ティルマンはどんな氣持で、この道を歩いたか知らないが、われわれにはティルマンと一しよに歩いたガルチェンがついていたから、彼の案内するままにまかせて至極氣樂にここまでやつて來ることが出來た。そして、これからさきもなおティルマンの足跡をひろつて、アンナプルナ第四峰に登ろうというのである。

マルシャンディ上流の山山

ベース・キャンプの横に流れる谷を、われわれはチンディ Chhindi と聞いたが、テイルマンにしたがつてサブヂィ Sabzi と呼ぶことにする。ほとんどまつすぐな谷で、そのつきあたりにアンナプルナ第三峰 Annapurna III, 7577 m とアンナプルナ第四峰の間の最低鞍部——五五〇〇米ぐらい——が見える。望遠鏡でみると、その鞍部につづくクーロアールにかかつた小さな氷河の末端がたちきられて、ひどくオーバーハングしている。谷は大部分森林におおわれてなごやかであるが、山はどうも険悪らしい。ちよつと暗い氣持ちになつた。

十月七日、高木、ガルチェン、アンツェリン Angtsering、ダーコ Dako の四名が、二五名のポーターをしたがえて先發。午後になつて森林限界の資料をあつめかたがた、もうすこし高いところから山を觀察しようと思い、サブヂィ左岸のバッドランドに登る。アンナプルナ第三峰から出ている尾根のはしつこである。朝は晴れていたのに曇つてきた。しかしカリ・ガンダキ Kali-Gandaki 境いの西の空はまだ晴れている。いきぎれがはなはだしい。

ティルマン・ルートがガスの晴れ間によく見えた。谷の奥で左からはいつてくる氷河も見えている。ティルマン・ルートは、アンナプルナの主稜にとりつく急なせまい尾根のうえにあるが、その尾根の末端には大きな岩壁が出ている。岩壁から上はずつと雪稜になつていて、主稜のドームまでの間に三個所悪場がある。

下からかぞえて第一の悪場は、大きな氷壁がバンドになつて横に走つているところを、細くなつた尾根がかろうじて切れずに、はいあがつているように見える。ティルマンが六〇米の固定ロープをつかつて、二日がかりでようやく乗りこえたという氷壁にちがいない。三個所の悪場のうち一ばん悪そうであり、また迂回のきかない悪場である。

第二の悪場は第一の悪場と第三の悪場との中間にあつて、第一の悪場のようにやせ尾根にはなつていないが、やは

り氷壁と尾根とがぶつつかつている場所で、ステップを切らずには通れそうにない。第三の悪場というのは、ドームの直下に、それを取りまいて鉢巻きのように走つている線がそれであるが、やはり氷壁が出ているように見える。

われわれは、ティルマンが『アルパイン・ジァーナル』に出した報告（H. W. Tilman "The Annapurna Himal and south side of Everest" A. J. vol. LVIII, No. 282, May 1951, pp. 101—110.）をクイブに打つて持つていつたのであるが、あれは簡潔すぎて、第一の悪場のことは書いてあるけれども、それから上はすつかりはし折つてある。だから第一の悪場からドームの上までの間には、全然悪場がなかつたような印象を與える。一しよに行つたガルチェンもティルマンのときより尾根が荒れているというだけで、くわしいことをいわないから、そうかも知れないと思つていた。

しかし、ティルマンの『ネパール・ヒマラヤ』("Nepal Himalaya" London, Cambridge University Press, 1952, pp. xii+272) を見ると、第二の悪場のこともちやんと書いてある。そして、われわれの豫想しなかつたことが、この悪場を避けるために左の方へ半マイルもトラバースして、それから雪の斜面をまつすぐにドームの直下まで登つているのである。だが第三の悪場についてはなんの記載もしてないところをみると、この悪場だけはティルマンのときには無かつたかも知れない。

バッドランドを通りこすと、マツがへつてモミがぽつぽつと現われだした。ついに鞍部狀をなした平らなところへ出た。カンバの大木が一本たつていて、かたわらに石を積んだ小屋掛けのあとがあつた。ウシやウマの糞が落ちている。夏にはこんなところまで家畜を追いあげるのであろう。一服しようと思つたがマッチを忘れてきた。時計も忘れてきた。アンナプルナにかかつた雲が次第に濃厚になる。三九〇〇米、森林限界まではまだ來ていないが引きかえすことにした。ビブラムを利かして一氣にかけおりる。キャンプについて紅茶をのんでほつとしていると、山の方はまつくらになり、やがて雨がおちてきた。先發隊はどうしているだろうか。

朝起きると山の上には新雪がつもつている。田口、林が出發する。キャンプの近くを歩いてみる。水がわき出して

いるのはキャンプのそばの池だけでなく、その近くにも、池というほどのものではないが、いくつかの沮溜地があつて、やはり水が滲み出している。そして、しばらく流れているうちに小川となつて、崖ぶちからサブヂィへ落ちこんでいる。川ぶちにも水のわきでているところがあつた。石にアオミドロがついていた。サブヂィの水は氷河から流れてくるにもかかわらず、本流のようには濁つていない。ささにごりといつた程度である。

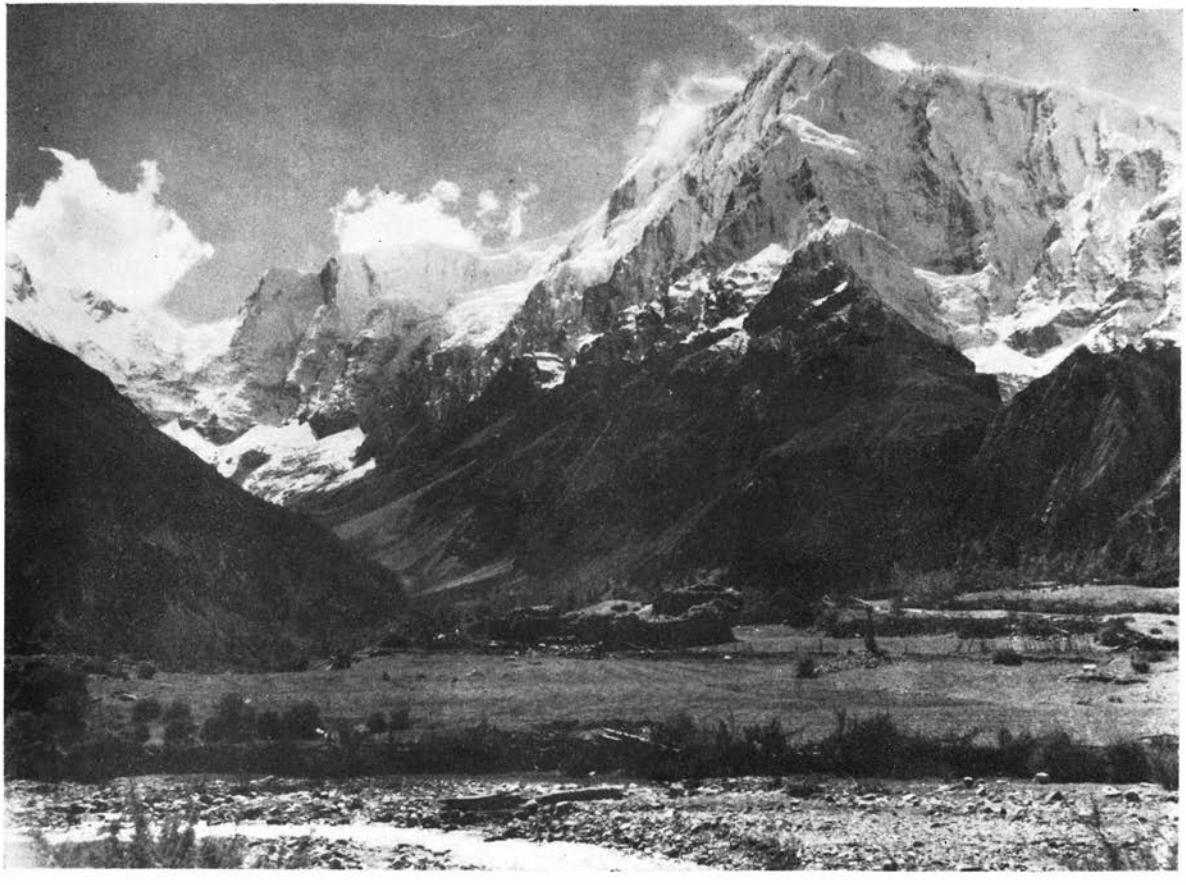
二時すぎから、もう一度昨日登つたバッドランドへと出かける。萬一ユキヒョウでも出るとうるさいから、ピッケルを持つてゆくことにしよう。森林限界はモミが四〇〇〇米どまり、カンバは四二〇〇米であつた。だいぶ苦しかつたが、もうひとふんばりして四四〇〇米まで登つた。草におおわれた尾根の上の一つのこぶにすぎないが、そこからさきになると岩峯が連續して、行くてをふさいでいる。

ヒマラヤの苦しさは登りだけだというが、まつたくそのとおり、下をむきだしたらちつとも苦しくはない。昨日よりおそく、暗くなりがけにキャンプへかえつたら、中尾が心配していて、明日からバラサーブの一人歩きはつつしんでもらいたい、といいわたされた。しかし、ピブソメーターで計つたベース・キャンプの高さが、三五〇〇米であるからバロメーターの讀みを正しいとすれば、四時間ほどで九〇〇米を上下してきたことになる。これで身體に自信ができた。

田口の連れていつたアノーが連絡にきていた。それでわかつたが、高木隊は最初の日はベース・キャンプから二時間半ほど前進したところに、キャンプ——このキャンプを、われわれは中間キャンプと名づけた——している。そして、その翌日は第一キャンプまで行けるつもりでいたところ、第一キャンプまでの間でもう一つキャンプ——このキャンプを、われわれはスペッシャル・キャンプと名づけた——を張らねばならないことを發見したらしい。

もつとも、ここで第一キャンプというのはティルマンの第一キャンプを意味しているのであつて、順序からいえば、ベース、キャンプのつぎのキャンプ、すなはち中間キャンプが第一キャンプでなければならないであろう。しかる

Manaslu from west （マナスルウの西面）



Annapurna III from upper basin of The Marsyandi
(マルシャンデイ源流地帯からみたアンナプルナ第三峰)

に、前記『アルパイン・ジャーナル』の記事をみると、ベース・キャンプのつぎにいきなり第一キャンプが出てきて、中間キャンプのこともスペッシャル・キャンプのことも、なんにも書いてない。ガルチェンの英語は半分も通じないのだから、いきおいティルマンの記事を唯一の頼りとするしかほかのないわれわれにとつて、この違算の生じたことはむしろ當然であつたろう。（但し『ネパール・ヒマラヤ』には、中間キャンプもスペッシャル・キャンプも、ちやんと出ていることを後日知つた。アルパイン・クラブでの講演をのせたジャーナルの記事以外に、登山にはやはり詳細なナレーディヴが必要だということがわかつた。）

スペッシャル・キャンプについた高木は、ティルマン・ルートの根元にわだかまつている岩壁を見てロックハーケンの必要を感じた。アノーはベース・キャンプへそれを取りにきたのである。ティルマンもこの部分でピッケルを一本折つているが、彼のきたのはブレ・モンスーンであつたから、この岩壁の大部分がまだ雪をつけていたそうである。

なお、田口のよこした通信によると、スペッシャル・キャンプにいる高木と中間キャンプにいる田口との間では、ハンディ・トーキーによる通話がうまくいつているけれども、ベース・キャンプとの通話はいつこうにらちがあかないと、いかにも殘念そうである。こちらでも昨日から約束の時間がくると、一生懸命に呼びだしをかけているのだがどうにもならなかつた。

毎朝七時ごろになると山すその小道を、マナングボットの連中が、男も女も、まじつて一隊をなしながら通つてゆく。いつでもなにか陽氣に、聲高にしやべつて通る。彼らはサブディの谷の奥へ草を刈りにゆくのである。夕方にはまた、刈つた草を一ぱい背負つてかえつてゆく。そして、ベース・キャンプの見えるところまでくると、背中の荷を置いておいて、われわれを見物にやつてくる。誰れでも一度は見物に來ているにちがいない。

ベース・キャンプからマルシャンディをへだてて、アンナプルナと反對の方角には、六〇一七米峯からつづいた山

脈が走つていて、ちようどキャンプから正面に當るところに、二つの顯著なピークが認められる。地圖を見ても標高はのつていないが、六〇〇〇米と六三〇〇米の間ぐらいだろう。頂上がすつぱり雪につつまれているところは、ピサンの六〇一七米峯と似ているが、ただこの方は頂上の下に萬年雪をたたえた傾斜のゆるい部分があつて、そこからおもちやのような氷河が流れだしているのが、ちがう。

朝日がこの二つのピークにさすと、その雪が、日の當つた部分は桃いろに、日の當らぬ部分は藍いろに染つて、夢のように美しい。元來が南向き斜面であるから、乾燥がきつく森林の生育が悪いところへ、シーズンがシーズンであるから、草がすつかり枯れてしまつていて、山そのものがいやに黄土色をしているにもかかわらず、その上に氷雪のピークがのつていると、なんだかヒマラヤでなくて、アンデスあたりの山を見ているような氣がしないでもない。とにかく、アンナプルナが荒々しく寒々としているのとは反對に、これらの山々はおとなしく、またあたたかそうである。何度も眺めているうちに、ぜひその中の一つに登つてみたい、と思うようになつた。

みんな出てしまつて、ひつそりかんとしたベース・キャンプで、留守部隊のためにテントの配置がえをやつたり、あたりの清掃をしたりしているところへ、また傳令がやつてきた。スペッシャル・キャンプの田口からである。通信文の中に、

前進パーティーならびにガルチェンの意見では、一一人用の荷物を第三キャンプまで運びあげる原案は、現在のこの不利なポスト・モンスーンの情況下において、遲滯なく再檢討を要する。

と前置きして、ティルマン・パーティーは、サーブ四名・シェルパ四名で、スペッシャル・キャンプから第一キャンプまで全荷物を運びあげるのに、わずか二日間ですませるほどの輕裝備であつたが、それにくらべるとわれわれの方は、あまりにも荷物が多すぎる。これでは荷物のリレーだけで、へたばつてしまうおそれがある。

だから、スペッシャル・キャンプから上は隊の編成を、アタック・パーティーとサポート・パーティーの二本立て

にすることによつて、第三キャンプまであげる荷物の量を輕減するようにでもしたらどうか。いずれにせよ、隊長に一刻も早くここまであがつてきてもらいたい。そして、明後日の午後には、ここで山を前にして計畫の再檢討が行われることを希望する。というようなことが書いてあつた。

一〇日、今西、中尾出發。パンシーと傳令にきたダーコがしたがう。ダーコは山羊を一頭ひつぱつている。ほかにニワトリ二羽と卵二〇個を用意した。道は毎日マナングボットの連中が草刈りにゆくので、よく踏まれている。マツの木の幹に鉋を打ちこんだあとが、楔形にのこつている。この邊はまだ鋸という便利なもののあることを知らないのだが、木を伐り倒すのが目的なら、反對側からすこし鉋を入れれば、もうすぐ倒れるというところまでいつているのに、どうしてほつておくのだろうと思つたが、それは燃火用につかうマツの心材をとるのが目あてだつたから、彼らにすれば、それ以上勞して伐りたおす必要などなかつたのである。

五キロばかり行つたところで、橋をわたつてサブディの右岸にうつる。そこまでは、マツとビャクシンを見るだけで、ベース・キャンプ附近とあまり變わりはなかつたが、そのうちにモミやカンバが現われはじめた。カンバはきれいに黄葉している。黄葉したヤナギの森林をぬけるところもあつた。樹木がだんだんまばらになつて、灌木原のようなところを通る。メギの紅葉が美しかつた。左から小谷がはいるところに、目印しの樺色をした三角旗がたててあつて、中間キャンプはすぐ見つかつた。

ベース・キャンプにいては聞こえないけれども、ここまでくるとさかんに雪崩の音がする。アンナプルナ第三峰の胸壁にかかつた氷河が崩れおちているので、雪煙の消えてしまつたあとまで、デブリはずいぶん長いあいだ瀧のようにおちつづける。夜ねてからも何回となく雪崩の音をきいた。

霜がおりている。氣がつくとアンナプルナ第三峰の頭がすつかり出ている。これは珍らしい、この山はいままでめつたに顏を見せたことがないのだから、久しぶりの大快晴に氣をよくして二子山の登りにかかる。二子山というの

は、中間キャンプの後を仕切つた大きなモレーンの丘で、その上にこぶが二つあるから二子山と名づけたが、道はこの二つのこぶの鞍部を通りぬけている。

中間キャンプの位置は、サブヂィの流れとはだいぶ高いところにあつて、カンバの森林限界へもほど遠くない。したがつて二子山はもう森林限界をぬいた草山であるが、この草山の下半分にはイネ科の草が多く、上半分にはスゲ科の草が多い。イネ科の草は黄色く枯れ、スゲ科の草は褐色に枯れるから、二子山は黄色と褐色に染めわけられている。マナングボットの連中は、この下半分の黄色くなつた草を刈るために、毎朝ここまで足を伸ばすのだから、つよいものだ。われわれの通つたときにも、もう二、三人刈りはじめているものがあつた。

二子山をこえると、モレーンの中を流れる淺い澤に出る。その澤を登つていつたら、大きな岩のあるところに、サルキ、アンツェリン、アノーの三人がいた。昨日までここがスペッシャル・キャンプのあつたところだが、キャンプの水が切れたので、今日はもう一段高いところへ移轉したという。彼らはこの轉宅の荷運びにきているところだつた。新らしいスペッシャル・キャンプについてみると、先發隊はすでに第一キャンプまでの道つくりを完了し、荷あげも半分ぐらいできていた。

さつそく計畫の再檢討をやつた結果、田口・高木・林・ガルチェン・サルキ・アンツェリンの六人をアタック隊として、ドームの上の第三キャンプに送りこむこと、あとのものは第三キャンプまでの間で、アタック隊をサポートすることにきめた。アタック隊自身も第三キャンプ以上では、登頂隊とこれをサポートするものとに、わかれる必要があるであろう。

もし、第四キャンプ乃至は第五キャンプまで前進したとき、サーブはすつかりまいつてしまつたにもかかわらず、シェルパはなお元氣で登頂を希望したならば、シェルパだけでも登頂さすべきである。という今西の意見に對して、田口は反對だつた。

明くればいよいよ、アタック隊を第一キャンプに送りだす日である。全員一一名が出動。しばらく歩くと、アンナプルナの主稜と並行に走つた氷河の上に出る。半マイルぐらいの巾はあるが、表面は全部岩屑でおおわれている。氷河を横切り、第一キャンプ下の岩壁めがけてスクリーを登る。半分ほどから上は、新雪がスクリーをおおつていた。

岩壁の根元まであがつて、すこし右にトラバースし、浅いクーロアールにはいつた。ちよつとした氷の瀧があつて、そこにはステップが刻んであつた。もう一つ上の瀧には固定ロープがおろしてあつた。この瀧の上でクーロアールをはなれて左から落ちてくる溝のようなくぼみについてゆくと、第一キャンプに出られる。しかし、クーロアールからの取つつきは、やはり瀧になつていて、ここにも固定ロープがおろしてあつたが、ここはアンザイレンして瀧の左手の岩場を登つてもよい。

昨日におとらぬ大快晴で、遠くの山までよく見える。ベース・キャンプからでは見えない山がたくさん出ている。とくに、ナウル・コーラ Naur Khola の深い谷をへだてて、その左岸にそばだつた、まつ白なピラミッド型の山が印象的であつた。ティルマンが、アンナプルナ第四峰のあとで試みた六九〇〇米峯なのであるが、おそらく彼も、こちらから見てねらいをつけたのにちがいない。

午後一時半というのに、もう日がかげろうとしている。ポスト・モンスーンの北斜面に行動するものの悲哀である。第一キャンプの附近は新雪が意外に深い。主稜の上の吹きだまりで、難澁するのでないだろうか。二時半になつたので、これからさきの全權を田口にゆだね、お茶を一杯よばれてサポート隊は山をおりる。固定ロープを利用して、二時間でスペッシャル・キャンプにもどつた。スペッシャル・キャンプの高さ四八〇〇米、第一キャンプの高さは五四〇〇米。

翌一三日も快晴に明けた。アンナプルナ第三峰の稜線に雪煙がすこしたつているけれども、春山のようなのどかさである。この日の豫定、第一キャンプのアタック隊は第二キャンプへの道つくり、スペッシャル・キャンプのサポー

ト隊は、シェルパ三名で第一キャンプへ最後の荷あげ。第一キャンプの人影が肉眼ではつきりと見える。呼ぶ聲も聞こえる。

九時、アンザイレンした三名が動きだした。三人とも大きなルックを背負つているから、アタック隊のシェルパであろう。やつとしてから、また三名動きだした。これがサーブであろう。どうも元氣がない。稜線に出て、シェルパの休んでいるところで追いついた。それからしばらくは登つてゆくのが見えていたが、あとは雪稜のかげになつて見えない。ドームからさきで新雪をこがねばならない場合を考えると、ティリチ・ミーア Tirich Mir のノールエー隊のように、スキー杖があつた方がよいであろう。ポーターを走らせてベース・キャンプから取りよせることにした。

朝の調子では、いよいよモンスーンも明けたのかと思わせたが、午後になつて雲が次第に濃くなつてきた。やがてパラパラとあられが降つてきた。第一キャンプへ出かけたパンシーたちがかえつてきた。第一キャンプで、上からおりてきたアタック隊に出あつたといつて、田口の手紙をわたした。

われわれは三名とも昨夜テント内で完全に山よいにかかり、「酸素を、もつと酸素を」と呼ぶばかりで、ほとんど眠れなかつた。

本日の偵察の結果、斜面の堅雪のうえに新雪がつもつていて、キックだけでは不安心なので、ステップを切らねばならないところがすくなくない。こういう情況下では、第一キャンプと第二キャンプとの間隔が、長すぎるように思われるから、ティルマンの第二キャンプ下の氷壁につづいた、ナイフ・エッジの手前に、われわれの第二キャンプを設けることとした。このためティルマンの場合よりも、キャンプの數が一つふえる。

明日、第一キャンプをサポート隊にゆずつて、われわれの第二キャンプに前進する。

こんなことが書いてあつた。しかし、それでよいのか。われわれの計畫は、ティルマンと同じコンディションのも

とに、ティルマンのやつたとおりキャンプを前進さして、それでわれわれの力なら、どこまで行けるかをためそうというのであつた。しかるに雪の狀態が悪くて、まだティルマンの第二キャンプまでも行つていないうちに、はやくも計畫のつまずきをきたした。ティルマンのときより雪の狀態が悪いのだから、これだけでただちにわれわれの實力が、ティルマンに劣るとはいえないかもしれぬ。そんなことよりも心配なのは、いまからこれではティルマンの第二キャンプと第三キャンプの間にも、われわれはまたもう一つ、テントをはる必要がおこつてくるのでないだろうか。主稜へ出てからも、そうした狀態がつづくとしたら、アンナプルナ第四峰の登頂は豫期していたよりもだいぶ難しくなるのでないか、ということであつた。

なにしても、ティルマンどおりには前進できない。ということが明らかになつた以上、われわれのアンナプルナ計畫を、もう一度考え直してみることがたいせつである。やれるところまでやつてみるということも、もちろん考えてよいのだが、われわれはアンナプルナ第四峰だけで、全力をつかいつくすわけにはゆかない。あとにまだマナスルウの偵察があるから。それにこのアンナプルナは、われわれの誰れにとつても、はじめてのヒマラヤの經驗である。大事をとつた方がよい。そうなると、ドームへあがるまでに待ちかまえている三つの悪場が氣にかかるのである。田口・高木はアルプスで修業をつんでいるから別に氣にもしていないようだが、氷壁にステップを切つて登るなどという藝當は、あまり氣持ちのよいものではあるまい。それに天氣が、どうやらまた下り坂らしい。夜になつてもテントの上に、ぽつぽつと雪の降りかかる音がする。せつかく切つたステップも、かき消されてしまうであろう。

翌朝起きると、一面に雪がつもつていた。雲がひくくたれている。豫定どおり中尾とシェルパ三人が、第一キャンプへ移動するべく出發した。田口に、愼重を期せよと書いてやつた。晴れ間に見あげたところでは、第一キャンプの連中、今日は休むつもりであるらしい。中尾らが出發したあとへ、ベース・キャンプへ出した使いがかえつてきた。リングのついていないストックと、輪カンとを持つてきた。畫をかいてやつたのだが、スキーを知らないディリー

は、ストックのリングと輪カンとを取りちがえたのである。

キャンプの附近の雪は、午後にはもうほとんど消えてしまつた。第一キャンプの上には、アタック隊のつけたシュプールが、雪におおわれてかすかに殘つている。アンナプルナ第三峰の胸壁にかかつた氷河の末端が、くずれて雪崩おちるのを觀察した。

十月十五日。北の空にわずかばかり透いたところがあるきりで、空は重々しく曇り、山も濃い雲につつまれている。第一キャンプの連中、依然として動きそうにない。そのうち三人おりてくる姿が見えてきた。二人は相當な荷を負つている。から身の一人は瀧の上まできて、あとの二人と別れ、また一人で上へ引きかえして行く。降りる二人を確保しに來たものであろう。

晝すぎになると、またあられがぱらぱら降つてきた。そこへ、アノーとダーコとがかえつてきた。田口の手紙が、つぎのようなことを告げている。

毎日雪が降つて、第二キャンプへ行くときに通らねばならない斜面に、雪崩の危險が刻々增加しつつある。われわれの高度馴化は、まだ充分だとはいえない。環境的條件も主體的條件もよくないから、ひとまず攻擊を中止して、スペッシャル・キャンプへ退却することに決定した。今日中におりるか明日にするかは、午後の天候具合をみて、きめたい。

そうこうするうちに、第一キャンプの連中が降りはじめたといつて、シェルパやポーターが騷ぎだした。望遠鏡をとつてみると、なるほど五人ぐらいの人影が見える。もう例のクーロアールのところまでおりているものもある。あわせて八名、全員退却ということらしい。

誰が一ばんにかえつてくるかと思つたら、それは中尾だつた。せつかくサポートにあがつたのに、こんな早い退却なんて、あつたものではない、とえらい劍幕である。つづいてシェルパたちがかえり、アタック隊のサーブ三名は、

Annapurna II (26,041ft.)
↓

Annapurna IV (24,688ft.)
↓

The snow dome
↓

View of Annapurna Himal
(アンナプルナ・ヒマール山群)

重いルックを背負つて、くらくなる頃かえつてきた。サポート隊というのは、上へ荷物をあげるだけでなしに、下るときにも運搬を手傳うものと思つていたのに、中尾の奴はから身同然で、さつさとさきにおりてしまつた、とふんがいしている。

隊長テントにあつまつて食事した。雪の狀態というのは、堅いところはばかに堅く、またやわらかいところは、ラッセルがつらいほど深いという。ティルマンのときは、氷壁の部分をのぞけば、あとはクランポンも使わずに、キックだけで登れたそうだ。

ティルマンのときにくらべて、雪のコンディションがよくないばかりでなく、天候もまたよくないのである。それにこのルートは北斜面で日當りが悪い。風ときたら全然吹かない、といつてもよいぐらいである。これでは、これからさき降る雪が、落ちつこうにも落ちつきようがないのではないか。無理をしない方がよい。なにも殘念がることはない。われわれは、アンナプルナ第四峰を思い切ることにしよう。

氣持ちが輕くなつたせいもあろう。隣りのアタック隊のテントでは、いつまでも話し聲がしている。話し聲のとだえた頃には、テントをたたくあられの音が、ようやく頻繁になりだした。夜中に小便に起きたときは、テントの外がもうまつ白になつていた。今日の總退却の判斷が適切であつたことを確認さすかのように。

あくる日も相かわらずの天氣、主稜は重苦しく雲につつまれている。雪が降つていることであろう。田口・中尾はアノーをつれて山をくだる。シェルパ四人が、中間キャンプまで荷物をおろす。高木・林は休養。今西はキャンプから見えている萬年雪を調べにゆく、かえりのことを思つてモレーンの上にケルンを積みながらゆく。

この萬年雪は、ひろい尾根のうえにあつて、氷河とは直接つながつていない獨立した萬年雪である。高さは五二〇〇米、現在の氣候的雪線を位置づける資料の一つになるであろう。モレーンの分布からみると、かつてはもつと氷河のひろがつていたときがあつたのにちがいない。スペッシャル・キャンプの前にだつて、氷に磨かれた岩がならんで

いるのだから。

ではその頃には、もつと氷河が谷の下まで押しだしていたであろうか。そう考えたいところであるにもかかわらず、その痕跡がいつこうに見當らないのである。われわれが第一キャンプへゆくとき渡る、岩屑でおおわれた氷河——これが、この谷では唯一の氷河といつてもよいのだが——は、下の方でアンナプルナ第三峰のすそにぶつつかつて、右の方へ曲つている。その末端はいまでも四〇〇〇米ぐらいまでは來ているだろう。しかし、われわれがサブヂィを登つていつて、はじめて、かつての氷河がのこしたモーレンに接するのは、中間キャンプ附近であるから、高さからいうとほとんどかわりがない。

そこで一足飛びに結論を持ちだすが、この氷河は、かつてはサブヂィのずつと下までのびていたというのでなくて、もつと氷河の發達の旺盛だつたときでも、やはりこの邊までしかのびていなかつた。それから氷河が衰退をはじめた。氷河の衰退というと、われわれはすぐ後退だけしか考えないが、この衰退によつて、われわれの氷河は次第にその厚味を失つていつたのである。末端からとけて行つたのでなくて、全表面からとけて行つたのである。だから、厚味のすくなかつた部分は、いまではもうすつかり無くなつてしまつたのであろう。いまでも岩屑におおわれてのこつている氷河は、いわばとけのこりの氷河である。もういまではほとんど動いていない、化石した氷河である。

なぜ、こういうことが起こりうるかということも、考えてみた。氷河の盛衰が、氣候的雪線の位置に關係していることは、いうまでもない。そしてもし、溫度が上昇したため、氣候的雪線が高くなつたものなら、氷河はその末端からとけ出し、氣候的雪線を追うて次第に後退をはじめるであろう。けれどももし、溫度は變わらないで、降水量だけ變わつたとしたらどうであろう。降水量の減少のために、氣候的雪線の位置も多少は高くなるかもしれないが、それよりもその場合には、氷河が末端からとけ出さないで、全面的な衰退をはじめるにちがいない。その結果、とけのこりの氷河から緣の切れた萬年雪とが、見いだされるようになる。

雪が降りだして、ピサンの方へ出ている谷――それはターレ Thale という谷である――の様子は、よくわからない。その雪は、日本で降る雪のようにしめつぽかつた。萬年雪の上につもつて、靴の裏にくつつくような雪であつた。

スペッシャル・キャンプの最後の朝。新雪がまたうすく地表をおおうている。ポーターが二名撤收の應援にきた。のこつた四つのテントをたたんで山をおりる。四五〇〇米ぐらいから下は雪が雨にかわつた。降つているのかいないのかわからぬ、ぬかのように細かい雨であつた。

森林限界附近のダケカンバは、もうすつかり葉をおとしていた。しかし、メギやクマリスクの紅葉は、いまがさかりで、もえるように赤かつた。橋をわたつて左岸の臺地の上に、森林を背景にした感じのよい出作りがあつた。取り入れはもうすんでいたから、誰れもおらないと思つたら、石小屋の中から三人の男女が現われた。小屋にしまつてある干草をとりにきていたのだ。二時ごろベース・キャンプへかえつて、ディリーや先着の田口、中尾に迎えられた。ベース・キャンプは今日も、チベット人が好奇心を滿たしにたかつている。

さてこれからどうするか。會社の用事がひかえている田口とは、これでお別れしなければならない。竹節がくるかこないかは、まだ明らかになつていない。今西は、ベース・キャンプをこのままにしておいて、こんどはアンナプルナと反對側の山を試みてみようといつた。キャンプから見ている、あの山である。あれなら一週間で充分やれるだろう。あれなら登頂できるにちがいない。田口は、そんなことに時間をつぶしているよりも、早くマナスルウの偵察にかかるべきである、と主張した。中尾は今西に贊成した。高木と林とはなにもいわなかつた。

つぎの日は休み。洗濯屋や散髪屋が忙しい。ひる前、四人づれの藝人がキャンプを訪れた。夫婦ものふた組で、乳のみ子が一人ついている。チベットからきたそうだ。チベット人はきたないはずだが、この藝人の女は二人ともきれいな着物をきて、小ざつぱりしていた。男の方は着物もきたなく、顏もはなはだ下卑ている。女二人が打つ太鼓にあわせて、男二人が舞いをまつた。そのつぎには男も女も胡弓を引き、歌をうたいながら踊つた。

天氣はまだよろしくない。曇りがちで、うすら寒く、サブヂィの谷の奥はくらい。藝人がかえつてから、華北向けの日本語放送をキャッチしたら、昔こいしい銀座の柳――東京行進曲――が聞こえてきた。夜になつて小雨が降りだした。

また出發の準備。荷物の仕わけがはじまる。天氣はまだ本ものではないけれども、どうやら風の樣子が變わつてきた。なんとなく大陸風とでもいいたいような、すこし寒さを帶びた風で、マツの梢にあたつてしようしようと音をたてた。やがて、田口が乘つてかえるというチベット馬がひかれてきた。首につけた鈴がちりんちりんとなつた。田口は馬の上で手を振りながら、かえつていつた、從者を四名したがえて。

田口と入れちがいに、ポストマンがあがつてきた。故郷からの通信と一しよに、竹節の通信がはいつていて、一人で後を追うていることがわかつた。一八日にトンゼにつくという、ジャガートからのたよりであつた。田口とはどうせ會うだろうが、竹節宛の通信を書いてポストマンに持たせてやつた。

十月二十日、九時半出發。サーブ四名、シェルパ六名、ポーター八名。ポーターは全部チベッタンで、うち二名は女である。ベース・キャンプから一キロほど上流で橋を渡つて、マルシャンディの左岸をバッドランドの裾に沿うて引きかえすと、ちようどサブヂィと向いあわせになるところに、一つの谷がはいつている。ベース・キャンプからは見えないが、そこに四、五軒の家が點在した小さな部落があつた。屋根の上で、もみがらを風に吹かせて、えりわけていた。

村の名前を聞くと、チョルー Chulu といつた。谷の名前もチョルーである。谷の奥にそびえる、われわれの目標の山も、またチョルーというのだそうである。日本ならチョルーの頭とでもいうところだろう。しかし、ほとんど同じぐらいの高さのピークが二つならんでいるのだが、その一つ一つに對する呼び名があるかどうかは聞きもらした。それで、東の方のピークを「東チョルー」、西の方のピークを「西チョルー」、と呼ぶことにする。西チョルーの方

が、とがつていて、見たところきれいである。

谷のチョルーはサブヂィにくらべると、水量がずつとすくない。石ころの多い河原のうえを、せせらぎを立てながら流れている。その水に太陽がきらきらと輝いている。天氣がよくなつてきたので、アンナプルナ第三峰が出ている。稜線に雪煙があがつている。左岸づたいに谷をのぼつていつた。

谷ぞいには、やはりマツの木が多いけれども、斜面を濃緑色に染めているのはビャクシンである。一時間あまり登つたところで、谷が二た俣にわかれる。左の谷の正面に岩壁があつて、左右二本の瀧がかかつている。瀧の上では、まん中に尾根のはさまつた二つのはつきりした谷なのだが、その尾根も谷も、この一枚壁によつて斷ちきられた、といつたかたちである。そのもう一つ上に、ベース・キャンプでは見えていない、六三〇〇米級の山が、姿を現わしている。ちよつと手ごわそうである。

二つの谷にはさまれた段丘狀のところをすこしのぼると、ビャクシンの大木の間にテントがはつてあつた。高さは四二〇〇米。豪勢なキャンプファィアを樂しむことができた。どこもすつかり暗くなつたあとになつても、アンナプルナ第四峰の頂上のみは殘照にほのあかかつた。

チベット人は出發するまえに、めいめいがビャクシンのひと枝を火にくべてゆく。聖地巡禮がビャクシンの枝をくれたことを思いだした。右俣にはいつて、その左岸の斜面を道沿いに登つた。森林限界はすぐこえた。四五〇〇米で樹種はダケカンバ、アンナプルナ側は北向きであり、こちらは南向きだから、これぐらいのちがいはあつてもよいのである。しかし、アンナプルナ側のようなモミのゾーンが見られないのは、こちら側がより乾燥していることを現わしたものであろう。モミは、キャンプより下で數本見ただけであつた。

森林限界以上を占める草つきも、アンナプルナ側より高いところまであがつている。そして、草の生えているかぎりは、放牧地として利用するものと見え、至るところに家畜の踏みあとや糞がのこつている。けれども、もうシーズ

ンがおそいから、どこにも家畜の姿は認められない。夏だったら、この邊は百花燎らんで、その間をヤクやヒツジの群れが、うろついているのだろう。草つきの限界が放牧地の限界とは、まことに徹底した土地利用ぶりである。この限界の高さは五〇〇〇米ぐらい。

草つきのうえは、いうまでもなくがらがら石が出ている。一たん尾根の上に出たが、先頭はそれから、この岩屑地帶を、右俣の上端にかかった氷河のツンゲ目がけてトラバースしはじめた。水を求めているのだな、ということがわかった。ティルマンもこの邊から、ナウル・コーラへ越えているのだが、そのときは六月だったので、雪どけの水がどこでも豐富に得られたそうだ。

ときどき立ちどまって呼吸を調節しながら、アンナプルナの方をふりかえると、下からは見えないアンナプルナ第三峰の頂上が出ている。そのつづきに二つ三つピークがあって、その後からアンナプルナ第一峰 Annapurna I, 8078 m と覺しき山が、顔を出している。これでアンナプルナ連峯の大物が、全部顔をそろえたというわけだ。まさに大觀である。

トラバースに三時間もかかって、やっとツンゲの下についたが、水は流れていなかった。雪でしんぼうすることにして、ここでキャンプ、五三〇〇米。アンナプルナ第四峰の第一キャンプに、ほぼひとしい高さである。南斜面の山のあたりがたさ、ここはまだ日が當っている。しかしもうすぐ暮れるというので、二人だけ強いのをのこして、あとのポーターをかえした。彼らはまるで脫兎のごとく、一目散に山を驅けおりていった。

翌日も大快晴に明けた。ツンゲの横をまいて、五五〇〇米でクランポンをつけ、氷河の上に出た。しばらく急なところがあって、そこを登りきると、あたりがひろびろとしてきた。一面に雪をかぶっているから、氷河の上のような氣がしない。午后一時、五八五〇米まで進んで、雪上のキャンプ。時間はまだ早かったが、雲がたちこめてきたので、サポートにきたアノーと一名のポーターを、なるだけ早く下のキャンプにかえしたかったからである。

その夜はずいぶん風が荒れたけれども、寒くはなかつた。最高最低寒暖計は攝氏零下二〇度を示していた。昨日のように、午后になると雲が出てくる心配があるから、早く出發したいと思つたが、日が當るまでは行動しにくいものである。アンツェリンをキャンプ・キーパーにのこして、九時まえ出發。

下からみて見當をつけておいた西チョルーの南尾根は、どこから取つつくかというだけで、尾根そのものにはどこにも惡場らしいものがない。キャンプから二キロほど登つたところに、一段のアイス・フォールがあつて、それを越えれば、またひろびろとしたカール狀の地形が、東チョルーと西チョルーの鞍部までつづいている。

とにかく、アイス・フォールを越えることにしよう。先頭にたつた高木が、クレバスの間にうまくルートを見つけてゆく。アイス・フォールは案外簡單にのりこえて、南尾根へは、雪のついていない黄色つぽい色のガレを登ることにした。雪の上ばかり行つて、鞍部から東尾根を登ることも考えられるが、すこし遠まわりになる。

尾根に出てからは、また雪ばかり踏んで、十二時に頂上、バロメーターは六二〇〇米を示した。もちろん、これが初登山である。地圖に、名前や標高がのつていないからといつて、卑下するには及ばない。技術的な困難をともなわなかつたからといつて、はずかしがる必要もない。むしろヒマラヤへきて、こんなにやさしく初登山のできる山が、見いだせたことを喜ぶべきでなかろうか。あるいは、ヒマラヤなればこそ、五〇才になつても初登山のできるような山が殘つているのだ、と考えてもよい。

頂上から見たところ、じつさい、チョルー級の、頭だけ氷雪をかぶつた山が、チベットざかいを北から西にかけて、數えきれぬぐらい並んでいたのである。そして、そのすべてがやがて一度は、初登山の對象になる山だということを考えたとき、おのずから心のひろまる思いがしたのである。

下りは愼重に、頂上からアンザイレンした。高木、中尾、ガルチェンは、東チョールの偵察をかねて鞍部の方へまわつた。ガレの下で待ちあわせてランチを食つた。クランポンがよくきくので、アイス・フォールも心配なくとお

り、午后三時キャンプ、案のじよう雲がまきはじめた。

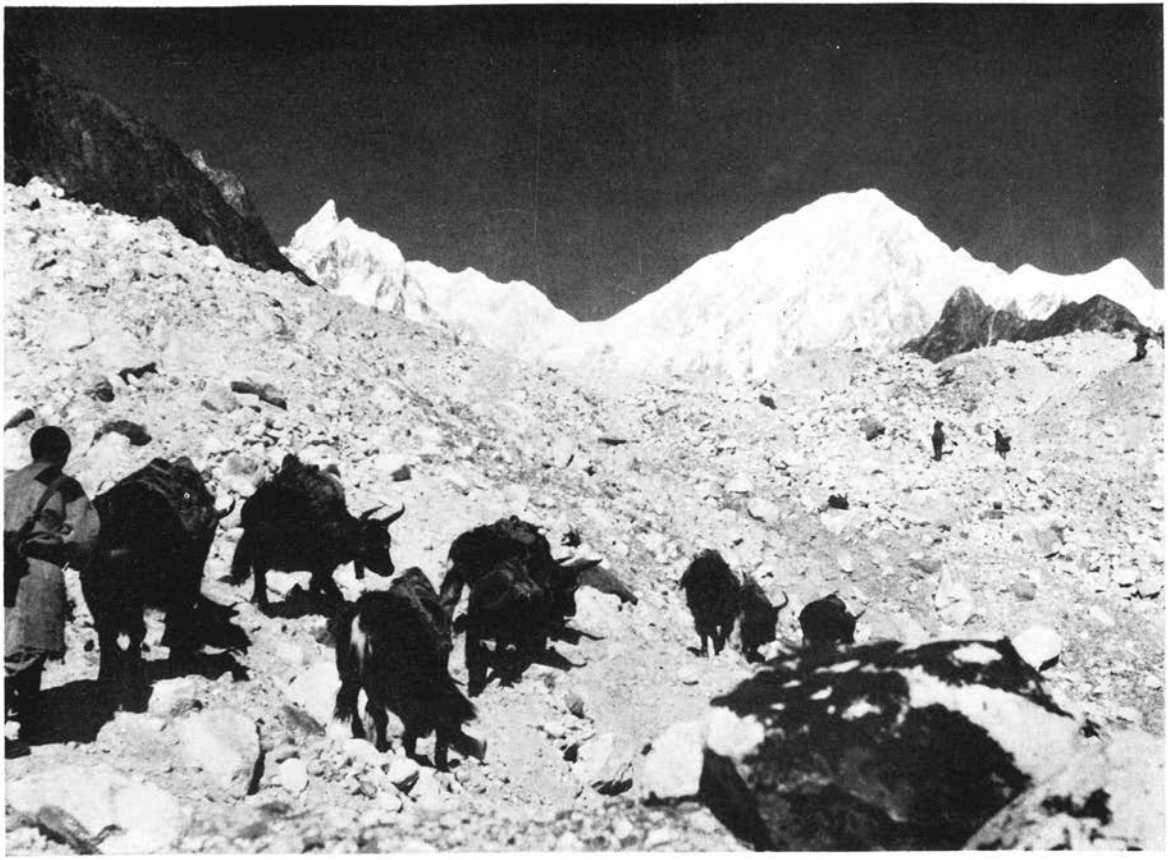
この登山でスキー杖を用いてみたが、有効であることを確認した。スキーをはいた場合に、單杖で歩くのと兩杖で歩くのと、どちらが樂であるかは、いまさら誰れしも問題にしないであろう。ヒマラヤへ登るのは苦しいから、すこしでも樂なようにというので、兩杖が登場したのである。もちろんそれによつて、ピッケルがいらなくなつたのではない。兩杖の使用と同じ意味で、スキー——半分に折れるスキーでなくては、運搬に不便だが——の使用も考えてみるべきである。チョルーの雪の狀態は、やはり南向きのせいか、日本アルプスの五月の雪といいたいところだつたから、スキーがあれば充分活用されたであろう。

翌日は東チョルーに登る豫定だつたが、誰れも登ろうといいださないので、東チョルーを放棄して、今西、高木、ガルチェンは尾根づたいに、その他はツンゲのキャンプによつて、一日で二た俣のビヤクシンの森までくだり、そこで落ちあうことにした。

ひろい雪原を左の方にとつて、ナウル・コーラとの分水嶺へ出た。萬年雪限界の高さが知りたかつたのであるが、それは五五〇〇米であつた。森林限界と同じように、アンナプルナ側よりも三〇〇米高くなつている。萬年雪につづいて、ナウル・コーラ側（北側）では、新雪が岩屑の間を埋めていた。

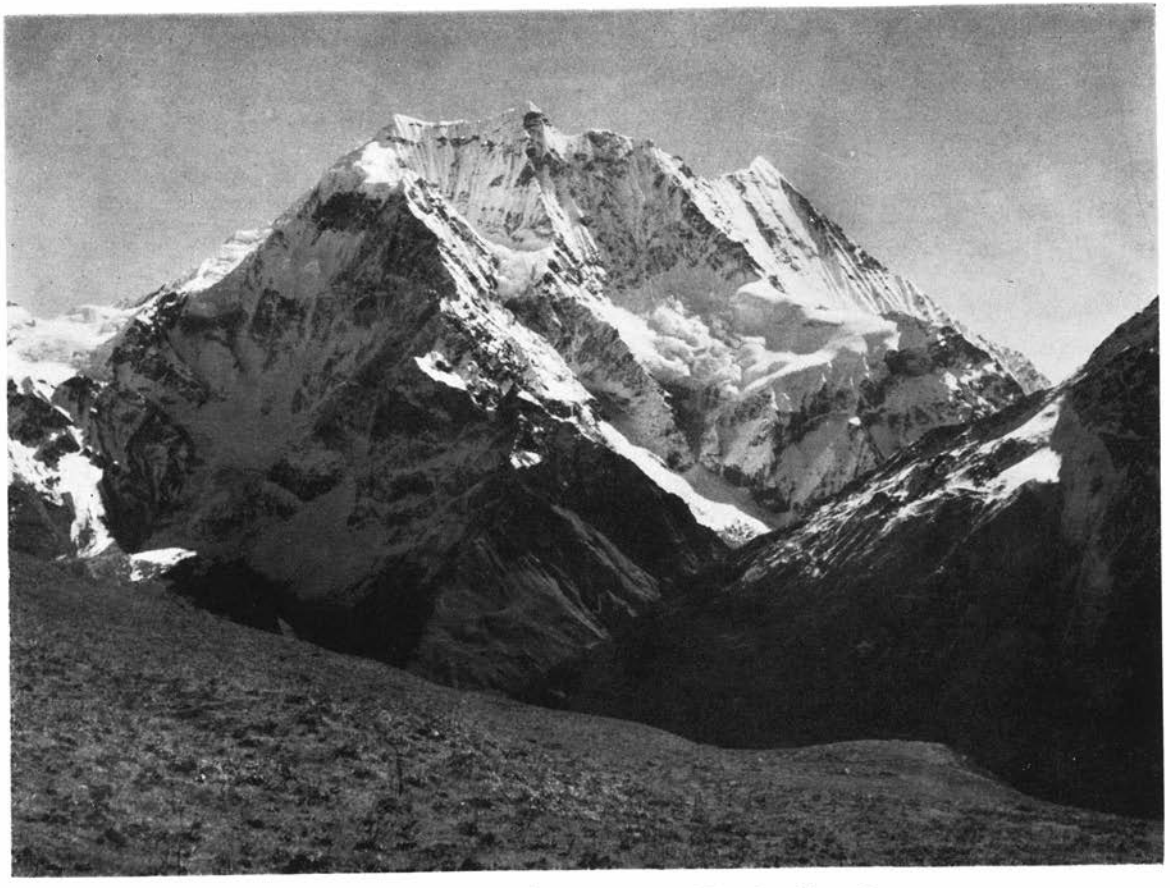
ナウル・コーラにおりる谷は、ひろい、ゆるやかな谷であつた。右手にピサンの六〇一七米峯が、はげしい形相をしてそびえ、左手には、ナウル・コーラの本谷をへだてて、テイルマンの六九〇〇米峯が、そびえている。そして、この二つのピークの間から、ちようどよい具合に、マナルスウ、P二九、ヒマールチュリの三山が、おそろいで顔を見せていた。

ナウル・コーラよりにすこしゆくと、長徑四〇米、短徑二〇米ぐらいの少さな池がある。頂上からの下りがけに、見つけておいたのである。どうしてできた池かよくわからないが、水溫は案外高くて攝氏六度——氣溫は攝氏八・五



Himlung Himal, 23,380ft., from western side of The Larkhya Pass

（ラルキヤ峠の西側からヒムルン・ヒマールを望む）



An unnamed peak, c 24,000ft., near The Larkhya Pass

（チベット国境に近い無名の7,000m峰）

度、時間は正午、高さ五五〇〇米――であつた。

登りとちがつて、下りはアンナプルナを直正面に見ながらゆくのだから、すばらしい。天氣もまた、すばらしくよく晴れている。晴れているといつても、アンナプルナ第三峰と第四峰の間のコルだけには雲のかかつていることが多いのに、今日はそれさえ見當たらないのだから、まつたく珍らしい。それに風がちつとも吹かないから、暑いぐらい。ここだけでなくて、アンナプルナも――第二、第三、第四は――雪煙をあげていない。

しかるに、アンナプルナ第一峰だけは、ものすごく雪煙をあげている。これはどうしたことだろう。アンナプルナの大障壁の右に見えるピラミッド型の山が、これまたものすごく雪煙をあげている。あれは多分ダウラギリ Dhaulagiri, 8172 m であろう。八〇〇〇米を超えない山と、八〇〇〇米を超した山とで、こうもちがうのだろうか。

ヘルツォーグとラシュナールの二人が、そこでふた夜を明かし、そこをトラバースして頂上へ往復したという、アンナプルナ第一峰の最後の斜面が片鱗を見せている。フランス隊の報告書で見ていた寫眞は、みんな下からうつしたものばかりだから、ほんとうの傾斜が出ていないが、ここから見るとどうして、なかなか急なものである。よくまああれをやつたものだ、と頭の下がるような氣がした。アンナプルナの勇士に對する尊敬だけではない。そこには登頂されても、なお毅然として天空にそそりたつた、この八〇〇〇米の巨峯に對する讃嘆や畏怖といつたものも、入りまじつていたことであろう。

森のキャンプでひと晩ぐつすり寢て、かえりは谷をくだらずに、バッドランドの上の臺地へ出る道をとつた。その道は、ほとんど登りくだりのないトラバース道で、山を眺めながら、のんきな氣持で歩くことができた。一匹の白い大きな羊が、高みからわれわれの通るのを眺めていた。逃亡したものの、仲間が一匹もいなくなつては、やはりさびしいのであろう。見えつかくれつ、しばらくわれわれのあとを追つていた。

臺地にはヨモギが一面に散生していて、踏むとよいにおいがした。片隅にラマ寺の廢墟のようなものがあつた。石

をつんだチベット人の家が數軒たつているところもあつたが、人はいなかつた。夏だけ使うのかもしれない。

アンナプルナ第三峰から出ている氷河を、正面に臨むところへきた。兩側のモレインがはつきり殘つていて、かつて氷河がどの邊まで押しだしていたか、あるいはその氷河の厚さがどれぐらいだつたか、を示している。それを見ても、現在と過去とを問わず、氷河のスケールははなはだ小さくて、とてもマルシャンディの河谷まで押しだすような、威力のあるものでなかつたことがわかる。チャモィとピサンの間でみた、あのてらてらの斜面を氷蝕地形と解することは、もはや成りたたないように思えてきた。

臺地を過ぎると、道はまた斜面のトラバースになつて、ブラガ Braga という村へおりるようになつているのであるが、遠廻りになるので、マツ林の間に見える草地を目がけておりて行つた。行つてみると、草地と見えたのは濕原であつて、仔づれのウマやヤクが樂しそうに草を喰つていた。

ベース・キャンプにかえると、ディリーが、竹節がきている、しかしいまは鹿狩りに行つているという。カトマンズで苦心して獵銃を一挺手に入れたのだが、考えてみるとわれわれはいままで、鐵砲打ちをしてみようというような、餘裕のある日を持たなかつた。シカはこの邊にたくさんいるらしいのである。おそらくジャコウジカであろう。この日もたくさん出たそうだが、獲物はなかつた。竹節は一人旅の苦勞を話してくれた。從者がいるから、ほんとうの一人旅ではないが、なにしろ言葉が通じないのである。よほどこたえたものとみえて、彼は會つた日から、ああ早くかえりたい、といつている。

ベース・キャンプにかえつて、三日間滯在。林の診療所がまた繁昌する。このごろは診察料の相場がきまつたらしく、誰れもがロキシー——例の米を蒸溜してつくつた地酒——一本と、卵數個とを持つてくるようになつた。なかには藥をせしめるのが目的で、假病をつかつたという横着者も二〜三あつた。せしめた藥を賣つて、金もうけをしようという魂膽である。

マナスルウの偵察

十月二十九日、ベース・キャンプを引きはらつて、いよいよマナスルウへの行軍がはじまる。さわやかな秋風が高原の上を吹きながれている。太陽はさんさんと降りそそいでいる。しかしもう、畑に出て働いている人間も、草をはんでいる家畜も、ほとんど見あたらない。

峠にかかるところで、ポーターたちに追いついた。ブラガやマナングボットの連中で、四二人という中には女もかなりまじつていた。乳呑み兒をかかえたのまでいる。母親が荷物をかつぎ、乳呑み兒の方は、別に八つぐらいの上の子がついてきていて、それも籠に入れて背負つている。そして、休憩のときに、荷物をおろした母親が乳呑み兒を受けとつて、お乳をのませるというしくみである。

だいたい農業關係の仕事が一段落ついたので、連中にすれば、これから冬にかけては出稼ぎの時期である。なかには、このままカトマンズまで出るというものもあり、また一度かえつて出直すが、そのときはビルマまで行くのだ、といつているものもあつた。

ピサンにおりてダーレの谷をわたるところから、谷の奥にアンナプルナの主稜を望むことが出來た。ティルマン・ルートの例のドームも見えているが、アンナプルナ第四峰は、ここから見たのではピークというよりも、單なる稜線上の一隆起ぐらいにしか見えない。サブヂィとダーレをわかつ尾根の上の萬年雪も見えていた。

翌日、あのてらてらに磨かれた岩壁の下をとおつて、もう一度觀察してみたが、もはや氷蝕地帶であることは考えられなかつた。氷蝕でなければ、うえにのつていた岩盤がすべり落ちた跡であろう。後日、カトマンズで、われわれと同じ年のブレ・モンスーンにここを通つたスイスの地質學者ハーゲン Hagen の意見を求めたところ、彼は卽座に

あれは氷蝕地形だと答えたが、ティルマンの『ネパール・ヒマラヤ』には、地すべりだと書いてある（同書一二六頁参照）。

ここを通りこしたところで晝食していたら、對岸（アンナプルナ側）の山の中腹に雪崩がおちていて、さつきから見ているがちつともとまらない、と中尾が云い出した。いわれてみるとなるほど、一見いかにも雪崩らしいものが落ちている。せまい谷の中を滝になつておちていて下にデブリの堆積がある。しかし雪煙もあげていないし、またどこからこうつづけて落ちてくるのか、その發生地もわからない。上の方はものすごい岩壁になつているのである。

今西は、あれは普通の水の滝であつて雪崩ではない。雪煙をあげていないということもおかしいが、雪崩である以上は必らずとまるものであつて、一時間も二時間もつづくような雪崩はありえない。といつたが、普通の滝とすれば、そこで落ちている水量が、下まで持續されるべきであるのに、この場合は滝の下から流れ出てくる水量が、滝そのものの水量よりも、明らかにすくないようにみえた。これに對して今西は、岩の間から突如として湧き出した水が、しばらく流れる中にまた地下にもぐつてしまうような場合があつてもよいと主張したが、けつきよく意見の一致を見ないままで、さきを急がねばならなくなつた。

ティルマン・キャンプを素通りして、チャモィの岩壁の下で、川を右岸へ渡つたところの、ソバの刈つたあとの畑にテントを張つた。ポーターたちの中にはテントのそばで自炊して、夜もそのままそこでごろ寝しているものが何人かいた。カトマンズのポーターでは、ちよつと眞似のできぬ藝當である。自炊といつても彼らは湯をわかすだけであつて、その湯でツァンパ――いわゆる麥こがし――をこねれば、それでもう食事の用意ができたことになるのだから、米をかしいだりたいたりするのとはちがつて、まことに簡便である。湯がなければないで水ででも事足りるらしい。行軍中に腹のへつたようなときには、水でこねて食つているところを、よく見かけたからである。ついでに書いておくが、いつか立山の室堂で一しよになつた行者も、麥こがしばかり食つていたように記憶している。近代的登山家も、

麥こがしについては、もうすこし研究してみる必要がないであろうか。

テグリンのポーターたちも、キャンプ・ファイアのそばでよく踊つたが、チベット人もよく踊る。しかし踊りの歌も踊りそのものも、兩者の間ではまるでちがう。言葉も宗教も、衣、食、住もちがうのだから、歌や踊りだつてちがつていて不思議はないのだが、ではどういうようにちがうのか、と問われても、不粋者ぞろいのわれわれには答えるすべのないのが殘念である。

キャンプを出てすこし行くと、正面にマナスルウが見えている。頂上をとりまいて、一段低いところに、たくさん針峯（エギュ）がならんでいるが、まだそのつづき具合がよくわからない。ナウル・コーラの出合まできたら、ピセアの森にセミが鳴いていた。ここのピセアは老木になると下枝がたれて、ヒマラヤ杉に似たような樹形を呈する。また、ここまで下りてきたら、草の葉が青いのに氣がついた。

クンツアをすぎて中腹のトラバース道になる。常綠廣葉樹が出てきた。はるか下流にトンゼのうしろの草山が見えてきた。ツグディカダカまでは思つたよりも長かつた。牧場にはもうウシは一頭もいなかつた。まわりの森のツタがもえるように紅葉していた。このまえは見えなかつたが、カールのうしろやゝ右よりのところに、ひとつ二つ針峯の頭のさきだけがのぞいている。

われわれはここで二隊にわかれて、今西・高木・竹節は、ここからカールのある山にのぼり、マルシャンディをへだてて、マナスルウの西南面を觀察する。中尾・林はこのままトンゼまで出て、ズウド・コーラ Dudh Khola へはいり、ビムタコーチ Bimtakhoti に先行して、その邊の適當なところからマナスルウの西北面を觀察する。リエゾンのディリーは、中尾たちと一しよにトンゼへいつて、今西隊の到着までにラルキア Larkya 越えに必要なポーターと物資とをととのえておく、という計畫をたてていた。

そこで、今西隊の方へはガルチェン、アンツェリン、ダーコの三シェルパと五名のポーターをのこして、その他の

ものはトンゼに向かつた。牧場にのこつて、草の上にグラウンド・シーツをしき寝そべつて空を眺めていたら、アマツバメがたくさん空を飛んでいつた。

ブラガやマナングボットからきたポーターたちは、今日トンゼで解雇することになつていたから、どういう理由で五名だけが仲間からはなれて居残りを志願する氣になつたのだろうか。聞いてみると、その中の三名はグラパニのもので、マナングボット方面へあきないに行つた歸えりを、ポーターとなつて稼いでいたのである。女ポーターが一人いたのは、この三名の中に夫婦者がふくまれていたからである。もう一人はムクチナートのものであつた。殘りの一人だけは村の者であつたが、これはラマで酒ぐせが惡く、どうやら村でのけ者にされているらしい。

われわれは地圖にナムン・バンジャン Namun Bhanjyang と記されている峠道を、傳うつもりであつた。さいわいグラパニのポーターの一人が、たつた一回ではあるがこの峠を越えて、ポカラまで行つたことがあるというので、峠の上ぐらいまでは行つてみたいと思つた。マナスルウの偵察もあるが、雪線や氷河の觀察もしたかつたし、一度稜線まででて、南側が見たいという氣持ちもあつた。この峠道はもちろん間道であるが、これを越せばトンゼからポカラまで七日間で行けるという。

ツグディカダカは二五〇〇米、ナムン・バンジャンが五四〇〇米とすれば、峠までに二回キャンプしなければならないであろう。小屋のよこで道が別れている。わりあいよく踏まれに道だ。山は、五合目ぐらいなら上の木は、もうすつかり葉を落しているが、それから下になると針葉樹の間に黄葉した木がまじつていて美しい。みち〳〵シャクナゲの多いのが眼をひく。アンナプルナのマツとも、チョルーのビャクシンとも、また趣きがちがつてゐて非常にうるおいのある景色、日本の山に登つているようだ。

大きな岩の下に泊り場のつくつてあるところへきた。前に水が流れている。晝食しているうちに雲が動き出して、日をおゝうてしまつた。たきぎを集めたりしつゝ登つてゆくと、雨がしよぼしよぼ降つて來た。日本の山に似ている

などとほめるから、それ見ろ、御丁寧に雨まで降つて來たではないか。道ばたの岩の下にもぐり込んで、一時間ばかり雨宿りした。やがて雨があられに變つて來た。小やみになつたところで出かけると、あられがつもつてもう道が白くなつている。三五〇〇米で森林限界をこえた。水が出ていたのをさいわい、三六五〇米でキャンプにした。

夜のあいだに降つた雪は朝になつたらやんで山が出ている。ズウド・コーラの奥に七二四五米の無名峯、それから國境のチェオ・ヒマール Cheo Himal, 6705 m や、ヒムルン・ヒマール Himlung Himal, 7014 m、近くはテイルマンの六九〇〇米峯などが出ている。しかしこの雪では、裝備の悪いボーグーをつれてキャンプを前進さすわけにゆかない。こゝから輕裝で行けるところまで行つてみることにしよう。

道はカールのへりの一ばん低いところに通じている。そこは四〇〇〇米ぐらい。そこまで行かぬうちにもう雲が動きはじめて、マナスルウは出たり消えたりしている。まるで堤防を思わすような鞍部を越えて向こう側におりたところは、馬蹄形のかなりいい形をした氷蝕地形であつた。左の方にとがつているのが、下から見えていた針峯らしい。そのつゞきに萬年雪も見えている。

こんな天氣に、これ以上行つてみたところでマナスルウが見えるでなし、いい加減に引きかえそうじやないか、と高木はいつた。山はたとえ見えなくても、テントで寢ているよりは、かわつたところを歩いていた方がよい、と今西はいつた。靈すぎ、また雨が降つて來た。ゆうべ降つた新雪をかぶつた、古い雪の上を行くようになつた。左の谷から風がびゆうびゆう雪を吹き上げてくる。上を見ると雲につつまれて、これからどこをどう登るのか見當もつかない。四五五〇米。まだ一時すぎたばかりで時間は早いが、引きかえすべきときだと思つた。

登りに氣がつかなかつたが、しばらくおりたところに立派な岩屋があつて、やはり泊れるようになつていた。そこまでくればもう風も吹かない。煙草を一服吸つて、なにかなしに灰色の景色を眺めていたら、一匹のモルモットが雪の上を岩から岩へ走りすぎた。

萬年雪までは登れなかつたので正確なことはいえないが、下から見て、その高さは四六〇〇米か四七〇〇米か、というぐらいのところを考えていたのである。アンナプルナやチョルーの萬年雪限界に比べると、ばかに低いが、一つの山塊の周邊部で萬年雪限界が低くなるのは一般現象であり、またこの邊では、南によるほど低くなる傾向があるかのようにも思われる。クディ・コーラの奥に、まつ白な山が出ていたことを思い出しているのである。あれがナムン・バンジャンつゞきの山なのだ。五四〇〇米のナムン・バンジャンは、だからもちろん雪線をぬいた峠である。

ふと眼をさますとテントが明るいので、もう朝に成つたのかと思つて外へ出たら、中天に滿月がこうこうとさえていた。ひる間は天氣が悪いが夜になると晴れるのである。そうだとすれば、朝早く雲がまだ出ないうちをねらわないことには、腹案の目的が達せられないであろう。

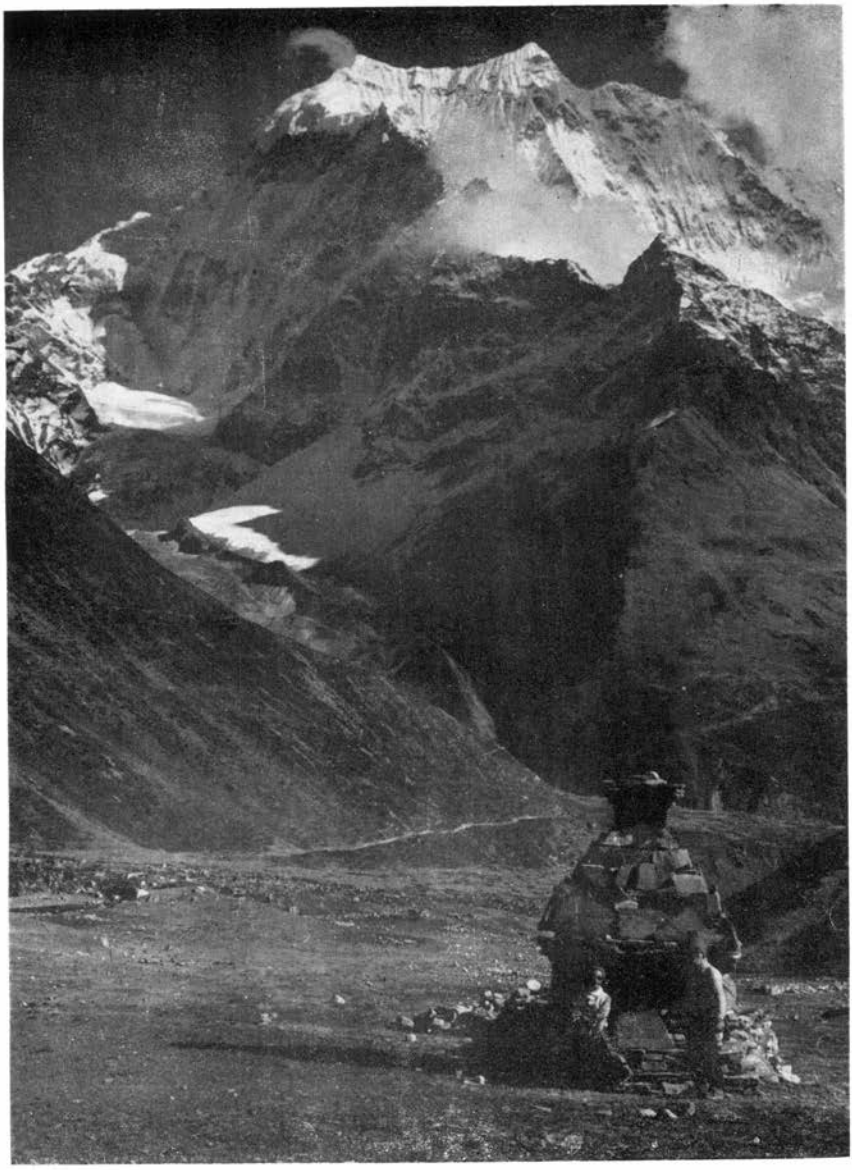
翌朝は七時に出發、カールを横切つてその東端の一角に登つた。せつかく意氣ごんできたのに、頂きについたときははや雲が動きはじめている。マルシャンディの下流、ネパール南部の丘陵地帶からインド平原にかけては、一面の雲の海。

そのうち、まことに幸運なことにはマナスルウにかゝつた雲が、すこしづゝ消えはじめた。P二九も出て來た。ヒマールチュリも出て來た。この好機逸すべからずと、寫眞をとつたりスケッチをしたりした。マナスルウ西南面の輪廓は、これでだいたい頭に入つた。ただ、マナスルウとP二九の間のコルが、ここからでは見えないし、またこのコルから出ている谷が、はたしてムシ・コーラの原流に當つているかどうかを、確めることができなかつた。それは、こちらのいる場所が低いのだから仕方がない。四〇〇〇米をすこし出たぐらいでは、まだマナスルウの頂上までゆうに四〇〇〇米の開きがある。たいしたものだ。

キャンプまでくだらぬうちに、もうまた雲につゝまれてしまつた。急げばこれからでも今日中にトンゼまで行けるのだが、もうひと晩ツグディカダカで泊りたかつたので、ダーコにバガルチャップでロキシーとニワトリと卵を買つ

Manaslu from north-east

（ラルキヤ峠の東麓から見たマナスルウ）



Larkhya Bazar

（ラルキヤ・バザール）

てきてもらうことにした。われわれはゆつくり秋の色彩を樂しみながら、山をおりることにした。

灌木帶のナナカマドが赤い實をつけていた。新雪のつもつたのは三三〇〇米――カールからその下につゞく急斜面へ移りかわるところ――までであつた。雲がかかつていたのもその邊までゝあつた。溪流のそばで休んだ。氷河から流れでる川とちがつて、川底の石には、うす青く珪藻がついている。川の面には昆虫がとんでいる。この川にしてイワナのいないことが、玉にきずというものだろう。

夜になつたらやはり空が晴れて、十六夜の月がしずしずと出た。今夜こそ、月を見ながらポーターのようにごろ寢だと、たき火のそばにシュラーフをもちだし寢たが、露がひどくてずぐずぐになつてしまつた。ツグディカダカの下の常綠廣葉樹林は、落ちたてのカシの實をふんで歩いた。バガルチャップまでくると、道ばたにソリダコーの黄色い花が咲きみだれていた。危げな枝の橋をわたつてトンゼには畫すぎについた。

中尾・林はパンシーとサルキをつれて、豫定どおりビムタコーチへ先行していた。ディリーが待つていた。たまたまインディアン・アーミーがブリ・ガンダキからラルキアを越えて、トンゼにおりてきたそうだ。そこでさつそくわれわれのリエゾン・オフィサーは彼らに事情を説明して、彼等のもつていたコインとわれわれの紙幣とを交換さすことに成功した。そのうえ砂糖までふんだんにせしめることができたから、これで心配なくラルキアが越えられるという。サンキュー、ディリー、では明日ただちに中尾隊のあとを追つて出發することにしよう。

さて、いよ〳〵出發ということになつてみると、ポーターの出發が悪い。ぼつ〳〵と出ていつて、最後に六人分の荷物がのこつた。トンゼのヘッドマンが何べんも村とキャンプの間をゆききしているが、もうなかなかやつてこない。この若いヘッドマンは五人ワイフをもつているそうだが、顏の色がやゝ白く服裝はネパール・スタイルで、白いふちなし帽子、白いシャツに黑いチョッキ、腰に白いきれをまとい、黑い半靴をはいていた。

トンゼは一八〇〇米ぐらいだろう。こゝまでおりたらもつと溫かくてもよかりそうなものだが、じつさいは濕度が

高くなつているため、かえつて冷えびえとしている。それに、こゝはもうマルシャンディの峡谷の底だから、なかなか日が射してこない。早く出發して日當りのよいところへ行きたい。やつとゾーパが二頭きたので、それに四人分の荷をつみ、あとの二人分を四人の女・子供にわけてかつがせ、さきを急いだ。

ズウド・コーラの水も、マルシャンディの本流におとらず濁つている。出發してすぐ左岸にうつつた。日を受けて歩いていると、低いだけにやつぱり暑い。ティルジ Tiji は右岸にあつた。すつかりチベットづくりで中にゾーパのたくさん泊つている家があつた。蒙古旅行のウマ宿を思いだした。

二二〇〇米附近からカシ森林。上からかわいゝ女の子が二人おりてきた。中尾隊のつれていつたポークーで持つてきた通信の中に、

ピムグコーチの上、三九〇〇米の森林限界附近にキャンプしている。ラルキア・ラには、目下三十糎の雪が約二哩にわたつて積つているのみ、恐るるに足らず。キャラバンが毎日通つている。

と書いてあつた。ティルジから一時間ほど行つた川ぶちでキャンプ。

しばらくゆくと、出作りの小屋のたつた廣い畑地に出た。右岸の山も左岸の山も岩山で、下の方に生えている木はなお常綠廣葉樹である。ふりかえると、トンゼのうしろに萬年雪をつけた山が見える。あのナムン・バンジャンの山にちがいない。ずいぶん高くみえる。ゾーパの群れや羊の群れが、山をおりてくるのに出あう。みな鹽の袋を背負つている。

畑地につゞいて左から出た高い尾根をこえるところがある。そこはちよつとした峠になつていた。峠をおりたところにも畑があり家が一軒あつて、女が機を織つていた。こゝは二五〇〇米だつたが、この峠をさかいにして上流にはもう常綠廣葉樹林は見られず、マツ・ツガ・イチイ・モミといつた針葉樹の、黑ぐろとした森林にかわつた。その中にあつて黃色くみえるのは、カエデであろう。黑木におおわれた前山のむこうには、雲一つない靑空を背にして白い

山がのぞいていた。

北からはいる支流とわかれて、谷が右折するあたりから七二四五米の無名峯が見えたが、マナスルウはまだ見えない。ティルジ以來ずつと右岸ばかりつたつている。常綠廣葉樹の鮮苔林はなくても、ツガの枝から長くたれさがつたサルオガセが、この谷の濕潤さを物語つている。四時ごろ、マナスルウの前衞で、われ〳〵が三本槍と假稱した見事な岩峯の下を通過。それから三〇分も歩いたころ、モミの大木の間から、紫色の煙があがるのが見えた。この森の中のキャンプ、高さは二九五〇米。

昨日、われわれのあとからあがつてきたゾーパの一群があつて、同じところで泊つたのだが、そのゾーパのうち五頭に荷をつます交渉が成立したので、ポーターを一一名かえした。ラルキア越えには、ポーターをできるだけすくなくして、そのかわりにゾーパを使おうというのが最初からの案であつた。

マナスルウがいよいよ出て來た。三本槍からつゞいた西尾根、北峯へつゞく北尾根、北峯七二四五米峯と、一大パノラマが展開した。今西はスケッチに熱中して最後尾になつた。谷が左折する。まだモミの森林。一軒家があつた。鹽をつんだゾーパや羊が相かわらずおりてくる。登りが急になつて來たと思つていたら、知らぬうちにモレーンの上に登つていた。そこに、高木・竹節が休んでいた。じつをいうと、この日今西・高木は前夜の食いすぎがたゝつて腹をこわし、竹節は風邪氣味で、三人ともとみに元氣がないのである。それで、サーブは三人ともおくれているから、ビムタコーチで待つているようにという手紙を、先行しているディリー宛に書いて、使いに持たせてやつた。

こゝまできてびつくりしたことが一つある。それは、昨日から氣がついていたのであるが、谷の奥で七二四五米峯の下にあたるところに、マナスルウの方から出た、大きな押し出したようなもののあることであつた。今日近づいてみて、それはモレーンの丘だろうといふ判斷を下した。その丘の上にはカンバがたくさん生えていた。

ところで、こゝまで來て、それを上から眺めることができたので、はじめてその正體が明らかになつた。モレーン

の丘と考へたものは、見よ、谷一ぱいに廣がつて、マナスルウのふところまで、蛇行しながらえんえんとつづいているではないか。これが氷河でなくてなんであろうか。もしも一般的な氷河の概念にあわないところがあるとすれば、この氷河は、その表面がすつかり岩屑におおはれているということであり、そのうえにカンバまでが茂つているということである。

一度はびつくりしたものの、岩屑でおおわれた氷河なら、われわれはすでにアンナプルナで、これを見ているのである。氷河の上に木が生えているというから、おかしい氣がするけれども、シベリヤの永久凍土層の上には、立派に森林が育つていて誰れも怪しむものはない。永久凍土層というものが、容易に消えてなくならないように、岩屑ですつかり表面をおおわれてしまつた氷河というものも、容易には融けないにちがいない。

モレーンの丘をつききると山裾の間にメドウが開けてきて、ビムタコーチの家はモレーン寄りにかたまつていた。ディリーが出てきて、使いがくるのが遲かつたからガルチェンはポーターと一しよに、もう一時間もさきにここをたつていつたという。時計は二時半を廻つている。中尾の手紙にはビムタコーチからキャンプまで三時間行程、と書いてあつた。いまとなつては、いくらおそくなつてもキャンプまで頑張るより仕方があるまい。

モレーンの丘の裾にそうてぶら〳〵登つてゆくと、上のキャンプからポーターが、あつい紅茶をテルモスに入れてもつてきてくれた。しばらく行くと、こんどは馬——さつきたしかに馬に乘つて上へ行くものがあるのを見た。その馬だろう——を二頭つれてきた。高木と今西とが乘つた。岩石の多い不整地の上をゆくのだろう。馬がすべりはせぬかと氣をもんだが、馬の方はこんな道になれているようだつた。ガルチェンが迎いにきたのでキャンプはどこかとたずねたら、あと五分だと答えた。中尾の三時間はかけ値であることがわかつた。

中尾隊は、ティルマンの觀察したとおり北峯の北側のコルにとりついていて、それから北峯越えで、その南側のコルへ出る以外には西北側からのマナスルウの登路はない。しかし北峯越えは相當な困難が豫想される。しかるに北峯

の南のコルを通して見えるサマ側の斜面は、ティルマンの『アルパイン・ジャーナル』にのせた寫眞からもわかるように、雪のついた斜面である。だから東北面からこの雪の斜面を登つて、直接頂上のプラトーにとりつく登路が求められるとすれば、その方をとるべきであろう、という結論を用意していた。同感である。われわれもズウド・コーラを登りながら、そう考えていたのである。

しかしラルキア越えには燃料がないから早出して、向う側の燃料のあるところまで一氣に越してしまわねばならないという話、それなら明日は一日休養して英氣を養うことにしよう。

朝起るなりモレーンの丘に登つてみた。低く見えているが、それでも一〇〇米や一五〇米はあるだろう。上にあがるとヒムルン・ヒマールからチェオ・ヒマールにつゞく國境の山が、ひと眼に見わたせた。ヒムルン・ヒマールの左に、高さは低いが、ものすごくつつ立つた山がある。ラルキアの峠そのものは見えないが、それと覺しきあたりが低くなつていて、そこへ谷が入りこんでいる。ヒムルン・ヒマールもチェオ・ヒマールも、それからマナスルウも、この邊の山はみな岩が白味を帶びていて日を受けるとそれが桃色に見える。深成岩なのであろう。アンナプルナの岩が水成岩で黑つぽかつたのとちがつて、たいへん明るい感じを受ける。

ヒムルン・ヒマールの兩側から一本づつ、ラルキア側から一本、合計三本の巨大な氷河が、眼の前に横たわつている。これらの氷河も、流れているというよりは横にわたつているのである。岩屑で一面おおわれているところは、昨日見たマナスルウから出ていた氷河とかわりがない。ただ、こちらの方がはるかに雄大である。われわれが見たヒマラヤの化石氷河の中では最大のものである。氷河の表面には、モレーンの丘の上にくらべると、四～五〇米は低いであろう。どれだけの時間がかゝつたものかわからぬが、氷河が生きて動いて、さかんにこのモレーンを運んでいたときから、いまゝでの間に、すでにこの高さに相當するだけの氷河がとけてしまつたことを示している。

氷河らしい氷河を、はじめて眼のあたりに見て、これだけの氷河がアンナプルナで考えたように、雪線の變動を伴

わなくても、單に降水量の變動だけで、生きたり死んだりするだろうと考えることに、いさゝか自信がもてなくなつた。ナムン・バンジャンの方にしたつて、あのカールを氷河がけづつたものとすれば、四〇〇〇米ぐらいの高さに萬年雪限界を假定した方が、説明が樂になるのでなかろうか。そうすれば、そのときはいまよりも、六～七〇〇〇米雪線が低かつたことになる。

しかし、雪線の低下ということなら、こゝだけの問題でなくて、それはおそらく、ヒマラヤの全體にわたる現象であつたろう。すると、雪線の低下がかりにあつたとしても、ここだけになぜこんな大きな氷河が發達したのか、ということに對する説明としては——雪線だけを取りあげていたのでは——なお不充分なところがある。

そこでやつぱり降水量ということにもどつてくるのであるが、まず注意したいことは、この谷が南向きの谷である、ということである、單に南向きということだけなら、チョルーだつてそうであるが、ここはチョルーなどとちがつて、マルシャンディという大きな深い谷の走向——南北方向——から、あまりずれていない。マルシャンディは、東西方向のヒマラヤの間にあいた、一つの門であり、そこをくぐつて、ヒマラヤの北麓までモンスーンの濕氣のはいりこむ通路である。ここでは森林限界に生えたダケカンバの枝にまで、サルオガセがびつしりついているのを見て、われわれは眼をみはつたが、それはこの高さにおいてもなお、いかに强くモンスーンの影響があるかということの證據である。

ヒマラヤに降る雪はどこからくるのか、またいつ降る雪はどこからくるのか、またいつ降るのか、ということについて殘念ながらわれわれはまだ、くわしいことを知らない。けれどもアンナプルナに雪が多くて、チョルーにすくないことを考えると、雪は南からくるのであろう。アンナプルナで吸いとられてしまうから、チョルーに降る雪がすくなくなるのだと考えてもよい。位置からいえば、ヒムルン・ヒマールなどは、チョルーよりも北へよつている。しかるにここに大きな氷河が發達しているということは、モンスーンの濕氣がここまで自由にはいり込んでくるのと同じ

ように、マルシャンディをとおつて南から押しよせてくる雪を、間にあつてさえぎり、吸いとる高い山が存在せぬため、いきおいここに降る雪が多くなることによるのである。

そのかわり、ここでひと山越えて、チベットへはいれば、アンナプルナとチョルーのように、チベットの山に降る雪の量はずつと減つてしまうであろう。同じヒムルン・ヒマールでも、南側なればこそこれだけの氷河が發達しているのであつて、北側へまわれば、もつと發達がわるいのではなかろうか。この點は日本アルプスとちようど反對になつていて、風上に降る雪の方が、風下に降る雪よりも多いということになるわけだが、七〇〇〇米という高度では空氣がもはや多量の濕氣を含みえないのだから、これは當然のことゝ思つてよいのである。

氷河を發達させるための條件というものが、まだこのほかにもいろいろあるから一概にはいえないけれども、以上のことを考えあわせると、アンナプルナもわれわれが見たのは、北側だつたから大きな氷河がなかつたので、南側へまわつたらあるいはここに劣らぬような氷河——たとえ化石化していようとも——に、出くわすのではなかろうか、という氣がする。

十一月九日、ラルキア越え、八時まえに出發。この邊の勝手を知つたポーターたちは、もうずつと先の方を歩いている。モレーンの丘に沿うてすすみ、だいぶ登つてから、一度谷をわたつて反對側のモレーンの上に出た。谷の水には氷がはつていた。

ナムン・バンヂャンの萬年雪のついた山が、いよいよ高く見える。登りぞこなつたことがいまごろになつて殘念だ。遠くビサンの六〇一七米峯が出ている。こちらからだと裏側を見ているので、あの特徴のあるアイス・キャップがわからない。頂上まで岩がくろい。テイルマンの六九〇〇米峰ももちろん見えている。

峠の近くになつて、落石の危險のある山腹をへつつた。そこを越すとまたモレーンを傳つて、一度も氷河らしいものの上を踏まずに、五二〇〇米のラルキア・ラまで登つてしまつた。しかし、道が通つているのは、峠の一ばん低い

ところではない。一ばん低いところをのぞくと、そこで兩側に流れる氷河がつゞいていた。

峠の上は風が吹いて寒いのですこしおりたところの岩蔭に休んだ。チベット人たちは要領を心得ていて、こういう寒いところは小走りに通りすぎたが、ネパール人のポーターが一人、ところもあらうに寒い峠の上で倒れていた。たまたま林が通りかかつたので介抱してつれてきた。驚いたことに、この雪のつもつたラルキアを、二三名のポーターのうち、六名のネパール人はハダシで越えたのであつて、倒れていたというのも、このハダシ組の一人であつた。

休んでいると、下から羊のキャラバンがあがつて來た。上からは二〇頭ばかりのヤクのキャラバンがおりて來た。シェルパたちは、ヤクに荷をかつがせて、から身で歩いている。今朝ビムタコーチをたつてきたキャラバンであつて、このヤクどもに荷物を負わせる豫定であつたが、なかなかやつて來ないので、待ちきれずに出發したのであるという。しかし結局ヤクの方が人間よりも早い。彼等はちつとも休まないから。

ちよつと見たところではわからないが、ヤクの方がゾーパよりも毛深い。ヤクもゾーパも、荷物をはこんでいるのは、みんな雄であつて雌は荷物をはこばない。ヤクに對して雌の方はデイム、ゾーパに對して雌の方はゾーモという。パンシーにいわせると、ゾーにも二種あつて、牡牛とデイムとの間にできた子がデイム・ゾーであり、ヤクと牡牛の間にできた子がパム・ゾーである。ヤクやディム・ゾーは高いところの家畜で、低地につれてきたらすぐ弱つてしまうのが、パム・ゾーの方は、高地でも低地でも平氣である。ヤクやディム・ゾーは殺して食つてもよいが、パム・ゾーは殺してはいけないのだそうである。

峠の北よりに萬年雪があり、峠そのものも上まで氷河がつづいているのだから、この邊の氣候的雪線の高さを、峠の高さ五二〇〇米で現わすとすれば、高すぎても低すぎるような心配はおそらくないであろう。けれども峠から東の方を見ると、これでも同じ山脈のつゞきかと疑われるほど、ちがつた風景が展開している。

同じチベットさかいの山だが、もうそこには氷雪でつつまれたような山は、一つとして見えない。高い山がないか

らでもあろう。そうかといつて、森林をまとおたような山もない。どれもこれも地肌の出た山であり、裾の方に枯れ草の生えているのが、せいぜいである。その地肌というのがまた、黄色つぽかつたり、黒ずんだり、ブリューがかつたりしていて、どこがおもしろいのかよくわからないが、いくら見ていてもあきないのである。氷河の山よりも、もつとなにか異郷的なものを感じていたのだ。われわれはついにチベットを望みみるところへ行けなかつたが、この風景はもはやチベット的なものであつたかも知れない。

新雪がつもつていたのは、中尾の通信にあつたように、峠の上ほんのしばらくの間だけであつた。モレーンの上か、岩屑でおおわれた氷河の上かはつきりしないが、相當でこぼこのあるところを、どんどん下つていつた。次第に左の方の草山の裾に近づいていつて、道はいつしか山裾とモレーンとの間の、くぼみを通るようになる。そこに一箇所、かわいらしい氷河湖があつたが、その水にももう氷が張つていた。いまごろこんなところにテントをはつて、ヤクを放牧しているものがあつた。

モレーンに沿つて歩いた距離からいうと、こちら側の氷河も、ずいぶん大きいということがわかる。やつとツンゲまで來た。そこから下は河原が開けて、もはや飛石づたいにはわたれぬぐらいの水が流れている。對岸の草原にキャンプ、四一〇〇米で、まだラルキア・マーケットまでは來ていないが、それでも一日のうちに、一三〇〇米登つて、一一〇〇米くだつたことになる。

キャンプにおちついて、なに氣なくうしろにあるモレーンの丘に登つてみた。モレーンの丘といつても、キャンプの側からでは、土手にのぼるぐらいの高さしかない。しかし、反對側は深くおちこんでいて、數十米下を川が流れていた。その川は、一キロほど下流で、右岸から出ている氷河につきあたつている。氷河の奥に、左邊が急で右邊のゆるい、不等邊三角形をした、大きな白い山が出ている。夕闇のせまる中に、いく分鮮明さを缺いて出ている。

あれはなんだ。マナスルウ以外にこんな山があるはずがない。しかし、いままで見てきたマナスルウとあまりにも

ちがうではないか。マナスルウといふ山が、こんな溫容な山であつてよいのだろうか。いまだかつて一度も笑顔を見せたことのない、嚴格なおやじが、まるでひとがかわつたように、笑顔を見せても子供はすぐには喜ばないであろう。あれでもマナスルウだろうか、という氣持ちに壓倒されて、疑つているわけでもないのに、どうしてかうれしくなれなかつた。

翌日はサマ Sama までくだる豫定だつたけれども、マナスルウの登路發見ということはわれわれとして第一に考えねばならない課題であり、しかもその課題が、いまやまさに解決されようとしているのである。それをうつちやつておけるかというので、パンシーに森林限界までいつたら、そこでキャンプして待つているようにいいつけておいて、高木・林・竹節・ガルチェン・サルキの五名は、マナスルウよりの右岸の山へ、今西・中尾は反對側の左側の山へ、それぞれ偵察に出かけることにした。

出かけるまえに、うしろのモレーンの土手の上にあがつていた誰れかが、ワイルド・シープがいるという。望遠鏡をとつて見に行つたら、ちようど高木たちの登ろうという山の中腹あたりの草つきに、大小とりまぜて十五～六頭もいる。むこうでも氣がついたのか、ぼつぼつ動きだして、とうとうみな姿を消してしまつた。シェルパかチベット人のポーターが見つけたのであろうが、枯草色をした動物が、枯草の中にいるのである。それをちらと見ただけですぐ發見する彼等の能力には舌をまかざるを得ない。これがこんどの旅行を通じて、バラールを見たわれわれの唯一の經驗であつた。

マナスルウの登路は、まず北峯とナイケ Naike ――北峯からブリ・ガンダキに出ている尾根上の顯著なピーク――との間のコルに取りつき、そこからさきは北峯の東がわをまいて、氷河の上をマナスルウと北峯との間のコルに出る。このコルからもう一度東がわへもどつて、さきの氷河につづいた斜面をのぼり、最後にちよつと急なところをぬけると、そこはもうティルマンのいわゆるプラトーである。あとは尾根どおしに頂上。誰れが見たつて、こゝから見たか

(*Above*) *On the east ridge of Manaslu* (マナスルウの東尾根にて)

(*Below*) *To the east ridge of Manaslu* (マナスルウの東尾根へ向って)

Manaslu glacier and Naike

（マナスル氷河とナイケ）

ぎり、これ以外の登路は考えられぬであろう。

ついでにラルキア・ラの方を見ると、峠は見えないが峠の上にあつた萬年雪が氷河のかなたに沈んでゆく太陽のように、まるい頭だけ出している。氷河といつたが、このラルキア・ラから出ている氷河も、もちろんすつかり岩屑におおわれていて、どこにも氷は見えていない。ツンゲといえども、普通のがらがらした急斜面にすぎない。むしろ氷河そのものが、周圍を浸蝕によつてきりとられた、溶岩臺地かなにかのようである。

この化石氷河のツンゲに近く、左側（右岸）の山から、一つの小さな氷河——化石でなくて生きた氷河——がおりていた。その氷河は、現在の末端からすこしはなれて、化石氷河とすれすれのところに、じつにきれいな完璧な三日月形のモレーンをのこしていた。このモレーンの方が、われわれの化石氷河よりも、あるいは新らしいかも知れぬ。左側の山つづきに、七二四五米峯の頂上が出ていた。

ラルキア・マーケットには、ビムタコーチとちがつて誰れもいなかつた。正面に、ブリ・ガンダキ左岸の氷河をつけた山が、とげとげしく立ちふさがつている。これも登れるようには作られていない山の、一つであろう。ギア・ラ Gya La から出てくる谷にかゝつた橋のところで、お茶をもつてきたポークーに出あつた。ギア・ラの方を見ても尾根の上に一箇所萬年雪が見えるだけで、荒涼としていたが下流の方には續々と氷雪におゝわれた山が現われだした。ヒマールチュリのつづきが、見えているのである。かつて畑に使つたことがあるらしい、階段狀をなした平の一隅に、先發のパンシーたちがテントを張つて待つていた。その夜は秘藏のウイスキーで登路發見祝いをやつた。

このキャンプ地からサマまでは、もう半日の道のりであつた。カンバがばかにたくさん生えていて、川ぶちにまで茂つている。下るにつれて、ビャクシンも見られるようになつた。シャクナゲの厚い葉が、太陽にきらきらと輝いている。サマの近くまできたら、モミと、いままでどこにも見あたらなかつたカラマツが出て來た。カンバの枝に、サルオガセがさがつていないところを見ると、ここの方がズウド・コーラよりも濕潤でないのであろう。しかし、ブリ

・ガンダキの上流には、ついにマルシャンディ上流のあのセミ・デザートといわれるような、さわやかな高原地帯は、出てきそうにないのである。

マナスルウが出た。東尾根の上端にあるピナクルが、ここからでは大きく見えすぎて、マナスルウは、ちょうど鹿島槍のような双頭の山であるかのごとき印象を與える。東尾根というのも、上半分はおそろしく險しい岩尾根で、あれでは手のつけようがないのであろう。やがてマナスルウから押しだした大きな氷河の下をとおった。これは生きている氷河であつた。生きている氷河としては、われわれの見た中での最大のものであつて、そのうえに林立したセラックのものすごさは、みるものの膽を寒からしめずにはおかなかつた。

この氷河をすぎたところに、ちよつと立派なゴムパ――ラマ寺――があつた。われわれはその境内のなかに、キャンプした。それがサマのベースキャンプである。そして、二三名のポーターのうち、ネパール人四名、チベット人二名をのこして、あとの者は解雇した。

もしもマナスルウを、サマ側からはじめて見たのであるならば、われわれはきつと不安と焦燥とを感じていたにちがいない。われわれの發見した登路は、ここからではよく見えないからである。しかし、この場合のわれわれは、いわばもうかぎを預けられていたようなものだ。こちら側に出ている大きな氷河を抜けていつても、北峯とナイケとの間のコルに出られる、という見とおしはついていた。（その可能性は、あとで高木・竹節隊の偵察によつて確認された）

ところで、マナスルウの登路發見という名譽は、はたしてわれわれに許されてよいものだろうか。一九五〇年に、ティルマンはたしかにラルキア・ラを越していない。彼は歸えりもマルシャンディをくだつた。けれども、三名の隊員が、ティルマンとわかれて、ラルキア・ラを越え、ブリ・ガンダキをくだつて歸えつていることが、ガルチェンの言葉によつて確かめられているのである。彼らはモンスーンに妨げられて、あの登路を見ることができなかつたのであろうか。もし見ていたとしたら、サマ側からの可能性についてティルマンが『アルパイン・ジャーナル』にひと言

も書いていない、というようなはずがないではないか。

われわれはそう思つていた。しかし、事實はそうではなかつた。アンナプルナ第四峰が不成功におわり、六九〇〇米峯が不成功におわつたティルマンは、三名の隊員とわかれたのちに、もう一度ビムタコーチへかえつてきて、こんどは七二四五米峯をねらうつもりであつた。しかるに、思いがけなく、がらがら石の間で顚倒したのがもとになつて、彼はこの野心を放棄したうえ、ビムタコーチでしばらく靜養することを餘儀なくされた。

彼の『ネパール・ヒマラヤ』をみると、その間にロバーツ Major J. O. M. Roberts が、ラルキア・ラを越えて、サマ側に足をのばしているのである。どこまで行つたかは確かでないが、彼は歸えつてきて、むこう側でマナスルウのうえのいわゆるプラトーに、直接取りつくことができるのでないかと思われるルートを見つけた、といつてティルマンに報告している。そうすると、彼もまたわれわれと同じように、あのラルキア・マーケットの上に出てくる氷河の奥に、北峯とナイケとの間のコルをとおして、マナスルウを望みみた、と信ぜざるをえなくなるのである。登路發見の名譽は、ロバーツのものであつて、われわれのものではない。

しかし、そのあとにティルマンは筆をつゞけて、われわれはそれを試みてみようという考えを持ちあわさない人間の、非熱情的な平靜さをもつて、このマナスルウの登路を論議した、といつている。そして、この登路ならやれそうだとも、やれそうにないとも書いてないから、どういう論議がなされたのかは知るよしもないが、フランス隊のアンナプルナを批評して、わしならあんなルートは御免だ、というティルマンのことだから、せつかくロバーツの見つけた、このマナスルウのルートも、あるいはティルマンの御氣に召さなかつたのかもしれない。

すると彼は、いまでも北峯越えをマナスルウの唯一の登路と考えているのだろうか。雪崩の心配ということからいえば、なるほど北峯越えの方が安全であろう。しかし、北峯越えに日を費しているようでは、肝心のマナスルウが打てない。この勝負は、マナスルウと北峯とのコルを、いかにして早く奪取するかという點にかゝつていると思われる。

からである。

登山の歴史とは、ひと口にいえば、試みずして登れないときめていたところを、試みることによつて登つたという歴史である。もつとも、試みたからといつて、必らずしも成功するものとはかぎらないが、それを試みようという考えをもつたものが、それを試みることに對しては、ティルマンといえども、あえて文句はつけないであろう。

後　記

マナスルウ一周の旅行記としては、さらにサマのベース・キャンプにおける一七日間と、ブリ・ガンダキをくだつてカトマンズへ歸るまでの一七日間の、二章をつけ加えなければ、宗全なものとはいえないが、ここまでは比較的順調にきたわれわれも、これからさきになると、アクシデントをおこしたり、隊員の氣持ちが一致しなかつたりして、足並みがとかく亂れがちとなるのである。

だからその記錄の發表を澁っているというわけではないが、與えられた紙幅もすでに超過しているし、われわれ先遣隊としては、マナスルウの登路發見というクライマックスで一應ピリオドをうつて、あとを本隊におゆづりする、という手もあるかと思うので、今回はこれで責任をはたしたことにしていたゞきたい。

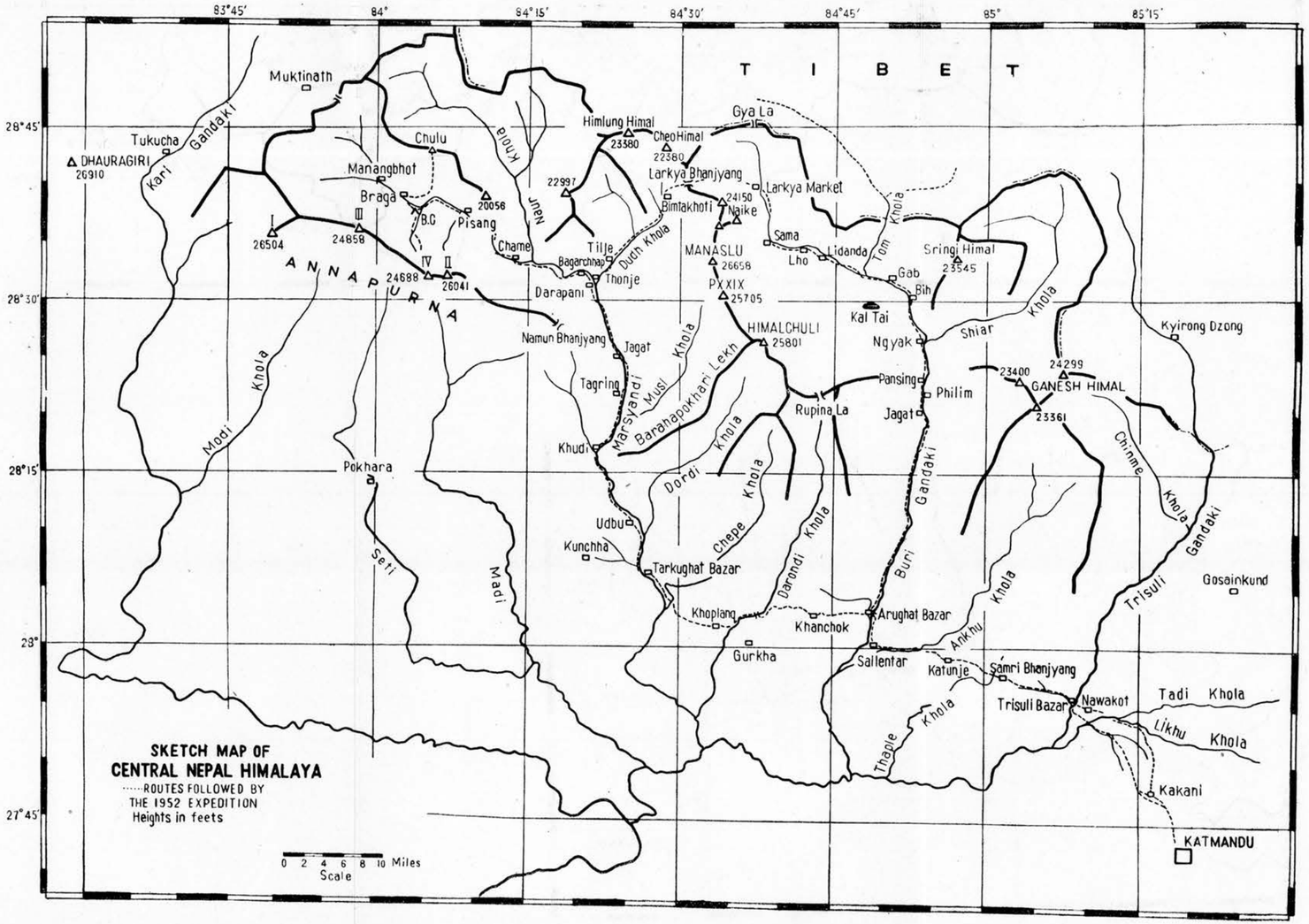
學術報告は、改めて執筆するつもりでいるが、そういう體裁のもとに書かれたものでは、とかく一般の方に親しんでもらえない、といううらみがあるから、ナレーチヴの中に織り込みうるようなことがらは、生まのまま學術資料として隨所にほうりこんでおいた。その態度は『大興安嶺探檢』の場合と同じである。

一方から云えば、われわれに、學術資料的な觀察を抜きにした、純粋な紀行文を書けと註文されても、それは不可能であろう。純粋などというのは、蒸溜水のように味のないものであつて、文學者の書いたものには文學者的なにおいがし、科學者の書いたものには科學者的なあくが、あつてもよいのではなかろうか。いさゝか辯解がましい

「アンナプルナとマナスルウ」正誤表

頁	行	正	誤
1	4	開析	開拓
8	16	先きさきで	先きさきて
10	4	Khola の出合の上に、大きな虹がかかった。ウディブ Udbu	Khola についたら
		についたら	
		ついでP二九の頂きが、朝日にかがやく。マナスルウもP二九も	ついでP二九も
16	8	ひろびろとした谷	ひろびろとして谷
16	15	パルナシウス	ペルナシウス
19	9	豫想しなかったことだが	豫想しなかったことが
20	1	沮洳地	沮溜地
20	19	ベース・キャンプ	ベース、キャンプ
21	19	六三一七米峯	六〇一七米峯
22	2	すつぽり	すつぱり
23	6	鉈を打ちこんだあと	鉋を打ちこんだあと
23	7	鉈を入れれば	鉋を入れれば
23	12	ヤナギの叢林	ヤナギの森林
23	19	ないのだから。	ないのだから、
24	18	登頂さすべきである、	登頂さすべきである。
27	8	なににしても	なにしても
27	8	前進できない、	前進できない。
29	11	せいもあろう、	せいもあろう。
30	19	氷河と、氷河から	氷河から
31	13	キャンプから見えている	キャンプから見ている
33	15	樹種はダケカンバ、アンナプルナ側よりも三〇〇米は高い。	樹種はダケカンバ、アンナプルナ側は
34	18	アンナプルナ側は	あたりがたさ
34	14	ありがたさに	雪上のキャンプ
36	11	雪上にキャンプ	分水嶺
		分水嶺	

頁	行	正	誤
36	16	マナスルウ	マナルスウ
39	6	それを籠に入れて	それも籠に入れて
39	14	氷蝕地形であるとは	氷蝕地帶であることは
40	8	ありえない、といつたが	ありえない。といつたが
40	13	ソバを刈つたあと	ソバの刈つたあと
42	14	踏まれた道	踏まれに道
42	14	五合目ぐらいから上	五合目ぐらいなら上
43	10	右の方にとがつているのが	左の方にとがつているのが
44	8	偵察の目的	腹案の目的
45	1	もらうことにして、	もらうことにした。
45	7	もちだして寝たが	もちだし寝たが
45	8	ソリダゴー	ソリダコー
45	15	ポーターの出足が悪い	ポーターの出疲が悪い
46	7	カシの森林	カシ森林
47	10	北峯、七二四五米峯と	北峯七二四五米峯と
47	17	大きな押し出しのようなもの	大きな押し出したようなもの
48	9	山裾との間に	山裾の間に
48	15	上をゆくのだから、	上をゆくのだろう。
48	18	北側のコルにとりついて	北側のコルにとりついていて
49	14	横たわつているのである	横にわたつているのである
49	16	氷河の表面は	氷河の表面には
49	18	氷がとけてしまつた	氷河がとけてしまつた
50	15	どこからくるのか、またいつ降るのか	どこからくるのか、またいつ降る雪はどこからくるのか、またいつ降るのか
52	12	ヤクと牝牛	ヤクと牡牛
52	14	しまうが	しまうのが
54	8	反對側の左岸の山	反對側の左側の山
56	5	手のつけようがないであろう	手のつけようがないのであろう
57	19	マナスルウと北峯との間のコル	マナスルウと北峯とのコル


83°45'
84°
84°15'
84°30'
84°45'
85°
85°15'
28°45'
28°30'
28°15'
28°
27°45'
T I B E T
Muktinath
Tukucha
Kari Gandaki
DHAURAGIRI
26910
Chulu
Manangbhot
Braga
B.C
Pisang
20056
Chame
Nawl Khola
22997
Himlung Himal
23380
Cheo Himal
22380
Gya La
Larkya Bhanjyang
Larkya Market
Bimtakhoti
24150
Naike
Tilje
Bagarchhap
Dudh Khola
Thonje
Darapani
26504
24858
24688
26041
ANNAPURNA
MANASLU
26658
Sama
Lho
Lidanda
Tom Khola
Gab
Bih
Sringi Himal
23545
PXXIX
25705
Kal Tai
HIMALCHULI
25801
Ngyak
Shiar Khola
Kyirong Dzong
Namun Bhanjyang
Jagat
Tagring
Marsyandi
Musi Khola
Barahapokhari Lekh
Pansing
Philim
23400
24299
GANESH HIMAL
23361
Rupina La
Jagat
Khudi
Dordi Khola
Chepe Khola
Chinne Khola
Gandaki
Pokhara
Modi Khola
Seti
Madi
Udbu
Kunchha
Tarkughat Bazar
Darondi Khola
Buri Gandaki
Trisuli
Gosainkund
Khoplang
Khanchok
Arughat Bazar
Ankhu Khola
Gurkha
Sallentar
Katunje
Samri Bhanjyang
Trisuli Bazar
Nawakot
Tadi Khola
Likhu Khola
Thaple Khola
Kakani
KATMANDU
SKETCH MAP OF
CENTRAL NEPAL HIMALAYA
.....ROUTES FOLLOWED BY
THE 1952 EXPEDITION
Heights in feets
0 2 4 6 8 10 Miles
Scale

が、これをもつてあとがきとする。（一九五三・四・二四）

附記

本會評議員西堀榮三郎氏が一九五二年二月ネパール入國の好機をとらえて以來、日本からのヒマラヤ遠征が急速に進捗した事情は、本誌前號及本會々報記載の通りだが、本會は一九五二年秋、今西氏を隊長とする先遣隊をアンナプルナ及びマナスルウ山域におくつた。隊の編成は、今西錦司（隊長）、高木正孝、田口二郎、中尾佐助、林一彦の五氏をメンバーとし、シェルパはガルチェン（サーダー）、サルキ、アンツェリン、パンシイの四名のほかに、アノー、ダーコの計六名を、またリエゾンとしてデイリー氏をつれた。一九五二年八月廿五日東京羽田發。廿六日カルカッタ着、卅日ダージリンに至り、九月四日パトナを經て五日カトマンズに入り、諸般の準備をとゝのえて九月十四日カトマンズを發足した。一行を追つて九月十日東京を出發した竹節作太氏（毎日新聞）は、ネパール入國に思わざる時日を費したが、九月三十日カトマンズに入り十月五日同所を發して、途中アンナプルナⅣの試登終了後下山の途にあつた田口氏と會い、十月廿二日無事今西隊と合流した。一方田口氏は往路通りカトマンズに歸着し十一月九日東京に着いて、一九五三年の登山隊に對し貴重な資料を提供した。サマを根據地としてマナスルウ東面のリコニサンスを終えた今西隊は、十一月廿九日サマにわかれをつげ、ブリ・ガンダキの峽谷を南下して、十二月四日ニヤツク、同十日アルガート・バザールに、同十五日カトマンズに歸着し、全踏査行程四四〇粁、所要日數一〇三日の「ラウンド・マナスルウ」を終了し、十二月廿一日カトマンズ出發、廿八日無事羽田に歸還した。本先遣隊に關しては本稿の他に、岩波寫眞文庫88「ヒマラヤ」（日本山岳會監修）及び本會々報第一六三―一六六號等を併せ參照されたい。

一九五三年のマナスルウ登山隊は評議員三田幸夫氏を隊長とする十五名を以て組織され、三月四日及び十八日の二回にわたつて羽田を出發、當初の豫定通りサマを根據地としてマナスルウ氷河からナイケ・コル、ノース・コルに順次キャンプを進めた。六月一日加藤喜一郎、山田二郎、石坂昭二郎の三隊員は最後の攻擊にむかい高度七七五〇米に達したが、寒氣と烈風、加うるに酸素の缺乏等の惡條件の下で、その日に無事下降することの不可能を知つて、頂上を距る三七五米の地點から引返した。一九五三年の三田隊の報告は本誌次號に掲載の豫定である。二回に亘るマナスルウへの遠征は、毎日新聞社の絶大な後援の下に行われたが、同社内に設けられたヒマラヤ登山後援會を通じ各方面から多大の援助をうけ、また登山隊の裝備、食糧、各種器具等万般に亘つても少なからぬ寄贈をうけた。本會は毎日新聞社に對し、又これら全國のあらゆる後援者各位に對し深甚の謝意を表する。（編　者）

「ツェルマットのクラブ室」
（"The Club-Room of Zermatt"）を中心として

成瀬岩雄

ウィンパーの『アルプス登攀記』を讀まれた方は、あの中に「ツェルマットの倶樂部室」と云う圖版（本誌收載）が載つているのを御記憶のことと思うが、その説明によれば原書には一八六四年とあるから、あれはマッターホルン初登攀前年の、さる夏のことであろう。當時のアルパイン・クラブの猛者連を一堂に集めた、云わば「先蹤者」を繪で現わしたような誠に樂しい圖版である。

當時のツェルマットは、毎年夏になるとこれ等の連中が、恰も南の國から古巣に歸つて來る燕のように、何處からともなく集つて來てはこのツェルマット、否もつと詳しく云えばモンテローザ・ホテルに歸つて來た。要するに此處にもアルパイン・クラブのクラブルームがもう一つあつたのである。と云つて、ロンドンのそれのように、そう判然したものでも無し、併し集つて來る連中も特に約束したようでも無く、來て見ると同じ顔ぶれであつたようである。唯、ロンドンのそれと違うのは特に矢釜しい規則も無かつたようで、婦人もそのメンバーに入つていたし、もう一つ「ガイドの溜り場」とでも譯したらよいのか、恐らく山のエンサイクロペディアでも無ければとても載りそうにも無い、"Guide Wall" と云う別室（?）付きの、と云つても野天ではあるが——所謂「ツェルマットのクラブ室」があ

つたのである。ロンドンのそれは一八五七年の創立と判然文献に載つているけれども、ツェルマットのそれは、恐らく其處に集る當の御本人連も判つていないのでは無いかと思うのである。

併し、このクラブルームも亦連綿として今日に至るも尙續いていることは『アルプスと人』の「山の宿」にもある通りである。

その創立當時（?）の「一八六四年のツェルマットのクラブ室」の模樣は、『アルプス登攀記』によれば斯んな模樣であつた。

「モンテローザ・ホテルの前の石垣の上には、何時も、二十人程の山案内が——フランス人、スイス人、イグリー人、そして良いのも、惡いのも、又、どつちでもないのも——腰を下して、自分達の雇主を待つたり、又雇主を探したりしてゐる。又、新しく到着して來るお客を眺め、どの位日當が稼げるかと胸算用をしてゐる。登山者は——時には、奇妙な驚歎すべき服裝をしてゐる——あつちこつちに集まつて立ち、或は椅子に腰掛け、或はホテルの入口の脇に置かれた腰掛に打ち寛いでゐる。此の連中の穿いてゐる靴は、大變なものである。併し、それよりも帽子の方が、尙大變である。皮が剝げ、水ぶくれが出來、すつかり脹れ上つてしまた彼等の顏こそは、十分一見の價値がある。中には、面倒を厭はず手當をよくした結果、奇麗な銅色に燒けた顏色をしてゐる者もある。併し、大部分は、こんなに仕合せではない。彼等は岩の上で焙られ、氷の上で燒かれ、その頰——先づ膨れ上り、それからひゞが入つたのである——からは、松脂の樣なものが滲み出てゐる。それが顏を流れ、乾いた跡が、まるで松の幹に付いた脂の樣に、あつちこつちにくつ着いてゐる。彼等はこの染を取らうとして顏の皮を大きく剝いてしまふ。さうなると事態は益ゝ惡化し、絶望狀態に陷つてしまふ。そこで小刀や剃刀を持ち出し、靜かに根氣よく、皮を剝がして、皮膚の色を一樣にしようと努力する。併し、之は不可能である。だが、何んとかならうと一生懸命にやるもので、遂には、此の慘めな顏は、手の付けやうもない程、酷いものとなり終つてしまふ。彼等の唇はひどく割れ、頰は脹れ上り、眼は眞赤に血

走り、鼻は皮が剝けて、何とも形容し難い姿となつてゐる。

之が登山者の樂しみなのである！ 新しく到着した連中は、此の樣子を眺め、自分の柔味のある顏や、奇麗な手と比べて、如何にも情けないと云ふ樣な顏をしてゐる――併し、今自分が可笑しがつている連中と、間も無く自分も、恐らく同じ樣になるのだとは氣が附かないのであらう。

之等の奇妙な服裝をし、可笑しな顏をした連中の間には、何の蟠りもない朗かさがある。客間の中や、都會の生活には、求め得られない朗らかさがある。親しみのない人達が、餘りにも冷淡な英國人が――此のツェルマットの倶樂部室で――一緒になつて、樂しく打ち解けてゐるのを見るのは、嬉しいことである。又、ホテルの主人と、その氣立てのいゝ細君とが、新しい到着者に、親切に應對しているのを眺めるのも、樂しいことである。」（浦松佐美太郎氏の譯による）と。

所が、この「ツェルマットのクラブ室」なる圖版が登山史上に强烈な刺戟劑として、山への熱情に燃えた後世の偉大な登山家を、いかに醉わせたかと云うことは、其處に殘された數々のエピソードや回想を拾つて見ると、誠に愉快なツェルマット變遷史が出來そうである。其等の人々にとつては、ツェルマットを廻廊のように圍む山々も勿論樂しいものではあつたが、このクラブルームに對する憧憬も亦一つの樂しみであつたに違いない。この圖版に完全に魅せられていた後世の若い登山家連は、此處を訪れて、何かこの圖版の「眞」に些かでも近く觸れてみたいと云うような、好奇心と憧憬を持つてこのツェルマットを訪れたのである。例へば、

「其日の午後早く、我々はツェルマットに入つた。『そら、すぐアルパイン・クラブの連中の誰かに邂ふかも知れないぞ』と一言、アーヴィング R. L. G. Irving が云つたので、私は急いで靴下のヅレを引き上げて直した。村の一角を廻ると、モンテローザ・ホテルと "Guide Wall" の前に表われたのである。

實は、あのウィンパーの『アルプス登攀記』の例の繪が私の頭に判然コビリついていたので、『ツェルマットのク

ラブ室』の中のあの著名な人達の一群が、そつくり其儘其處に表われるのじや無いかとさえ思つたのである。

ムーア（註1）スティーヴン（註2）と話をしているグローブ（註3）今はクラブに保存されているあのピッケルに寄り掛つているケニディ（註4）髭面の嚴しいジョン・ボール（註5）ぼんやりと上の方を見ているウルリヒ・ラウエナー（註6）とてつもない大きなピッケルを持つて足組みして坐つているフランツ・アンダーマッテン（註7）のあの繪……。勿論、其等の人影とては無かつたが。

併し、ホテルの外ではこれ等先蹤者の後繼者連が三々五々、籐椅子に寄り掛つて歡談に耽つているのを見て、私は思わず畏敬の念に打たれた。

御連中は、ダン・ブランシュ Dent Blanche やトイフェルス・グラート Teufels Grat の去りし日の手柄話でもやつているのであろうか。それとも唯ぼんやりと、ザイラー氏（註8）の御馳走のことでも思い出しているのであろうか。王位を象徴する人々。皇帝。德の高い人。知名の士……であろうか。雪燒けで鼻の皮が剝げた顏が一齊に、我々ガイドレスの侵入して來たのをヂロット見下しているようである。これ等、高名な先輩連は、我々若年の輩に對しては實に親切であり、寛大であり、又理解あると云うことは後年になつて判つたのではあるが、其の時ばかりは、我々は小さな安宿へと逃げたのである。」

等と云つているのは、その晩年にはアルパイン・ジャーナルの編集をやつたりアルパイン・クラブの副會長迄やつたティングル（註9）が其の昔、一九〇六年オックスフォードの學生の時、その級友と初めてアルプスを訪れた時の感激の一場面であるが、それ程にこの圖版は後世の若い登山家を牽きつけて止まなかつた由緒ある圖版なのである。

更に又、クロード・シュスター（註10）とか、ロングスタフ（註11）とか、ウィンスロップ・ヤング（註12）とか、ストラット（註13）等と云う何れもアルパイン・クラブの會長をやつたような、近代登山家の中でも錚々たる連中が、其の青年時代に、この「ツェルマットのクラブ室」や"Guide Wall"に憧憬れた一章を語つているのを見ると、こ

の「ツェルマットのクラブ室」こそは歐洲累代登山家の洗禮の地でもあつたようである。

一九四一年、曩の大戰が漸く酣にならんとする時、アルパイン・クラブの會長の任期を終えたクロード・シュスターが、戰爭のため登山者の質的下落を憂慮して、戰後には恐らくガイドレスの登山が徒らに勃興するかも知れないことを豫想し、

「ガイドレスの登山と云うものを別に否定もしないし、腕のある者同志で登ることも亦樂しいものであるが、一面親しみと云う意味から云えば、聊か嘆わしいことである。と云うのは自分のように常にガイドと一緒に登つて來た者にとつては、どつちかと云えば、穢ない上衣を着て髭を生やしたガイドの連中が、モンテローザ・ホテルの前に並んでいる光景を、もう見られ無くなるのだと思うと、聊か淋しさを覺えるのである。」等と會長辭任の節に一席、この"Guide Wall"の回想を語り、又一九五〇年、第三十一代のアルパイン・クラブ會長の任期を終えた、我々にもエヴェレスト登山で特に其の名を親しまれているロングスタフが、其の青年時代に初めてツェルマットを訪れた時のことを、

「……我々はツェルマットに下りて行つた。私にとつては、黄金時代の英國登山者のメッカ、モンテローザ・ホテルは初めてなのである。ホテルの向い側の低い石垣。其處にはガイドでも一流の連中しか腰掛けることが出來ないのであるが、私はふと、昔あのポップ（註14）の連中だけしか腰掛けられない、イートン校の『石垣』を思出したのである。

其日には丁度、後日間も無くダン・ブランシュの登山で亡くなつた、オーエン・グリーン・ジョンズ（註15）や、畫家のアルフレッド・ウィリアムス（註16）や、又私にとつては實に幸運と云わんか、ノーマン・コリー（註17）とチャールス・ブルース（註18）を其處に發見したのである。ブルースは第五グルカ聯隊のグルカ兵を二人連れて來て居り、彼のヒマラヤ遠征に備えて、このグルカ兵の訓練をやつていたのである。」等と當時の歡喜溢るゝ模樣を語り、又そ

の昔、未だケンブリッジの學生の頃、ツェルマットを訪れたウィンスロップ・ヤングなども、

「……我々はツェルマットに食糧を仕入れに下りて行つたのであるが、又其日に直ぐ、薄暗くなる頃、トリフト Trift の谷に向つて登つて行つた。私は當時、ツェルマットなどはメツカだと思つていたし、もつと登山の修行でも積んで偉い人にでもなつたら、堂々正面切つて乘り込んで行こうと思つたから、ツェルマットには泊らなかつたのである。」等と云つているかと思うと、當時、アルプスを貪り歩いていたこのヤングの言葉を恰も立證するように、イー・エル・ストラットは、

「一八九五年の頃、ツェルマットには決して顔を出さないが、併し毎日、普通の人間ではとても行きそうにも無い遠い所の山を、峯から峯へと獨りで、又時にはツィナールのガイドと一緒に歩いて樂んでいる若い天才的の青年がいると、當時ツェルマットでは噂に上つていた。この天才兒こそは今の會長なるウィンスロップ・ヤングであつたのだ。當時、ツェルマットは殆んど英國人ばかりであつたが、唯、皆から付合ひ易くて、又尊敬もされていたオーストリア人だけは、ザイラー未亡人の獨り采配振つていたモンテローザ・ホテルの聖域の仲間に入ることを許されていた。ドクター・クギイ(註19)、ルイス・フリードマン(註20)、ハインリッヒ・ブァン(註21)等と云う連中が、そうであつた。ドイツ人は漸く其頃來初めていたが、マッターホルンのベルグシュルンドの近くに少しいる位のもので、ホテルに泊る者等はなかつた。併し、エドワード・ハーン Edward Hahn だけは熱心な、人を惹付けるような人で、他のドイツ人とは著しい對照をなしていた。フランス人は一人も居なかつたと思う。併し、イクリヤ人ではマゾッチ Mazzuchi と云う凄い人がいた。リッフェル・アルプに君臨していたエドワード・デヴィッドソン(註22)は二ケ月の間と云うものは、このモンテローザ・ホテルに入るを許された者に對しては、實に何くれとなく献身的に世話を燒いていた。時には彼はツェルマット附近の山に出掛ける序に、當時アルプスではガイドとしては最高の相棒とでも云うべき、クルッカー Klucker とジョセフ Joseph の二人を伴つて、王者の如くツェルマットに現われたのである。

其後、クルッカーの代りに、フランツ・ロッホマッター Franz Lochmatter がジョセフの二番手を承つていた。チャールス・ウォーラストン（註23）は嚴格ではあつたが、時にはツェルマットで無鐵砲なことをする若い者に、溫和しく批評をしたりしたのである。ヒマラヤで亡くなり、ニコライ谷の兄弟分を嘆かしめたマンメリー A. F. Mummery の後繼者であると萬人から噂されていた、あのアフリカ探險で有名なエドワード・ゴーガン Edward Gorgan 等もいた。ザイラー家の古い使用人で、ウィンパーの時代からいる者では、ヨスト（註24）とヴィクトル Victor は未だ健在であつた。ヴィクトルの方がヨストより後に死んだけれども、二人の中では、ヴィクトルの方が親切な人間であつた。」

等と、後世のアルパイン・クラブの會長連が夫々、若き日を回顧しているのを見ると、今日に至るもなお「ツェルマットのクラブ室」なる聖地詣りの傳統は後を絶たないようである。

それにもう一つ云い忘れてならないことは、モンテローザ・ホテルの經營者なるザイラー夫妻の溫き存在が無かつたならば　このクラブルームの存在價値は全く無かつたのである。マッターホルン無くしてツェルマットは考えられなかつたように、ザイラー夫妻なくしてはこの「ツェルマットのクラブ室」は考えられなかつたのである。

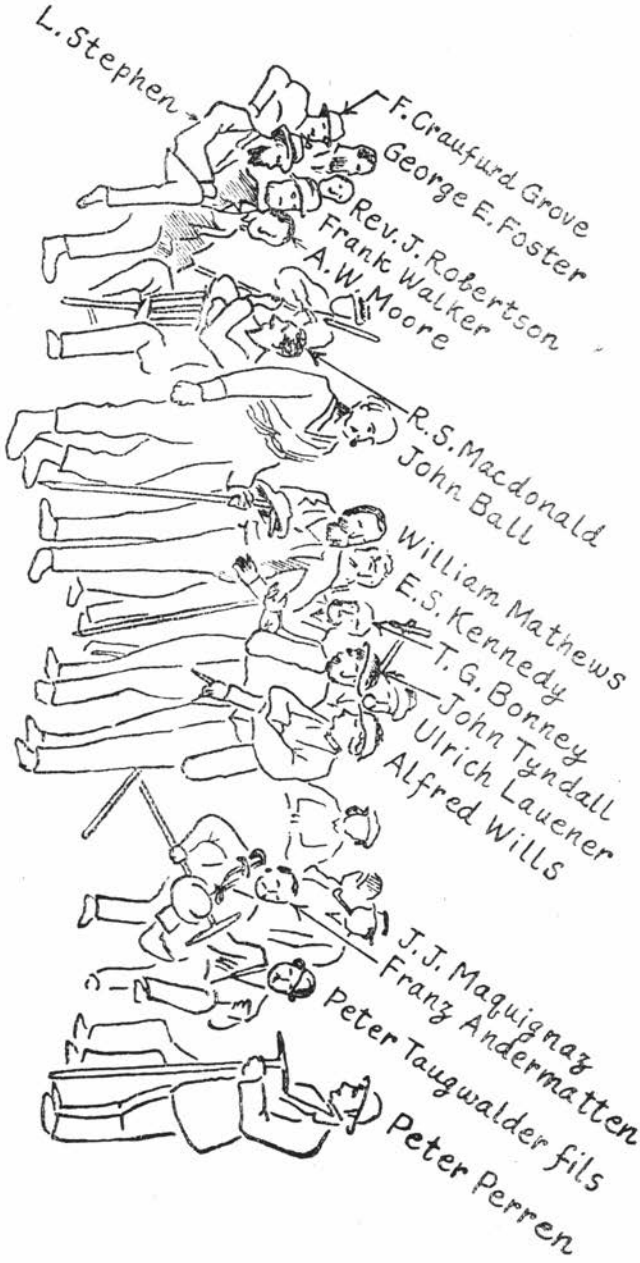
そも〳〵このモンテローザ・ホテルのおこりと云うものは、昔、村醫者であつたラウベルと云う人によつて經營されていた、木造の小さな磯ないホテルであつたのを、村の素封家なるザイラーが、一八五四年にこれを買取り、モンテローザ・ホテルと名付けたのが始まりで、實はもう一つ、モン・セルバン・ホテルと云ふのがあり、しかも外觀はこの方が立派であつたが、山登りの連中は、このザイラー夫妻の溫かい親愛の情に引かされて自づと此の方に集るようになり、たとえ初めは何かのはずみでモン・セルバン・ホテルに泊つたものでも、其の次からはザイラー夫妻の元に宿をとるようになり、從つてモン・セルバン・ホテルは客足が減る一方で、遂にモンテローザ・ホテルに買收され、モンテローザ・ホテルは益々繁榮の一途を辿つて行つたのである。

ザイラーは一八九一年、多くの村人に惜しまれながら老齢にしてこの世を去つたが、次のレスリー・スティーヴンの追憶を讀んで見れば、「ツェルマットのクラブ室」とザイラー夫妻との淺からぬ關係も自らうなづけるのである。

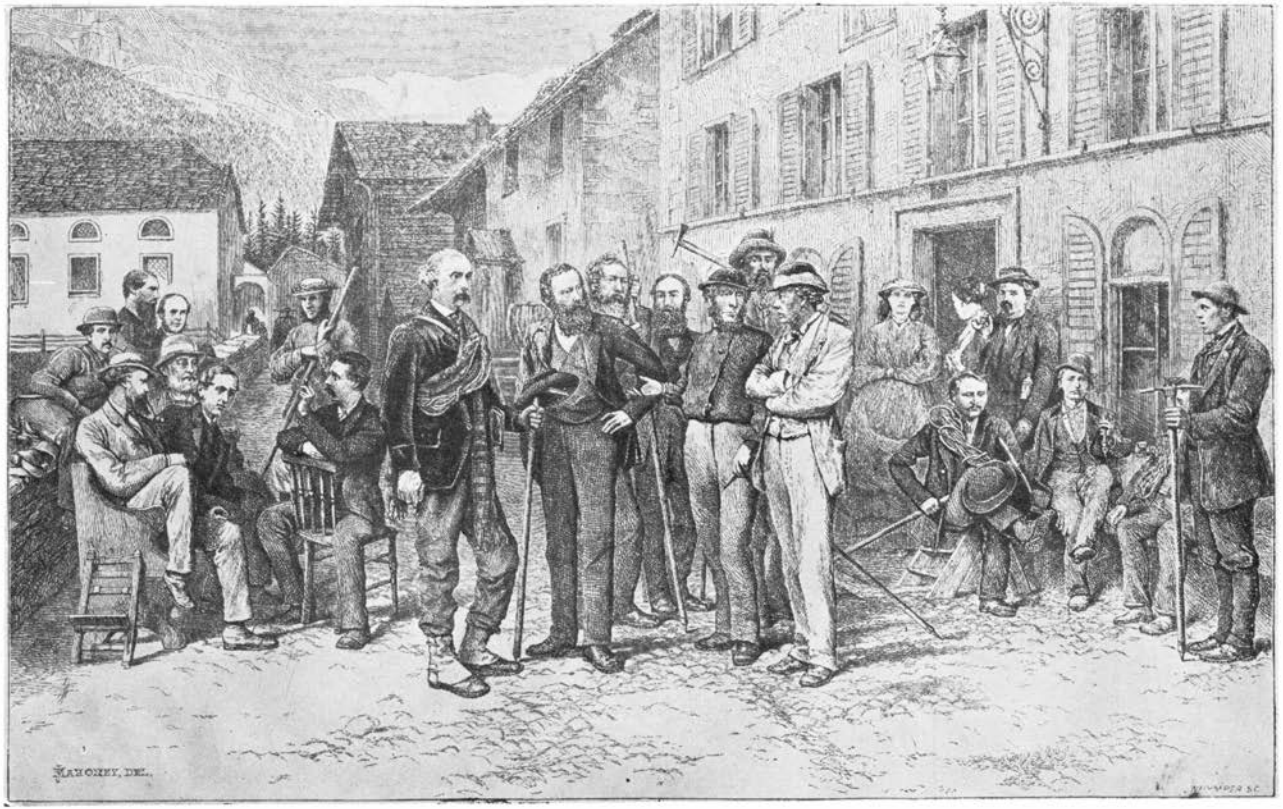
「たとえ、建物は大きくなつてもザイラーは昔の馴染を無いがしろにするようなこともなく、しかも何代も何代も後を絶たずに來る旅行者からは、彼が最初に得たと同樣の尊敬と親愛の情を受けていたのである。ツェルマットのことを考えると私は故郷を思うと少しも変らない。——それは唯の一時的の滯在の、單なる場所としてではなく——それは主として、私は此處で、この上も無い親切な、正直な、友情溢るゝ又腕のあるホテルの主人の家族の一員同樣に取扱われたからである。ツェルマットは繁え、ザイラー氏もその子孫代々によつて續かんことは、アルパイン・クラブの連中の誰もが欲する所に違い無い。心から尊敬を抱き得、又眞の友達となし得る事の出來る人を知り得たと云うことは、私の滿足とする所である。大抵のホテル業と云うものは、一時的のもので、ホテルの主人に對して、斯うゆう經驗を持つことは極く稀である。併し私は確かに、ビズネスマンであると同時に、斯くお客の信頼をかち得、後々永く、親愛の念を持つて記憶されると云うことは、ザイラー夫妻の宿で長く過した者が一人のこらずそう感じるであろうと思う。」

と云つているのも單なるお世辭では無いようである。又其程に、この「ツェルマットのクラブ室」とザイラー夫妻とは切つても切れぬ存在であつた。"The best host and hostess in the world" と迄、登山家連の間で、最上級の形容詞を以て云い表わされている夫妻であつたのである。

本物のアルパイン・クラブ創立者の一人であるチャールズ・エドワード・マシュウズ(註25)もこの「ツェルマットのクラブ室」を "Mountaineer's True Home" とまで云つており、「私が初めてザイラーとあの親切な夫人に會つたのは一八五六年のことであつたが、モンテローザ・ホテルは當時今の半分位しかなかつたけれども、昔の人達が、あの世にも稀なる懇切丁寧なる夫妻の歡待を受けて、誰もが、『モンテローザ・ホテルに休まないで居られよう



(註) 本掛絵中の人物の中 A.W.Moore と F.Walker は不在ぶりと云う説もある。



The Club-Room of Zermatt, in 1864
(from Whymper's *Scrambles*)

An "Off Day" at The Monte Rosa Hotel
(from Mummery's *My Climbs*)

か……』と云つているその意味も、よく判つた。其後に、もつと大きな、便利なホテルも出來たには出來たが、結局は、皆何れもザイラーの手に委ねられるようになつてしまつた。このモンテローザ・ホテルこそは登山家にとつて眞の home であり、又事實、誰もこれ以外の他のホテルへ行こうとはしなかつたのである。」

と云つている所を見ると、彼等にとつてホテルでも無ければ、クラブでも無く、もつと內輪のものであつたようである。

事實、毎シーズン入れ替り立ち替りやつて來る登山家連は、このホテルの小さな前庭に集つては「煙草會議」を樂しみ、その登山に際しては、ザイラーは登山計畫のよき協力者であり、又忠告者でもあつた。後になつて、皆夫々樂しい思い出を持たぬ登山家はなかつた。或者はその到着や出發の際、特にザイラー夫妻の催してくれた樂しい饗應のパンチの味を忘れることが出來なかつたであろう。しかもこのパンチは、先の村醫者、ラウベルの時代から仕えているヨストと呼ぶ好々爺の得意の腕によつて作られ、後年「有名なるヨスト」として、モンテローザ・ホテルと合言葉のようになつていた。又或者は、ザイラー夫妻の好意の贈物であつた年代距たるワインが、屢ゝベッドルームに迄持ち込まれた程の「顔」の登山家もあつた。

しかも、其處に集つて來る連中の中でも、特に毎年の登山シーズンの內、「少なくとも一度は必ずツェルマットで落合わなければ腹の蟲の承知しないグループ」があつたのである。シーマー・キング(註26)とかリッフェルホルン Riffelhorn に二百五十二回も登つたと云う、エドワード・デヴィッドソン Edward Davidson とか、マーティン・コンウェイ Martin Conway 等はその中心をなす者であつた。

特にマーティン・コンウェイ等は、五夏も續いて此處を訪れ、ザイラー家の一員として數々の思い出を殘して行つたのであつた。彼も實は當初は「何かのはずみで」、モン・セルバン・ホテルに宿をとつた組であつたが、後にはこの、「ツェルマットのクラブ室」の方の常連になつてしまつた。

「一八七〇年代のツェルマットは、あらゆる點に於て、後年とは非常に異なる所があつた、全く小さな所であつた。ホテルらしいホテルは二つしかなくて、モン・セルバン・ホテルが旅行者向き、モンテローザ・ホテルが登山者向きのホテルであつた。此處には年々、同じグループが集まつて來るのであつた。其等の人々の集りは、クラブと云うよりは、もつと、Family と云うようなものであつた。つまり、友人連の集りと云うよりも血旅の集りであつた。皆の共通の興味が、皆を結びつけていたのである。それも大部分は、或一つの階級の英國人であつた。ザイラー夫妻は此處に集る連中の父であり、母であつた。天氣の好い日には我々は登り、天氣の惡い時には、平らでもないテーブルの上で玉突をやつたり、話に耽つたりして、時の距つのも忘れたのである。何の山が何時登られたかと云うことは、此處に集る連中には、チャント、判つていて、それは恰も裁判官が胸の中に慣習法を覺えている如く、チャント判つていた。年々、古い連中が見え無くなつても新しい連中がそれに代つて來たり、このグループと云うものは、早期の先覺者と續いて絶え無かつたのである。ハドソン（註27）、ウィンパー、ティンダル（註28）等、其他の連中は初期の先蹤者に入るであろう。ウィンパーの『アルプス登攀記』の中に出て來るツェルマットの記述、あの『ガイドの溜り場』は依然、今でも昔と聊も變らないのである。『アルプス登攀記』の中に出て來るあの雰圍氣は。チャント今でも殘つている。我々は今はもうそうでも無いが、當時はあの高峰に對しては尊敬の念を以て眺めていた。若し誰でも、どれかの山が登られたかどうかと云うことを知り度いと思へば、それはモンテローザ・ホテルの客間に行けば判つたのである。それは實に最終の決定者（最終の權威）であつたのである。……』

とはマーティン・コンウェイの後年に於ける回顧談であるが、特に彼にとつて忘れられないのは、一八八一年のこと。それは彼が永年のツェルマット附近の山々、谷、村を丹念に歩いて苦心の結晶たる、ツェルマットの案内記、『ツェルマット・ポケット・ブック』"Zermatt Pocket Book" が漸く此年の初めに出版される運びとなり、この年の夏、彼は特にザイラー夫妻に招かれて、このポケット・ブックの「出版のお祝」を催され、Bourvoir 酒の盃を祝わ

れたからである。

そも〳〵案内記と云うものは從來もあるにはあつたが、コンウェイのそれのように、一地方について斯く詳細に渉つた案内記はこれが初めてなのである。

從來の案内記と云うものは、氷河に掛つてからの、より上へのルート等については、正確に記されてある場合が多かつたが、それ迄に達する麓の道のことについては、コンウェイのこの、『ポケット・ブック』のように、詳細に渉つて記されてあるものは無かつた。氷河に通ずる迄のあらゆる谷の路と云うものについて知ることは重要なことであり、殊に初めて山に來る者にとつては、誠によき手引となつたのである。低い所のことについて知ると云うことは、高い山のことについて知るよりも尙お難しいことである。雪線上の登山のことについて判ら無いことは、屢ゝ何處か然る可き所から望遠鏡で見れば判つたけれども、奥まつた閑靜な谷や、カトル・アルプ Cattle Alp に通ずる所の路と云うものは、澤山の路があつて、夫々續いていなかつたりして、其れは唯、實際に行つて見るか、正確な方向が書いてあるノートを見るかしなければ、判らない。斯う云う點に特に注意を置いて著わされたのが、この『ツェルマット・ポケット・ブック』の大きな特長であつた。爾來、案内記は世界のあらゆる方面の色々な山群に關して出版されたが、其の殆んどの何れもが實はこの『ツェルマット・ポケット・ブック』の系統を追つているのである。

豫而てから、民俗學とか地誌等について興味を抱いていた彼にとつては、それは最早や、唯、山を見て簡單に魅せられ、恍惚としてしまうようなことは、もう昔のことであつた。この土地の人々の習慣等に親しみを覺えた彼は、或時はツェルマットの百姓家に、二、三週間も滯在する程の愛着を覺えていたのである。

或年の、夏の登山シーズンも漸く終りに近付き、九月の聲を聞く頃になつてもその愛着に牽かされて、容易に此處を立去りかねていた彼にとつては、又しても後髮を引くものがあつたのである。それは九月の或る、暴風雨の日であつたが、偶然にもツェルマットに於ける家族の家系圖の小冊子を見出したのである。そして、タウグワルダー家

Taugwalders とかビーナー家 Bieners とか、ボーグー、馭騾者、ガイド等が、遠く十三世紀に既にこのツェルマット附近に移住して來ていると云うことを發見したのである。又、村の自治組織と云うものも依然としてツェルマットに昔、印せられた特長が保持せられ、野や、アルプの名前も亦同樣に古いものであると云うことを發見したのである。山の運河の、水の補給を調整する村と村との間の、昔の採り決めとか、時間時間によつてそれを各人の家に引く分配と云うものが今尙お依然として行われて居り、しかも立派に成功していることを知り、彼にとつては雪に輝く四圍の山々の全景が又新たな意味を添えたのである。氷河の流れから取入れた小川は丘の一方を横切り、巧妙な工夫によつて山腹を這わせて、それが終りの方になると、アルプの牧場の上で無數の小川のようになつて刷けるようになつていて、其れがもう永年のことであるから古くなつていて、其の地面のキリ立つた表面は小さな小川の底や排水點に、奇麗な氷河の土が何世紀も堆積しているのを發見したのである。斯んなことが、色々判つて來ると、雪線の直ぐ下の方に見える地方の、眼に映ゆる景色とか、谷の方の景色が又別の意味を持つて感ぜられて來た。あの繪のような景色の中には、人間の過去のもつれ、永年の積み重ねられた活動とか、過ぎ去つた時代の紀念すべき樣々の事柄が、その中の過去のもつれにまつわつていると云うことを發見し、彼が常に身を離さなかつたメモに書き込まれて行つたのである。

又、或時は案内人手帳を調べたり、ガイドの知識をかりたり、又ホテルの投宿者が雨の日などに、時間つぶしに無聊にまかせて詳しく書いたホテルの備付帳——それは永年のこと故、煙草の臭やチーズの香りの滲み込んだような、燻つた備付帳。そして、それは、雨でも降らなければ恐らく書かないで忘れてしまつたか、記錄されなかつたであろう所の旅行記を、めくつて見てはメモに書き留めて英國に持歸り、劍橋大學やアルパイン・クラブの讀書室に籠つては、專心、このノートの整理を續けたのである。アルパイン・クラブは當時、月例會の晩以外は火氣も人氣も無く、又、大學の圖書館の隅つこの小さな階段の所に腰を掛けて、寒さに震えながらアルパイン・ジャーナルの既刊本や、

彼のメモの整理に專心して漸く出來上つたのが、この、『ツェルマット・ポケット・ブック』であつた。

ウィンパーや、彼の特に尊敬措く能わざりし、ティングルが、屢〻ツェルマットを訪れたのは、それはマッターホルンの初登山と云う大きな魅力があつたからではあろうが、其後の時代の連中では先づ、この「ツェルマットのクラブ室」の常連としては、マーティン・コンウェイ等は一方の旗頭では無かろうか。それだけに彼のツェルマット附近に對する知識は、實に網の目のように詳細に彼の腦裡に疊み込まれ、と同時に彼にとつては正に「ユートピア」の出現でもあつた。

乍併、其後漸くツェルマットにも登山鐵道が敷設せられるに至り、從來の登山の中心地としてのユートピアが、所謂、觀光的色彩を帶びるに至り、偶〻"The Alps from End to End"(註29)の山歩きの途次、此處に立寄つたコンウェイは、計らずも今は唯靜かな回想に耽りつゝ、觀光婦人連の高山植物採りの案内等に餘生を送つていた往年の名ガイド、メルヒオール・アンデレッグ(註30)に邂逅い、共にこのユートピアも昔日の面影更に無きを嘆き合つたこともあつたが、後年彼自身も漸く老境に入るに及び、彼自身の登山活動の終止點が、このツェルマットであつたのも、矢張ツェルマットに對する彼の愛着が、結局彼の腦裡を去ることが出來なかつたからであろう。

それは、一九〇一年のことであつたが、彼も齡既に五十も半ばし、此度は彼の娘を伴つて此處を訪れ、ブライトホルンの頂に立つたのである。一八七二年、彼が初めてこの頂に立つた時は、未だ十八才のケンブリッヂの學生であつたが、今彼が伴つた娘も亦十八才であり、しかも、このブライトホルンが彼にとつて最初の登山であつたように、彼の娘にとつても亦最初の登山であつたのである。二十九年前、

「……雲が上つて、イグリヤの低い山々が見えて來た。ロープで結び合うと云うこと、雪原をドン〳〵のして行くことは何んとも云えぬ愉快なことであつた。私は聊かの疲勞も覺えず、自らの肉體であると云うことさえ感じなかつた。間もなく、長い、むしろ、急な斜面にぶつかつて、百五十、ステップを切つた。今迄ステップカッティングと

云うことを、本だけで讀んでいた以外に知らぬ者にとつては、これ以上何を望むものであろうか。遂に頂上に立つた。とても信ずることの出來ないような冒險が成し遂げられ、私は無限の滿足にかられたのである。若し人生の行路と云うものに沿つて道標が立てられるとすれば、其れは此處に、私は先づ立てるのであろう。」

と、當時記した、このブライトホルンに、今彼は別れの挨拶に娘を伴つて來たのである。

「天氣は素晴しい快晴に惠まれたのであるが、最後の登りは二十九年前に來た時よりは遙かに疲勞を覺えた。曾ては私の親しんだ白雪を頂いた山々が、恰も白髪をいたゞいた私を抱擁するかの如く眼の前に展開し、私の眼の届く限りでは、先ず目星しい山で、私の登らぬ山は無かつた。私はこの山々に向つて最後の別れを告げたのである。が併し私は別に別離の悲しみと云うものは覺えなかつた。これ等の山々こそは曾て私に永久に忘れ得ぬ健康と喜びと美と友と豐かなる思い出を與えて呉れたのである。それこそは私の胸にシカと抱かれ、私にとつては限り無く貴いものである」と。

これが彼の別れの挨拶であるが、正に一幅の繪であり詩でなくして何んであろうか。

オーストリヤの生んだ偉大な登山家、ユーリアス・クギー等も亦、この「ツェルマットのクラブ室」に憧憬れた一人であつた。其れは一八八六年のことであつたが、其迄ユーリッシュ・アルペン Julish Alpen に於て數々の登山を成し、永年、彼が胸に抱いていたスイスの山に初めて此年やつて來たのである。しかも先ず、このツェルマットにやつて來たのも既に彼の頭の中には、「ツェルマットのクラブ室」がチャント疊み込まれていたのである。どうせスイスに行くのなら、「モンテローザ越え」で行けと勸められる程、既に彼の腕も相當なものであつた。

リッフェルハウス Riffelhouse に一夜の疲れを休めた彼は、それこそ夢が現實化したとでも云おうか、計らずもその翌晩ツェルマットにあつた英國山岳會の錚々たる連中に、この「ツェルマットのクラブ室」へ招かれたのであ

る。勿論この中には、例の通り「ツェルマットで落合わなければ腹の蟲の承知しないグループ」の、コンウェイ、デヴィッドソン、キングなんて云う連中は勿論お揃いであつたし、昔からチャント決まつていたと云う、「アルパイン・クラブ様御席」とでも譯したらよいのか、"Alpine Club Table" にパンチを圍んで、夜の更ける迄歌い明かしたその夜の狀景は、斯んな模樣であつた。

「翌晩、我々オーストリヤ人はツェルマットにあつたアルパイン・クラブのメンバー連から、モンテローザ・ホテルに招かれた。パンチは彼の有名なる、老ヨストによつて作られ、このパンチは非常に勝れたもので、其の芳醇たるも亦何時迄も記憶に殘る勝れたものであつた。それにも增して錚々たる登山家連が、長テーブルの前に我々と共に座したのは永久に忘れられぬものである。エギュイーユ・ブランシュ・ドゥ・ペテレ（註31）の征服者、シーマー・キング、コンウェイ、デヴィッドソン、エックルス（註32）、フィツジェラルド（註33）、エッケンシュタイン（註34）其他多勢であつた。彼等は私のために英國の歌を歌つてくれ、私は御返しにカリンシヤ Carinthia の歌を歌つた。誠に奇しき一夕であり、夜更けて漸く寢についた。後から思い合せて見ると、ファーラー（註35）も亦其場所に或は近所にいたに違いないのだが、どうも其點判然覺えていない。數年後、アローラ Arolla で遭つたのは判然覺えているのであるが。英國登山界の貴族的な、一見控え目なるとは著しく異う我々大陸の登山家の特質をよく了解して、彼らとの間柄を斯くも密接に結ばしめたのは實に彼の親切であり、威嚴であり、能き理解ある所である。彼こそは我々とあの歴史に輝く A・C——原文、原文字の儘——との間に貴重なる繫りをつけてくれる人物であるという印象を與えたのである。彼は紳士で、彼に向つて唯の數語語つただけで、ノートペーパー一枚だけででも、喜んで助けてくれるような人である。そして物判りがよく、明朗で、正しく、登山の最高の理想を心から抱いて居り、人と人の結びということを求め、分裂をいとうたのである。もう一人、偉人エドワード・ウィンパーが其處にいると思つて探して見たが、無駄であつた。彼はいつでも少し離れていたとの話である。

これ等英國の登山家連は私にとつては非常に魅力があつた。私は彼等を尊敬し崇拜して成人して來たのである。私は彼等の實際登つている所も見、高名なる人が、來る年も來る年も、いかにも落付いて靜かに、しかも自信を以て山登りに出掛けるのを見た。又その登山を終えた時には靜かにホテルに歸つて行くのを見た。あゝ、我々若い者達も年老いては彼等のようになりたいものである。實に彼等こそはこの世に、何物を以てしても比較さるべきものなき傳統の保持者である。

それで、ガイドの連中の方はどうかと云うと、或者はドッシリとした均勢のとれた體驅の、氷の達人が私の前を通り過ぎたり、ホテルの前の低い "Guide Wall" に腰を掛けたりしていたのである。ブルゲナーの三兄弟、色の黑い温和しいアロイス・ブルゲナー Alois Burgener。あまり信用は出來ないが、時には離れ業をやるフランツ・ブルゲナー Franz Burgener。王者の如きアレクザンダー・ブルゲナー Alexander Burgener。トルッフェルス Truffers。クヌーベル Knubel。スウペルサクセス Supersaxes。逞しきカルベルマッテンス Kalbermattens。肩幅廣く、丈高き、ペレン Perren。實に氣持のいゝ働き者のヂェンチネッタ Gentinettas。男振りのよい線の鋭い水兵のような顏をした、義狹心のあるフェリックス・ユーレン Felix Julen。古色然たる、老クウグワルダー Taugwalder。ブライトホルン Breithorn で有名な、植物通の、ビーナー Biener。おどけ者のアロイス・ポーリンガー Alois Pollinger。素走つこい、ツルブリッゲン兄弟 Zurbriggen。兄貴と比べれば、はにかみやであるが數多の大膽なる登山をやり、今では遠く西部の金鑛に働きに出掛けているルイス・ツルブリッゲン Louis Zurbriggen。其他オーバーランドから來たアルマー親子 Almer。ウールリヒ・カウフマン Ulrich Kaufman。ペーター・バウマン Peter Bauman。ヨッシー Jossie。時にガイドの中の王者、メルヒオール・アンデレッグ Melchior Anderegg もいるに違い無いと思つて探したのであるが見當ら無かつた。

其他、未だうんと遠くからやつて來ている頭株の連中。如何にも朗らかな青い眼のズルデン Sulden から來たビー

クー・ダングル Peter Dangle。ドーフィネの精とも云う可きマキシマン・ガスパール Maximin Gaspard。クリスチャン・クルッカー Christian Klucker。ラムゾー Ramssu から來た、火をも喰うと云うファーラーのお抱えのケーデルバッヘル Köderbacher。ドロミテのサントー・シオルペス Santo Siorpäss。カルス Kals のヨハン・ケーレル Johan Kehrer。如何にも氣品はあるが併し人見知りする彼のクールマイユール Courmayeur のエミール・レイ Emil Rey。シャムニー Chamonix のデヴァッスウ Devouassouds とシモン Simond。ボンヌヴァル Bonneval から來た輕快なるアギル・ブラン Agile Blanc。その帽子に山鳥の毛を刺し、首にしやれたスカーフをしたヴァルトゥールナンシュ Valtournanch の連中。ボンヤリと壁に倚り掛つている白髪の老人は誰かを待つているのであろうか。これこそ彼のウィンパーの大競爭者にして、マッターホルンとチンボラゾー Chimborazo で、切つても切れぬ緣の「狙擊兵」、ヂャン・アントワーヌ・カーレル Jean Antoine Carrel である。併しもう、彼も昔日の勢はないが誰かお客を待つているようだ。

私はこれ等の連中は皆、知つている仲である。後年、何年か後になつても、これ等何れも登山史上の歷史的人物がお客の先頭に立つて、或は氷のアレートや或は遙か彼方の山頂で偶然邂逅すると、遠くの方から樂しそうに、『ヤアー、クギーさん、御元氣で……。いつまでも、御盛んですね……。大したものですね……』等と云われた事は、實に何回も〳〵あつたが、これ亦誠に樂しいものである。心からの握手。そして、『じや、御元氣で、何れ又（Auf Wieder Sehen）』と唯、簡單な言葉を殘して別れて行くのであつた。」と。

當時は勿論、今日でも、モンテローザの東の壁はアルプスに於ても一流中の一流とされている所を越えて先ずスイスに第一歩を印し、「ウィンパーのマッターホルン」を初めて、泌み〳〵と間近に仰ぎ得た彼にとつては、山そのものの收穫も勿論大きかつたには違い無いが、いきなり「ツェルマットのラクブ室」や"Alpine Club Table"や當代一流のガイドを網羅した"Guide Wall"を斯く迄滿喫し得た彼にとつては、スイスの第一印象と云うものは正に

千金に値するものであつたようである。

一八九一年八月のアルプスは稀に見る惡天候續きで、多くの男女の登山家が雨に閉じ込められて、「ツェルマットのクラブ室」に無聊を續けていたのである。中にはアルプスに初めてやつて來たので、彌が上にも熱に燃え眞夜中でも何んでも飛び出し度い位の元氣に溢れた若者もいたので、この長雨に閉じ込められる事は彼等に取つて誠に辛いことであつた。一應、何んでも時を消す方法、手段は試みられたのであるが、其れでも物足り無くて滿足を得られ無かつた連中は、このモンテローザ・ホテルのルーフ・クライミング Roof-Climbing をあらゆるルートからヴァリエーションで、或はロープを使い、或はロープ無しで登る連中もあつたのである。

偶ゝ當時、アルプス狹しとばかりに縱横に活躍していた、ノルマン・ネルダ Norman-Neruda が、之も其の道では當代一流の令名を轟かせていたエンガディン Engadine のガイド、クリスチャン・クルッカーを伴つて、ポアン・ドゥ・ツィナール Point de Zinal の南東稜の初登攀をねらつて、此處に泊り合せていたのである。その前年、一八九〇年、當時未踏の否、勿論、其迄に試みる者すら無かつたリスカム Lyskamm の北の氷壁——恰も小銃の連發を聞く樣な雪崩の轟音。之れが當時リスカムの北の壁に關して得らるゝ唯一の知識であつたのである——をやつてのけた、さすがのノルマン・ネルダも、この惡天候續きと無聊にだけは如何とも抗することが出來なかつたのであるが、これが奇緣と云わんか、何か目新しい登攀をやつて見度いと云う熱望に燃えている、一婦人登山家を話相手に見出したのである。

それは彼の記述によると、

「天氣は益ゝ惡くなるばかりで、我々登山仲間の若い連中は皆、不平タラ〳〵であつた。その中に英國山岳會の會員たる父に伴われた一人の若い婦人登山家がいた。彼女は初心者の中でも登山に對して異常な熱意を持つて居り、所

謂、事少なくともアルプスに關しては珍らしく闘志滿々たる女性であつた。そんなことから、短時日の間ではあつたが彼女と非常に親しくなつたので、クルッカーは私の登山熱ももうおしまいだ。もうこれきりで山にも來なくなるだろう等と陰欝な豫言めいたことを云つたものだが、事實は勿論、彼の云う通りにならなかつた。その女性はペイトン孃 Miss Peyton と云い、既に之迄に、どちらかと云えば普通のガイドと並みのルートからの登山を、二、三やつていたのであるが、いゝガイドにつけば事實、登山の技術に何物かを體得する事が出來、普通の並みの登山家よりは遙かに勝れた登山家になれるし、面白い登山も出來ると云う、チョットしたヒントを與えたのであるが、それが又彼女の登山熱を彌が上にも燃え立たしたのである。實際、唯並みの登山家と云う者はいくら、うんと難しい登山をやろうとしても、唯ガイドの後ろに引付いて行くばかりで滿足して、たとえ何百回登つた所でガイドの技術と云うことについては何の會得すること無く、結局は初めて山に登つた時以上のことについて知らないで終つてしまうのである。

この婦人が本當の意味の登山家になろうとする決心と云うものゝ結果は如何なつたかと云うことは、私の語る幕ではない。それは他人様の御意見にお委せして置いた方が安全であろう。それはウッカリ喋つても依怙贔屓になつたと思われると困るから。と云うのは皆さんも御承知の様に、その婦人は今は私の女房なのでありますから……」と云うのだから、つまりアルプスの悪天候はノルマン・ネルダをして、この「ツェルマットのクラブ室」を彼の一生の紀念すべき慶き日の慶き場所たらしめたのである。

そして、クルッカーの冀の陰欝なる豫言——山に來なくなるだろう等と云う豫言は、勿論美事に裏切られて、事後ネルダ夫妻は相携えて屢ゝ山歩きを共にしたのである。

併し後年、彼がドロミテの鋭峰、フュンフフィンガー・シュピッツェ Fünffinger Spitze のシュミット・カミン Schmitt Kamin に病を犯して登攀中、不幸墜落慘死したことは、登山史上餘りにも有名なアクシデントとして傳え聞く所である。當時勿論この新夫人も同伴していたのであるが、ツェルマットの慶き日より僅か六年にしてこの慘

事は、假令それは運命の神の仕業とは云え誰か天を怨まざる者無かろうか。其後、同夫人の手になつた追憶の書 "The Climbs of Norman-Neruda" を手にし、「彼は實は翌年にはクルッカーを伴つてヒマラヤに出掛ける計畫をしていた」との序文の一節を見るに於ては尙更のことである。

この若く美しい未亡人の其後の登山については何等知る由もなきことながら、曾て彼等が相携えて初登攀のケルンを積んだドロミテの一峰「シマ・ウィルマ」(註36)こそは、實は彼等の間にもうけられた愛嬢、「ウィルマ」の名を附せし、忘れも得ぬ初登攀の山として、彼女の思い出を新たにしたことであろう。

今、「ツェルマットのクラブ室」に婦人會員を語つたからには、此處に今一人どうしても語ら無くてはならぬ婦人がある。事實、この婦人を語らずばこの「ツェルマットのクラブ室」の變遷史は成立たないのである。其の名はミス・ルーシィ・ウォーカー Lucy Walker と云い、その生立ちから云つてもアルパイン・クラブの初期のコミッティーを務めたフランシス・ウォーカー Francis Walker を父に持ち、第十二代のアルパイン・クラブの會長を務めたホレース・ウォーカー(註37)を弟に持つていたと云うだけで既に話は半分は判るであろうとは思うけれども、この婦人をめぐる「ツェルマットのクラブ室」も亦樂しい話である。

それは、一八九二年の夏のこと、偶ゝニュージーランドからやつて來た一人の青年登山家があつたが、この前年ニュージーランド・アルパイン・クラブの創立に當り、總てを英國山岳會に倣つて發足した同クラブの名譽書記たりしこの青年が、翌一八九二年に、ロンドンは、アルパイン・クラブを訪れ、彼が年來の宿望たりし A・C 入會の夢を實現し得たその喜びを抱いて、彼が英國の友たるジョージ・ブローク George Broke とニューマーチ F. W. Newmarch を誘い、先ずこの「ツェルマットのクラブ室」を訪れたのであつた。六十年後の今日、この青年は當時の模様を斯う語つているのである。

「一八九二年の事、ジョージ・ブロークとニューマーチと私の三人は、ガイドレスの登山を鳥渡ばかりやろうと云

うことで、ツェルマットに出掛けた。我々はモンテローザ・ホテルに宿をとつた。或晩夕食後、スモーキング・ルームに上つて行こうとして、私は通路の一端に數人の人が、一婦人を交えて御茶を飲んでいるのがフト眼に止まつたのである。ブロークが云うには『あれがルーシィ・ウォーカー嬢だよ。若し貴公があの女性と知り合いになれたら、クラブの偉い人達にも會えるのだよ……』と。

我々も御茶を命じた。丁度其時、その中の一人がやつて來て、ブロークに、あなたと御一緒のハーパー氏 A. P. Harper はニュージーランドから來られたのですかと問うたのである。私は即座に、ハーマン・ウーレイ(註38)を紹介された。ウーレイはルーシィ・ウォーカー嬢が一緒にお茶を飲みませんかと云つていますが、とのことであつた。私は其處で、ウォーカー、ピルキントン(註39)、ウーレイ、ウィックス(註40)、其他一、二の人々の前に立つた時は、もう突然古代の神々の前に立たされたような氣がしたのである。併しウォーカー嬢が私に、ニュージーランドのことを色々話させて、我々が散々苦勞して草分けの登山をしたと云う事を聞いて、居並ぶ他の連中の方に顔を向けて『それこそ本當の登山ですね。小舍とか、チャントした食糧があるわけでなし……』と云われた時には、漸く元氣を取戻したのである。私は尙お、屹驚したことには彼女に、毎晩この集りにいらつしやいと云われ時には、實にスリルを覺えた。實際、私にとつては、彼女はこれ等の偉い人達のかしづく宮廷の女王の如く見えたのである。私はツェルマットからザースへ行く時に、彼女は九月になつたらリヴァプールのこれ等の連中の所へ來ませんか。毎年山友達が澤山集りますからとの話であつた。」

と回顧しているのであるが、遙々ニュージーランドからこの「ツェルマットのクラブ室」に憧憬れて來て女王に拜謁、恐懼、感激しているこの主は、實は今は時めくニュージーランド・アルパイン・クラブの創始者にして名譽會員であり、又現にアルパイン・クラブの名譽會員でもある、エー・ピー・ハーパー(註41)の若き日の感激の圖なのである。

併し、事實當時の登山界に於ける彼女の聲望と云うものは、充分これを裏付けるものは、勿論多々あつたのである。

それは一八七八年、彼女の弟なるホレース・ウォーカーが、アルパイン・クラブの會長の時であつたが、偶〻晩餐會の席上での話に、「若しアルパイン・クラブにサリカ法（註42）と云うものが無かつたら、あのチャーミングなレディこそは、とつくにアルパイン・クラブの會長になつていたであろう」と出席者一同の話題に上つたと云うし、又後年、登山史家としては勿論のこと、その足跡の廣大なことと、アルパイン・クラブでも頑固親爺としてあまりにも有名な彼のクーリッジ（註43）に、そも〳〵の登山の手ほどきをしたと云う彼の叔母なる女流登山家、メグ・クローディア・ブレバート・クーリッジ Meta Claudia Brevoort Coolidge でさえも、「若し、ミス・ルーシィ・ウォーカーの薫陶なかりせば、叔母もあれだけの女流登山家にはなつていなかつたであろう」と、クーリッヂ自身述べている位であり、又冀に述べた第二十八代のアルパイン・クラブの會長をやつたクロード・シュスター等も、その著書 "Peaks and Pleasant Pastures" の卷頭に、彼女に捧ぐるの書として、「自分の今日、この一書を著す迄の、一人前の登山家になつたのは貴女の御指導の大いに與つて力あるものであります。この一書は寫眞一枚掲つているわけでなし、登山術の研究書でもなし、物語的のものでもなし、唯普通のあり來たりのことを書き綴つただけのものに過ぎ無いものでありますが、唯、貴女だけは、この書に述べてある私の氣持をよく判つて下さる事と思ひます」と云う樣な意味の献本の辭を述べているのを見れば、登山史上に於て女性の登山家としては先ずアルパイン・クラブの初代の會長のジョン・ボール John Ball にも比す可きものでは無かつたのではないだろうか。

成程、其の登山歴を見ても、一八五八年には、既にテオドール峠 Théodule Pass を皮切りに、以來卅年の長きに亘り、毎年必ずアルプスを訪れ、百近くの登山をなし、其の中には當代隨一の名ガイド、メルヒオール・アンデレックを伴つて、バルム・ホルン Balm Horn の初登山も含まれているし、マッターホルンやウェッターホルンの婦人としての最初の登攀者でもあつたのである。當時、婦人の登山者も勿論なくはなかつたが、彼女のように毎年缺かさず、ハイ・アルプスを訪れたものは他に一人も無かつたのであるから、ザイラー夫妻と永年の交際が續いたのも當然

のことであつた。

當時、リヴァプールにあつたウォーカー家は、六十年の長きに亘り登山家の集いの場所であり、當時タケット（註44）の一族と共に、この兩家は一族郎黨、皆、登山家の塊りで、登山界に於ても「アルパイン・ファミリイ」として聞え高く、マーティン・コンウェイ等もウォーカー家には度々足を運んだ内の一人であり、當時コンウェイの呼稱は、William Martin Conway の頭文字をとつて、Wicked Man と云うことになつていたのも、この語源は、實は、ルーシィ・ウォーカー孃の作にあつたと云うのであるが、其の年齢から云つても、二廻り近くも年長者であつた彼女は、一八六四年には既に「ツェルマットのクラブ室」の常連の一人であつたから、コンウェイと雖も彼女には頭が上らなかつたのであろう

實は、ウィンパーの例の圖版（挿入圖版參照）の右側のホテルの戸口の所に立つている婦人が、他でもない彼女であると云う事迄知つている者は餘りいないのである。

併し、彼女は一面當時の所謂ヴィクトリア王朝時代の典型的な女性であり、徒歩旅行とか乘馬とか釣とかをやるでも無し、むしろ家庭にあつて針仕事をよくし、數ケ國語に通じて又讀書家であり、よき hostess であつた。其登山に際しても決して男裝等することもなく、激しい登山の後にはホテルの一室に於て型のくずれた白地の衣服の皺を直しているのを屢〻見受けることがあつたと云う。

唯、彼女の强力な資產と云うものはその長縮すること無い意志の力であつた。

以上は「ツェルマットのクラブ室」の大體の模樣であるが、未だ〳〵唯一言、二言程度このクラブ室の思い出を語つている登山家の言葉を丹念に拾つていたら、實に枚擧に逞ないのである。例えば Monte Rosa と云ふ字句が出て來たので、ヘンな所に斯んな山の名前がポツンと出たのはおかしいと思つて續いて讀んで見ると、要するにそれはモ

ンテローザ・ホテルのことであつたりすることは度々であり、其程にアルパイン・クラブの連中にとつては、敢えて山の名前やホテルの名前を特に區別せぬ程、自らのものにしていたのである。

それもその筈である。遙々英國からやつて來たとは云え、ホンの氣輕に「ツェルマットのクラブ室」否「故郷」に歸つて來るような樂しさと喜びを抱いてやつて來ているし、迎える方も、上はホテルの主人夫妻から下はポーターのヨストに至る迄、都會に勉學にでも出ている息子が夏休みにでも又歸つて來た位の輕い氣持で喜び迎えているのであるから、お互いに何の氣兼も、形式的な主客のもてなし等もあろう筈は無いのであるから、正に彼等にとつては夏の「アルパイン・クラブの別莊」位いに思つていたのであろう。しかも集つて來る連中はつい先日迄ロンドンで顏を合せていた連中であるし、事實、現實に雪の山々が眼の前に見えるだけに、彼等にとつてはツェルマットのアルパイン・クラブでなくして何んであつたろう。

然し、昔から登山に限らず、英國人程クラブライフと云うものを樂しむ國民は無いと云うことは聞いているものの、山と云うものを中心にして、人と人との繫りが斯く何世代後迄も結ばれて行く溫き繫りは誠に羨ましい限りでは無いか。アルパイン・クラブの慣習として、第八代の會長、チャールス・エドワード・マシュウスの時以來、三年の任期を終えた會長は必ず辭任の演說を試みることになつているようであるが、或は「クラブの傳統」と云うことに一言觸れ、或はこの大任を無事果し得た感激と喜びを述べていないものは無いのも、矢張この人と人との繫がりの溫かさを如實に物語つているのでは無かろうか。先輩は後輩を、後輩は先輩を、無言の中に導き導かれて行くあの世界の暖かさこそは、正に百年に垂んとする傳統の由つて來る所のものでは無いか。

私は、このクラブの年刊誌たる、あの、アルパイン・ジャーナルを手にする度に、つくづく感ずるのであるが、その創刊號以來、表紙も、大きさも、內容の組み方も、百年この方、終始一貫、些も異る所がない。一體アルパイン・クラブのもので、毎年、變つているのは何があるのだろう。それは、年次晩餐會の獻立表の表紙位かな、と私は實は

眞劍に考えた程、其の無頓着さを、イヂになつて考えて見たことがある。又、會員名簿にして見た所で、何年間つても表紙はあの薄桃色一色だけ。無頓着と云えば無頓着。表紙の色位、變えたらよさそうな氣がするのであるが、其れは結局內容が目的なので、外觀等はどうでもいゝのだからと云つてしまえばそれ迄ではあるが。併し實は何世代もの人と人との繋りの溫かさが、この年刊誌の表紙や會員名簿の薄桃色、一色に既に表われているのだと云うことに漸く氣がついたのも、つまり我々凡人の下手な美的觀念の先入觀と云うものの災する所であろうか。この溫き傳統こそは實にこのクラブの資產であり、百年の傳統によつて築かれた定款では無かろうか。

それは「私はもう年老い、活動の時期も過ぎた今だから、此處に申上げるが……」と語るウィンスロップ・ヤングの、會長辭任の節の演說の一節を此處に引用して見れば、この一言だけで充分このクラブの溫き傳統の輝かしさが、實に羨ましくなる程判然伺われるような氣がしてならない。

「クラブの皆がお互いにもつと親しくなり易いように、又我々の如き末輩がモンテローザ・ホテルで大先輩からチョットでもお目に止めて貰いたいと云う希望から、その昔私はクラブの會員章とクラブ・タイを作ろうぢや無いかと提言したのである。これについては、實は何ケ月も活潑なる議論が續いたのであるが、我々は少なからず驚いたことには、クラブがこの二つの提案を採用するに當り、私がネクタイを、ファーラーが會員章を考案するよう、命ぜられてしまつたことである。(中略) 私はもう、年老い、活動の時期も過ぎ、今だから申上げるが、私のこの提案の功績にと、その裏に第一號と彫つてある會員章を實は私は貰つたのであるが、クラブの私に對する親切は實にこれに過ぐるもの無し、と私は感謝しているのである。(中略) ダグラス・フレッシフィールド (註45) 等は我々のこの提案に、面白がつて反對するのであつた。そして、あてこすりに、『この次はどうするのだ。何の改革だ。きつと婦人の入會でも認めようと云うのだろう。』等と、フレッシフィールドは皮肉を云つたものだが、此時ばかりは私はムキになつて斯う云つたことを覺えている。『いゝえ。いゝえ。決してそんな事は……若し、クラブが又、眠つたような狀態に

でもなつた其時こそは、必ずあなたの御反對に大賛成を惜しみませんよ』」

とウィンスロップ・ヤングは語つているが、それはフレッシフィールドの如き大先輩に取てつは成程、顏見世のための會員章やネクタイ等は其の必要性よりも、むしろ若輩連のクラブを愛するのあまりの熱情として、高所より微笑んでいる方が、餘程嬉しかつたようである。

その昔私が、未だ日本山岳會の會員でない頃、當時の常例會場であつた清水谷皆香園で、斯界の大先輩、木暮さんや高頭さん、高野さん、田部さん、武田さん等の大御所を遙拜し、それは、失禮な申分ではあるが、どう最眞目に見ても、木暮さんの容姿風貌は都會には珍らしいものであつたし、高頭さんに至つては尙更のこと。併し私にとつては唯、「慈父」と云う一言しか形容詞の持ち合せしかなかつた程の居列ぶ大先輩の談笑を其こそ「お眼に止らば」と、淡い希望に燃えつゝ廊下の隅つこで小さくなつて、一言でも聞き洩すまじと耳をそば立てゝいたあの頃。又、當時の「山岳」には必ず掲せられていた小集會の出席者の何十名かの名前の最後に、「其他會員外何名」と名前の代りに、十把一からげで、數字の代名詞を以て、いとも簡單に片附けられてあるのを見ただけでも「あゝ、我輩も、この中の一人だつたのだ」と、唯云い知れぬ自己滿足に醉つていた、あの少年の頃。要するに、今にして見れば、私にとつては「ツェルマットのクラブ室」であつた、あの清水谷皆香園は、今は一生の樂しい思い出の一頁であるだけに、このヤングとフレッシフィールドの言葉こそは、實に現實に、眼に見えるような氣がしてならないのである。

【附　註】

（註1）A.W. Moore——登山史上の黄金時代と稱せられる一八五九年—一八六五年の間に於ける先蹤者の一人で、又アルプスの冬期登山の先覺者である。當時登山界に於ける「よき仲間」として、一つの合言葉にもなつていたハドソ

ンとケニデイー、クリスチャン・アルマーとクーリッヂ、ホレース・ウォーカーとムーア、として史上に永く殘る登山家であつた。殊に彼が死後、其の生前の登山記を纒めて、これも亦彼の曾ての登山仲間たりしケニデイーの著した『一八六四年のアルプス』"The Alps in 1864" は、今日に於ても山岳圖書として最高級のものであり、ウォーカーやウインパーと仲好く、いかにも山を樂しんでいると云う感を受ける書である。中でも其の一節「ブレンヴァよりのモン・ブラン」の如きは當時の記錄的登山の紀行である。一八七二年—一八七四年、アルパイン・クラブ名譽書記。

（註2） I. Stephen——第四代（一八六六年—一八六八年）アルパイン・クラブ會長。

（註3） F. C. Grove——第十代（一八八四年—一八八六年）アルパイン・クラブ會長。

（註4） E. S. Kennedy——第二代（一八六一年—一八六三年）アルパイン・クラブ會長。

（註5） John Ball——アルパイン・クラブ初代會長（一八五八年—一八六〇年）。

（註6） Ulrich Lauener——當代一流の山案内人。

（註7） Franz J. Andermatten——同右。

（註8） Alexander Seiler——モンテローザ・ホテルの主人。

（註9） H.E.G. Tyndale——一九四七—一九四八年、アルパイン・クラブ副會長。十年（一九三八—一九四八年）の永きに亙りアルパイン・ジャーナルの編集に携わり、しかも第二次大戰中の六年間と戰後の三年間を含むこの十年と云うものは、あらゆる困難に遭遇しながらもよく年來のアルパイン・ジャーナルの水準を保持し續けて來たことは、前大戰中の編集者ファーラーと共に英國山岳會の正に至寶とも云うべく、又實に彼の溫和な人格と豐富な經驗の然らしむる所である。冷酷なる論爭を嫌い、批判するに當つても懇切を極め、決して仕返しをするようなことはなかつたと云う。又嫌惡に左右さるゝようなことはなかつたと云う。その編集に當つても從來の編集者の間には、斧は使用するもので、しまつて置くものではないと云われていたのが、彼は登山家にとつてはそれはもう時代遲れのものであると笑つて取合わず、その記事が例えば既に昔に登られたような、初登山とか新しいルートによる登攀とか云う點から云つてニュースとしては全く興味のないものであつても、「登山」と云うことだけで面白いと思わすような記事は喜んで採用したと云う。

又大陸の登山家との友交厚く、ナンガ・パルバットで亡くなつたドイツのメルクル等もその一人であつた。又オーストリヤのクギー（後述）等には特に私淑し、親しくクギ

ーの山居を訪ねては其の德を慕つていたと云う。クギーの山の回想記とでも云う可き名著 "Aus dem Leben eines Bergsteiger" の英譯をなし、その序文に「その昔、クギー少年に『山登り』の火の手を焚きつけたウインバーの『アルプス登攀記』の發行所なる John Murray 書店から、今この譯譯が發行せられると云うことは私にとつては勿論のこと、ドクター・クギーにとつてもさぞかし御滿足のことと思う」と語つているのも、彼の溫和なる人格と大陸の登山家との溫き友交を如實に示すものではないか。彼の書齋には、常にクギーの寫眞が掲げられてあつたと云う。

一九四八年、六十才にして亡くなつたのであるが、從來の他の高名な登山家の例よりして、六十才と云うのは餘りに早死のような氣がしてならないのである。それも、一つには彼の登山界に及ぼした功績の餘りに大きかつたが爲めに、尙更、惜しいような氣がしてならない、先入觀のせいでもあろうか。それは、將來必ずアルパイン・クラブの會長の地位を占めた人物に違いないと思うのも、敢えて私一人ではないと思う。

(註10) Claud Schuster——第二十八代(一九三八年—一九四〇年)アルパイン・クラブ會長。

(註11) T. G. Longstaff——第三十一代(一九四七年—一九四九年)アルパイン・クラブ會長。

近代登山家の內ではヒマラヤに關する最高權威者であり、第二回エヴェレスト登山隊員。其の昔、我が立教大學のナンダ・コット登山隊の成功の折には、彼が曾て試みて登頂果さざりしナンダ・コットの成功を祝し、特に日本山岳會宛に祝文を寄せられたことは、我々會員の未だ記憶に新たな所である。(會報第六四號參照)

尙お松方三郎氏宛の同氏の近況によれば、今は、スコットランドの北西なる一寒村、ガルブ Garve より尙お道程にして六十哩も距たり、郵便の定期車が唯一の交通機關にして、しかも質實、溫健なる同地方村民等は專らケルト語を常用語とすると云う、山間僻地のプリミティヴな生活に餘生を樂しんでいると云う。識者の語る所によれば、ケルト語なる語は頗る難解にして、我國に於ける鹿兒島言葉と東京言葉との差どころには非ずとの事なれば、先づ先づ山間の僻地の別天地の樣である。

その昔、同氏に伴われてグリンランドの「マッターホルン」、ホルテタッケン Hjortetakken に迄足跡を殘し、或は又、アルプスに於てはガイドレスにてルイネット Ruinette ドーヴ・ブランシュ Douves Blanche の登山に活躍したるシルビヤ・ロングスタフ Sylvia Longstaff 孃を始めとして數多の子女、子息も夫々一家をなし、今は「十

七人の孫の祖父となりたり」と嬉しげに語る、この往年の Veteran Himalayan Climber の松方氏宛の書翰に對してはマナスル登山隊の快報でも是非送り度いものである。

尙お同氏の名著 "This My Voyage" は古來山岳古典書の出版書肆として其の名高き John Murray 書店の好意により、獨、佛、スペインの各國語に飜譯出版さるゝ由。

（註12） Geoffrey Winthrop Young——第一次大戰で足部の負傷を受けてから往年の活躍の止まつたのは誠に殘念なことではあるが、若しこの不幸がなかつたらエヴェレストで亡くなつたマロリー（G. L. Mallory）等とはよき仲間であつた關係上、當然エヴェレストのメンバーに入つている登山家である。

其の著書は何れも山岳文獻として名著の評高く、歴代會長の中でもフレッシフィールド等とは別の意味で大物ではないか。第二十九代（一九四一年—一九四三年）アルパイン・クラブ會長。

（註13） E. L. Strutt——第二十七代（一九三五年—一九三七年）アルパイン・クラブ會長。

一九二七年より十年間アルパイン・ジャーナルの編集に携わり、第三回エヴェレスト登山隊員。

（註14） Pop——劍橋大學、イートン校に於て一八八一年以來この方行われている討論會。

（註15） Owen Glynne Jones——岩登りの名人。スコットランド地方の岩山については特に顯微鏡的知識を持つていたと當時評せられていた。一八九九年八月、ダン・ブランシュの山頂附近に於て、ガイドのスリップにより一命を亡う。

（註16） Alfred Williams——一八三二年生。一八七八年アルパイン・クラブ入會。一八九二年理事。一九〇五年歿。

山岳畫家としてアルプスはドーフィネからドロミテに迄足跡を殘し、又遠くコーカサス、ヒマラヤに迄畫架を携え、一九〇一年にはダージリン、アルモラ等に滯在してクマオン、シッキム・ヒマラヤの大作を遺す。「グランド・ジョラス」「クマオン」の大作は今日、アルパイン・クラブの一室を飾るものとして何人も知る所である。當時、アルパイン・クラブの會員としても重きをなし、後にヒマラヤの先覺者としては勿論のこと、第二十二代のアルパイン・クラブ會長として、歴代會長の中でも大物の中に列するノーマン・コリーのよい指導者でもあつた。

「私は未だアルパイン・クラブの會員でなく實はクラブに入り度くて堪らないと思つていた頃、アルフレッド・ウイリアムス氏からアルパイン・クラブと云う所は斯ういう所だ、そして會員と云うものは斯々なのだと散々お談議を聞かされたものであるが、私は未だにそれを忘れることが出來ない……」とノーマン・コリーはその會長就任の演說

で語つている位であるから、コリーにとつては大先輩であつたようである。

（註17） Norman Collie——（註16）参照。コリーの一面を語るものとして會報第一五八號所載の拙文、「或る登山家の邂逅」参照。

（註18） Charles Granville Bruce——第二十三代（一九二三年—一九二五年）アルパイン・クラブ會長。

「ヒマラヤに廿年」"Twenty Years in the Himalaya" の著書ある如く殆んど一生をヒマラヤに捧げたる人。遠くはコンウェイ、マンメリー、ロングスタフの時代よりエヴェレストの初期の登山隊に迄夫々行を共にす。英國人には珍らしく東洋人に對して親愛の情を持ち、性來の明朗性と諧謔に富んだ性質に加うるに堪能なる土語を操つてよく現地人の氣質を把握し、グルカ人のポーター、チベット人等はこの大リーダーに恰も完く魅せられたる如く、欣然、屈從、尊敬の態度を示し、又時には彼等の間に冗談を飛ばして現地人と喜々として戯れる樣は假令一々通譯を乞わずとも傍の見る眼も樂しかつたと云う。

曾てエヴェレストへのキャラバンの途次、ヂェレップ Jelep の峠より下り來るチベット人の一隊がこのゾングリ太つたブルースを遙か彼方から見留けるや、一齊に歡喜の叫びをあげて近寄り來たり、忽ちこの旦那を取圍みて先づ喜びの挨拶を交すや、ブルースは彼の側に近付いて來た一人の、ゾボンのブク〳〵した所を捉え、平手打ちをくらわせて彼等の狂喜する中に、如何にも流暢に、しかも滔々とラブレー Rabelais（十六世紀に於けるフランスの僧侶で、エロ、グロ的諷刺の作家であつたと云う）の話の一コマ、下ネの話を交えて一同をドット狂喜させたりしたあの時の聲は、今尚お耳に殘つている樣だとは當時の一行の一人たるストラット（註13参照）の後年、語る所である。

又同じくエヴェレスト遠征の節、一行の内、英本國しか知らぬ隊員の一人が、島國根性から、勿論本人は冗談の積りであつた樣ではあるが、グルカ人の顏色について輕蔑の言をなしたるに、彼は奮然色を成して立上り、幸いストラットが素早く兩人の間に立つて事無きを得て、彼は呵々大笑して冷靜に戻つたと云う。が併し彼にとつてはグルカ人の名譽は實に彼自身の名譽でもあつたのである。とは同じくストラットの語る所である。

エヴェレスト遠征の節には齡五十六に達し、その昔のガリポリの戰にて負える戰傷の痕未だ完全に癒えず、彼の不屈の精神は二萬呎の高所に登るに不適であつたが、寒氣に對して不死身とも云う可く、ベースキャンプやキャンプ No. 1 に、嚴寒の時でも何時でも何時間でも平氣で行動していたと云う。その證據には一九二二年の報告書"Assault

on Mount Everest" のベースキャンプに於ける一行の寫眞を見ても、他の連中が耳の處まで隠れる帽子を冠つているのに、彼だけはカーキの半ズボンに胴着と薄いスェーターだけで座つている姿が、これを如實に物語つている。

彼がヒマラヤ遠征と云うものに盡した蔭の力、例えば今日に於ては最早や往年の如く遙々スイスから一流のガイドを態々伴わずとも立派にヒマラヤ・エキスペディションの一役を買い得るシェルパーの存在するは、實は元をたゞせばブルースの訓練によるものであると同時に、彼の現地人に對する寛容、温情の態度と堪能なる土語の然らしむる所であると云う事は何人も等しく認むる所である。

尚お彼がたゞに、グルカ人、チベット人のみに限らず如何なる所に於ても其の行先先に於て相手に親愛、尊敬の念を抱かしめた證據に、曾てガリポリの戰に於てフランス軍と偶々親密となるや忽ちにしてワインの小樽をせしめ來たり、寸暇を見ては大いに「一杯」を樂しんでいたと云う。が併し如何樣にしてこの戰場のさ中にこの樽入りを運び來たりしかは當時一同の不可解とする處であつたが、其の昔、キーバー Keyber（印度とアラビヤの國境）に於て彼が看視をやつていた頃、當時身體の調子を整え置くため附近のピスガー Pisgah 山迄從卒を背負つては何百呎もある岡を登る練習をしていたので、恐らくブルース自身が背負つて來たのであろう。酒好きの彼の事であるから酒樽の小樽を背負つて上る事位は、何んでも無かつたのであろうとは當時一同の得た結論であつたと云う。

（註19）Dr. Julius Kugy——オーストリア登山界の神樣と云われる人。事實、彼の著わした文献を若い連中は聖書であると迄云つている程である。トリエスト Triest の百貨店の主人。植物に造詣深く、音樂にかけては素人の域を脱し、常に教會のパイプオルガンの彈手を受持つていたと云うから、バッハの曲を殊のほか愛好していたと云うのも成程とうなづける。

彼は特に野營を親しみ、山の美しさ、靜けさをよく音樂の美に例えている所は彼の著書の隨所に見受けられる。その華麗にして熱情湧くが如き記述は、イタリヤのギド・レイに劣ぐものではなかろうか。事實、彼自身もギド・レイに私淑し、マッターホルン山麓でギド・レイに邂逅する場面こそは、抒情登山家たる彼の一面を如實に物語るものである。（會報第一五八號所載の拙文「或る登山家の邂逅」參照。）

英國山岳會のベテランとも親交厚く、一九三三年にはアルパイン・クラブの名譽會員に推されたのも、その人格、登山歴から云つて之亦當然なことである。

一九三八年七月十九日、彼の熱愛したユーリアン・アル

ペンの一山村、バルブルナに於て八十歳の祝が催され、當日は實に一五〇〇通もの祝文の詰められたリュックサックが郵便配達によつて屆けられ、祝客の自動車は山麓の村を埋めたと云うのも、彼が如何に一オーストリヤの登山家としてばかりでなく、その圓滿な人格は歐洲の登山家として各國の登山家の尊敬の的であつたことを物語るものである。

(註20) Louis Friedman——前述クギーと共にオーストリヤの生んだ三偉人。

(註21) Heinrich Pfannl——前述クギーと共にオーストリヤの生んだ三偉人。

(註22) William E. Davidson——第十九代(一九一一年—一九一三年)アルパイン・クラブ會長。

後に Sir の稱號を受く。

彼は著書こそなけれ、その足跡はアルプスを限なく亙り、英國登山家の例に洩れず名門の出にして、常にアルプスに於ても一流處のガイドを二人引連れて歩いていたと云う。他人に對しては特に親切溫情あり、一面、明朗な彼の性質は特にガイド連の間に評判よく、或る日のこと、シャムニーの宿でベッドの下に玩具の蛇を巧妙に這わせ置きガイド連中の恐怖、驚喜するのを喜んだりして人氣を博したこともあると云う。

又、當時としては遙々、訪れる者の稀な冬期のグリンデルワルドを訪れて、五百人からの男女の村人をホテルに集めてダンスパーティーを催し正午から翌朝六時迄、又再び正午から翌朝五時半に及ぶ大パーティーを催しこの間、實に二千五百本のワインを振舞つてクリスマスを樂み、又、彼がロンドンの自宅にアルパイン・クラブ入會二十五年紀念の喜びの祝を催し、當日は特にアルパイン・クラブの重鎭を多數招ずる傍ら、一方に於て右招客には極秘にスイスより彼の御贔屓のガイド、ジョセフ・ボーリンガー、フランツ・ロッホマッターの二名を別室に招じて、正に饗宴の始まらんとするに當り、隣室との戸を開いて之等ガイドとは勿論豫而からの知合いの、居並ぶ招客連を驚喜させたりして喜んでいたと云う。

(註23) Charles Wollaston——一九一八年—一九二〇年アルパイン・クラブ副會長。

(註24) Jost——一八六五年、マッターホルンのアクシデントのあつた頃には既にこのモンテローザ・ホテルに働いていたポーターで、此處に集る御常連には永年顏馴みのポーターであり、又バーテンダーでもあつたようである。彼の作る「パンチ」が之亦、御常連の忘れることの出來ぬ「一杯」であつたのである。元來、いつこく者のこの老爺は寫眞を撮られることを特に嫌い、其だけに此處に集る御常連は面白がつて無理に、何んとかして寫眞を撮ろうと苦心し、

人掛りで一人にコストの注意を惹付けさせて置いて、其の隙に他の一人が漸く寫眞を撮ることが出來た等と云つている登山家もある程、彼も亦一面、このクラブルームには無くてはならぬ愛玩の對象であつた。

彼も亦昔からの登山家がやつて來ると、唯嬉しさの餘り酒場の壁をコツ〳〵とたゝいて見せ、耳をすまして「どうです。この音は……」と、その昔のラウベル時代からのみがき込んだ板壁の響きに昔を偲ばせて喜んでいたと云う。

（註25） Charles Edward Mathews——第八代（一八七八年—一八八〇年）アルパイン・クラブ會長。アルパイン・クラブ創立者の一人。

（註26） Seymour King——モンブランのイタリヤ側の一山稜にして、アルプスで今日尚お最難物の一つなるベテレ山稜の初登攀者。彼は此行に於て途中二日の野營を餘儀なくされ、當時の不充分な防寒用意のためこの無理が祟り、事後健康を害し比較的早期に登山を斷念したのである。彼は又、岩登りの達人であり、エンゲルヘルナー山群中のキング・スピッツェは彼の初登攀の功により、其の名を附せられたものである。

（註27） Charles Hudson——マッターホルン初登攀の際の犠牲者の一人ではあるが、當時彼の登山技術はガイド級の評高く、又登高意欲の旺盛なことは彼と親友ケニディーとの共著、"Where there's a Will, There's a Way" の題名の如く、誠にその意志强固な一面を物語るものである。該書の内容はアルプスの初期の登山の模樣を伺い知るには面白い文献であり、それは我國に於ける木暮さんの秩父の草分け時代の文献を思出させるような樂しい文献である。今日、マッターホルンを望むツェルマットの教會内の聖壇には次の如き追憶文が記されてあると云う。

"Beneath the Holy Table waiting for the coming of our Lord Jesus Christ now lie the earthly remains of Charles Hudson, Vicar of Skillington, Lincolnshire (killed on the Matterhorn, July 14, 1865), removed hither after resting for forty-six years in the village churchyard"

尚お今日このツェルマットの教會には、彼が生前愛用した樫の机が彼の未亡人によつて寄贈、使用されていると云う。

（註28） John Tyndall——黄金時代の英國登山者の一人。彼は又、唯登山家のみでなく、物理學の泰斗として氷河學の權威者であり、一面彼の紀行は其の文體頗る抒情的で文學的見地より見ても誠に立派なものである。ウィンパーとマッターホルン登攀の競爭者であつたことは史上餘りにも有名な事實であるが、今日イタリヤ側山稜にピック・ティン

ダルの名の附せられあるを見ても明らかな事である。

後世の登山家でティンダルの影響を受けた者、又少なくなく、中でもコンウェイの如きも

「ロイヤル・インスティテューションに於ける少年達への冬の講義には缺かさず出席して、私はティンダルをこの世の最も偉大なる人物であると思つた。それは恰も神に捧げ物でもする如く彼の行く所なら何處へでも、又、彼の云うことなら何んでも從うと云う尊敬の念を抱いていたのである」と云つているのも其の一例である。

(註29) "The Alps from End to End"——一八九四年六月より八月末に至る八十六日の間、フィッジェラルドと共にアルプスを南から北へ、更に東へとフランス、スイス、イタリヤ、オーストリアと一千哩に亙る山旅の書であり、其の間二十一の登頂と三十九の峠越をなし、途中或はスパイに間違えられたり、オーストリア山中の小舍ではドイツの青年登山家とビールの美味さを論じ合つたり、誠に變化に富んだ遍歴の書である。

コンウェイはこの山旅に於て、先年彼が人跡稀なカラコラムに遠征したる際この山旅に連行を約したる二名のグルカ人を終始連れて歩いたのであるが、八十六日間の山旅を無事濟ませて、ロンドンのコンウェイ家に歸着するや、その玄關先に先づ第一に喜び迎え出たのは「グルカの父」とも云う可き、ブルース(註18參照)であつたと云う。

尙、この旅行に於てコンウェイは特に從來の一登山地を中心とする放射狀の登山 Centrist は、山の眞の姿を知り得るものでなく、峯から峠、谷。谷から峠、峯へと歩いてこそ眞の山の姿と云うものが判るのである。一の山の頂に立つて次に登る山を眺めると同時に又襷きに登つて來た山を眺め、之を續けて行く山登りこそ、山の眞の姿を把握出來るのであると力說して當時の登山界に異常な刺戟を與えた。

(註30) Melchior Anderegg——當時アルプスのガイドの中では「ガイドの神樣」と云われていたガイドで、年老いてはツェルマットで土產物屋等を經營し、傍ら婦人連を案內してハイキング程度の山歩きを樂しんでいたと云う。コンウェイとこのツェルマットで邂逅した時は六十六歲の時であつた。

(註31) Aiguille Blanche de Pétéret——モンブランのイタリヤ側の山稜にして、今日に於ても尙おアルプス一流の難所として聞え高く、落石と雪崩のための危險頗る多く、餘程の好天氣を攫まなければ登攀の機會は得難い。從つて一年の內に此處を登攀し得る者は幾組も無いと云う。コンディションによつては途中二日の露營も餘儀なくされることもあり、時には落石は落石を呼び五十トンから百トン位の

落石の轟音を聞くこともあると云う。

一八七七年、ジェームス・エックルスによつて初登攀され、第二回目は一八八〇年イタリヤの登山家によつて、第三回は三十九年後の一九一九年に同じくイタリヤの登山家により、第四回目はフィンチ（エヴェレスト第三回登攀隊員にして、一九四九年、アルパイン・クラブ副會長となる。現存の人）等によつて登攀せられたりと云う位、訪れる者の少ない悪場である。この間、高名な登山家にして此處を登攀中、犧牲となつた者も亦少なくない。

（註32） James Eccles——（註31参照）エックルスのペテレ山稜の登攀は登山史上に於ても實に Classic Ascent と呼ばれている。

（註33） E. A. FitzGerald——（註29）の中の人物。年齢的にはコンウェイよりは二廻りも下ではあつたがコンウェイとは特に親しき間柄であつた。

それは一八九三年の事。マッターホルン山麓のヴァルトゥールナンシュ Valtournache の宿に於て、二日も續いた荒天に籠城を餘儀なくされていたコンウェイは、偶々この非凡にして無口なる青年、フィッゼラルドと宿を共にしたのがそも〳〵の交友の初まりで、恰も氷の突然破れたる如く、忽ちにして二人の會話は始められたと云う。それにコンウェイの心を先ず捉えたのはこの青年が抱くニュージーランドのマウント・クック Mount Cook とアンデス Andes への遠征に對する念願であつた。

翌年、彼は之がキッカケとなつて先ずコンウェイの "The Alps from End to End"（註29参照）の山歩きに行を共にし山小舍にて同宿せる一ドイツ登山家と語り合う内、談偶々南米のアコンカグア Aconcagua の事に及び、該ドイツ登山家の持合せ居たるアコンカグアの寫眞や見取圖を見せられ、忽ちにして年來の宿望たるアコンカグア遠征の夢に油を注いだのであつて、曩にコンウェイの勸めによつてニュージーランドに伴いたるアルプスのガイド、ツルブリッケンを再び伴い、アコンカグア遠征の旅に上つたのである。ニュージーランド行に於ては彼が到着の旬日前に當地の登山家によつて既に最高峰のクックは初登山さるるの不運に遭い、又アコンカグアの登山に於ても不幸、病のため最高峰を踏む事は出來なかつたのであるが、その著 "Climbs in the New Zealand Alps" と "The Highest Andes" は共に今尚お山岳古典書の一つとして一般に推されているものである。

（註34） O. Eckenstein——有名なるエッケンシュタイン・アイゼンの創始者でヒマラヤにも遠征の山歴を有する人物。

（註35） J. P. Farrar——第二十一代（一九一七年－一九二〇年）アルパイン・クラブ會長。一九〇九年より十年間、ア

ルパイン・ジャーナルの編集に當る。

チャールス・ハドソン（前述）に私淑し、ハドソンの死を惜みたるその追憶記「現代登山家の龜鑑、チャールス・ハドソン」は前大戰中の原稿不足のアルパイン・ジャーナル誌に異常の光彩を副え、當時の登山界に刺戟を與えたと云う。彼はスイスに育ち、南アフリカにて金鑛をあてた父の遺業を暫らく繼ぐ内南阿戰爭に從軍し、偶ゝ野戰の露營地に於て或晩焚火を圍んで雜談中その一團の一人が徐ろに彼の方を振向き、

「あなたはあのマッターホルンの初登山の時の慘事を御存知ですか。實は、私はチャールス・ハドソンの一人息子なのですがねー。當時は私は未だ子供の時でしたが……」

と語り出したのには驚いたそうであるが、この一人息子こそは同軍の軍醫であつたと云う。

先に述べたように、前大戰中アルパイン・ジャーナルの編集に當り、よくその傳統の水準を保持して來たのは、後の今次大戰中のティンダルと共に歴代會長の中でも燦たる存在である。大陸は勿論のこと、遠く英自治領、アメリカ等の登山家とアルパイン・クラブの間の交友に當つては熱心な促進者であり、その登山歴に於ても登山術に於てもずば抜けたものであり、又社交的にも、老年の者からも、若いものからも、同樣の尊敬と愛情を集めていた。既に老年となり、或は病床にある昔の登山家連等の所在が判れば常に何處へでも、ありし日の懷古の手紙等を送つて慰めては喜んでいたと云う。又若い者で進取の氣象に富み、登山の熱意を抱く者に對しては、よき指導者となり、決して咎めるようなことはしなかつたと云う。今、例えば年來のアルパイン・ジャーナル誌を繰つて見てもアルプスのガイドや外國の登山家の追憶記に、彼程に度々筆を執つている者は無いのである。又、歐洲ではその水準の高い點では、何人も否定することなき、學校山岳部として斷然群を拔いているベルンのアカデミッシュ・アルペン・クルップの錚々たる連中の追憶記、例えばアドルフ・シャルナー Adolf von Tscharner とかリシャルデー Willy Richardet 等の追憶記をアルパイン・ジャーナルに掲せているのも、實にこのファーラーである所から見ても、如何に彼が大陸の若い連中と交わり、彼らの尊敬の的であつたかを物語るものである。又、第二次大戰に於て、アメリカ人にして英國山岳會會員たる一同が、英軍のために傷病兵運搬自働車の寄贈をなしたる由なるも、之が動機も、その昔、ファーラーがアメリカ人登山家と英國登山家との交歡に盡したる恩義に對する報いの意味も多分に含まれていたと云う。

彼のヒマラヤの先覺者、ノーマン・コリーも、このファーラーの次代の會長就任の際、ファーラーの如き大人物の

後に、私の如きが會長を御引受けするのには、餘りに重荷であると云つているのも、決してノーマン・コリーの御世辭ではない樣である。

其の登山に際しては獨特の服裝――と云うのはヅボンをまくり上げてバンドで止め、シャツも腕をまくり上げて歩く恰好は、山中、遠方より見てもすぐ、彼方にファーラー在ることが判つたと云う。

（註36） Cima Wilma――ドロミテ山群中の一峰にして、高度は僅かに二七六〇米であるが岩登りの快を味い得る山としてネルダ夫妻の初登攀せしもの。

（註37） Horace Walker――第十二代（一八九〇年―一八九二年）アルパイン・クラブ會長。

黄金時代の登山家の一人としてムーア（註1參照）のよき登山仲間であつた。

（註38） Herman Woolley――第十八代（一九〇八年―一九一〇年）アルパイン・クラブ會長。

アルプス、コーカサス、ノルウェー、カナダに足跡を有す。

（註39） Charles H. Pilkington――第十四代（一八九六年―一八九八年）アルパイン・クラブ會長。

アルプスに於てピッケルはその時代、地方によつて各々異なつていたが今日一般に使用されている最も普通のものは實にこのピルキントンの創始にあると云う。

（註40） W. H. Wicks――シャムニー・エギーユ峻峰中のグラン・シャルモの一峰にベートン・ウイックスの名の附せられてあるのは彼の記錄的登山を物語るものである。

（註41） A. P. Harper――アルパイン・クラブの會員は、現在約五百六十名であるが、ハーパーは會員在籍年數の最長者の一人であり、實に六十一年の長きに亙る在籍者である。しかも名譽會員に推されてからも既に二十一年に亙る、名譽會員中の最古參者である。

今日、ニュージーランド登山界の父と仰がれ、年老いても尚お若者達と山小舍の一時を樂しみ、その昔の樂しかつた山行を語つて後進の指導を唯一の樂しみとしていると云う。

曩にシプトンに誘われてカラコラムの山旅に行を共にしたスコット・ラッセル Scott Russell なども實はこのハーパーの直弟子である。ラッセルの語る所によれば、曾てキャンプ行の一夕、アルパイン・クラブの光輝ある歴史、マンメリー、ノーマン・コリー、ホレース・ウォーカー等の話を聞かされ、このウォーカー孃のモンテローザ・ホテルの女王振りも聞かされたと云う。

（註42） Saric Law――ゲルマンのサリー族法典。女子の王位繼承權を否認せるもの。アルパイン・クラブは創立以來今

尚お婦人の入會を認めないのである。

(註43) W. A. B. Coolidge——アルプスの登山史にかけては彼の右に出るものは無い。又多くの初登山を含む足跡についても彼程に廣汎に亙る者も少ないのである。そして晩年には遂にグリンデルワルドに居を移して臨終に迄アルプスから離れることの出來ない人であつた。生前親しく彼の寓居を訪れられた槇さんの話によれば山の書物に埋もれた彼の書齋は四面四壁ギッチリと書棚を以て埋められて居たと云う。彼の死後この藏書が賣立に出され、當時スイスにあつた槇さんも之が買取りに奔走せられたが、一足違いで入手出來なかつたのは今にして見れば誠に殘念なことである。

彼は妻子なく、實に山が妻子であり友達であつた。一面、非常に潔癖でありアルパイン・クラブでは頑固な先輩として聞え高く、ウィンパーやエドワード・デヴィッドソンとの永年に亙る論爭、喧嘩は史上有名な事實である。コンウェイの記す所によればクーリッジと喧嘩をしなかつたのはコンウェイとフレッシフィールドだけであろうとのこと。近年のアルパイン・ジャーナルに載つたウィンスロップ・ヤングのクーリッジ評も仲々面白い。卽ち

「生れつきの登山家であり又博學にして、私が貰つた手紙等を見ても非常に丁重で、先輩としてよき相談相手となり得る人ではあつたが、彼の記すペンの先に、性の惡い小人がいつも引つついていて不親切と云う汁を出すのであつた。だから、折角の彼の偉大な知識が書き表わされる時には、まずいことを書くようになつてしまつたのである。要するに、こせ〳〵していて、大きな所がなかつたのである。折角、書いてもこの小人のために彼のアルプスに對する豐かな場面が時には無味乾燥な砂漠のようになつてしまうし、或は峻烈な批評を下したりして、チョットしたつまらぬことでも何年後迄も喧嘩が續くようになつてしまつたのである。彼はアルプスの挿話めいた話を數多くの本にし、パンフレット等も出し、又、ガイド・ブックに迄之等の材料を一生懸命に著したのであるが、併しこの澤山のいゝ本があるにも拘らず後の時代の登山者に脚光を浴びせるような、聖なる山の火のタイマッに火を點ずるようなことは一度も無かつたのである」と云つて居り、要するにアルプスに關する知識は該博であるが、ペンの先の小人が惡いのだと、如何にも巧妙な、皮肉と云えば皮肉、一面先輩に對する敬意も同時に表わしたヤングらしい表現の仕方では無いか。

(註44) Francis F. Tuckett——一八六六年—一八六八年アルパイン・クラブ副會長。

タケットはアパルイン・クラブの創始者を除いては先ず最初に會員となつた人であつたが又當然アルパイン・クラ

ブの會長たる資格もあり、事實屢々その任に推されたのであるが固辭して受け無かつたのである。その足跡の廣大なことは、史上、クーリッジと共に餘りにも有名で、クーリッジよりは時代的に遙かに先輩であり、クーリッジも實はタケットの指導宣しきを得たからこそ後世にあれだけの登山家になつたのである。

それは、クーリッジ自身の記すタケットに對する敬意の言葉を左に拾つて見ても、さすがのクーリッヂもタケットにだけは頭が上ら無かつたようである。

「私が一番最初にタケットから手紙を貰つたのは一八六八年の三月一日のことで、彼が嚮きにアルパイン・ジャーナルの第三號二十七頁に發表したティロールのことについて尙お色々說明を附して、多くの參考になることを敎えてくれたのである。其後又、續いて三月五日附、十二月三日附と手紙を貰つたが之れが將來永く彼の死の直前迄彼と文通、親交を續けることの出來た最初のキッカケとなつたのである。一八六九年の十一月にはタケットが曩に、一八六二年に隈なく足跡を印したドーフィネの山のことについて色々と敎えを乞うたのに對して多くの手紙の交換をした。其等、手紙の中で、一八六九年十一月二十三日附の彼からの手紙に、彼は私に是非アルパイン・クラブに入會したらどうかと云うことが書いてあり、私は勿論喜んで彼の勸めを受けたのである。當時、私は未だ十九歲であつたが、六回アルプス旅行をやつていた。入會の申込に際し、ヒースコートが第一の推薦者であり、彼が第二の推薦者として連署してくれた。私は一八七〇年一月二十五日に入會許可されたと記憶しているが（私の名前は一八六九年十二月十五日の役員會には計らずも洩れたので）爾來私は常に冗談にタケットを『アルプスの父』と呼んでいるのである。彼は一八七〇年二月十二日附の手紙を以て私の入會を祝つてくれ、先の十二月二日附の手紙で、フレンチューの彼の家を訪問するようにと、詳細記した手紙を受取つた。二月八日より二十一日迄の間、三日間、彼の家に滯在して私は彼とドーフィネの山のことについて色々、永々と意見を交わしたのである」と云つている位であるからクーリッジにとつては大先輩であつたのである。

（註45） Douglas W. Freshfield——第十三代（一八九三年—一八九五年）アルパイン・クラブ會長。

歷代會長の中でも大物中の大物である。彼も亦、若年の頃は前述タケットの薰陶を受け、タケットとの交友のキッカケは「會報」第一五九號、一六〇號所載の拙文「或る登山家の邂逅」參照。尙お詳細は「山岳」第三十年一號所載松方三郎氏の「フレッシフイールドを想ふ」を參照されたい。

附言

本稿を草するにあたり、單行本としては左の文献を參照しました。幸い諸賢の御參考になればと考え此處に記して置きます。尚お左記以外のものとしては英國山岳會々誌「アルパイン・ジャーナル」に大部分負ふ所があることも併せて附言しておきます。又、其の貴重な數多い文献を常に欣然と貸與された松方三郎氏と本文を編するに当り、懇切丁寧な助言を藉し被下た望月達夫君に對しても、此處に感謝の意を表するものであります。

1. "Scrambles amongst the Alps" by Edward Whymper.
2. "This my Voyage" by T. Longstaff.
3. "On High Hills" by G. W. Young.
4. "Alpine Pilgrimage" by J. Kugy.
5. "Alpine Club Register" by A. L. Mumm.
6. "Climbs of Norman-Neruda" by N. Neruda.
7. "The Alps from End to End" by Martin Conway.
8. "Alpine Memories" by Martin Conway.
9. "Zermatt and the Matterhorn" by Edward Whymper.
10. "Swiss Travel and Swiss Guide Book" by W. A. B. Coolidge.
11. "Pioneers of the Alps" by C. D. Cunningham.
12. "A Pioneer in the High Alps" by F. F. Tuckett.
13. "Making of a Mountaineer" by G.I. Finch.
14. "The Alps in 1864" by A. W. Moore.
15. "Where there's a Will, there's a Way" by C. Hudson & E.S. Kennedy.
16. "Mountaineering" by C. T. Dent.
17. "アルプス登攀記" ウィンパー著・浦松佐美太郎譯。
18. "アルプスと人" 松方三郎著。
19. "先驅者" 大島亮吉著。

（一九五二・四・二〇脱稿）

筆者成瀬氏が本文の末尾にふれている清水谷皆香園時代を偲ぶ集りが、たまたま神谷恭、岩永信雄、成瀬岩雄、交野武一の四氏のきもいりで去る六月十四日（日）の午後四時から行われた。皆香園は戰後使用が出來なくなったため、小石川の六義園が會場にあてられたが、當日は三十餘名の參會者の中に、高野、武田、鳥山、中村、田部、近藤、冠等の古い會員諸氏の顔も見え、懷舊談に初夏の一夕を過したことを附記する。

（編　者）

冬の知床半島の山々

A・A・C・K
京都大學山岳部

一、まえがき

知床（しれとこ）が、わが登山界に始めて知られるようになつてから、もう隨分と長い年月が流れている。恐らく二十數年、あるいはもつと以前の話である。その頃はまだ、わが國の版圖内には千島列島が含まれており、勢い北邊の山としての興味も、千島の山々に集中された。それらは嚴冬期のチャチャヌプリ登頂[1]などの成果を生んだが、この半面、一見したところ北海道の一つの突起にすぎない知床半島の山々は、陽の目を見ることがなかつた。

戰後、四つの小さな島に限られた狹い地域だけが、わが國に殘されてみると、その中での數少ない未知の地帶の一つとして、知床の山々が、遲まきながら、いくつかの山岳團體の注目を浴びるようになつたのは、まず自然のなりゆきといえよう。そして、半島の尖端、知床岬から約五十粁の間、人煙を絶ち、「陸の孤島」という呼稱が、全くふさわしいといわれるこの半島の冬期の狀態は、私達の未知の登高への夢をゆすぶるに充分であつたばかりでなく、それ以上に、何か野性への限りない憧憬のようなものが感ぜられた。

知床半島の山々は、岬から數えて知床岳（一二五六

米)、硫黄山(一五六二米)、羅臼岳(一六六〇米)の三座があげられ、それらを連らねる山稜が、丁度、半島の脊稜を形成している。今少し細かく觀察すると、この山稜は知床岳の南方でルサ越えと呼ばれる部分で、高度約二百米まで降下しており、以北の知床岳、ポロモイ岳から岬までの連峰と、以南の硫黄山から無名の突起を越えて、羅臼岳に至る連峰との二群に明瞭に分たれる。さらに著明なことは、このルサを境として、北と南とでは氣象條件が全く異る事實である。

この半島の山々へ近接する路は、半島の根元から海岸線を徒歩で傳うか、小型漁船を傭船して目的地に近い上陸地點へあがるか、二つの手段しかない。山稜によつて縱斷される半島の二つの側面は、オホーツク海に面したものを北見側、根室海峽をへだてて千島と相對しているものを、根室側と呼び慣されている。陸路、海路いずれをとるにせよ根室側では羅臼(らうす)、北見側では斜里(しやり)が根據地となる。斜里は釧網線が通つているので問題はないが、羅臼は標津(しべつ)線の終點、根室標津から海岸沿いに約五十粁の行程があり、夏期は一日二往復のバスがあるが、一月に入ると積雪のために杜絶して、それ以後は雪融けまで十五頓の運搬船が、羅臼港から一往復することになつているが、標津には港がなく直接「はしけ」で海岸線へ上陸せねばならない。少し季節風が吹き募ると、缺航を餘儀なくされる。一月も下旬に近ずくと、オホーツク海を南下してくる流氷が、岬を廻つて根室海峽に浸入してくる頃には、全く交通が絶えてしまう。流氷によつて海路の近接路が利用できなくなることは、北見側でも同樣なことはいうまでもない。

戰前までは、恐らく根據地までの交通の便宜のためであろう、北大の開拓期の業績[2]をはじめ夏期の記錄の大部分が北見側からなされている。登られた頻度も半島の根元に近い羅臼岳が最も多く、北見側はウトロ港より、根室側は羅臼港より、いくつかの地元の人達の記錄がある。しかし硫黄山となると採掘をしていた當時に北見側から登られていたが、根室側からは記錄がなく最奥の知床岳となると、前記の北大の記錄が同じく北見側からのものであるほかは、全く見られない[3]。

これが冬期及び積雪期の記錄となると、皆無に近く、僅かに根室の山岳會の人達の羅臼岳の記錄と五月に北大の人達の羅臼岳、硫黄山の間の縱走[4]があるのみである。登山から少し離れるが、故入江保太氏が知床半島の海岸線を、斜里から岬を廻つて、羅臼まで徒歩で通過した珍らしい記錄がある。

これらの半島の狀況からみて、私達は記錄の少ない根室側に登路を求めて本計畫を立案し、まず昭和二十七年八月に三名の偵察隊を派遣して、知床岳と羅臼岳の根室側を踏査させた。これらの報告によると、知床半島の根室側の海岸線は、わが國でも有數の昆布の產地であり、それを採取するための番屋が立ち並んでおり、岬の近くにもそれが少數ながらあることや、戰後に引揚者などの入植計畫として、羅臼から半島の先の方へ約十粁の知圓別には、既に七十戸近くの定住者があり小學校もあつて、さらに先の合泊（あいどまり）にも一年前より五戸の越冬者があること、また岬から五粁南方のニカリウスには北越紙業の伐採が入つていて、今冬は何人かの人夫が越冬する計畫がある等の情報が明らかになつた。これで、海岸線だけであるにせよ知床半島にも次第に開發の手が伸びており、過剩人口に惱む戰後のわが國としては當然のことであるが、冬の知床といえども、いつまでも人煙を絕つたまゝではありえないという見透しも、認めないわけには行かない有樣であつた。

しかし、一歩海岸線から入ると、エゾマツ、トドマツの原始林は、寸豪も人爲の跡を止めず生い繁り、海岸線から登高を開始する山々の規模も豫想以上に大きく深いものがあつて、この點では少しも私達の期待を裏切るところはなかつた。

二、計畫と編成

九月に入つて、知床半島の現狀と偵察隊の報告を總合して、次の如き計畫が立案された。

『第一次計畫』　十二月十五日頃までに全員、根據地羅臼に集結。本隊はカモイウンベ川口に上陸して、そこをベースにして、同川とすぐ北のポロカモイウンベ川との間の大きな尾根を經て主稜に出、知床岳の東を通つてポロモイ豪地、あるいは可能ならばポロモイ岳の向うま

で極地法で前進する。一方、支隊（「岬パーティ」と呼稱）三名をなるべく知床岬の尖端に近いところに上陸させて、岬から知床岳までの夏期も未踏の山稜をラッシュ・ククティクスで南下させて本隊に合流させる。この間、約二週間をあてる。

『第二次計畫』　第一次計畫が終れば、全員カモイウンベのベースに集結。元旦を迎えるとともに隊を二分して、一隊は知圓別から硫黄山を、他の隊は羅臼溫泉から羅臼岳を、それ〳〵ラッシュで登頂して一月十日に再び羅臼に集結して全計畫を終了する。

十一月下旬、毎日新聞社の後援が決定し、二名の報道員を加えて次の編成が決定された。

隊　長　伊藤洋平（OB）　副隊長　藤村　良（OB）
總務係　廣瀬幸治（理四）
食糧係　齋藤淳生（醫二）　寺本巖（工三）　川瀬裕史（法二）
裝備係　山口　克（OB）　脇坂　誠（農三）　中川　潔（經四）　平井一正（工三）
醫療係　杉山喜一（OB）　中島道郎（醫二）
報道班　北尾正康（毎日・記事）　依田孝喜（毎日・寫眞）

三、行動記録

行動の概要を山日記から抜粋すると次の通りである。

十二月八日　先發隊三名（脇坂・中川・川瀬）京都發。
十二月十日　本隊九名、「日本海」號にて京都出發。
十二月十四日　全員羅臼着。西井誠誘氏の誠諦寺を、同氏の御好意により本據とする。
十二月十五日　各方面の挨拶と交渉。荷物の梱包を解き整理して再びパッキングするなど、終日忙がしく費して、夜に最後的作戰會議を行う。第一次計畫の隊員編成を次の通りに決定する。

第一隊　藤村・中島・脇坂
第二隊　山口・齋藤・平井
第三隊　廣瀬・中川・寺本
第五隊　伊藤・杉山・川瀬

（第一隊は岬パーティ。第二、第三、第五隊は本隊。第四隊は慣例により缺番。）

A　第一次計畫

十二月十六日　前夜半より季節風強く、出港は絶望視されていたが、未明の僅かな凪ぎをとらえて、「日の丸」という十噸の漁船で羅臼港を出發。前日、船長との交渉の際も、冬期は波が荒くて、カモイウンベのすぐ北にある觀音岩より先へ船を出すことはなく、まして岬上陸などは不可能というより狂氣の沙汰だとの話に、數日間は羅臼で待機かと諦めていたところとて、一同大喜び。しかし、船長は行けるところまで行くとしか約束出來ないというので、氣が氣でない。合泊で本隊を上陸させるに要する時間も惜しんで、一擧に岬に向つて突入するとの船長の決意に、ほつと安堵の胸をなで下ろす。觀音岩を廻ると、噂の通り海の狀態はがらりと一變。船は甚だしいピッチングをはじめた。船長はニカリウスに上陸を勸告したので一同それに同意。波はます〳〵荒らく、ピッチングに加えて船は木の葉の如くローリングし、程度の差こそあれ全員、船酔いでしばしグロッキーになる。第一隊三名と隊長がハシケで上陸、隊員と別れの握手を交し、再び船へ戻る。

船は船長の氣轉で、ニカリウス沖で半圓を描いて別れの氣笛を吹きならす。そして、再びローリングとピッチングをやりながら合泊まで引き返し、こゝで本隊九名、報道班二名と多量の荷を上陸させて船を返す。越冬している子出藤氏の番屋をベース・ハウスに決定。こゝにきわめて順調に一日の休息もなく根據地に到達することが出來て、計畫はいよ〳〵その第一歩を踏み出した。

第一隊行動記錄

十二月十六日　曇後晴

ニカリウスに上陸したのは九時五〇分。惡化する天候にせきたてられて、別れの言葉を交す暇もなく、船はあわただしく汽笛を鳴らして南方の鼻の向うに消えて行つた。それを見送ると、番屋に入つて晝食の後、いよ〳〵スキーを荷物の上につけて出發した。十日分の全食糧、裝備、それにスキーと合計十二貫。いま〳〵しい重さである。まず枝尾根の二五〇米位のコルを越え、「赤岩」の北の海岸へ出て岬へ向うつもりであつたが、重荷のた

め一向に渉らず、氣は焦つても時間を喰うばかり。そこで、主稜上に登つてテントを設營してから、ラッシュで岬を往復した方が勞力が少なくてすむと判斷して、ミズナラ、シラカンバの生えた枝尾根を眞直ぐに登る。荷物を途中で二回に分けて運んで、コンター三〇〇米位の臺地で最初のテントを張る。

十二月十七日　吹雪一時晴

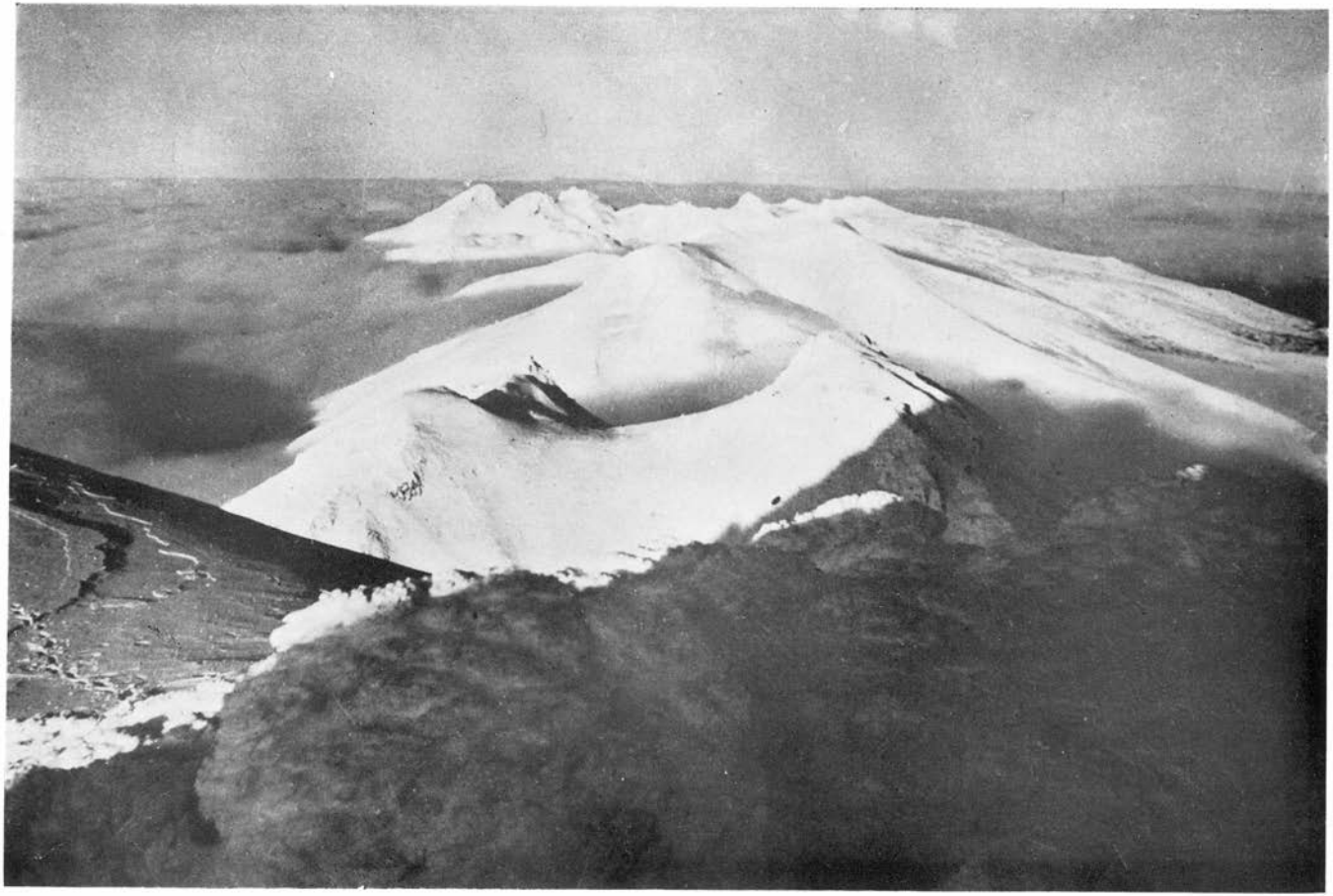
起きて外をみると吹雪いているため、出發を見合せている中によくなつてきたので九時頃出發。荷物は二回にわけて運ぶことにしたが、行程は依然として渉らず、そのうちに再び吹雪となる。ラッセルがひどい。主稜とのジャンクションのやゝ手前にテントを張る。二度目のボッカが終る頃には暗くなつた。

十二月十八日　吹雪

相變らず天氣は悪い。サルオガセのたくさんついたエゾマツ、トドマツの針葉樹林の間をぬけて主稜の上へ出ると、北見側から猛烈な風が吹きつける。これを避けて根室側をまいて行く。六五一米のピークの南側のコルにテントを張り、藤村は岬への偵察。他の二人はボッカ。岬までは一日のラッシュで行けそうだ。

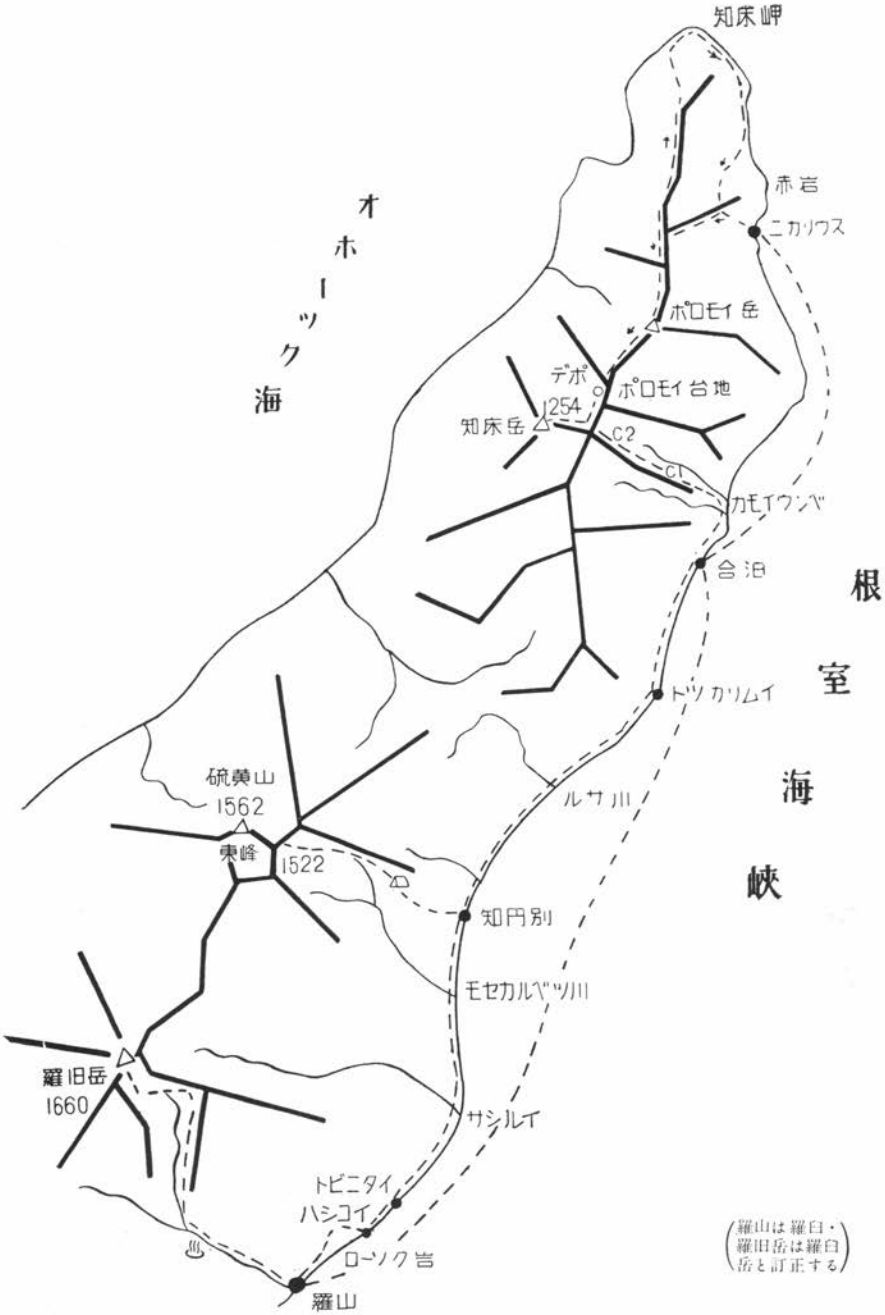
十二月十九日　吹雪一時晴

天氣が悪いが、意を決して岬に向う。一時晴れて見透しがきくと眼下に岬が迫り、オホーツク海から押寄せる波頭が、岩に白く碎けてすさまじい風景だ。ところが下るに從つて物すごいトドマツ、ミズナラの原始林となり、それにツルアヂサイが到るところ下つて、その中をくぐり抜けるに一苦勞で、行程は遲々として渉らない。行けども行けども岬の草原は現れて來ず、見透しがきかない上に地圖はいさゝか怪しく、その上はれていた空も再び吹雪となる。あまりブッシュがひどいので、一旦西海岸へ下つて濱と山との境界を進む。やがて原始林が突如として開けて、あたりは一面の笹の生い茂つた草原の廣い臺地となつた。オホーツク海の荒海、氷をかぶつた岩に碎けて水しぶきをあげる。强風にさらされながら、この笹原を一時間ほど進むと遂に午後二時、知床岬に到達した。沖には有名な風船岩がしぶきを浴びて立つている。誰も見たことのない冬の岬の光景が、われ〳〵の目前に展開していた。岬から根室側へ海岸線沿いに廻



羅臼岳頂上より硫黄山を望む

寺本　巌


知床岬
赤岩
ニカリウス
オホーツク海
ポロモイ岳
デポ
ポロモイ台地
1254
知床岳
C2
C1
カモイウンベ
合泊
根室海峡
トツカリムイ
硫黄山
1562
東峰
1522
ルサ川
知円別
モセカルベツ川
羅旧岳
1660
サシルイ
トビニタイ
ハシコイ
ローソク岩
羅山
(羅山は羅臼・羅旧岳は羅臼岳と訂正する)

知床半島概念図

り込むこと約一粁、完全な番屋を見つけてもぐり、用意してきたAレーションをたべる。その夜はビバーク。波の音、風の音のあい間に、狐がしきりに鳴く。

十二月廿日　吹雪

相も變らぬ惡天候の中を、海岸段丘を登り熊笹やヤマヨモギをわけて南進。途中二〜三米ばかりの高さにまで伸びたオオイタドリのすばらしい群落があり、その中を枯れた莖をぽき〳〵折りながら進む。赤岩の北側へついたのが九時半頃。ここから十六日に登つた尾根に取付く。美くしいイチヰの木肌が眼にしみる。あれほど重荷に喘いだ尾根も、空身ではこともなく登り切つて三時頃にテントへ歸り着いた。

十二月廿一日　晴

起き出てみると、珍らしや快晴無風、海をへだてた向う側、ソ連領千島のチャチャヌプリの中央尖頂（セントラル・コーン）にモルゲンロートが輝いて美しい。十數年前、嚴冬のあの山頂に足跡を印した先輩があつたわけだ。しかし、戰後千島が鐵のカーテンの向うに隔てられてから、この名山の冬の粧いをこらした容姿を、目のあたり見たのはこれが初めてであろう。テントがせまくその上に荷物が多いので出發が手間どる。今日から荷物を一度で運ぶことにしたが、所々にある岳樺のブッシュが豫想外にひどく、通過が困難なのでやむを得ず途中から再び二回にわける。天氣がよいので（全期間を通じて唯一の快晴日）ぐつと行程が伸びる。七六〇米のピークを廻つて、その南方のコルに達してテントを張る。

十二月廿二日　吹雪

明ければ果して物凄い吹雪。岬の往復で豫定が大分遲れているので、吹雪をついて出發したが、一時間ばかりして名狀し難い猛吹雪となり、やむなく再び荷物を二分した。それから間もなく完全に前進不能の天候となり、直ちにテントを張つた。すぐ下の荷物をデポしたところまで引返すことすら出來ずに泊る。寢袋が一つしかないので三人がそれに足を突込んで風の弱まるのを待つたが、夜に入つてもます〳〵激しくなるばかり。二時間おきにスープを沸かして歌をうたい、體をぶつつけ合つて徹夜する。骨まで滲みる言語に絶した寒氣。それでもたまらぬほど睡い。やがて歌も話も種が盡きて、なか〳〵

時間が經つてくれない。

十二月廿三日　吹雪

今日もまた猛吹雪。またかといつた調子でもう別に驚きもしない。このままでは仕方がないので、意を決して藤村・脇坂は荷物をとりに行く。デポを見つけること、再びテントへ戻ること、ともに自信のもてないような吹雪であつたが、うまく荷をとつてくることが出來た。

十二月廿四日　吹雪

連日の吹雪で行動豫定が大變遲れており、そろ〳〵食料、燃料の不足が見えてきた。一昨日の思わぬ失敗にこりて、荷物も大分少なくなつたので一度に運ぶことにしたが、度々オホーツク海から吹きつける烈風に吹き倒される。それに岳樺と風で雪を吹き飛ばされたハイマツに惱まされて、一向に行進は捗らない。ポロモイ岳の手前のコルへついて、風下側へ少し下りてテントを張る。本隊ももし順調にテントが伸びていたら、このあたりに最前線の赤い標旗があらわれる筈だが、同じく連日のすさまじい惡天候に前進をはばまれているのであろう、それらしいものは見當らない。

十二月廿五日　晴、ガス

風がやんで靜かな朝だ。だがガスが深い。ポロモイ岳は根室側の急斜面をトラバース氣味に登つたが、そこから問題のポロモイ臺地へは尾根がいくつも放射狀に出ているので下り口がわからない。磁石だけを頼りにゆつくり進む。時々うつすらとガスが切れると、ここぞとばかりにピッチをあげて前進。再びガスが深まるとまた速度を落す。こうして漸く臺地の入口らしいところへきたとき、突然えぐり取られたようにガスの中から青空が現われ、周圍の雪が眩むばかりにきら〳〵と輝き始めた。ポロモイ臺地は中央が凹んで、地圖にはない徑二百米位の池となつていて、その厚い氷を踏んで眞中を渡り、この天の惠みともいうべきタイムリ！な晴れ間のために、最も問題視されていた臺地のトラバースを難なく終えて知床岳へ續く尾根にかゝつた。本隊の姿でも見えぬかとコールするも反應がない。やせ尾根を北見側へ捲いてエビノシッポだらけの斜面を横斷して行く。日が沈みかけてこの横斷も終るころ、稜線上に點々と並ぶ本隊のたてた赤旗をみつけた。遂にやつたのだ。思わずコールをかけ

ヨーデルを歌う。少し進むと眞新らしいシュブールと旗のデポを見つけ、明日はいよ〳〵本隊と合流だと、すつかり氣をよくしてテントを張る。

十二月廿六日　吹雪

今日はどんなに荒れたつて本隊にあえるのだからと、たかをくゝつて出發してみたが、十分ほど進むと、烈風で吹き飛ばされたものか赤旗の列が切れ、だだつ廣い視界の全くきかない吹雪の中の尾根の上で、進むこともならず、その場にテントを張る。シュラフは石の如く凍り、もぐり込む時にはバリ〳〵と音をたてる。それでも入つてみると結構あたたかいから不思議だ。その内面にも呼息の水分が凝結して人工霜の層が出來ている。晝はぬいて夜は乾パン三枚、話すこともなく默々としてテントを背中で押えている。風は吹き募るばかりだ。

十二月廿七日　吹雪

相變らずの猛吹雪。豫定の日數はとつくにすぎて、食料、燃料ともに殘り少なくなつてきた。本隊と行き違いになるのを恐れて、昨日の赤旗のデポのところまでテントを戻す。今日は乾パン一日三枚のみ。明日からは一日二枚で正月まで食いつなげば、如何に知床のこの惡天候とはいえ、晴れる日もあつて本隊に會えるだろう。

十二月廿八日　雪

風はないが、雪を交えた濃いガスだ。下手に動くより、果報は寢て待てとばかり乾パン一枚食つてまた横になる。そのうちに一人がコールを聞いたという。空耳だ、いや確かに聞えたといいあううちに、次に明瞭なコールが聞かれた。本隊だ。遂に第二隊の連中がテントへ飛び込んできた。感激の握手をしながら三人とも声をそろえて開口一番「乾パンをくれ」。

二隊のガイドでC_2を通過、C_1の上方の露岩をまくあたりですつかり暮れてしまつた。急斜面では相當へばつてバタ〳〵轉倒する。途中まで出迎えた隊長と固い握手を交して、久し振りで針葉樹林帶の中のC_1に泊る。夜遲くまで話がつきない。

十二月廿九日　雪

ドカ雪をラッセルしながら隊長のリードで合泊のベース・ハウスまで下る。スキーが滑らず前日にもまして疲勞感が甚だしく、全行程のラッセルをしてもらいながら

も、尙かつ六時間もかゝつてやつと合泊へ着いた。

本隊行動記錄

十二月十六日　晴後曇

合泊沖合に引返してきて、荷上げ上陸、全部を完了したのは丁度お晝前。晝食後直ちに三名が偵察に出る。カモイウンベの豫定の尾根の取付きまで、海岸傳いにスキーをかついで約二十分。この附近の海岸はすぐ斷崖になつていて、あまり良い登り口がない。ブッシュの茂り方も豫想ほどでなく、スキーも使用可能との見透しを得てコンター二百五十米位まで登つて歸る。他の隊員は半日を荷物の整理に費した。

十二月十七日　雪後晴

いやに暖かく濕つぽい雪の降る中を全員でC_1設營に向う。ゆるやかな尾根を三時間ほど登ると次第に傾斜が加わり、大きく電光を切つて登つて四二〇米のピークの上に出て、一旦少し下りさらに上つて高度四五〇米の所にC_1を建設。ここは風もあたらず、また下にトドマツの葉を充分敷いたために非常に快適であつた。第三隊が殘り他はベースへ下る。

十二月十八日　晴後吹雪

C_1から眼下に根室海峽を見下ろし、その向うには國後島が指呼の間に望まれる。朝起きるとすばらしい快晴。國後の彼方から大きな太陽が登る。第三隊はC_2の設營のために出發したが、九時頃から崩れ出した。C_1のすぐ上に露岩があり、その右をまくとそれが急傾斜のブッシュで、その上に吹き溜りでラッセルがひどくなか〳〵のアルバイトだ。本格的な吹雪になつてきたので八百米位まで登つてデポを作つて下る。第二、第五隊はB・H—C_1間の荷上げ。第二隊はC_1に泊り、第五隊は再びB・Hへ。（第二隊平井、隊長と入れ代り下る）

十二月十九日　雪

第五隊はB・H—C_1間の荷上げに三度び往復、第二、第三隊はC_1で沈澱。

十二月廿日　吹雪

朝少し天氣がよさそうに見えたので、第二、第三隊はC_2建設に出發したが、露岩のあたりから吹雪となる。全く天候が三時間位の間に急變する。冬期の知床半島北部

の特異的な天候で、天氣圖からも全く判斷が出來ない。吹雪の中を登つて主稜のすぐ下と思われる一〇〇〇米のあたりにC_2を作る。第三隊のみ殘り、第二隊は下る。第五隊はB・Hで沈澱休養。

十二月廿一日　晴

始めての快晴に第三隊はC_3の位置にデポを作るべく勇躍出發。主稜上は恐ろしくだゝつ廣くて、それがハイマツのために波狀の巨大なスカブラで覆われ、一寸みたところ氷河のようだ。この曠漠たる尾根の廣さは、吹雪き出したら危險この上もない。一一八二米のピークを捲いてヤセ尾根の上を通り、ポロモイ臺地にかゝる所にデポを作る。（赤旗を五本横に並べて立てたが、風でとんだか雪で埋つたか、食糧、燃料とも相當にあつたが第一隊の發見するところとはならなかつた。）第二隊は、C_1よりC_2へ荷上げ、隊長C_2に入り他は下る。第五隊はC_1へ入る。この日は稜線では比較的風も弱く、チャチャヌブリや硫黄山が望まれた唯一の日であつた。

十二月廿二日、廿三日、廿四日　吹雪

テントを出れば目もあけられぬ猛吹雪に動きがとれず、特にC_2は風當りがひどく、カマボコ天幕が今にも引き裂かれそうになる。氣溫零下三〇度、テント内でも零下十度まで下り、C_2の内張りの表面には中のあらゆる水蒸氣が凝結して人工霜の數粍にも及ぶ層が出來て、それが毎日成長して行く。

十二月廿五日　ガス時々晴

三日目にさしもの吹雪もやつと晴れた様子だが、C_2はすつかり雪に埋つて入口を中から掘り出すのに一苦勞。こんなことで手間取つている中にC_1から第二隊がやつてきた。時間が遲くなつてC_3の設營が出來ないので第三隊及び山口の四人で標識の强化に出かける。廿一日に立てた旗の中で風に飛ばされたのを補强しながらヤセ尾根の途中まで行き（これを通過してポロモイ臺地を見下ろす地點まで進んでいたら、丁度岬パーティがトラバースしているところが見えたものと思われる）、またその手前のコルに旗をデポして歸る（これを數時間後に岬パーティが發見）。

第五隊杉山、川瀨はC_1から知床岳へ登頂。

十二月廿六日、廿七日　吹雪

毎日四時に起きて用意をし、明るくなる頃テントを出てみては吹雪いているので駄目だとまたひつ込む。これを反復している。嫌になるほど毎日天氣が悪い。次第に第一隊のことが氣遣われる。羅臼村での晴天日數の統計では、最も悪い年で十二月から一月にかけては三日に一度は晴天となつている。それを鵜呑みにしていたのは輕率。ルシャを境にして天候が全く異り、知床北部にこのような特有の悪い氣象條件があることに氣ずかなかつた。氣象臺でも逆に是非データを教えてほしいといつている位だから、この誤算を責めるわけにはゆかない。

十二月廿八日　雪

やはり悪い。が、風がなくて何となく暖かい。第二隊と寺本の四人は標旗をポロモイ臺地の向うまで伸すべく登つて、コルで遂に第一隊と握手した。平井・寺本がスキーを飛ばして、C_1の本部へ報告にきて、捷報はたちまち全員に傳わり、雪の中で肩を組んで大喜びをすると同時に、いさゝか氣抜けがしたようだ。

すつかり暮れてから、靜かに降りしきるボタン雪の中を、岬パーティはC_2に到着した。

十二月廿九日、卅日　吹雪

杉山・山口・廣瀬・齋藤がC_2に殘りC_3のデポを撤收すべく粘つたが、くる日もくる日も吹雪ばかり。主稜上の廣大な尾根では吹雪くと赤旗の列さえも頼りにならない。毎朝テントを出て恨めしそうに空を眺めては、またひつ込む。卅日は吹雪く中を主稜まで出てみたがあきらめて引返す。

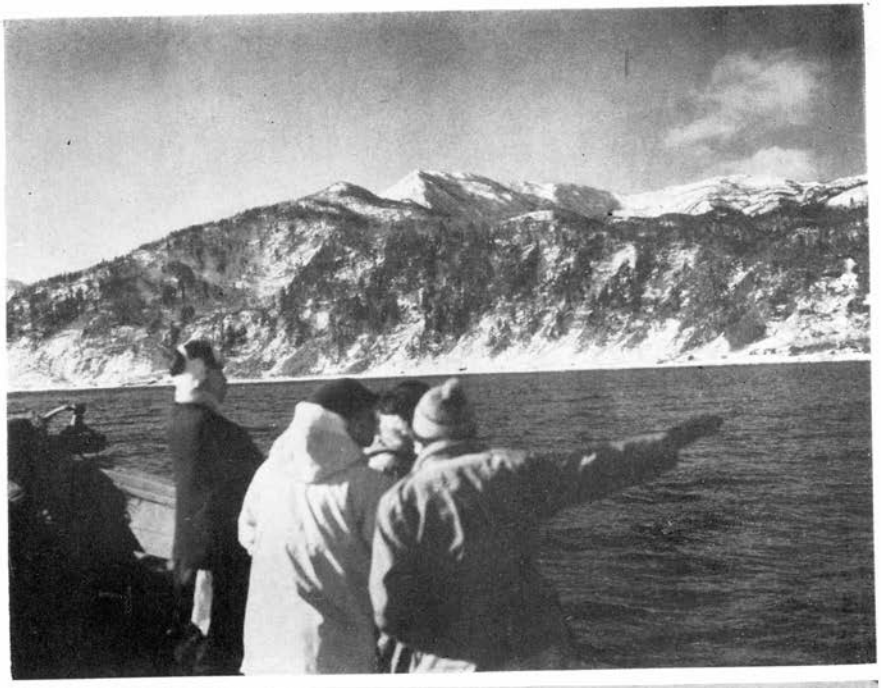
十二月卅一日　晴後吹雪

このまゝでは第二次計畫が遂行できなくなるので、隊長の命令で今日中に撤收することになり、藤村、中島がB・Hより連路と支援に上つてきて、デポは心殘りではあるが放棄する。C_1撤收パーティは恐ろしく重い荷物を何とかかつぎ下ろして、暗くなつてからベースへ歸りついたが、C_2の方はカマボコ天幕は内側に一糎の厚さに氷がはりついて、どうしても落ちず、容積重量とも三倍以上になつて始末に終えない。仕方なく一部の荷をC_1の跡へ殘してベースへ下る。久しぶりで全員ベースに會し、談笑しつゝ一九五二年を送る。

一月一日

冬の知床半島の山々（右から羅臼岳、無名峰、硫黄山、左端知床岳）

寺本　巌



(上) 知床半島カモイウンベ沖にて

(下) 知床岳第二キャンプ

依田孝喜

藤村、山口、中島、廣瀬、川瀬の五人でC_1跡まで殘りの荷を下げに行く。他は荷物の整理。午後三時まえ、荷をもつてベースに戻り、ここに第一次計畫は終了した。

B 第二次計畫

まず第二次の行動に移る前提として、陸の離れ島と化した合泊から脱出せねばならない。卅日、脇坂が知圓別に行つて二日に船を迎えに來るよう交渉したが、海が荒れて船がこない。隊の編成は次の通りに決定された。

羅臼隊　伊藤、杉山、廣瀬、脇坂、中島、平井、寺本

川瀬

硫黄隊　藤村、山口、齋藤

一月二日午後に船がこないことが明らかになり、歸京の期日も切迫して來たので、まず硫黄隊及びそのサポートとして脇坂、平井、川瀬の計六人が、海岸傳いに知圓別へ向い、三日から登攀を開始。平井、川瀬は再び合泊へ戻り、脇坂のみ單身で羅臼に至つて改めて船の交渉をし、四日の朝、吹雪にかすむ合泊の沖合に漸く五噸餘の小船が現れた。これが、オープンの船で、羅臼までの三時間、吹雪にさらされて坐つていることは全く洒落どころの話ではなかつた。

羅臼隊の行動記録

一月四日

十一時半すぎに羅臼港に歸投。西井さんのお宅で晝食やらパッキングやらをすませて三時出發。羅臼溫泉へ向う。なるべく早くついて登路の偵察をと思つたが、ついた時は眞暗だつた。逢澤組の菊池氏方に泊めてもらう。伊藤は内地への通信連絡のため平井と殘り、午後七時過ぎに二人で西井氏方を出發。九時前に合流した。

一月五日　快晴

登路の偵察が充分でなかつたので、六時頃僅かに明るくなつた頃に出發する。登攀隊は廣瀬、中川、平井、寺本の四人に杉山、中島、脇坂の三名がサポート隊として專ら先行してラッセルを行つた。

夏の偵察から判斷して、溫泉の裏の小澤から登つて右岸の尾根に取付く。約一時間で尾根の上に出た頃、ようやく明るくなつた。出發時の小雪も次第におさまつて天

氣がよくなるらしい。尾根を登り續け八〇〇米位でアイゼンにかえる。十時頃、サポート隊は引返し、十一時に九六〇米ピークに立つ。快晴微風のすばらしい天候となる。知床岳の惡い體驗からみれば嘘のような天氣だ。ここから約百米下つて廣い盆地を横ぎり、最後のドームを直登する。ラッセルは案外ひどく、ところ〴〵急斜面では腰まで入る。頂上附近はアイゼンが快調にきゝ、最後の岩峰は北側から小さなルンゼを登り、エビノシッポで覆われた頂上に立つたのは三時十五分。知床半島の最高點。既に日は西に傾いて一面の雲海の上に、バラ色に染つたチャチャヌプリが頭を出している。

早々にしてトレースをふんでかけ下りたが、盆地ですつかり日没となり、ヘッドランプの光でシュプールをつたう。稜線の下で隊長の出迎えをうけて、溫泉へ歸りついたのは九時。

一月六日　吹雪

降りしきる雪の中を、すべてを撤收して午前中に羅臼へ歸る。猛吹雪の警報をきく。

硫黄隊の行動記錄

一月二日　雪

船が來ないので午後からサポートの三人とともに見送られて合泊をあとにする。北國の日はあまりに短かく、あまり時間もないので、どん〳〵飛ばしたが、トッカリムイの岩場を越えるころにはとつぷりと暮れてしまつた。小雪のちらつく中を、波打ち際に一本のシュプールを刻んで無言の行進が續き、午後十時頃やつと知圓別についた。小學校の校長先生宅に泊めてもらう。

一月三日　雪

午前は荷物の整理、準備にすぎて、午後山口、齋藤は偵察に出かけ高度三百米位まで行つて歸る。

一月四日　小雪

七時出發。昨日のシュプールを追つて行程は捗り、引返し點に十時半につく。ここから上はダケカンバの生えただだつ廣い尾根で、地形の見當がつかず二十米間隔に赤布をつけながら行く。小雪まじりの强風に、いよ〳〵視界惡く十二時半頃、少し早いがテントを張つた。そこ

からさらに少し登つてみたが、上方は樹木もなく一面の茫漠たる地形、コンダー六百五十米位で引返す。

一月五日　晴

唯一の登頂の機會。四時から用意したが、小雪がふり視界きかず待機、八時頃少し青空がみえてきたので出發。恐ろしく寒い風が、眞正面から吹き下ろす。九〇〇米—一〇〇〇米あたりは尾根が少しやせて、モセカルベツ川へ切れている。少し休んでいると急に天氣が好轉し始め、硫黄の巨體がどつしりと目前にのし上つている。モセカルベツ側をトラバース氣味にぐん〳〵登り十二時主稜上に立つ。一五二二米（東峰）の地點である。こゝから硫黄の本峯までは一寸、劍の八峯のような感じのナイフリッヂが續いてすばらしい。これを傳うには、恐らくもう一日の行動が要求されようし、とても時間がない。あきらめて引返すことにした。何かほぐれぬ不滿とやるだけの事はしたということで慰さめながらクラストした斜面をガリ〳〵滑りながらテントに歸つた。

一月六日　雪

撤收に時間がかかり九時半出發。雪の降る中をボーゲンでゆつくり下る。約二時間で知圓別着。小學校で晝食を御馳走になつてから羅臼へ向う。再び雪の海岸の行進。サシルイあたりから猛烈な吹雪となり日も暮れてしまつたのでハシコイの民家に泊めてもらう。

一月七日　吹雪

ローソク岩のラッセルはすごく、途中まで迎えにきてくれた連中とともに十一時半頃、羅臼に歸りついた。

× × × ×

どうやら無事計畫を終え、全員再び羅臼の西井氏方に集結したものの、バスは既に春まで不通となり、海路に頼るしかなくなつていた。その上にオホーツク海の流氷は、もう岬を廻つて根室海峽に侵入してきているとの知らせに、西井さんから「越年婿の口を十二ほど捜すことにするか」と冗談をいわれて心細いこと限りなし。八日は晴れたが風が強くて船が出ず、その日の午後は羅臼村村長村田氏の招宴で樂しい一時を過させて頂く。九日朝、幸運にも根室標津行の船が出るとの知らせを得て波止場に急ぐ。西井さんはわざ〳〵見送りに防波堤の先に立つて帽子をいつまでも振つておられた。期せずして

「螢の光」の合唱が起り、羅臼に別れをつげた。

四、食糧と裝備に關する二、三の知見

全く隔絶した場所で四十日間の行動を豫定した計畫であつたので、從來の知識の集積に努力したことは勿論だが、二、三の點について新らしい試みと、その良否の判斷の資料が得られたので、ここに記すことにしたい。

(A) 食糧について

完全なレーション・システム (Ration-System) を目標に、まず米軍のBレーションからヒントを得て、すべてを一種類づつ三人單位にわけてパッキングし、主食は米を全廢して乾パンとアルファ澱粉を用いた。アルファ澱粉（尾西食品製）は廉價である上に、調理がただ水でこねるだけでよいという簡便さが身上で、味も腹もちもよく非常に優秀である。

また乾パンは鹽味のものとレイズン入り甘味のものとを作り、前者は朝夕、後者は晝食用とした。

野菜は凡て乾燥加工して不要の水分を除き、それによつて重量は原料の十三分の一に減少させることができた。それを二十匁單位にキャラメル箱の大きさのブロックにプレスし包裝した。

その他のすべての副食(アルファ澱粉の場合はキナコ、デンプ、海苔の佃煮。乾パンの場合はカレーの素、ハヤシの素、シチューの素、かれいのソティ等を交替で使用)も、すべて三人單位に包裝した。これは使用に際して便利なことはいうまでもないが、現在量を知るためにも、また擔荷數量の決定に關しても非常に便利であつた。因みに綠茶も三人分づつガーゼの袋に入れた。

ペミカンを數種試作して一應好結果を得たが使用量が少なかつたので、結論を急ぐことは差控えたい。また米軍Cレーションをまねて一人二食分一箱の非常食を作りこの中には食慾をそそり、かつカロリーの高い食品(バター・チーズ・チョコレート等)を入れて厚いボール箱に收めパラフィン防濕を施した。これは行動中、如何なるときにも必ずルックに入れて歩かせることにした。

近代の野戰食・登山食の傾向は、不要な水分の除去による輕量化が問題の焦點となつている。殊に人間の力で擔ぎ上げねばならない登山食、中でも高所食糧におい

て、それが最も重要であることは論を俟たない。今回の完全なレーション・システムの採用も、この觀點を離れるものではなかつた。そして、一應の成功を收めたものと思われた。水分の除去によつてヴィタミンの脱落が案ぜられたが、これは毎日總合ビタミン劑パンビタン一錠ないし二錠を服用させた。この結果、從來の内地の長期登山でも、しば〳〵見られた明らかなヴィタミン不足の症狀は、全く觀察されなかつた。

(B) 裝備について

東洋レーヨン、丸山工業所、一澤帆布加工所などの好意と協力を得て、アミランに耐寒性ビニール防水をした三人用ウィンパー・テントを試作した。これは防風、防水ともに完全で、豫備實驗の結果は少なくとも零下四十度位までは強さを減ずることなく、從來のテント地より強くて輕いことが認められた。今回の岬パーティに思い切つて携行させた。

そのために設計もスイス隊の高所テントからヒントを得て、外側吊下式にして籐の支柱を採用した。これは吹雪の中で五分間で張ることができ、また一人で張ることも可能である。さらにこのテントの最大の利點は、雪や氷がテントの外側、内側に附着しても、手で拂い落せばすぐとれることで、縱走中に少しも增量することがなかつた。これはC_2のカマボコテントが撤收のときには三倍餘りも重くなつていたことに比べると、まず驚異に値した。また完全防風性も、この稜線の風で、一重の内幕なしのテントで二週間も耐えかつ行動できたことは、最近とくに問題視されている高々所の强風に耐えるテントの製作に一つの據點を與えるのではなかろうか。ただ、ビニール防水層の厚さは再檢討の餘地があり、試作のテントは、重量輕減の點では從來のテントとあまり變らなかつた。

また同じくアミランの新製品のザイルを持つて行つたが、一部の國產品にとかくの風評があるような、硬化などの障害は認められなかつた。しかし使用の回數が少ないので結論は與えられない。

その他、燃料のガソリンは食糧の場合と同樣に三人一人分づつ（四〇〇CC）罐詰めにしたが、これは非常に好都合であつた。またマットはペンキ塗りのベニアを使

用してみたが、評判通り廉價な割に使いものになるとの判定になつた。

五、むすび

知床半島の冬は、私達が豫想したほど無人の境ではなかつた。羅臼の村にしても、そこには立派な近代化された社會があつた。この波は僅かながらも半島の原始林の中へ滲透し始めているように思われた。

山々のスケールは豫想以上に大きく、極端に惡い半島北部の天候と寒氣は、私達に決して容易ではない闘爭を強いるものがあつた。山々の冷酷さに比べて、羅臼をはじめ地元の人々の暖かい心遣いは、私達に樂しい未知の經驗を加えてくれた。この報告を結ぶにあたつて、本計畫にあらゆる形で支援を與えられた方々に對して深甚なる謝意を表する次第である。

（編　註）

1　昭和十年十二月。渡邊漸「冬のチャチャヌプリ」（山岳第三十一年第一號）參照。

2　知床半島の山々の初期の登山は、一九二六年（大正十五年）七月の羅臼岳、硫黄山、一九二八年（昭和三年）七月の羅臼岳、硫黄山、同年七月の知床岳、硫黄山、羅臼岳等が算えられる。原忠平「知床半島の山」（北大山岳部々報二號）參照。

3　知床岳の初登攀は北大の記錄に先立つこと一年、即ち昭和二年八月成蹊高校山岳部員（成瀨岩雄他五名）によつて計畫實行された。「知床岳初登山と知床半島の一周」（昭和二年發行、成蹊高校部報所載、田山正男記）はこの方面の最初の纒つた記錄である。（成瀨岩雄記）

4　昭和十年五月。豊田春滿「知床半島の春」（北大山岳部々報第五號）及同誌記錄欄九六～八頁參照。又昭和十二年五月、羅臼岳の記錄が北大部報第六號記錄欄（八五～六頁）にある。

日本山岳會編

山　日　記　一九五四年版

十月中刊行豫定

木曾御嶽の夏

―赤川谷を攀じ傳上川を降る―

新井　清

知川志賀先生の名づくる處、「日本ライン」の邊り、犬山城天守閣に登れば、濃尾の大觀が眼下に展開する。樓上の欄干に身を寄せて、南に小牧山古戰場を指呼し懷古の念を持ちつゝ北へ廻れば、木曾川の碧潭を脚下に俯瞰し、右岸遙かに美濃の群山を拔いて從容と聳ゆる木曾御嶽の勇姿に、誰しも讃嘆の聲を放つ。殊に初夏、綠美しい山波の重なる上に、逆光に映え白雪を輝やかす聖山の印象は生涯忘れ難いものだ。筆者は將に二十年前、右の憶い出を持つ者である。雪の御嶽に魅せられて、冬山に憧れて登り、春夏秋冬に亙つて幾度か頂上に足跡を殘した。御嶽をめぐる山旅を重ねるにつれて、私の最も親しい山になつた。――「春によし秋によしとて登りたる懷しき山木曾の御嶽」清山人――「人臭い山ばかり登つとる」と評した高橋健治博士に答えて、「御嶽さんが好きだから登るのです」といつたことがある。

今にして思えば、大家の言を引いて山岳會の入會が延期されたのである。御嶽さんが祟つたのはもう一度あるが、これはここには省略する。コニーデ式火山の御嶽は信仰の山として開かれて以來、夏日は白衣の講徒で賑わい登山道は喧噪である。だが道を溪谷に求める時、御嶽より源を發する卍の谷々は幽邃で、森林と飛瀑の美觀が谷を涉る者に幸福を味わせてくれるのだ。飛驒の濁河川と木曾は王瀧川がそれを代表する。後者の支流濁川畔には木曾唯一の溫泉がある。旅舍は二階建母屋一軒で、近在の人達が農閑期に自炊入浴に來る鄙びた溫泉だ。森林鐵道の下黑澤分岐點から濁川伐材場まで約四粁である。二十六年の晩秋、木曾駒で病み上松からこゝへ來て身を養つた。夕には薄粥を啜つて爐邊で意氣地なく横になつていた。營林署の小屋から入浴にきた人達が、七八人圍爐裏を圍んで酒宴を始め、健啖な人達を羨望しながら眺めていると、酒が廻るにつれ「赤川の幕岩は屛風の樣だ」「硫氣孔は面白い」とか語つている。御嶽赤川谷のことらしい、彼等は登つたのだろうか。地獄谷は戰爭中に中京山岳會によつて踏査され(編註)、下廊下附近まで遡行されたまゝである。白川谷は王瀧營林署の石黑署長によつて勇敢にも登攀されたといわれる。赤川谷登攀は小生にとつて久しい懸案である。會話を聽いてムックリ起上り「登られたか」と問うと「降つた」との答えでホッとしたものゝ在茸日を過しては「行行向不惑、淹留遂無成」である。營林署の人達も

登攀の希望があるので、こゝに腹臓なくその計畫を語り、二十七年夏に同行することを濁川伐材場の主任小椋利一氏と確約した。三浦から鞍掛峠を越えて歸洛し、それから八ケ月、冬が過ぎ、春も逝く頃から度々小椋氏と便りを交わし用意萬端を備えた。七月初旬梅雨も收まらぬのに學生連はルームから天幕、寢袋、ラヂウス、ザイル、三つ道具類を引張り出して涸澤へ向つた。御嶽行の前にトレーニングするのだ。自分は落付かぬ七月を送り、三十一日に磁石に引かれる鐵片のように京都を發つた。所要地圖（地調五萬）木曾福島、上松、御嶽山、加子母。

参加者、中村昌也、山田和馬（京工藝大現役）、板谷勝仁、南昌宏（濟美山岳會）、丸山敏春（王瀧營林署）

（編註）高橋正「王瀧川（裏御岳）」（山岳三六の二）
中京山岳會「御岳地獄谷踏査報告」（日本山岳會々報一〇一・一〇二）

赤川谷ベース・キャンプまで

七月三十一日。十七時五十五分京都發上り列車に乘る。汽車が動いて旅心は定まつた。名古屋發二十二時四十分の準急に乘換えて、翌八月一日午前二時上松驛に着き、中村、山田兩君と落合う。王瀧營林署連絡所を訪ね休息する。午前八時森林鐵道に乘込み、三浦ダム見學に行く小學生の團體と賑やかに出發する。ピーポッポの汽笛が鳴ると、喜こんで玩具箱がひつくり返つたような騒ぎが起こる。木曾川右岸に沿つて間もなく棧だ。

「木曾で棧、太田で渡し、碓氷峠がなくばよい」の古い俚謡で知られている棧も今は昔話となつている。王瀧川に沿つてから常盤橋に來て、目が覺めるような碧色の淵が現われ始める。輕便鐵道は王瀧川から離れず、川と屈曲をともにするので飽くことを知らぬ。京都から同行した南、板谷兩君は始めてなので物珍らしく土地の人を見つけて質問攻めである。六段淵、鞍馬橋の名所を過ぎて王瀧營林署の田嶋驛に着くと事業課長渡邊千洋氏が迎えておられ恐縮する。前石黒署長の白川谷登攀のことなど話題にのぼる。田嶋を出た林鐵は鰔川合流點から王瀧川左岸に移る。鰔川に沿う山道が見える。一度辿りたい美濃付知への道だ。下黒澤の鐵橋の手前で下車する。上等の車輛から大荷物を下す我等を、不思議そうに見ていた子供達は車が動き出すと、ハンカチーフを振つている。さらに濁川支線のガソリンカーに乘る。急カーブの登りでトロッコに獅嚙付く。正午近く濁川到着。谷間に伐材所の平屋が並び、その向うの林間に懐しい溫泉の旅舍が覗く。伐材所で小椋氏と會食して丸山敏春君が參加することに決つた。濁川の主、大旦那は里に降つていて會えないのが殘念だ。溫泉を訪ねて主人に昨年爐邊で撮つた寫眞を渡すと喜こんだ。吃の息子は王瀧へ歸つている由、跛の親爺は玄關先まで送つて出て「戰爭で不自由な躰に成らなかつたら俺も一緒に行くに」という。十四時十五分伐材所の人々の賑やか

な見送りを受けて重荷を擔つて出發する。傳上川出合を經て濁川は川床の石が代赭色になる。危ない丸太橋が渡してある場所で、皆怪しい腰つきで渡つたが自分は腰まで濡れて渡渉した。溫泉から約八粁、二時間後赤川白川、舊合流點につく。それよりキャンプ地を物色しつゝ赤川の磧を歩み、新合流點より約二〇〇米上流、右岸の椹林の中にキャンプ地を定めてベース・キャンプを張る。時に十七時過ぎ、こゝは高度千五百米である。空が曇つて蒸暑かつたが、夕立が沛然と來て一過後爽やかな涼氣のうちに樂しい夕食をおえ、焚火を圍んで紅茶を飲みながら明日の計畫を語る。明日は出來る限り谷筋をトレースして山頂の小屋泊り、赤川谷の概念を摑んで以後の精査を行う豫定をプリントを示して說明した。裝備や食料の點檢は上松で濟ませて完全なので何の不安もない。食料は十日分もあり、裝備は三十米ザイル三本、ハンマー三丁、ハーケン九十本。二立入水筒とガスマスクは「亞硫酸ガスによる生理的變調と硫黃を含んだ谷の流れが飲用に適しないことを忘れてはならない」という中京山岳會の報告を信じた故に用意した。二十一時焚火を消して一同天幕に入る。寢袋へ潛ってすぐに現役連は高鼾だ。六人枕を連べると息苦しく蒸暑い。自分は寢袋を抱えて天幕を出て野外に寢ころぶ。梢の上に銀河が流れ、ヴェーガが美しく輝いている。涼しい風がほてつた頰に心よい。谷の瀨音が次第に高まり、じつと耳を澄ませば自然が話しかけているようだ。ツアラツストラの夜の歌が想われる。

赤川谷登攀

八月二日。ジューイチの囀りで目が覺める。東の空は朝燒けしている。赤川の流れで顏を洗う、口を漱ぐとビリッと酸味がある。濃い味噌汁、漬物、飯の朝食を攝つて、サブルックに食糧二日分を收め、ザイル三十米二本、ハーケン二十本、ガラビナ六個、ハンマー三丁を分擔し、水筒は丸山君の意見で清水が豐富にあるというので二立入は割愛、兵隊用三個に留めた。ガスマスクは各自携行する。天幕の戸口を閉じ、焚火を消して七時前に出發。雲行は早いが一日は持ちそうだ。廣い磧の岩石を飛び傳いながら北上する。處々に中洲があり、立枯れの巨木がある。谷がやゝ東に向うところで左岸の綠の尾根の一角にガレが見え、一角から煙が立ち昇つているのが望見される。遙か彼方なので地圖を見ると標高差は千米、距離にして三粁だ。磧は爪先上りになり、兩岸は崖になつて逼る。キャンプ地から一粁、三十分を費す。右岸に岩洞がある。二人は泊れる。岩デブリが谷をうづめた場所が現われ荒涼さを增す。岩ツバメが崖の中腹に巢を作り飛び交している。二米位の瀧があるが磧傳いに跳めながら過ぎる。突然八米の瀧に行手を塞がれる。その上に二米の瀧が見え二段の瀧をなしている。谷幅は約八米で、右岸には立派な岩のアーチがある。「地獄谷裏門」と稱されるもの

だ。裏門の岩棚の中を登る。山ヌケで出來た洞を拔けるとトンネルの下に谷が見下されアーチ上には檜の大木が繁茂している。崖上から先刻の瀧の上部を偵察する。兩岸は約百米の急崖で谷幅は十米位、晝なお暗い谷底を水は泡立つて流れている。下廊下を遡行しても七十米の大瀧は直登も捲くことも不可能といわれる。右岸の急崖の中腹を谷に沿つてトラバースを續ける。下生えのイバラに棘れて三十分、烈しい水勢が響き、白いしぶきを擧げて廊下に落ち込む大瀧が現われた。一見して王瀧川の百間瀧より小兵と斷する。ガレを傳つて瀧上へ注意深く下つた。磧に荷を置き瀧上から下廊下を眺める。瀧の高さを測り、四十八米の數値を得た。タバコを吸いながら中廊下を望むと兩岸はやゝ開け、陽が當つて明るい。しかもここからの谷筋の遡行記錄はない。下降記錄も右岸バンド傳いである。一同元氣に溢れて行動を開始する。

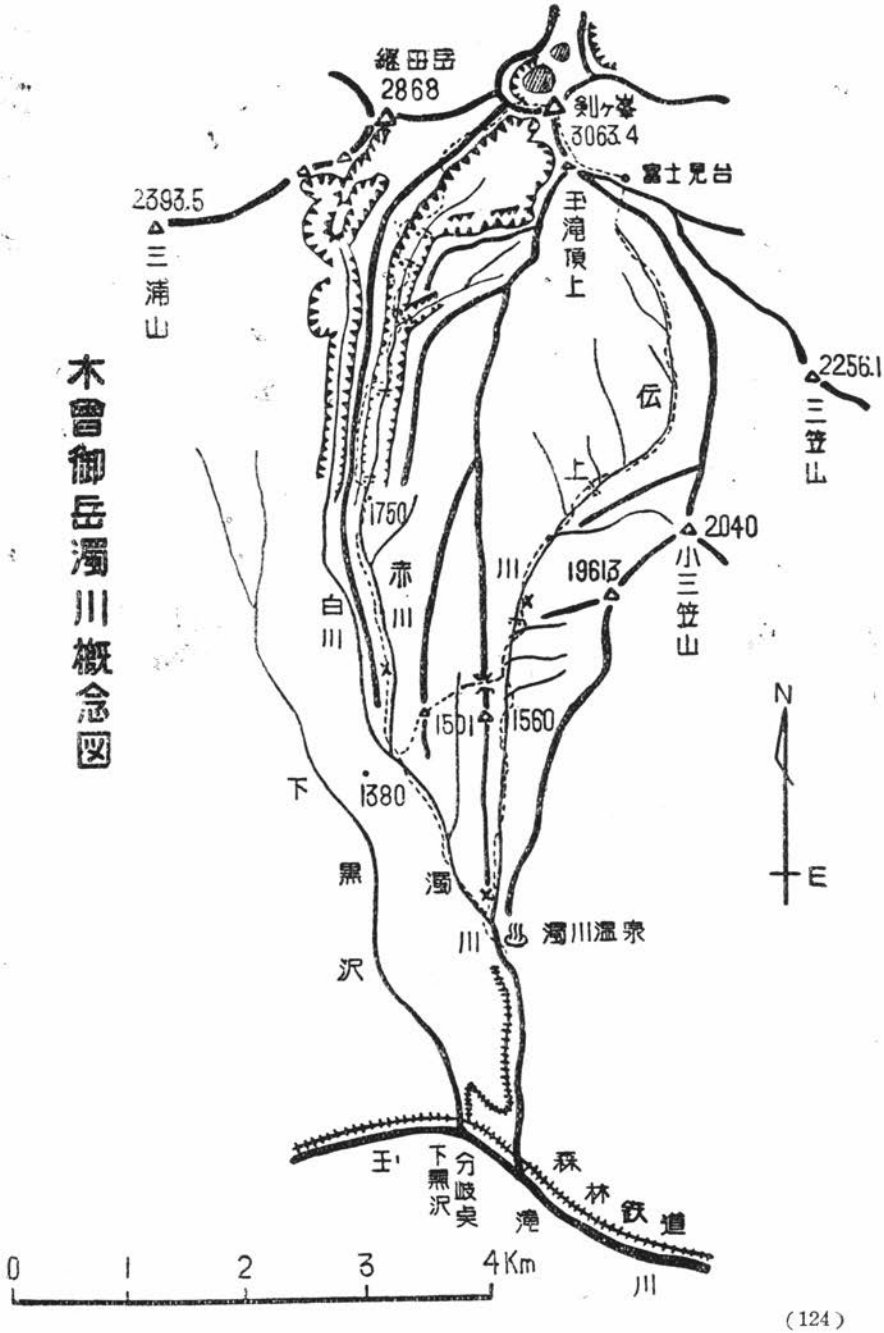
この邊りの川床の岩石は濁川のそれより白い色をしている。水も酸味が減つている樣だ。行手にガレが大きく姿を現わし、水蒸氣が高くふいている。その周圍の黃色いのは硫黃であろう。右岸の尾根の一角、樹林帶の終るところだ。瀧現われる。六米、樂に乘越える。十分もすると四米の二段の瀧、これを登ると十一米の三段瀧が直ぐ控えている。左岸寄りに越える。十米歩むと四米の瀧、二米の瀧といさゝかアッケない。水量も少ないので壁を搦んだり、へつる樣なスリルがない。次のも二米、今度は三米では呑氣過ぎる。谷が北東へ廻る。兩岸も過る。三米の瀧を登ると五米の瀧が谷幅一杯に落ち、小さい瀧にしては轟々たる水音がする。これは奥に大物がある。皆緊張した。五米瀧は水際からは兩岸ともオーバーハングで登れず、左岸をへつつて斜面を高捲きで上ると、どうだ、行手に斜上から美しい白布を引いた四十米の瀧が懸り、對岸からは廿米の飛泉が水柱となつて落下している。ここは黑川と赤川の落合である。黑川の瀧は白い泡沫が黑い岩磐の斜面に映發して輝やくばかり、地獄で佛の感がある。御嶽山塊では鹿山筋谷に觀音瀧があるから、これは勢至（セイシ）の瀧と呼びたい。赤川の瀧は岩頭から奔馬の如く迸る。下廊下の大瀧が冥府の王者ならば、さしずめ馬頭（メヅ）の瀧といおうか。六人一列に腰をおろして馬頭のルートを觀察する。瀑の右岸寄りにルートが見付かつた。上部で東にトラバースして、瀑に沿つて登れば行ける。まず王瀧側の自分達の居る崖にハーケンを打ち込み、懸垂して現役二人が降る。瀨を渉つて、瀑下でアンザイレンして、山田がトップでスル〳〵と登る。午年生れ、馬頭を登るにふさわしい。トラバースに掛るところにハーケンを打ち、カラビナを通した。岩が濡れているので大事をとつた。瀑に沿つて攀じ、岩頭にすつくと立つた。クライマーが岩上に立つた姿は美しい。東大寺戒壇院の四天王像を連想させる。輕やかに立つてしかも男性的な力が滿ちている。中村も續いて登る。一同が瀑上に揃つて、時計を見るとこ

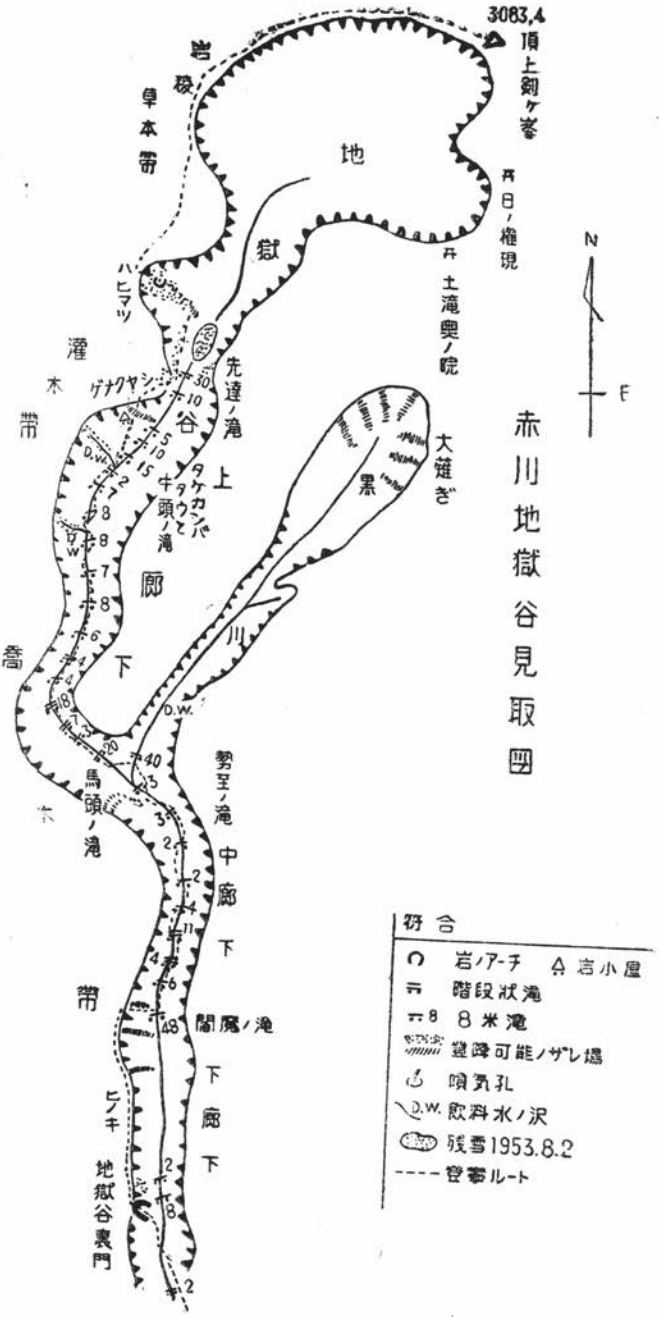
こで三十分沈澱していた。上流は傾斜が増して、瀧が連續して見える。眺めて猛然と闘志が涌く。先登、二十歩にして三米の小瀧、續いて七米の三段瀧、間も無く二米の瀧上に八米の瀧、左岸をへつり、その上の八米は右岸を搦む。三段の瀧だつた。しぶきを浴びて過ぎる四米瀧、續いて三段の小瀧、六米の瀧、八米の瀧、七米の瀧と連續突破しやゝ汗ばむ。八米の瀧逼る。右岸を搦む。次の八米の瀧との間に右岸より清水が流れ出ている。腰を下すに絶好の巨岩あり中食する。フランスパン、ビスケット、チーズとバター、チョコレート。レモン入り紅茶が美味い。腹が出來ると紫煙をふかす。谷は狭いが陽が射して明るい。尾根には唐檜に岳樺が交つている。若者達はハンマーで岩に記念の文字を刻む。見る人も稀れだと思うと微笑ましい。

出發は正午。すぐ上の八米と七米の瀧を登り次いで二米の小瀧を越えると十五米の美しい瀧あり、牛頭の瀧と名付け右岸を高捲する。高度は一三五〇米、地図上地獄谷の谷の邊りである。谷水は目立つて減り、傾斜が増し高度は高まる。唐檜は姿を次第に消し岳樺も倭曲してきた。川床を眺めながら灌木帶に入る。十米の瀧と五米の瀧あり、その上部に谷へ降るガレ場あり、横切つて高捲する。キバナシャクナゲの群落中を行く。咲き殘りの花が歩むにつれホロ〳〵と落ちる。終るところ、三十米の瀧あり。これは御嶽行者中先達が周知の瀧である。瀧の上に殘雪あり。眼界は開けて右崖に偃松現わる。砂礫の間を辿つて右岸のガレの手前に出た。王瀧側のガレを越して剣ケ峯が望まれる。硫氣孔のガレ場を登る。急崖の端に一叢の駒草が風にゆれていた。硫氣孔に近寄る。附近は硫黄で眞黄色、水蒸氣をシューッと音立てゝ噴いているのが一つ、他の二つは湯烟り程度である。丸山君が氣孔へピッケルの柄を突込んだと見る間に、破れるような響が起りピッケルは吹き飛び、小石が彈け硫黄の灰神樂が舞つた。とたんに水蒸氣の噴出が弱く棚曳く程度に落ちた。硫氣孔が擴がつたためである。偃松帶の踏跡を辿つて尾根へ出る。西に谷をへだてゝ繼母岳が嚴しい面を露呈、東は地獄の漏斗壁上に本峰が土盛りしたように見える。ここからは繼母が貫録を示す。偃松とガラ石の中を登る。

緊張から解放されると急に疲勞は増す。頑健を誇る板谷が眞先に弱り、水筒の喇叭飲みを幾度もやる。彼と一緒に殿で植物の名を當てながら踏跡を進む。碧い岩桔梗、黄色のミヤマキンポウゲ、淡紅はミネヅワウ、白きはミヤマツメクサだ。漸く繼母岳と同じ高さになつた。稜線が次第に近づく。地獄谷の急崖上にさしかゝる。霧が涌いてくる。現役連は稜線に出たらしい「ヤッホー」と呼んでいる。すぐ雲に隠れる。跡を追つてやつと一ノ池を見下す稜線に達する。中村がしきりに呼ぶ。「ブロッケンです、早く」といつている。登つて行くと消えたという。暫くすると出た。ウインバーのマッターホルン初登頂、續くアクシデント後に現われたブロッケンが話題に上る。あのリング

木曾御岳濁川概念図


縄田岳
2868
剣ヶ峯
3063.4
富士見台
2393.5
三浦山
玉滝頂上
2256.1
三笠山
伝上川
2040
小三笠山
1961.3
1750
赤川
白川
1501
1560
1380
下黒沢
濁川
濁川温泉
玉滝
下黒沢分岐点
森林鉄道
N
E
0
1
2
3
4Km



(符合は符号・1923は1559と訂正)

付きの十字架はフラーゲだ、と若者は聲を揃えていう。信ずべきであると、自分は力說したが二十年の斷層を感じて寂寥を味わつた。リンリンと霧の中から鈴音が聞えて一團の白衣の人達が現われた。「六根清淨」に和して我等も劍ヶ峯へ向う。岩の重なつた階段を攀じ登ると懷しの頂上である。時に十七時三十分、赤川谷の奮鬪は報いられた。祠を拜んで直ぐ三角點の頭を觸りに行く。木の香も新しく組まれた測量の櫓に上る。四邊雲海で眺望はない。見事なブロッケンが現われたのが慰めだ。二ノ池畔でパイ罐を開き休息して、服の埃を拂い、二ノ池新館に入る。主人が奥へ案內する。風呂が沸いているので早速入る。夕飯は甘く、罐詰をあけて、ウイスキーを飲む。主人も話しにきて舊知の消息を聽く。中小屋の浦澤不意知君は三岳村の村長さんになつた由。夜具を重ねて暖かく寢た。

傳上川下降

八月三日。朝倉後三ノ池畔へ散步に行く。御岳さんの瞳を讃えて小屋へ戻り、熱いぜんざいを馳走になつて、二ノ池の北から一ノ池を廻り再び頂上へ登る。雲行は怪しく濃い霧が流れる。先達を圍んで「行」中の一團がある。御幣を打振つて聲高く祈禱する先達は神像前に飛び上り、飛び下り幣を落してバッタリ倒れる。年輩の男女が背を擦り介抱する。こちらを向いて先達は起上る。五十がらみの目の鋭い男、チョビ髭を生やしている。忽ち問答となり「ノリウツリ給フハ如何ナル神ゾ」チョビ髭曰く「吾ハ白川權現ナリ」一同平伏する。中村はブッと吹き出す。自分は手を振つて制した。西洋流の學問の知識では測り難い宗教の世界だ。ましてここは山岳宗徒の聖なる道場である。日本アルプスの先蹤者ウエストン師も山岳宗をジャスティファイされた。その生涯の過半を中央アジアの探檢に捧げたS・ヘデイン博士に至つては、東洋人の持つ信仰の力と神祕を驚嘆した。丸山君が「行」の力というものに頭を下げていたのはやはり地元の衆である。「行」は續いている。「本願成就の上は早々に下山すべし、夕刻より山は荒れるべし」と宣い「これにて白川權現退散」で終る。我等も退散することにして歸路を傳上川に求めた。この天候では赤川谷は危險が多いと考えたからである。王瀧道をどん〳〵降る。九合目富士見臺まで來ると少し明るくなる。八合目を過ぎて間もなく道から西へ空澤が現われる。二千四百米等高線とクロスする邊りである。ナナカマドの繁りを分けてここから傳上川水源へのトラバースにうつる。空谷を下つて、王瀧頂上から小三笠山へ延びる尾根の小丘に取りつく。偃松の波を漕いで行く。頭を出したり隱れたり遠くから眺めると面白いが、繁茂しているので仲々のアルバイトである。岳樺、白樺が交つてきて小丘を越えると傳上の水源をなす空谷である。左岸の崖端の岳樺にザイルを掛け、十五米アブザイレンして空谷へ降る。崖の斷層面の熔岩互層が墨流し

を觀るようだ。ゴロ石の突谷を呑氣に降る。十分にして右岸より小澤が注入する。十一時五十五分ここで晝食して約一時間遊んだ。

二百米も降ると、せせらぎは消えて伏流となる。王瀧道の七合目邊りの尾根がふり返ると陽が當つて美しい草色に輝やいている。谷が西に廻るところ、高度約千七百米。兩岸は逼つて廊下狀となり、五米の瀧があり、すぐ下に三十米の瀧がある。瀧といつても水は小流れである。兩者の間に二疊敷の棚があり、五米瀧の釜が出來ている。スレート狀の岩棚に自然の作つた水浴場だ。美しい水を湛えているので、一風呂浴びたい錯覺が生じた。右岸の檜林を高捲きして降る。小三笠山に日射を遮られてこのあたりは高い樹梢からサルオガセが懸垂し、足下は羊齒類が繁つている。降ること百米で廢道に出る。傳上川右岸の徑路で小三笠山をトラバースして王瀧六合目に達したのだが今は荒れている。ここで中村、板谷、山田は谷へ降り、殘留三名は林道を行く。熊の糞を見付ける。樹皮を抉つた嚙跡も生々しい。丸山が蜂を喰つている熊公を見た話をする。目を閉じてペロペロやつていたとゼスチュアーが面白く腹を抱えて笑う。林道はじめ〳〵してギンリャウサウが氣味悪い姿をもたげていた。南は採つて押花にした。道は突谷に出合い傳上へ出て谷組と落合う。十三米の瀧と小瀧が三つばかりあつた由。右岸より澤來る。河原は開け、水は淙々と流れる。左岸から美しい谷が合流する。千六百米等高線と交わるところで、支谷は小三笠山の笠から發するものであろう。右岸ついで左岸から支流が注ぎ、本谷には中洲が作られ、そこには白檜の大木が繁つている。谷が南に廻る邊りは傳上川の最も豁達な部分で、兩岸の白檜や檜は亭々と空へ延び、廣い磧の中を清冽な水が、分れては合し、會つては別れ自由に流れていて、我々は心樂しく口笛を吹きながら降つた。木曾のお山の谷を歩む愉しさを沁々味わつた。

樂しいことは永く續かず、緩い三米の小瀧を眺めながら降る頃、傳上の大瀧も近いのを察して、「愼重に降れ」と注意を與えて間もなくのことだつた。學生達はドン〳〵先きになる。△一九六一・三米の裾、谷が曲つて大瀧をつくる地點、傳上川の「傳」の二百米上流で白川權現は犧牲者に石槌を下した。「オーイ」と下で呼んでいる。その聲が鋭いのでハッとして急ぐ。左岸近く中村が半身を流れに浸して突臥している。裸になつた山田がザイルを結んで腰の邊りまでの水中を中村の方へ近づいて行くところだつた。「どうした」といいながら駈つける。「岩に足を喰はれた」と確保中の板谷が答えた。ルックを放つて、川中に入る。山田が背おつて岸へ近づいて來た。ぐつたりした中村の顏が蒼白である。河原に寢かせて石に喰はれた左足を檢べる。地下足袋の上まで血が溢れていた。虻がもう寄つて來る。甲の傷口を酒精で消毒し、骨折を檢査する。觸ると痛がる

が折れてないのでホッとする。止血繃帶して一先づ休息。私は退却を心に決めて、今夜の宿りを大瀧附近にし、明日は濁川溫泉に泊り、ベース・キャンプを撤收して明後日上松に出る豫定をした。板谷、山田兩人を空身にして中村に付添はせ、荷物を殘りの三人が分擔して出發する。すでに十七時。降ること十五分で傳上の大瀧に達する。豐富な水量をもつて三十米落下している。右岸は岩壁が逼り、左岸のガレを搦めば降りられることを確かめた。瀧上の左岸十五米、巨岩の間に砂原を見付け小屋掛けする。丸山君の得意とする至藝である。たちまち立派な小屋が出來上つた。雲行が怪しかつたが、四邊が暗くなると見る間に轟然たる雷雨が襲來。小屋の中で一同縮まつていた。夕立が收まると谷は闇に包まれ、豪盛な焚火をして、非常食の速成餅の夕食を喫し、甘い紅茶を啜る。傷つけるアキリーズも元氣恢復し、歌を口吟む。毒箭に非ずして幸である。ウイスキーを飲み交わし、本格的の木曾節を合唱する。

八月四日。谷の明け方は流石に冷え、皆起き出して焚火にあたる。朝食の餅と氷砂糖入りの紅茶で食糧は盡きた。七時小屋を發つ、大瀧左岸を高捲して降る。一時間を要した。谷は次第に左岸からの澤を合して水量は豐かに、筋立つ瀨と美しい淵が現われてくる。鮎が銀鱗をひらめかせている。岸邊にはサハサザミ、ナデシコ、玉簪、ギバウシが咲き目を樂しませる。大瀧下流の傳上川は庭園的風景に富んだ支澤を持つている。見事な楓が季節をよそに紅葉していたり、王瀧側から出ていた石壘のような小澤はその奥に小さい瀧が懸り、前景にバランが叢生していて修學院離宮の雄瀧を想わせた。川ネズミが小澤から可愛いい恰好で泳いでくる。

十時半、丸山、南兩君を食糧補給班として、ベース・キャンプへ行かせる。兩人は傳上右岸の尾根をトラバースして獨標一五〇一米に出て、三角形の一邊を辿り午過ぎに自からの食糧を補給し、我々の食糧を傳上川出合に持つてきたのである。僕は兩人を先發させてから淺瀨指示役を務めながら降つた。流木を杖にすれば淵明の詩が浮ぶ。「悵恨獨策還。崎嶇歷榛曲。山澗清且淺。遇以濯吾足。」濁川左岸の尾根が現われ合流點に到着。中村を殘して山田、板谷兩人はベース・キャンプ撤收に向う。暫くすると丸山がビスケット、菓子、タバコを持つてきてくれた。兩人は早速食べる。鮎つりの老人現われる。傳上は今日は不漁の由。菓子を奬めて話す。美濃付知の人で、丸山君の鄕里惠那郡大井町の小學校の校長さんを勤めた人、濁川溫泉に滯在して淸閑を樂しむ老人は小南又一郎博士と竹馬の友で机を並べて勉强したそうだ。丸山君も老人と一緒に事務所へ歸る。三時に重荷を持つて三君歸り來り、出合の丸木小屋に泊る。今宵も夕立あり、盛んに焚火して御馳走を作つた。十三夜の月が美しい。

八月五日。朝濁川伐材所へ歸る。中村の手當をうけ、溫泉に

侵る。ブツ〳〵と音をたてゝ涌く炭酸の泡に身體をくすぐられ、代赭色の體溫より少し溫かい湯に永い間、湯槽にジッともたれていた。疲れが薄紙をはぐようにほぐれる。午過ぎガソリンカーで濁川を後にした。下黒澤で小椋主任に會い、登山經過を報じ記念撮影して別れた。二時四十分下りの林鐵に乘り、五時上松着。五時四十七分上松發名古屋行にて歸洛。（一九五三年三月一日稿）

時間記録

赤川谷登攀。

ベースキャンプ六・五五　地獄谷裏門七・四五　下廊下閻魔（エンマ）ノ瀧九・二五　黒川・赤川合流點一〇・一〇　馬頭（メノ）ノ瀑一〇・三〇　上廊下晝食一一・四〇〜一二・〇三　牛頭（メノ）ノ瀧一二・二〇　先達ノ瀧一三・〇五　硫氣洞一三・四五〜一四・〇〇　稜線一七・〇〇　頂上一七・三〇

傳上川下降。

剣ヶ峯頂上一〇・〇〇　王瀧道富士見臺一〇・二五　傳上川水源下降一一・一〇　中食一一・五五—一二・五〇　三十米空瀧一三・一〇　大瀧野營地一七・一六　野營地發七・一四　大瀧八・〇〇　濁川出合一二・三〇

アコンカグアの登頂

本會々員關根吉郎氏を隊長とし碓井弘、淺山貞郎、日下田實、塚本茂樹、今村俊輔の五氏を隊員とする早大山岳部のアコンカグア遠征隊は、一九五二年十月廿四日神戸を出帆、海路アルゼンチンに渡りブエノスアイレスで準備をとゝのえ、メンドサを經て一九五三年一月十三日インカを出發、プラサデムーラスを根據地とし、一月廿六日アコンカグア（七〇三五米）の登頂に成功、つゞいて一月廿八日アコンカグア南峰（六九二五米）の第三登頂をなし、さらにアコンカグア一周の山旅を終つて、三月七日ブエノスアイレスを出帆、五月八日無事神戸へ歸還した。一行の成功はアルゼンチンでも大きな反響をよびペロン大統領からはとくにサン・マルチンの名刀が贈られた。本會は五月廿九日一行の歡迎會をもち、また同月廿一日の小集會で關根隊長から登山の模樣をきゝ得たが、報告の詳細は本誌次號に掲載されるであろう。尙關根氏の手記は本年四・五月の朝日新聞に連載されている。

（編　者）

ヘルヴェチア・ヒュッテと秩父宮殿下

山崎春雄

ヘルヴェチア・ヒュッテに秩父宮殿下が宿泊された頃は、小屋はまだ北大に寄附される以前のことで、建築家ヒンデル君、北大豫科のグブラー君及び私と三人名儀の私有物の狀態にあつたから、小屋の管理の仕事は專ら私がこれを擔當して居たのである。

古色蒼然たる第一冊目のヒュッテン・ブーフの初めの方に近く、殿下の御一行の宿泊の記入があるが、特に示されなければ誰も氣付かない一頁にすぎない。

その頃の皆の習慣で、姓名はローマ字で、他の記事は獨乙語でなされて居た頃だから、殿下の御名もヤスヒトとローマ字で記されて居る。この一隊の皆の署名は、それが殿下のであろうと、同行の京大の木原教授や北大の大野教授、又は當時學生の伊藤秀五郎君等の御歴々の大學人種の夫れであろうと、皆小學生の書いた字の樣なたどたどしい稚拙性を以てなされて居て、時に不敬な批評の原因となつたのである。か樣な不敬漢に對して私は安萬年筆や鋼ペンで書く手を以て、眞正の鷲鳥の羽からペンナイフを以てペンを自ら作つて字を書けとすゝめた。ヘルヴェチア宿帳の王子と大學教授の筆蹟は、私が高貴なお客樣のためにわざ〳〵用意した、鷲ペンの尖から出たものであつた。

昭和三年の冬に、最高位の皇族が北大のスキーの賓客として渡道されるという事は、ことにお客樣が學生だけと一緒に行動したいという、特別の御希望が併せ傳えられただけに、主人側の當局の人達に、多大の衝動と若干の困惑とを與えた出來事であつた。

我々の仲間や學生たちに取つては、無論この御希望は當然ともいうべき自然な事柄であつた。恐らく日本內地のスキーや山地の御旅行に於て、多くの好ましからざる、招かざる要素の爲に邪魔されるという事が知られて居るので、折角北海道の自然に望みをかけて、御自身の領地である御料林のスキー旅行を試みられる高貴な御客樣が、最も滿足される樣なサービスとは、卽ち瑞西の山地をかつて旅行された時の如く、全く自由に一般登山者と同樣の生活を樂しむという御希望を、そのまゝ實現する樣に萬全の措置を取ることに外ならないとは、我々の一致した信念であつた。

殿下のスキー行の御日程は前後二つに分たれ、前半は手稻山腹の北大スキー部のパラダイス・ヒュッテに一泊、次の日に奥手稻山を越えてヘルヴェチア・ヒュッテに一泊、翌日錢函に下

る二泊の山行、後半は青山溫泉を基地として、周圍のスキー地を見るということに定められてあつた。

北大總長、後の佐藤男爵の最大の不安は、この前半の計畫にある二日間の殿下の安全にかけられ、最高貴の宮樣を學生だけに任せ切つて、雪に埋もれた山小屋に送ると云うことは、老總長の心事にすれば、我々の想像を絶した危惧と憂慮の原因となつたにちがいなかつた。

しかし、すべての無知から來る俗慮の介入を拒否して、殿下と學生だけの隊を編制するという最高原則は、あらゆる障害を强力に排除してその目的を達した。

この前半の山小屋宿泊のスキー行の隊長には、かつて板倉、加納氏等と共に多くの北海道冬山初登攀のパイオニーアである松川五郎君が選ばれ、その下に北大スキー部及び山岳部から數名づゝの部員が參加し、大野教授がスキー部長として隨行することゝなつた。

私自身は佐藤總長から、殿下スキー行の爲の一切の準備委員長を仰附かり、私が平素交渉を持たなかつた、大學本部と云う名の、あまり神經が敏感でない一大有機體の腹の眞正面にぶつかる、有難くない任務を引受けさせられたのである。

私は「山岳」のどの部分に載るのかも知らない此の一文では、私が職務上、殿下のために小屋に用意した食料のことのみに就いて、記述しようと思うのである。一體飲食のことを文章に細敍するということは、高級人種の憚かる所らしい。然るに近來の登山計畫の重要な一項目として、食物のことが堂々と取上げられて來たのだから、私も意を安んじて、二十五年間も私の記憶の中だけに生きて居た事實を、記錄しようと思うのである。

第一。お辨當のこと。私の聞かされた所では、宮樣のお嫌いなものとして擧げられた數項目の最後に、バタと蜜柑が含まれて居た。

バタを使わないこと位は、他の數項目のお好きでないものゝ排除の重大性にくらべれば、結局は小さな事柄であつた。北大農場自慢の、ゲルンジ種の乳牛から生産したバタをやめるからには、月並の肉製品等を以て代えるのも殘念と云うので、鷺鳥の肝のペーストを作ることとなつた。

フォア・グラ卽ち肥育した鷺鳥の脂肪の乘つた肝臟の製品は、この種食品中の最高峯である。ヘルヴェチア・ヒュッテの建築家ヒンデル君の夫人が、料理の弟子である私の家内に敎えて、獵期中はよく雁の肝でこれを作つた。脂肪に於て足りない所のものは、獵鳥の香氣がこれを補つて餘りある所の製品であつた。

然るに、殿下の御來道は二月から三月初めまでであつて、氷に閉された北地の水鄕ではまだ歸雁の渡來は見られない。幸に私は札幌の植物園の、冬も開いて居る池に鷺鳥が放たれ

て居ることを思い出して、動物教室の八田教授に一羽の鷺鳥を所望し、標本用として解剖する旨の一札を納れて、これを入手することが出來た。肥育の鳥とちがつて、北海道大學の帳簿に登錄されて居ると云う大學植物園の池の鷺鳥は、いた〳〵しくやせた動物ではあつたが、流石にその肝臓は相當の大きさがあつて、所要の香料が添加されて、チョコレート色をしたゲンゼレーベルバステーテが、新しい用意の容器に一杯出來上つたのであつた。

この製品は、直ちに嚴重にパッキングが施こされて、松川隊長のルックサックの底深く秘められたから、平民共には試食の光榮も與えられなかつた樣に記憶して居る。

次の問題はパンである。札幌市販のパンは二十五年を經過した今日でも、少しも進歩改良の形跡を示さないものである。私は昔の東京では、小石川關口の加特力の僧院のパンが優秀だつたことを知つて居た。私は札幌でも、修道院のものが一ばん良いことを知つて居たから、フランシスカン修道院のキノルド司教に面會して、殿下のためにパンの分與を請い、人頭大の大塊のいくつかを貰つて來た。

札幌市販のパンは、北海道の夏山でも一週間立つと七色のかびと化するのに、この修道院のパンは最後までパンであり、ボロ〳〵にもならないものである。

我々の準備がか樣に進捗して居る或る日のこと、總長は私を本部に招いて、やゝ遠慮勝ちに次の樣な申出でをなした。

「殿下が山小屋で、學生の調理したものを召上るということを聞いては居りますが、今回札幌の豐平館の主人が是非小屋にお供をして、自分の手で料理を調理したいと申出て居ります。豐平館のS君はコックではなくて立派な紳士でありますから、そう云う事になされては如何ですか。」

私は、今にして思えば冷靜を缺いたと思う樣な語氣で、總長の言葉をさえぎり、凡そ紳士の階級に屬する人間は、一切原則的に拒否すべきだと云う樣なことを述べ立てた。私は更に老總長を安心させる爲に、總長はじめ大學の最高幹部が、山小屋の學生料理と豐平館の夫れとに就いて抱いて居る、差別的先入觀を訂正すべく無益な骨折をしたのであつた。

第二。ヘルヴェチア食卓の献立。

第一のコース。えぞやまどり。

北海道はさておき、歐洲に於ても王侯の食卓に上せて恥かしからぬ第一の獵鳥は、この松雞であるという。此の鳥のラテン學名について居るボナシアとは、良い燒肉の義である。

私はヘルヴェチアを建てた獵師水本小判治を村から呼んで、豫かじめ山に上つて周邊の山林から相當の數の松雞を集めて、これを小屋の玄關の天井から釣下げておくことゝしたのだつた。此の鳥特有の上品な彩色の羽毛、コケットな赤い雞冠で飾られた頭、私はこの一群の獲物の集束を見た時に、これだけで

すでに皇子を迎える用意は整つたと思つたのであつた。

第二のコース。ウンガリッシュ・グーラシュ。

これは又前のものと異なり、甚だ平民的な献立である。ことに地域との關連性もなく選ばれたので、要するに學生が小屋で作れると云うことが主なる理由であつた。單なる牛肉の煮込みが、ハンガリーの地方的特色としてパプリカと唱えられる、赤いとうがらしの粉末を以て處理されてあるだけのものに過ぎない。

私が其後にベルリンの或る家で注文したときに、同卓の老人が、それはブダペストで食べるものだと口を入れた。私はその事を知つて居るが、これは私の家の惣菜だから比較のために食べるのだと答えると、その老人は大に驚ろいて、自分は日本人とハンガリー人と同祖先ということは聞いて居るが、グーラシュが日本の食べ物とは知らなかつたと云つて、殆ど感に打たれて居た。

このグーラシュ採用が決定すると、殿下の隊員の學生數名が私の家に來て、フラウの指導の下に蒸發皿やビーカーを持つ手で實習を開始したのであつた。學生側の主任は後に大野教授及びスキー部長の後任となつた小川君、主任に選ばれたのは、彼が「山とスキー」編輯所で自炊をした經驗者ということからだということは、二十數年を經た後に小川教授の自ら語る所によつて判明した。しかしこの學生料理が如何に成功したかに就いては、動かすべからざる證明があるのである。

錢函驛に、殿下の一行よりも一足先きに下山した宮家の事務官の前田伯爵が、まず出迎えの總長に丁寧に感謝の挨拶をされ、殿下が非常な御滿足であつたことを述べられた後に、總長の側に居た私に氣付いた伯爵は、今度は私に向つて、

「山崎さん、今度は大へん御世話になりました。學生の料理の上手なのには全く感心しました。總長さんに先日札幌で御馳走になつた豐平館の料理なんぞは、そう申しては何ですが學生の腕前には到底及びません。あの赤い色をした肉の料理……何とか申しましたな。」

「グーラシュです。」

「そう、そう、そのグーラシュが大へんな結構なものでした。」

と云つて加賀百萬石の一門なる伯爵が、錢函峠の向うの山小屋の一夜を、繼うる樣な眼付きと西洋風に云えば、口一杯水がたまる樣な表情をされたのである。

勢込んで話かける貴公子の顏と私の顏とを半々に、ぼう然と立ちつくした總長の顏を眺めた私も、旬日の苦心が一ぺんに吹飛んだ感じを受けたのだつた。

第三のコース。リンツェルトルテ。二品の料理のあとはデザートである。これは東アルペンの山地からウィーン地方の旅行者に取つては、有名なウィーンの林檎卷と共に代表的のお菓子

である。

最近になつて、札幌の私の家の近くの小さな教會に住んで居る獨乙人の神父さんが、リンツの生れで二十數年札幌に住んで、傳道に從事して居る人だという事を新聞で知つたうちの老妻が、この圓菓子を燒いて、この未知の異國人への贈物とした。私が神父住宅の玄關に立つて神父がリンツの生れであることを確めてこの贈物を差出すと、包みから現れた金色の塊りを見た加特力の老僧が、少年の樣な聲をして、

おゝ、リンツェルトルテ！　と叫んだ。

そしてどこでこの珍らしい物を手に入れたかとの問に對して、これは神父さんの爲に、うちの老いたフラウが特に燒いたものですと私が答えると、彼の童顏は法悅の光輝の樣に眩しくかがやいたのであつた。

そういふ因緣のあるデザートコースの挿話を以て、私の外道的な食慾の物語りを終ることとする。

私の職務の中の物語りは以上を以て盡きるのであるが、殿下御來道に關連して私の記憶に殘つて居る他の事件は、それが趣味の事柄の範圍を越えて居て、今日に至るまで何時でも、隨所に頭を出す社會的現實の問題であつた。

前に述べた樣に、御客樣の御嫌いなものとしてバタ以外の數項目が傳えられ、當時の若い學生は御客樣の最高の御滿足という原則からして、單純にこれを排除すべく實行に移したのであつた。

殿下が東京に歸られた後に、その事が地方のプレッセの問題となつて、大學の當局者が狼狽して遂に大學最高のセナートの會議が開かれることゝなつた。一言で云えば「責任者」大野スキー部長の査問會が開かれたのである。

この會議の前半は、往年私がベルリンで見たウェデキンドの「春の目ざめ」の教員會議の舞臺にやゝ似て居り、結末は、日本の歌舞伎芝居に用いられる、大權力の象徵の出現の前に、今迄威張つて居た小權力者等が平伏するという場合に甚だよく似て居たが、全體としては一の喜劇に外ならなかつた。

「春のめざめ」の教員の樣な話が終つて、大野スキー部長の陳述の段階に入るや、彼はそれまで大切そうに持つて居た、紫色の風呂敷包みからして昔の教育勅語をふくさから取出す人の手付きで恐ろしく大きな白色の封筒を取出した。彼はわざ〳〵總長に對して、最近宮家から到着したこの御手紙をこゝで讀んでいゝかと云う許可を、馬鹿丁寧な口調で求めた。

事件の曲線の上昇は勿論こゝが山で、あとは尊大な大學の評議會が、あまり大きくないスキー部長の前に屈伏した樣な形で、カーヴは急激に下降して行つた。

大野君は、たとえこの宮家の救助の手紙が前日の夜に屆いたにもせよ、會議にはゆう〳〵たる勝利の豫感を以て臨んだことは、その樣子にも現われて居たのであつたが、私は査問會の席

に居ながら、本質的には同罪の意識を持つて居たから、この喜劇の幸福な展開には最も助かつたと感じた一人の人間であつた。

×　　×

要するに北海道の田舎大學に起つた以上の事件は、或る最高の意志が正直な純眞な感情に依つて尊重されて、磨擦を敢えてして實行に移された過去の一挿話である。

雲上と地上の大きなへだたりは、一つの趣味で結合されて失われて居た。多分この大きな宿命的の距離を賢明に縮小する、他の視界の廣い存在が、最後の惡質なトラブルを幸福な終末へと針路を導いてくれたのであろう。

當時の私たちの智慧では、そういうことは理解の外のことであつたけれども……。

會員名簿　新刊

戰後はじめての會員名簿が出來ました。

A5判五〇頁。頒價一〇〇圓。

山岳　第四六・四七年

（一九五二年十月刊行）

內容

ネパール紀行　西堀榮三郎
冬の十勝岳・大雪山縱走　北大山岳部
ギド・レイのこと　日高信六郎
明神五峯東壁と前穗高四峰正面岩壁　石岡繁雄
春の白馬岳以北の縱走　岸田櫂二
赤石南半の覺え書　沼井鐵太郎
山の周邊・歐米ところ〴〵　松方三郎
白馬岳志雜攷（下）　中島正文

追悼　八木貞助氏（辻村）・百瀨愼太郎氏（槇・石川）・美木富士哉氏（名取）・入江保太氏（前田）

ヒマラヤン・ノーツ　エヴェレスト一九五一年・アンナプルナの初登頂・スコットランド隊のガルワール

A5版　二一六頁・寫眞　二十一葉・地圖　十四面

定價　四〇〇圓（會員割引　三五〇圓）

御希望の方は事務所でお求め下さい

セガンチニの跡を訪ねて

津田正夫

ピアンタ・ホテル

ジォヴァンニ・セガンチニが、コモ湖に近いブリアンツァ地方から出て、瑞西に足を踏み入れたのは一八八六年の夏で、そこは現在の瑞西グラウビュンデン州オーベルハルブスタイン溪谷のサヴォニンという寒村である。彼は一八九四年迄の八年間そこに住んで、幾つかの傑作を世に殘した。

彼がブリアンツァの生活に飽きて山を求め、方々を遍歴した後伊太利領チロルのリヴィニォが氣に入つて、同地に一泊したのは一八八六年の六月だつた。併し彼の姿が餘りにも異樣だつたこと、着いた翌日の日曜日に教會の彌撒に出なかつたことから、宗教心に厚い舊教徒の村人からすつかり異端者扱いをされ、泊つた宿屋でも出て行けがしの態度をとつたので、もう居た堪らなくなり、逃げるように同地を立去つたのである。

さてリヴィニォを出たは出たが、何處へ行つていゝか分らない。不圖思いついたのは、豫て友人から聞いていた瑞西の景勝の地ヴィア・マラであつた。その事を思い出すと直ぐ彼等二人はベルニナ峠を越えて、初めてエンガディンに足を入れ、サンモリッツからジルヴァプラナへ行き、そこで一臺の馬車を借りてジュリア（ユリエ）峠を越えた。先を急ぐ彼にはジュリア峠からみえるベルニナ連峯も、ピッツ・ジュリアの美しい姿も眼に入らない。

馬車はジュリア河の急流に沿うて幾度か森をくぐり、龍膽やアネモネの咲き亂れる野を過ぎ、ティンツェンの部落に近づいた。そして彼の眼前に劃然と開けた廣い綠の野をみたのである。野草咲き亂れた野原は眞中にジュリア河を挾んで南北に擴がり、野の盡きるところ落葉松や樅の林があり、その上は岩山となつて眞白な雪に被われている。小さな部落が河の近くに點在し、白い壁、鐘樓をもつた赤屋根の教會堂もみえる。靜かな世界である。これをみたセガンチニは矢庭に身體を乘り出して馭者に「こゝは何んて云うところだ」と聞いた。「サヴォニンですよ。ヴィア・マラはこれからティーフェンカステルに出てライン河に沿うて上るんです。あの山の向う側ですよ」と教えたが、セガンチニはもうそんな言葉は耳に入らない。驚く馭者を尻目に若い妻ビッチェの手を引張るようにして馬車を下り、丁度右側に旅籠屋があつたのでそこへ入つて行つた。彼は馭者に馬車賃を支拂うともう殘りの金は幾何もなかつた。その旅籠屋が今のピアンタ・ホテルである。「身なり構わず、ぼうぼうと亂れた頭のボヘミアン姿のセガンチニ」に驚き、その男の連れ

が「金髪の若い婦人、しかも慎しやかな愛くるしい人」であつたのに再度驚いたと云う旅籠屋の主人ダニエル・ピアンタ氏は故人となり、現在は長男アルフォンス・ピアンタ氏が當主となつている。

ピアンタ・ホテルは今では部屋數八十もあり、廣い食堂やカフェーの爲のホールも持つている。日本式に云えば五階建の、この地方としては第一のホテルであるが、セガンチニが足を留めた頃は今で云う舊館——一六六四年當時この邊りが伊太利領であつた頃建てられ、家の入口に聖母マリアの大きな聖像のある——しかなかつたそうだ。その舊館のサロンにはヴェネチア風の裝飾品や家具が置いてあつた。セガンチニはそれを大變喜んだそうだが、それは先代ピアンタ氏がヴェネチアにグランドホテルを經營していた事があり、後健康を害ねたのでそれを人手に渡した時、家具や裝飾品をこゝへもつて來た爲だそうだ。成程廊下の至るところにバロック式の彫像が置いてあり、又廊下や食堂の柱には、ヴェネチアの謝肉祭の假裝人物が洋燈を掲げている像がくつつけてある。

セガンチニが死ぬ迄仕えた女中のバーバ・ウーフェルはここのホテルの女中だつた。當時十四歳、頬の眞赤な、金髪の少女だつたと謂う。セガンチニがあとでこの地に家をもつた時、ピアンタ氏に懇望して貰い受けたとか、彼女はセガンチニが死ぬと直ぐ結婚し、兩三年前七十八歳の高齢で瑞西ウインテルトールで死んだ由である。

ピアンタ家で一つ珍らしいものを見せて貰つた。それはセガンチニがサヴォニンに永住する爲に役場（當時の役場はグラウビュンデンの都シュールであつた）に屆出た書類で、彼はこの書類で初めて今迄の姓セガンテを改めてセガンチニと書いている。

サヴォニンの家

セガンチニはピアンタ・ホテルに落着いてから後一度故郷へ歸つて子供達を連れ戻り、家をかりてこの地に八年住んだ。その家はジュリア峠から下りてこの村に入る街道の入口の右手の家で、先代ピアンタ氏が探してくれたものである。ペテレリと云う人の持ち家で、彼がアメリカに移民に行つて稼いだ金で建てた新しい家だつた。セガンチニはこの家をみてすつかり氣に入り、一年分の家賃を一度に支拂つてペテレリ氏を驚かせたと云う話もある。この家は今では當主のペテレリ一家が住んでいるが、廣いので二階の一部と三階は農業協同組合の事務所にしている。ピアンタ氏と共に、この家を訪れた時偶然當主ペテレリ氏も在宅していたので、主人の好意で家の内部を隅なくみせて貰つた。入口から入つた右手の部屋が居間、左手が食堂、その奥は臺所で、二階の階段を上つた左手の居間の上が夫妻の寢室、その向い、食堂の上がセガンチニのアトリエとなり、三階

は全部子供の寢室となつていた由である。セガンチニのアトリエになつていた部屋から、窓の外はジュリア河を隔てゝレアムス、コンテル等の部落や教會の尖塔がみえ、その上にはクルヴェル（二七三〇米）、トイッサ（二六六二米）の山々がみえる。この景色はセガンチニの『森よりの歸路』『水呑場』『耕作』『春の牧場』『アルプの春』『アルプの風景』などの背景と寸分違わない。

この家の食堂に入つた時、主人のペテレリ氏は隅に在る食器棚を指し「これはセガンチニさんに貸してあつたのです。ところがあの人は何處でみつけて來たのか上部の開きの硝子にこんな日本の繪を貼つたのです」と云う。よくみればそれは版畫で、德川時代の服裝をした男女の雪中の圖である。どういう積りでセガンチニが、こういう繪を食器棚の觀音開きの扉に貼つたのか、どうしても分らなかつた。

この家を辭してからピアンタ氏は私をとある百姓家に連れて行き、大聲出してその家の人を呼び出した。出て來た人は九十幾つの老人である。ピアンタ氏の說明に依ると、この人が「セガンチニの描いたあの『耕作』の中の働いている右手の方の男で、ペテレリ氏の叔父さん」だそうだ。彼は土地の「ロマンシュ」語しか話さないので、私はピアンタ氏に通譯を乞わなければならなかつたが、その老人の口から一つの面白い事を聞いた。それはセガンチニが繪をかく時は、彼は時々地に濠を掘つて、その中に畫架と共に自分も入つて描いたそうだ。これは自分の眼の高さから、今いる地點と向うの山手の景色との間の溪谷の景色が視界に入らないようにした爲と思われる。成程野に身を伏せて遠くに眼をやると、あの繪そのものの景色になる。又彼は畫作中は側に妻を腰かけさせ、いつも彼女にいろ〳〵の古典の作品を讀んで貰つていたそうである。

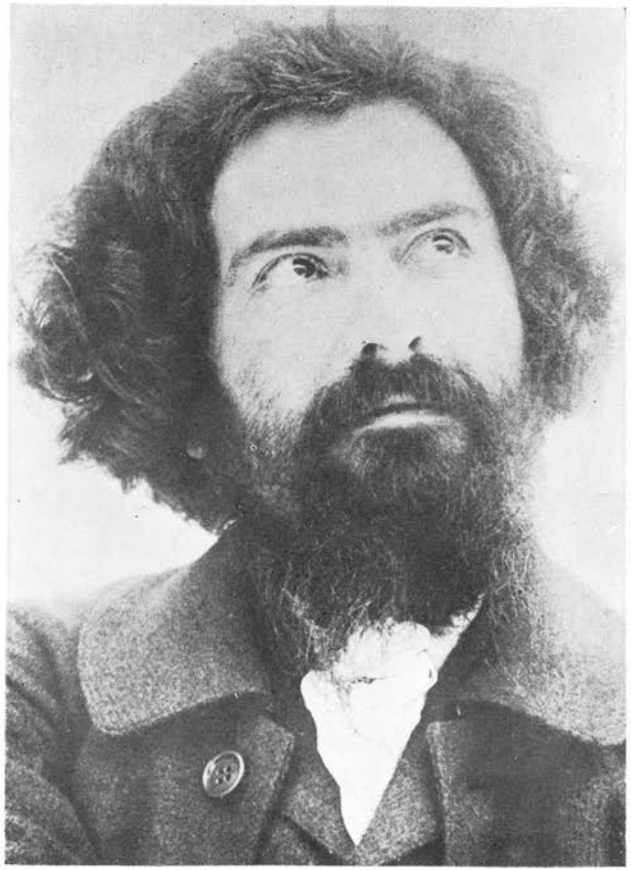
家の後ろの畑地や野原には牛が暖かい陽を浴びて牧草を食べていた。牧場には木柵があつて、龍膽やナナカマドやアネモネが咲き亂れていた。野の眞中に大きな木をくり拔いた水槽がある。この邊りセガンチニが『縫物する女』『水槽と白い牛』『森よりの歸路』を畫いたところである。『バルコンにて』の家は壞されて了つたそうだが、あゝいう家は部落の至るところにみられた。

セガンチニの住んでいた家の壁には一枚のプラカードが貼つてあつた。それには

「伊太利の不生出の畫家ジョヴァンニ・セガンチニは一八八六年から一八九四年迄こゝに滯在した。彼はこの靜寂な地の持つ總ての美を、彼の比類なき繪筆を以て現わしたのである。」

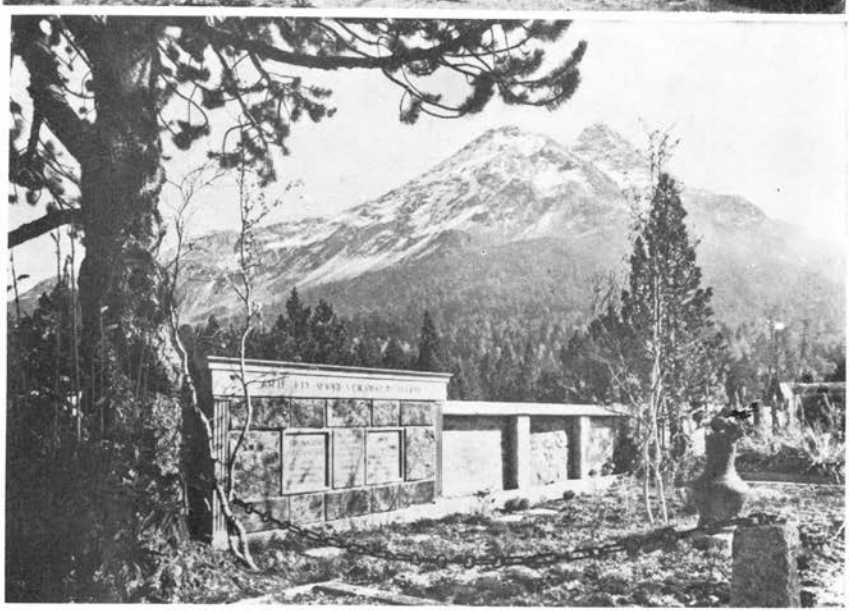
と云う文句が書いてある。

サヴォニンは昔も今も大體四百人の人口を擁している村であ



サヴォニン時代のセガンチニ
（ピアンタ氏所蔵未発表のもの）

アルコの公園にあるセガンチニ記念像



（上）“耕作”製作中のセガンチニと彼の妻

（下）マロヤのセガンチニの墓

る。この小さな村が三つの部落に分れ、その部落が聖ミカエル、聖マルタ、聖マリアの三つのカトリック會堂を持つているが、本寺はセガンチニの繪によく出て來る聖ミッシェル寺である。『縫物する女』の左手の會堂はそれであり、その前のバロック風の建物は土地の名家ベデレッチ家、ホテル・ピアンタはその向うで黄色い屋根をみせている。

サヴォニンの南、ユリア街道に沿うて三キロ程のところにティンツェンという村があり、そこから一時間程ビッツ・ミカエルの麓を登るとティギルという部落がある。セガンチニがよく描きに行つたところで、そこで描いた繪の一つに彼の『アルプの野』がある。又彼はサヴォニンの裏山のツサーンというところに在る一軒の小屋を借り、よくそこに寢泊りした。そこで彼は『アルプの午後』『アルプの五月』『サヴォニンの風景』などを描いた。

サヴォニンの村役場やピアンタ氏はこの小屋を買上げて、セガンチニの紀念建築物としようとしている。今は只その家の壁に「セガンチニが泊つていた家」と云う木製の掲示板がある丈である。サヴォニンの彼の家からは約一時間の距離で、妻のビッチェは毎日三度の食事をこゝへ運んだ由である。

セガンチニ紀念像

サンモリツの村外れ、落葉松の木立の中にセガンチニ美術館が、セガンチニの終焉の地シャフベルグに向つて建てられてある。こゝに立つと、木立を通して濃緑色のサンモリツ湖の彼方、サンモリツ・バートの眞上には蒼空に浮き出たようなマルニヤ（三一六三米）が聳え立ち、湖の向う側は落葉松の森の上にロザッチの氷河が光つている。

美術館の向い側、マロヤ街道を隔てゝ湖を見下ろす林の中に眞白な大理石のセガンチニ紀念像が立つていた。眼を閉ぢた裸身の女人像であつた。伊太利トリノの彫刻家レオナルド・ビストルフィの作で、臺座の三方には死んだセガンチニを取卷く女人像、又彼の繪によく出て來る家畜の群、牧人、オーベルハルブスタインの山々などが彫つてある。

私が初めてこのセガンチニ美術館や紀念像のことを知つたのは、瑞西滯在中友人が日本から贈つてくれた辻村伊助氏の『スイス日記』に依つてであつた。辻村氏がみた時も私が嘗て訪れた時も、その紀念像は美術館の向う側に在つた。私が最後にこの地を訪れた一九三七年にも同樣であつた。ところが一九四九年彼の五十年祭の時、この紀念像は、美術館の入口の右手に置き換へられた。

この紀念像を作つたビストルフィは今一つセガンチニの像を作つた。セガンチニの生地、ガルダ湖近くのアルコの町の公園に立つている。私は嘗て彼の生家をみたいと思つてアルコを訪れた時、生家はすつかり破壞されて取片付けられ、そこは、セ

ガンチニを紀念する小公園となり、泉の側に「この地にセガンチニの生家があつた」という碑がある丈なのにすつかり落膽していた時、村の人がセガンチニの像が山手の公園の中にあると教えてくれたので初めてみた。パレットをもつたセガンチニの立像である。

このサンモリツの紀念像はセガンチニの友人グルビッチ氏から贈られたもので女人像は「自然の魂」を表現したものである。

マロヤの家

靜寂の地サヴォニンに住んだセガンチニの飽む事を知らぬ努力にも拘らず、彼の名聲は一向に擧がらなかつた。彼は經濟的にだん〳〵困つて來た。すると村人の氣持も冷たくなつた。村の財政が豐かでないのに、若しセガンチニが死んだら遺族五人を村が面倒みなければならぬし、村にはそんな費用がないと誰からともなく云い出した。するとセガンチニの非社交性、彼が教會に行つた事のない事などが人の口に改めて上るようになつた。彼を觀る村人の眼が冷たくなつた。かのリヴィニオの部落で經驗したあの苦がい想いが彼の頭に浮び出た。そうなるともう一刻も早くこの村を出たい。さてどこへ行こうと日夜思い惱んだ。先代ピアンタ氏やその弟の勸止も耳に入らない。彼はミラノのグルビッチ(彼の友人であり文書商)に手紙をかいて金策を依頼し、妻ビッチェ、女中のバーバは毎日のように近くの村、果てはサンモリツの方まで歩いて家を探した。運よくマロヤに一軒の家がある事がバーバの叔父で同地でガイドをしている人から傳えられた。ビッチェとバーバは取るものもとりあえず、それを見に行つた。立派なシャレーである。あーこんな家に住めたら、お金があつたらと思い乍ら二人が歸宅すると、そこにはミラノから急を聞いて駈けつけたグルビッチがいて、然も大金をもつて來てくれた。それでセガンチニはその家を買う事になつたのである。

家はジルス湖からマロヤ街道に出、パラスホテルを右手にみた村の入口にある。家の前は「シュワイツェルホーフ」と云うホテルである。サンゴタルト隧道工事をしたクオミという人が建築したヴァレー風のシャレーで、セメント作りの地階の上に三階建の落葉松の材木で作つたシャレー、家の三方は廣いバルコンになつていて、そのバルコンの手摺は種々の花模樣の彫りがしてある。窓もこの地方の家としては思い切り大きい。

今こゝにセガンチニの長子ゴッタルト一家が住んでいる。內部の裝飾、調度品はセガンチニ生存當時と殆ど變つていないという事だつたが、書齋など入つてみると、書架にはゴッタルト氏のものがギッシリつまつていて、故人の藏書は廊下や裏手に先代が建てた圓形のアトリエの中に無雜作に積み重ねてあつた。そのアトリエも、ゴッタルト氏が畫をかくのですつかり彼好みとなつて了つて、只こゝでセガンチニが繪を描いたという

事を想像する丈である。この家で一つ面白いものをみた。

それは食堂の入口のホールに置いてある日本の具足一揃いであつた。「なんでこんなものを親父が買つたのか分らない。恐らくビアンタ氏が骨董蒐集家だつたので、ビアンタ氏に勸められたのではないかと思います」とゴッタルト氏は語つた。サヴォニンの家の食器棚の浮世繪、この家の日本の甲冑、セガンチニが何故こういうものに興味をもつたのか今だに想像つかない。

「何かデッサンでも殘つていないのですか」と聞いたら、ゴッタルト氏は憤然として

「親父も私たち一家も皆、あのグルビッチにしてやられたのです。今の言葉でいう搾取されたのです。あの男は私の家から父のものを根こそぎ持つて行つて了いました。母の手許にさえ一枚の繪を殘して行かなかつたのです。父の死後私たちが質素な生活をしなければならなかつたのも、皆あれの仕業の結果ですよ。」

と口汚なくいい切つた。

食堂の眞中の大きな卓子には石楠花の花を入れた花鉢があつた。よくみるとその卓子の表面は市松模樣ように線が彫つてあつて、その四角の中には一つ一つ花や動物などが彫つてある。

「こゝへ來てから父の名聲が高くなつた故か、毎日種々の人が訪ねて來たり、食事を共にしたりしました。父の上機嫌な高聲が私たちの食事している下の臺所まで聞えて來ました」

とゴッタルト氏は云つていた。

家の東側の窓から遠くに小さな教會堂がみえる。「あれが父の葬式をした教會です」と彼は指して教えてくれた。

ゴッタルト氏は七十一歳、アルベルト、マリオの弟たちを早く失い、今は妹のビアンカが只獨りの肉親である。併しどういう譯か二人の間はよくない。ビアンタ氏の家へはビアンカはよく訪ねて來るが、ゴッタルト氏は滅多に訪れないという事は聞いていた。「ビアンカはセガンチニの奥さんそつくりの、實に善良な人です」と口を極めて賞めているが、彼はゴッタルト氏の事に就ては餘り云わない。そのビアンカはゼーデルという瑞西人と結婚したが早く夫に別れ、今マロヤにたつた獨りで淋しく暮している。長子との不和が、ゴッタルト氏の二度目の奥太利生れの夫人との間が旨く行かない事に原因しているとも噂されている。私がマロヤを今年訪れた日は生憎ビアンカさんは他出中で會えなかつたが、後から鄭重な手紙が屆けられた。

セガンチニの墓

三十年前に槇さんが出版された『山行』で、多くの人はセガンチニの墓のあるマロヤの墓地の寫眞をみられたと思う。あれはサンモリツの寫眞家アルベール・スタイナーの作を轉載したのだと思うが、あのマロヤ共同墓地の内にあるセガンチニの墓

も、彼の死の五十年祭にすつかり改装された。

以前には、墓地の一番奥に小さな墓石があつて、その前に鐵製の水瓶が置いてあり、詣でる人がよく花をその水瓶に入れて行つたものである。ところが今はそれ等はすつかり取除かれた。あのセガンチニの繪『信仰の慰め』にある鐵の門を入つた眞正面には、幅三米高さ一米半位の、青大理石で額縁のように圍んだ大きな碑があり、その中に二枚の、眞白い大理石のセガンチニ夫妻の碑石——それに生れた年、生地、死んだ年、死んだ土地が刻つてある——がはめ込んである。その青大理石の額縁のようなものの上の部分には "Arte ed Amore vincono Il Tempo" と彫つてあり、碑の兩側のイタリア式の縦溝のある圓柱のようなものなど、以前の墓とちがつて實に立派なものになつた。

例の水瓶は墓地の眞中に置かれ、その周圍の雜草は綺麗に取られて、櫻草やアルペンローゼが一杯咲いていた。私が今年訪れた時は墓地内に植えてある三四本の白樺の若芽と共に、如何にも山の春を思わせるものがあつた。靜かな墓地で、周圍の、マルニア、ロッシ、ラグレフ、ドアン等の氷山が彼の墓を見守つているようだ。

セガンチニの墓の右に列んで、丁度墓地を圍む石垣と同じ位の高さで三米位の長さの墓石があり、それが三つに仕切つてあつて、二子アルベルト、三子マリオの墓碑がそれにはめ込んであり、長子ゴッタルトの分は開けてあつた。

墓地からジルス湖の方面に小さな教會堂がみえ、その上にラグレフが聳え立つている。石や岩、その間に偃松の生えている原に、マロヤ街道から一筋の眞白い道が墓地まで作つてある。その道を墓地を後ろに歩いた時、道の右側に近代的なシャレーが立つてるのをみて驚いた。驚いたと云えば、セガンチニの家の附近には以前にはシュワイツェルホーフ一軒しかなかつたのに、今では協同組合事務所や賣店、立派な郵便局やレストランが出來ている。時の流れを泌々感じた。

附　記

セガンチニの傳記で戰後出版されたものは左記のものである。

Giovanni Segantini : von Gottardo Segantini
(Rascher Verlag, Zürich, 1949)

Giovanni Segantini : von Hans Zbinden
(Paul Haupt, Bern, 1951)

Segantini : par Raffaele Calzini
(Editions du Milieu du Monde, Genève, 1947)

Giovanni Segantini : Bonifaci Piaz. (St. Moritz, 1951)

Giovanni Segantini : Enrico Somaré. (Trento, 1949)

ヒマラヤ遠征と英國の人々

島田　巽

ロンドンで生活していた間に一番殘念でたまらなかつたことは、シプトンのエヴェレスト偵察の報告を聞きそこなつたことであつた。一九五一年の遠征隊が歸つて來たというので、私は早速、英國山岳會へ手紙を書いて、シプトン氏の報告會が開催されるなら何とか聽講できるようにして欲しいと依頼することを忘れなかつた。これに對してアシスタント・セクレタリーのブレークニー氏からは、英國山岳會ではやらないが、地學協會の方で報告があるはずだということを報せて呉れた。今度は地學協會あてに申込んだところ、こちらが新聞記者なので記者席の聽講券を一枚同封した返事を貰うことが出來た。

かねがね期待していたシプトン氏自身の口から、エヴェレストの話が聞かれるのだということは、私を興奮させずにはおかなかつた。その報告會はケンジントン・ゴアの地學協會の講堂で二月四日（一九五二年）に行われることになつていた。ところが一月の終りに私は冬季オリムピックの報道の準備にオスロへ向えという命令を受取つてしまつた。オリムピックは二月の十五日からだから、シプトン氏の報告を聞いてから出發しても十分だと思つていたのに、萬事窮すである。折角手に入れた何よりも大切な聽講券をむざむざ無駄にして、私は雪のオスロへ飛ばざるを得なかつた。

こんなわけで私はシプトン氏にも會えず、話を聞く暇もなしに歸つて來てしまつた。齒ぎれのいゝ文章で綴られた偵察隊の報告を讀みながら、つくづく殘念に思われてならないのである。當時のロンドンには見渡したところ誰一人、私の聽講券を喜んで貰つてくれそうな山男は、日本人の仲間には見當らなかつた。せめて私は私の身代りによく聞いておいて欲しいと思つて、英語にかけては一寸太刀打できる人のないほど達者な伊藤あい子さんに頼んで、出席して貰うことにした。伊藤さんは快く承諾してくれた上、その報告會の模樣をオスロにいる私に詳しく傳えてさえ呉れた。

ぎつしりつまつて腰を下す席さえ足らない會場だつたそうだが、シプトンの話しも、その態度もすばらしかつたと伊藤さんは報せて來た。それに天然色のスライドが人々を魅惑したという。「私達の登つたコースはそれほど難しいものではありませんでした」と說明するスライドの場面は、物すごい氷壁であつたりして、いかにもシプトンが英國紳士の典型で、何事をも過少に表現する癖を示していて、それがとても好感を持てるものだつたというのが伊藤さんの印象であつた。正にさもありなん

と私はオスロでひとりほゝえんだのであつたが、同時にエヴェレストの天然色スライドまで見そこなつた不運を地團駄ふむ思いで嘆いたのであつた。

×　　×

それから約二カ月ばかりのち、私はうれしい機會にめぐり會うことが出來て、前回の埋合せをした思いであつた。というのは、一九五〇年アンナプルナの登頂に成功したヘルツォーグ氏はじめ、隊員の人たちの報告會を聞く好機をとらえることが出來たからであつた。それは一九五二年の三月二十六日、ロンドンの一夜、ウエストミンスターの議事堂やアベイと廣場を隔てて相對しているセントラル・ホールで行われた。

ヘルツォーグ氏を中心にあの「最初の八千米」登攀に協力した隊員たちが、パイプ・オルガンのある舞臺に並んだときには、英國人が嵐のような拍手を送つたが、これに答えてまずヘルツォーグがさほど流暢ではないが、英語であいさつを述べた。言葉につまると他の隊員たちがお互いに單語を探し出して行くといつた愛嬌のあるティーム・ワークも好ましかつた。

「最初の八千米へ登り得たことは、決して私たちだけの手柄だとは思つておりません。フランスの登山家の手柄でもありません。これは世界のアルピニストの勝利なのであります。」

ヘルツォーグは謙遜した態度で、ヒマラヤへの經驗では先輩格である英國の人々にこう語つた。もちろん大變な拍手を浴びた。丁度スイス隊がエヴェレスト目指して一週間ばかり前にジュネーヴを出發した頃でもあつたので、ヘルツォーグ氏はこんなこともいつた。

「われわれ登山家もまたキューに並ぶべきだと思います。」

キューとは行列のことであり、配給制の多い英國の戰後生活には「行列」という言葉は身に泌みる言葉なのである。それに三十年、エヴェレストと戰つて來た英國人にとつて、このピークを目指してスイス隊が出掛けて行くということ自身、何かしら割り切れぬものを感じていたときであつた。ヘルツォーグはこの心理をいゝ當てたかのように、他人の領域を侵さぬ仁義はよく心得ていますといつたわけである。さすがに滿堂割れるばかりの拍手であつた。私は英國人が抱いていた鬱憤の爆發だと感じないわけには行かなかつた。

この夜のフランス隊の報告は、實にそのモンタージュというか、演出そのものも鮮かであつた。携行したシネ・カメラは七五〇〇米のあたりクレヴァスのなかに一夜をあかした朝、不幸にもおそつた雪崩の餘波に埋もれてしまつた。したがつてそれ以上の高所のものは天然色スライドだけだつた。その映畫とスライドとを、間髪もいれずに、巧みに説明しながら映寫をつづけ、映畫からスライド、またスライドから映畫へと移り、登攀隊員が異る度ごとに、「これはラシュナルだから彼に説明して貰いましよう」といつた調子で説明のバトンをなめらかに渡

す。何の不自然さもなく隊員たちは、書面を眺めながら自分たちの體驗を報告して行く。大きな書面の上を光芒がはいまわつてルートを説明して呉れる。何かしらと思つていたら、説明する隊員の手に懐中電燈が握られていたりした。登山家だから口下手でなければならぬという法もなし、下手に悪びれるのがよいというわけではない。ともかくフランス人が英語で、これだけ鮮かに、八〇七八米の登頂記を語つたというばかりでなく、十分に聽衆に滿足を與える演出が行われたことに注目したいのである。

もちろん語られる内容それ自身、すばらしい冒險に富んでいたことも事實であつた。登頂に成功したヘルツォーグとラシュナルとが第五キャンプへ歸るまでに味つた苦惱、あらゆる歡喜と榮光と慰めを具現する山頂に、別れをつげての歸路、ヘルツォーグが脱いだ片一方の手袋が離れて、クーロアールの底へと落ちていつた。この高度で手袋を失うことが何を意味するかを絶望とともに見つめていたというヘルツォーグ。

「八千米の高度では、常識では考えられないほどつまらぬことをやつてしまうものなのです。」

彼はこういつて手袋の事件を説明したのであつた。その夜第五キャンプに支援パーティの二人とともに過して、翌朝さらに第四キャンプを目指したが、悪天候に妨げられてキャンプを發見できず、ついにクレヴァスの底部に降りてビヴァークの一夜を過す破目となる。このビヴァークのために一同の凍傷はますます悪化する。しかも翌朝クレヴァスに雪崩れこんだ粉雪のために、あらゆるものが埋められてしまう。一時間餘にわたつて、七千米近い高度で素手、素足で雪中をかき廻して靴を探すという悲慘事が起つたのであつた。ラシュナルは兩足、ヘルツォーグは兩手、兩足をひどい凍傷にやられ、テレィ、レビュファの二人は雪盲となつた。その揚句にまた雪崩だ。この四人が無事救われたことの方がむしろ不思議なほどであつた。たしかに幸運も手傳つたが、「アンナプルナからの撤退」は登頂よりもさらに強い意思と鬪志を必要としたことを、ヘルツォーグの言葉と、その指のない兩手が物語つていたのであつた。

休憩時間にヘルツォーグは二階正面の席についていた英國山岳會のC・A・エリオット會長とフランス大使に挨拶するために客席にその長身を現した。英國の少年少女たちがこの冒險の英雄にサインして貰おうと追いかけて來た。しかしどうして指のない彼にサインが出來ようか。氣の毒そうに附添いの人々が若い女性に斷りをいつているのであつた。

まだ寒い三月下旬、この翌日から二、三日雪が降つたほどのロンドンであつたが、滿堂の聽衆は——とくに老年の男女の多いのに英國らしさを感じさせられたのだが——この夜いずれも感慨深く頰を高潮させて、ウエストミンスターの廣場へ出たのであつた。

×　　×

「登山家もまたキューに並ぶべきだと思います。」

とヘルツォーグ氏はいつたのだが、たしかに一九五二年度のスイス隊がエヴェレストへ出掛けるまでには、いろいろと意見が對立した點があつたようである。最初スイス隊は英國と合同の遠征を行うつもりでいたようである。そのために一九五一年の偵察から歸國したばかりのシプトン氏が、わざわざジュネーヴへ飛んでスイス側と懇談したりしたのであつた。

しかしついに話は折合わずに、シプトン氏はやゝ腹を立てゝ歸つて來たということを私は耳にした。耳にした程度なので、その間の眞相は保證の限りではないが、スイス隊と英國隊との裝備の統一というようなことでも、スイス側はついに英國隊の意見に歩み寄らなかつたという話である。結局スイス隊は獨自の遠征隊を送ることになつたのであるが、いざ決つたとなると、もう英國側では何一事も不快な言葉を口にすることをしなかつた。

第一回のエヴェレスト遠征以來、遠征記を掲載して來たロンドンのタイムズ紙は、このスイス隊の遠征記も同じように掲載することに定めたのであつた。しかしそう決定するまでには、わざわざ海外ニュース部長のラルフ・ディーキン氏をジュネーヴに派遣して、その計畫なり裝備なりを十分に檢討した上で、遠征記の版權を買うことにきめたのである。ジュネーヴから歸つて來たディーキン氏の話では、スイス隊の裝備というものは、今までの英國の概念とは雲泥の差があるものだということだつた。それはどういう意味かというと地上のあらゆる「居心地よさ」をそのまま七千米、八千米の高度へ運び上げることによつて、隊員のエネルギーが損耗することを妨ごうという考え方なのだというのである。空氣入りのマットのついたスリーピング・バッグにもぐり込んで見て、その素晴らしさに驚いたよとディーキン氏は語つていた。おそらくこのような裝備の點でもスイス隊は金にもあかして、絶對にその優秀性を自負していたのであろう。

私自身、英國にいたせいか、スイス隊の行動に何か割切れないセンチメントを抱いていたのであつたが、たしか一九五二年の三月十八日、スイス隊がジュネーヴを出發しようという朝のタイムズ紙に、英國山岳會長の名において、スイス隊の壯途を祝し、その成功を祈る電報を發したことが掲載されていたのを私は見出した。さすがに、さすがに、と私はその度量に對して頭を下げたのであつた。

この氣持を私はタイムズのディーキン氏にも傳えたのであつた。その折、ディーキン氏は色々と興味ある話をしてくれたのである。私をまず驚かせたのは、英國山岳會にスイス隊の壯途を祝福する電報を打つようにすすめたのは、自分なのだというディーキン氏の話しであつた。一新聞記者がと思われる人があ

るかも知れない。ところがこのディーキン氏は一九二一年のエヴェレスト第一回遠征のときから、その遠征記の發表に關して英國山岳會と交渉を持つていたのである。一九二一年以來海外ニュース部長という職をつづけて守つて來たので、毎回の遠征はすべてディーキン氏の努力によつて紙上に發表されるとともに、その版權料が遠征費に寄與したところも大であつたろう。そればかりでなく、遠征を俗つぽいジャーナリズムのとりこにしなかつた點でも、陰の功勞者であつた。

第一回からの關係であるから、ディーキン氏がマロリーだとか、アーヴィンだとかエヴェレストに召された人たちを個人的に知つているのも不思議ではない。ディーキン氏はスイス隊の人たちにユニオン・ジャックの小旗を携行して呉れるように頼んだのだと語つていた。それは、スイス隊が幸運にもエヴェレストの山頂をきわめた時にはマロリーとアーヴィンのためにその小旗を殘して來てくれまいかという意味であつた。スイス隊はもちろん快諾したのであつたが、彼等にもまだ二人の先輩に感謝するだけの成果はあげられなかつたわけである。

「もしエヴェレストの頂上に達したとき、すでに赤旗がひるがえつていたら、君達はどうするつもりかね。」

とスイス隊に質問して見たといつてディーキン氏は笑つていた。當時、ソ連がエヴェレストを狙つているという噂があつたからである。中立國スイスはソ連の旗をどう扱うかという新聞記者らしい冗談でもあつたわけである。

昨年の十二月十九日、私にとつては悲しい報せの來た日であつた。このラルフ・ディーキン氏が六十四歳を最後として、ロンドンの自邸で急逝したという報道に接したのである。以上に書きしるしたことなどを、私は寂しさとともに想起せずにはいられなかつた。と同時に十二月二十日付のタイムズ紙に詳しく掲載された故人の追悼記を讀んで、私自身のまだまだ覗い知らなかつたこの老新聞人の人柄を知つたのであつた。

「私は山登りは苦手の方でね」といいながらも、エヴェレスト遠征のためには一生懸命に援助を惜しまない人であつたが、追悼記にも、ディーキン氏は海外旅行を最大の趣味としていたし、各地の建築を撮影した寫眞では專門家的でもあつたと書かれている。そして探險などにも深い知識を持つていたために、その方面に知己が多く、その關係もあつてタイムズ紙はつねに珍しい探險ニュースを手に入れることが出來たのだと記されていた。例のコン・ティキ號の航海記も、英國の新聞でいち早くこれを報道したのはタイムズであり、これもディーキン氏の功績なのだと書かれていた。もしエヴェレスト遠征の樂屋裏のエピックが語られるとしたならば、三十餘年間を一貫して遠征記の供給に努めた人物も、當然記されねばなるまいと思うのである。このディーキン氏がエヴェレスト登頂の日を待たずに逝いたことは本當に殘念この上もない。

追悼

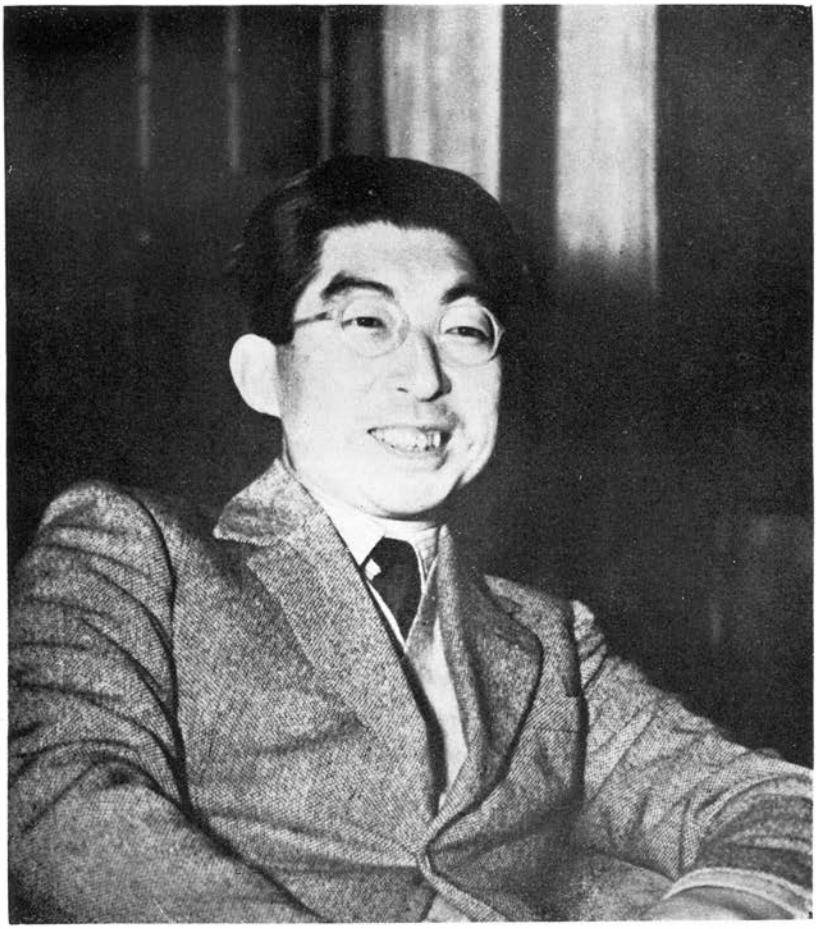
秩父宮殿下を追悼し奉る

槇　有　恒

秩父宮雍仁親王殿下には、昭和二十八年一月四日早曉鶴沼の御別邸にて御逝去あらせられた。御齡五十歳といえば、決して長命とは申せない御壽命であつたが、大正十年の暮にはじめて赤倉の細川邸にお泊りになられて、スキーを妙高山麓に樂しまれたときから爾後三十餘年、山岳に對し深い興味と愛とをお寄せになつたことを思えば、殿下の御生涯に山岳の占める部分は淺いものではなかつた。

殿下が登山をお始めになつたときは、少壯陸軍士官として公務御多端の際であつた。從つて、何時も餘暇の少い遽しい時間の御利用に止まり、スキーの場合などは、概ね土曜日の夜行列車にて赤倉又は五色などに向われ、翌朝到着早々其のまゝスキーを穿いて登山せられ、夕刻に再び山麓の驛から御歸京になつて、月曜の勤務をなさるという風であつた。殿下のスキーは、大なり小なりに登山を折り込んだ行程であつて、狹い練習場に器用な技術を追つて過ごされるようなことは、お好みでなかつた。登山の方は、最初は中房から燕を經て槍ケ岳への行程であつた。また五月の立山に登られたこともあつた。御外遊の際は、大正十四年夏にはスコットランドのベン・ネヴィスに登られ、その冬は瑞西のアレッチ氷河から、グリムゼル峠へのスキーの山旅をなされている。翌年の夏はアルプスの二大中心ともいうべき、ベルナーオーバーランド及びヴァリスの巨峯を、十餘り殆ど御休息の日もないように登つておられる。御歸朝後には穗高、槍ケ岳、小槍、笠ケ岳への縱走が主なものであつて、御健康を害されての後は、再び登山の機會をお持ちになることはなかつた。

其の頃の殿下は、力强い軀幹と手足とを持つた、頑丈な御體格であつた。青年として驚ろくべき健脚であり、一度も疲勞を訴えられたり、困難の前に辟易されるようなことはなかつた。まことに男らしい、そしてそれに相應しい活力と、何人をもひき附けずには措かない御氣立であつた。岩に對しても氷に對してもまた隊員としても、優れた技倆と溫い協力を惜しまれない、登山者として確かに第一級の方であつた。そのため私達隨行者にとつては、何時も樂しく又退屈を感ずるようなことはなかつた。殿下は、また山岳に關する文獻の蒐集にも御熱心であり、このことは御療養生活に何れ程の御慰安であつたろうかと拜察する。



秩父宮雍仁親王殿下
H. I. H. The Prince Chichibu
(1902—1953)

大正13年立山御登山の折の殿下とその一行　（151頁の説明参照）

Prince Chichibu and his party to Mt. Tateyama in 1924.

晩年、殿下は多方面に御執筆發表になつておられたが、登山に關しての御執筆は尠なかつたように思われる。

一九二九年の Alpine Journal に收められたウォルター・ウェストン師と浦松佐美太郎氏の共譯になる、殿下御執筆の登山記 "Eight days in the Japanese Alps" の中に次のお言葉がある。

"But our short existence in this present world, and even eternal life after death does not extend beyond the confines of this universe, and if this be so, then I want the opportunity of abandoning myself to communion with the heart of this illimitable universe—to meditate on it,and to attain to a state of harmony with the 'God' of the universe, even the very Ideal Itself. Mountaineerng, therefore, is not simply a sort of 'fashion' set by society—which, after all, is but a form of vanity. It is a worthy toil with a moral significance, and may become a source of real happiness. The mountains themselves stand as symbols of Eternal Life and serve as the expression of a mighty Spiritual Being."

一人の登山者として山岳の前に立たれた殿下は、謙虚な御心持で自分達を取り卷く世界との交渉に於て、殊に山岳に現われた壯麗な事象の下に、人間としての宿命を諦念せられ、內面的に思索することによつて、此事象を超越して靜安自由な精神の御境地を示されている。

殿下のわが國スポーツ界に殘された御足跡は、まことに偉大なものであることは、今更申すまでもないことであるが、殊に長く御自身御實行になつたのは登山であつた。わが日本山岳會名譽會員であらせられたことは、私達にとつて大きな勵みであり光榮でもあつた。昨年再び英國山岳會名譽會員に推薦を受けられたことは、殿下の如何に國際的に高い地位を占められておられたかを、示すものである。

わが登山界のよき指導者、よき友であらせられた殿下の御急逝は、悲しみに堪えない。謹んで哀悼の意を表し奉る。

殿下の御略歷

名譽會員秩父宮雍仁親王殿下は明治三十五年六月二十五日青山御所で誕生された。七月一日御名を雍仁と命ぜられ淳宮と稱せられた。御幼時は現在の陛下とともに川村純義大將夫妻がお預りしてお育てした時代もあつたが明治四十二年に學習院初等科に入學された。院長は乃木希典であつた。將軍時に年六十。

殿下の學習院時代は大正六年陸軍中央幼年學校の豫科に入學されるまで續いたが、院長は明治四十五年乃木將軍の歿後は大將大迫尚道に代つていた。大正七年豫科から本科に進まれ、九年三月士官候補生として歩兵第三連隊に入隊され、十月士官學校本科に入學された。十一年成年に達せられ秩父宮の宮號を賜つた。同年七月士官學校を卒え、歩兵第三連隊に歸隊され見習士官となられた。十月歩兵少尉に任官、十四年五月中尉に任官され、その月の二十四日に海外見學のための渡歐の旅にのぼられた。アルプスでの本格的の山登りをされたのはこの時代のことであるが、大正天皇の御不例のために殿下の留學は中斷し、急にアメリカを經て歸國されることになつた。日本に歸られたのは昭和二年一月、天皇崩御の後のことであつた。

昭和三年九月御結婚、同年十二月陸軍大學校に入學された。昭和六年大學校を卒業されてから昭和十年八月弘前の歩兵第三十一連隊に大隊長として赴任されるまでは參謀本部に勤務されたが、その間、昭和九年五月には御名代として滿洲國を訪問されている。弘前時代は約一年、翌十一年十二月再び參謀本部附となられたが、英帝ジョージ六世の戴冠式に參列されるため十二年一月から十月まで妃殿下と共に渡歐された。この度びは往復ともにカナダ經由であつたが、歸朝された當時は既に北支事變がはじまつていた。殿下も十三年一月大本營陸軍參謀になられ、第一部第二課に勤務されることになつた。以後昭和十六年三月御病氣のため參謀を免ぜられるまで大本營に勤務されたが、昭和二十年三月陸軍少將に任ぜられ、同年十二月豫備役に入られた。

殿下と登山界

秩父宮が日本山岳會の名譽會員になられたのは、昭和廿五年四月のことであつた。

英國のアルパイン・クラブは一九二八年五月に殿下を名譽會員に推擧している。王立地學協會のフェローになられたのはその前の年であつた。戰爭の結果この二つの會と殿下との關係は永く斷絶狀態にあつたが、アルパイン・クラブは昨年再び殿下をその名譽會員に推擧した。一九二八年の「アルパイン・ジャーナル」には「英國のかつての同盟國に對する親愛の情のしるしとし、かつは殿下御自身に對する敬意を表する意味において名譽會員に推擧した」と出ているが、父陛下の崩御で歸國された殿下が、そのまゝ日本に留まられるの止むなきに至つたことを知つた時アルパイン・クラブの先輩達の失望は大きかつた。同時にわずか一シーズンでアルプスと離れてしまわれた殿下に對する皆んなの同情は非常なものだつた。殿下を名譽會員に推擧しようという話はそんなところから出たもので、幾分なりともそれで殿下の御傷心をおなぐさみしようというのであつた。

一九二九年（第四十一卷）の「アルパイン・ジャーナル」には「日本アルプスの八日間」なる殿下の紀行文が出ている。歐洲アルプスでの殿下の御登山については「山岳」第二十六年第一號に會員渡邊八郎氏の執筆の「秩父宮殿下の瑞西に於ける御登山の概要」なる一文が出ているが、今日から考えると殿下の當時の御登山はアルプスの長い登山の歴史の上でやはり一つの時期を劃するものになつたということが出來る。アルプスすらも世の中の變遷の外に立つことは出來ない。そしてあゝした山登りそのものが、もうその後には存在していないように思うからである。アルプスとしてもそれはまことに樂しいよい時代であつたが、殿下の御一生においてもそれは一つの樂しいよき時代であつたように思われる。殿下がその五十年の御生涯の中に、山を通して一つのよき時代を持たれたとするならば、同じ山に心を打ちこんでいるわれ〳〵としてこれはたしかに大きな喜びであり、もつて慰むるにたるものだといつてもよいだろう。しかし今後日本山岳會が名譽會員に推擧しようというような第二の秩父宮が出て來られるであろうか。そんなことを考えると亡き殿下が日本の登山界で占めておられた地位が、そして殿下の御逝去によつてわれ〳〵の失つたものがどれほど大きなものであるかゞおのずからはつきりする。まして英國のアルパイン・クラブが名譽會員に推擧しようというような殿下が、今後再び日本の皇室の中から出て來られることがあるだろうか。こんなことを考えるとき、われ〳〵が山の世界の一人として殿下を持つたことの意味を一層はつきりと識るのである。

（松方三郎）

「立山御登山の折の殿下」の寫眞説明

此の寫眞は大正十三年五月、秩父宮殿下立山御登山の第一日を芦峅寺、佐伯靜氏邸にお泊りになつたとき、同氏庭前にて細川護立氏の撮影になるものである。寫眞に向つて左から坊城俊良氏、前田利男氏、渡邊八郎氏、三田幸夫氏（前列）、秩父宮殿下、大島亮吉氏、岡部長量氏（後列）、槇である。一行は殿下を中心に宮家から前田、渡邊兩氏と、山並にスキーの友人が加わり計九名の頗る賑やかな隊であつた。芦峅寺から弘法を經て室堂に至り、測行所に宿泊して雄山、淨土等登山の後、劔岳へ向う豫定であつたが、吹雪のためこれは中止した。快晴もあれば粉雪降る日もあつて、變化に富み、殿下も十分御滿足であつた。たゞ當時は積雪期登山の初期の頃なので、地元の方々に非常の御世話になつたので、後年殿下もその折のことを懷しんでよく話されたのであつた。今や寫眞中の、殿下をはじめ大島、岡部兩君も亡く懷舊の情に堪えない。

（槇　有恒）

ヒマラヤン・ノーツ

スイス隊のエヴェレスト

―一九五二年春・秋―

I はしがき

スイスだけのヒマラヤ遠征は一九三六年にはじまる。すなわちわが國の立教隊がナンダ・コートに入つていると同じ頃、アーノルト・ハイム教授とガンサーが、ガルワール地方をくまなく踏査している。續いて一九三九年にはアンドレ・ロックがガルワールに入り、デュナギリ、ラタバン、ゴウリ・バルバートの初登頂に成功した（會報八七號・九一號參照）。戰前にもギャルモ、ディレンフルトなどが、混成隊や國際隊に加わつていたが成果は思わしくはない。一九三〇年代の「ディ・アルペン」（スイス山岳會誌）をみると、マルセル・クルツなどが、丹念にヒマラヤの研究をしている。スイスのヒマラヤ遠征の基礎がためを行つていたとみるべきであろう。

戰後は一九四七年にローネル、ズッター等が、再びガルワールに遠征し、ケダルナートの初登頂などを行つた（山岳四三年一號及び會報一五四號參照）。一九四九年にはルネ・ディッテールがカンチ西方の北東ネパール側のヌプチュなど前衛峯の登攀をした（會報一六七號參照）。一九五〇年にはシュヴァレー等がアビ・ガミンに初登攀している。

これらヒマラヤ七〇〇〇m級峯の遠征の經驗を充分に咀嚼し、來るべき次の目標の八〇〇〇m級峯への攻擊計畫は、着々と進められていたと思われる。これらは主として、在チューリッヒの『山岳調査スイス財團』(Schweizerischen Stiftung für Alpine Forschung) が行つている。これはその前身の『山岳外國遠征財團提案委員』(Initiativcomite für eine Stiftung für alpine Ausland expeditionen) より發展したものと思う（一九四〇年）。今までの遠征の成果は、前者から發行され、左記の報告書にふくまれている。

„Berge der Welt" (Les Montagne du Monde) Bd. 1.—1946, Bd. 2.—1947, Bd. 3.—1948, Bd.4.—1949, Bd. 5.—1950.

おそらく今回のエヴェレストの報告書もこの中にふくまれ、發行されるであろう。

從來の西藏經由のルートが、中共の西藏侵入に伴い、北方經由の道が鎖された。ネパールの獨立とともに、新しい南面からの攻擊が開發されてきた。一九五〇年米國のハウストン、英國のティルマンが、エヴェレストの南面をさぐる觸手をのばすま

で、この方面は殆ど知られていなかつた。

一九五一年英國のシプトン隊によつて、めずらしくもポスト・モンスーンを選んで、エヴェレストの南面に偵察がくり出され、强烈な雨期をおかしてのクーンブ氷河入りが、計畫通りに進まず、就中氷河中の氷瀑の最悪の時期であつたために、サウス・コルに達せられなかつた。しかし登頂可能ルートとしてのサウス・コルの價値は注目されるに至つた（山岳四六・四七年、一七八―一九七頁參照）。

Ⅱ　ブレ・モンスーン攻撃

スイスの南面からのエヴェレスト攻撃計畫は一九四九年にネパール政府に提出されたが、一九五一年末に一九五二年春の入國が許可された。

出發に先立つてシプトン達との話合いがジュネーヴで行われたが、裝備・目的などが異るためにもの別れとなつた。すなわち、シプトン達はガイドをまじえる遠征隊とでは登りたくないといい、スイス側のガイド隊は英國と一緒に登りたくないと主張した。尤もスイス側は遮二無二、登頂一點張りの主義をもつていたためでもある。

スイス隊はジュネーヴ在住のスイス人で組織し、アルプスは端から端まで登り極めた練達の士で、ヒマラヤは一九三九年以來の遠征の經驗をもつ有能な登山家で組織された。最强メンバーの顔ぶれをあげると――

總指揮　ウィス・デュナント（Dr. Eduoard Wyss-Dunant）（醫師・心理學者）

攻擊隊長　ルネ・ディッテール（René Dittert）

攻擊隊　アンドレ・ロック（André Roch）

レイモン・ランベール（Raymond Lambert）（ガイド）

サポート隊　ルネ・オーベル（René Aubert）

レオン・フロリー（Léon Flory）

ジャン・ジャック・アスペル（Jean-Jacques Asper）（最年少で天才的なクライマー）

エルンスト・ホフシュテッテル（Ernst Hofstetter）（スキーヤーで最强）

ピエール・シャルル・ボンナン（Pierre Charles Bonnant）

ガブリエル・シュヴァレー（Dr. Gabriel Chevalley）

科學隊　アウグスティン・ロンバール教授（Prof. Augustin Lombard）（地質）

アルベルト・チンメルマン（Albert Zimmermann）（植物）

ロブジンガー・デレンバッハ夫人（Mme Lob-

singer Dellenbach)（人類）

サーダー　テンシン（Tensing）（シェルパ）

裝備はフランス隊のアンナプルナの經驗を生かして輕裝とし、世界の有福國であり、科學國でもあるので立派だつた。天幕は二重カンバス、內張りは白鳥の綿毛を用い等溫的である。寢袋は空氣マット附ゴム防水二人用で5キログラム。晝期的なのは酸素補給器（ロスカー・ウイス教授考案）で重量は1キログラムに滿たない。危險地帶の色分けした地圖、高所用の靴は柔軟でないので、馴鹿の毛皮のものを工夫した。

先發隊は三月一八日スイスから空路をネパールの首都カトマンズにつき、本隊は三月末にカトマンズを出て、ナムチェ・バザールに進んだ。ルートはシプトン隊と同じであるから省略する。シェルパ一二名に、クリーは一六五人をつれ、四月二三日にクーンブ氷河の末端に近い五〇四七mに基地をもうけた。天候は朝は晴れているが、午後になると降雪。

作戰は高所滯在を短かくし、體力減退を防ぎ、六人のクライマーが六五〇〇から八〇〇〇mにルートを拓き、そのうち最强の二名が頂上に向うことに決定された。攻擊も西風を考え、分秒の時間も計算に入れられていた。

四月二六日C3から攻擊進發は開始され、九人のクライマーと一二人のシェルパが天幕を前進せしめた。その高度は次の通りである。

C1　五二五〇m
C2　五五九九m
C3　五八九八m
C4　六四三六m
C5　六八九八m

C3の手前には巾5mのクレヴァスがありロープの橋をかけてすすむ。

西部盆地の下端で、上では氷雪崩が出てルートがおゝわれる。

ローツェ氷河下端。

ローツェ氷河上のC5についた攻擊隊長ディッテールは五月二五日に第一次頂上攻略を宣言した。ランベール、オーベル、フロリーはテンシン以下八名のシェルパをつれて出發したが、シェルパ三名が落伍し、その夜はまんぢりともしない寒い夜を送つた。翌日はサウス・コルに達したが、苛酷な風にさいなまれた。C6は七八八〇mにたてた。

五月二七日はたえまなく天幕をはばたく風にあけた。登頂を目指す前記の四名は、エヴェレスト南東峰の基部をめざして登り、二時間後に八〇一五mの小コルに達した。フロリーとオーベルは道をつけつつ斜面を登り續け、その尾根の頂につき、エヴェレストから下つたアレートにとりつく時、氣がつくとすでに午後三時だつた。四人で協議の結果、オーベルとフロリーはサウス・コルのC6で登頂隊の歸りをまつことになつた。殘つたランベールとテンシンの二人は天幕を張つた。C7は八三九七m。時に午後四時。間もなく殘酷な寒冷の夜三夜を迎え、なぐりあつて時を過ごし、飲食はあまりとれなかつた。

五月二八日。ヌプツェに雲がわいて風にあおられていた。午

前六時、二人は三個の酸素補給器と少量の食糧をもつて頂上へ出發した。やがてエヴェレスト南峰の頂上まで續く雪庇の出ているところにきた。この尾根は雪が膝までもぐり、ラッセルを代つたが、三歩進んで一息入れなければならなかつた。いつの間にか雪が降り、登高は一歩ごとに苦痛をました。やがて最後のピラミッドの手前の岩場まできたが急に天候が惡化した。これ以上登ることは暴擧だと考えて退却を決定した。この到達點は、今まで達した誰のものより高い、八六〇〇m（二八二一〇呎）だつた。酸素の補給は行動中は吸入できなかつたが、その效果は著しかつた。とはいえ、二〇分しか補給してくれなかつた。足場をさがしながら、正午すぎサウス・コルに歸還した。テンシンは極度の疲勞のため半日寢込んだ。彼の活躍は目ざましく、小柄でよいクライマーであつた。

第二次攻略は五月二九日ディッテール指揮のもとに、ロック、アスペル、ホフシュテッテル、シュヴァレーが同行した。出發前にシェルパがうまくつかめず、ロックは咳、アスペルは偵察で疲勞していた。サウス・コルへの途中で第一次隊とあつたが、全員が耐久力の限界に達しているのが見られた。やつたことを話してくれたが、頂上に達せられることには確信をえて、午後六時にサウス・コルのC6についた。すでに風は出ていた。

翌朝五月三〇日は晴れていたが、風は物凄く、凍傷にかゝるほどだつた。C7へ登るのは明日まで延期し、第二夜を送つた。五月三一日も相變らず風は強く、シェルパは進めず重大なジレンマに直面し、結論は下ることにきまつた。この高さでは人間の強さは衰退してくる。かくしてサウス・コルでの第三夜を迎えた。C5へ下る六月一日はもはや衰弱した隊となつていた。この日は皮肉にも天氣は靜かだつた。しかしサルキ（シェルパ）がコルで三晩も寢ていたのでシュヴァレーがつききりで降してやらねばならなかつた。三日前に登つた道をあえぎながら下つた。午後六時半にデポーの小さい寨地についた。サルキのためにこゝに泊り、ロックなどが月明りに助けられて下り、翌朝シェルパ二名の派遣をたのんだ。陽が出るまで（八時半頃）は動こうにも動けず、サルキは最惡の狀態で下つて行つた。C5でランベール等にあい、翌六月三日C5をたちBCに下つた。六月六日BCを撤收してナムチェ・バザールに引揚げた。

一方科學班はナムチェ峠をベースとして、シプトン隊の活躍した方面をさぐり、國境のナングパ・ラ（五八〇六m）などをさぐつた。こゝでチョ・オユウの隊員にあつた。また足底で歩く動物のplantigradesの足跡を見つけた。長さ二五—三〇糎、幅一一—一五糎、ベースは三五糎、進行は一列で、四足獸としても體重は六〇—八〇瓩と推定された。またチンメルマンは豹を見たといわれる。

かくして一行は最高到達點をクライマックスとして、春のブ

レ・モンスーンの攻撃を終つて歸國した。それには秋に捲土重來する豫約が秘められていた。

Ⅲ　ポスト・モンスーンの攻撃

秋の攻撃は春の隊員の二名が加わり、他は新しいメンバーで、六名から構成された。

隊　長　ガブリエル・シュヴァレー
隊　員　レイモン・ランベール
　　ジャン・ビュジオ（Jean Buzio）
　　ギュスターヴ・グロス（Gustave Gross）
　　エルネスト・ライス（Ernest Reiss）
　　アルター・シュペール（Arther Spöhel）
サーダー　テンシン

八月二八日スイスを出發し、改良を加えた新裝備は四臺の飛行機につんで、九月上旬カトマンズに到着した。

九月一〇日に一三名のシェルパと二五一名の人夫に荷をもたせて出發した。シェルパはナムチェ・バザールにつくと二二名に增加される。これは春の失敗にかんがみサウス・コル奪取に必要な人數である。

途中モンスーンのドシャ降りにあい、十日も陽の目を見なかつた。ズウド・コシは增水し高廻りをよぎなくされた。冷雨が雪と急變するや人夫二名があつけなく凍死してしまつた。救援人夫に助けられて九月二九日ナムチェ・バザールに到着した。十月二日の出發まで、荷物を點檢・整備した。

モンスーンは過ぎ、エヴェレストは秋の書割りの奥の高い空間に、雪煙をみなぎらせ、雄姿を現わした。ランベールは氷瀑の偵察をしたが春よりも狀況はよく、十月二日にはC2が建設された。

十月七日に春のBCについたが、雪がないのでC1（五二五〇m）を强化代用した。雪は氷河の奥に後退し、澄みきつた大氣は春とはくらぶべくもなくすばらしかつた。早速攻撃にうつり、十月一四日にC3（六〇〇〇m）、同二〇日にC4（六四五〇m）を設營し、樂にコンディションをとゝのえられた。しかし氷河の中は春とはくらべものにならぬほど變化し、氷瀑やクレバースを右に左にからんでルートをとつて進んだ。上部は深い粉雪におゝわれ、午後と夕方には雪崩が頻發した。

ランベールは終始トップで迅速適確な指揮をとり、十月二七日C5よりサウス・コルへ向い、翌日ビュジオがこれに續いた。ローツェ氷河のとりつきには固定綱をはつて安全をはかつた。十月三一日シュヴァレーらがドレェガー式酸素補給器の試驗に出かけたとき、ローツェ氷河には三組のシェルパ・パーティがとりついていた。午前十時頃同氷河の上部のクーロアールのセラックがさけ、雪崩が出て、四名のシェルパが流された。このうちミンマ・ドルジェは肋骨々折のため午後死亡した。他

の者も相當負傷し、十一月二日C4に下ろした。働き手のシェルパを後退させたのは痛手であつた。

寒さはきびしかつたが、天候は良好な日がつづいていた。ミンマの墓が六一〇〇mのモレーンにたてられてからは、寒氣と猛烈な風に夜もおちおち眠れなかつたがC6・C7の設營は齊々と進められた。しかし寒氣は防ぎようがなく、攻擊は荷物の配置とともに一進一退をした。

十一月一八日ランベールはサウス・コルに向つたが、一九日に七八八〇mのサウス・コルにC8をたてた。その夜はマイナス四〇度で、まんぢりともできなかつた。翌二〇日にはC9の設營のために午前一一時半に出發した。烈風と寒冷のため八一〇〇mに達したとき、シェルパ達はもう一歩も踏みだすことが出來なかつた。(これが秋の高所到達點である。)同日夕方一行はC7にかえつた。十一月二一日C7を去つて下降につき、正午頃C5についた。翌日は大吹雪になり、ほうほうの態でC3をへてC1に下つた。

秋の攻擊はモンスーンによつて、BC到達が遲れ、雪崩でアクシデントが起り、雪の狀態でテントが增え、メンバーも少なかつたので、よい天候のときの機會を逸してしまつた。

Ⅳ あとがき

登頂を主目標にしたスイス隊には、世界の注目がむけられていた。コッテ牛のようにタフそのもののランベールにしても、エヴェレストの峯頂は下せなかつた。生理的肉體的にはまだ餘裕はあつたが、風と寒さとはどうにもならなかつた。しかしエヴェレストの登頂の希望がすてられたわけではない。否、英國の八回の試登と今回のスイスの新見參の經驗とは、ヒマラヤへの多くの問題に、今まで體驗せられなかつた多くの效果をもたらした。こゝではスイス隊によつて知られた、ディッテール、ランベール、シュヴァレーらの經驗をもとにして、その成果をまとめてみよう。

1 隊員　エヴェレスト・クライマーの最適の年令(スイス人の場合)は三〇歲から四三歲の間であるという結論をえた。隊員の數は八名ぐらいがよいという。誰を見ても體力は精力的で最强、技術も優秀者である。

2 シェルパ　成功のためには多數必要である(春は一三名、秋は二二名)。彼等の裝備もヨーロッパ人と同じものを與え、馴致も同樣にしなければいけない。

3 裝備　本文中にのべたが概ね滿足であつた。輕裝でなければ迅速な攻擊はできない。

4 幕營　山の狀態にもよるが、秋の方が中繼キャンプが多くなる。七三一五m以上では身體を最良のコンディションにおくためにぜひ必要で、二―三人用のものがよい。

5 馴致　馴致の恩惠はC5(六九〇〇m)からサウス・コ

ル（七八八〇 m）の間で失われる。これはコルへのルートのせいもある。最終の登攀を行う超高度は空氣が稀薄で、一日に三〇〇m以上を登ると體力精力は使いはたされてしまう。コルの滯在も三日以上は無理のようだ。

6 酸素　生理的肉體的な困難は七五〇〇m以上で出てくるから酸素補給器が必要である。もし無酸素ならば、人間の登高限界は八五三〇mまでであろう。（八四〇〇mまでは行けた）行動中は酸素はとれない。今後はサウス・コルと頂上間の使用酸素量をきめなければならない。二人で頂上に行くとしても一時間に四二mぐらいの速度であつた。

7 モンスーン　春と秋とはどちらがよいか一概にきめられない。天候のよいのは秋で、幕營を少く進められるのは春で、春の方がやや有利かと思われる。

8 雪　雪も登高を困難ならしめるが、八六〇〇m以上でどうなつているかは未知數である。秋は雪崩が多い。

9 寒さと風　六五〇〇m以上では、寒さは着衣でさけられるが、風はなんとも致し方がない。登頂は風との戰いが決定するといつても過言ではない。サウス・コルで風が出れば、外には出られず寢られもしない。

10 南面　一般に南面は北面にくらべて風は少いとされていたが、エヴェレストを吹きまくる風は暴威をきわめ、北でも南でも大して差がない。（筆者の感じ方では南面の方が惡いように思われる。）

アンナプルナ隊がそうであつたように、スイス隊も隊のスピードをかくことのできない絶對條件にしていた。また組織と配備を強化し、馴致を重視している。

世界の注視をあびて行われた春と秋の、前例のない二回の力強い攻撃も、再びエヴェレストの頂上を踏むことはできなかつた。ランベールが春の攻撃の最後にいつた言葉――こゝにこそ、すばらしい遠征の終局がある――(Et voilà la fin d'une belle expédition !)が本當に實現される日はいつであろうか。

以上の記述は主として英國のザ・タイムズ及び朝日新聞社がタイムズとの特約によつて同紙上に發表された記事を基に纒めたものである。公式報告が公刊されゝば、さらに詳細に、遠征の模樣も成果も解るであろう。もし記述中に不審の點があれば、筆者の解讀不足によるものであることを申添えておく。

なお現在までに筆者の手許で、本遠征隊の報告としてノートされているものは左記の二點である。

§ Everest 1952. par André Roch.
Paris : Editions Jeheber, 1952. Nov. Collection "Montagne-Expeditions" 27×20.5 cm. 16 p. de préface du Dr. Wyss-Dunant. 96. photo (8 colour)

§ The Mountain World 1953. Annual publication for the Swiss Foundation for Alpine Research. New York : Harper & Bro. 1953. June. 64 page of pictures.

【田中栄蔵】

一九五三年度本會役員

會長　槇　有恒

理事　成瀬　岩雄　渡邊　公平　交野　武一
藤井　運平　望月　達夫　村山　雅美
村木潤次郎　金坂　一郎　加藤　泰安
舟橋　明賢　山田　二郎　沼倉寛二郎
大塚　博美　杉本　義信　今村　正二

評議員　日高信六郎　神谷　恭　沼井鐵太郎
松方　三郎　岩永　信雄　別宮　貞俊
三田　幸夫　今西　錦司　津田　周二
伊藤秀五郎　島田　巽　堀田　彌一
山崎　春雄　谷口　現吉　村井　米子
篠田　軍治　西堀榮三郎　入澤　文明

（支部長在職者）

藤島源太郎（越後）　伊藤彌十郎（福島）
大澤伊三郎（山梨）　高山忠四郎（信濃）
織田　收（山陰）　中田　勇吉（富山）
大室　貞一（静岡）　池田　知幸（石川）

監事　石原　憲治　林　和夫

ヒマラヤ委員會

委員長　槇　有恒

委員　松方　三郎　日高信六郎　西堀榮三郎
木原　均　藤島　敏男　堀田　彌一
三田　幸夫　伊集院虎一　今西　錦司
早川　種三

SANGAKU

The Journal of The Japanese Alpine Club

Vol. XLVIII **Issued in August, 1953**

Contents

Annapurna and Manaslu, 1952 ·····By Kinji Imanishi····· 1
Notes on "The Club-Room of Zermatt" ·····By Iwao Naruse····· 60
A Winter Journey to the Mountains in the Shiretoko Peninsular
By A.A.C. Kyoto & The Mountaineering Club of The Kyoto University·····101
Mount Kiso-Ontake in Summer, Akagawa-dani (valley)
and Denjo-gawa (river)·····By Kiyoshi Arai·····119
Prince Chichibu and the "Helvetia-Hütte" in Hokkaido
·····By Haruo Yamazaki·····130
An Intimate Journey to the Land of Segantini
·····By Masao Tsuda·····136
The British and the Himalayan Expeditions
·····By Tatsumi Shimada·····143
In Memoriam : H.I.H. The Prince Chichibu
·····By Yuko Maki & Saburo Matsukata·····148
Himalayan Notes : The Swiss Expeditions to Everest, 1952
·····By Eizo Tanaka·····152
Annapurna and Manaslu, 1952 (in English)
·····By Kinji Imanishi····· 1
The Theory of Belaying·····By Ichiro Kanesaka····· 3

28 plates 5 maps

.....

Editor : T. Mochizuki
Associate Editors : K. Tanabe, I. Naruse, E. Tanaka

The Japanese Alpine Club

President : Yuko Maki, Esq.
Honorary Secretary: Iwao Naruse, Esq.

Committee :

Iwao Naruse, Esq.
Takeichi Katano, Esq.
Tatsuo Mochizuki, Esq.
Junjiro Muraki, Esq.
Taian Kato, Esq.
Jiro Yamada, Esq.
Hiromi Otsuka, Esq.
Shoji Imamura, Esq.
Kohei Watanabe, Esq.
Umpei Fujii, Esq.
Masami Murayama, Esq.
Ichiro Kanesaka, Esq.
Meiken Funabashi, Esq.
Kanjiro Numakura, Esq.
Yoshinobu Sugimoto, Esq.

Address : 6-4 chome, Kanda-Surugadai,
Chiyoda-ku, Tokyo, Japan.

Annapurna and Manaslu, 1952.

A Japanese reconnaissance party of six members* including two scientists and one medical doctor left Kathmandu on September 14, 1952, with the object of exploring the Manaslu area, especially the Buri Gandaki side of the mountain, and collecting specimens and materials there in the field of natural history. Led by Dr. K. Imanishi, Prof. of Animal Ecology at the Kyoto University, the party concentrated the first part of its journey on the Marsyandi side of Annapurna; it attempted first Annapurna IV following the Tilman's route of 1950. The attempt, however, was frustrated by a heavy snowfall. The Japanese team, therefore, returned from 5700 m. at the foot of the first ice step. The ropes fixed there by the Tilman party still remained intact, and an axehead which had been left by the same party was recovered by our party. Before the team turned to Manaslu, they climbed Chulu (ca. 6200 m.) on the northern side of the Marsyandi valley. Three camps were pitched at 5300 m., 5500 m. and 5850 m., respectively The "Waldgrenze" was passed at 4500 m. and the "Schneegrenze at 5500. Ascent was made on October 23 without technical difficulties.

On the return journey to Thonje, one group of three members traced part of the route to Namun Bhanjyang to photograph the western face of Manaslu.

The monsoon was already over. In the forests, the crimson foliage of creepers and the yellow leaves of birches and maples looked beautiful under the blue sky, but the only flower especially impressive in the season was the purplish gentian. The party ascended along the Dudh Khola. Some Bhutias were still found at Bimtakhoti as Larkya Bhanjyang had been opened for yak, zho and sheep caravans. On November 9, the party crossed the pass, the water-shed of which was covered by a thin layer of fresh snow.

Observable from the Sama side of the pass through the glaciers and snow-clad slopes was a direct route to the upper plateau region of Manaslu. It was inferred that this route is more advantageous;

for the two cols, one of which is situated between the main peak of Manaslu and the northern peak and the other between the northern peak and its spur, can be used to set up advance bases. This route may probably be the one discovered by Major Roberts and was later described by Mr. Tilman in his new book, "Nepal Himalaya" (p. 201).

The base camp was established at Sama. The north-eastern face of Manaslu had been continuously explored until this camp was evacuated on November 29. The porters were recruited from Lidanda, as Sama was badly infested with typhoid fever. The water of the Buri Gandaki receded and permitted passage on the winter route along the riverside. Since the corn and rice fields were cleared and dried up, any spot could be used as a camping ground. Near Arughat Bazar, butterfies and dragonflies were again found active. The party returned to Kathmandu on December 15.

From the experience of this expedition, the Himalayan Committee of the Japanese Alpine Club decided to send another party in 1953 to scale Manaslu from the Sama side in the pre-monssoon season.

K. Imanishi

Notes :

* Dr. K. Imanishi (leader), Messrs. J. Taguchi, M. Takagi, S. Nakao, K. Hayashi and S. Takebushi.
Mr. Takebushi left Kathmandu on Oct. 5, as he could not arrive there with the main party.
Mr. Dilli Bahadur accompanied the whole journey as a liaison officer, whose assistance was most valuable and indispensable.
They had also six Sherpas, namely : Gyalgen, Sarki, Pansy, Angtsering, Anno and Dako.

確　　保　　論

金　坂　一　郎

（目　次）

§1　確保理論における原則
§2　彈性體の場合
§3　模型による實驗
§4　實技上の問題
§5　制動確保
§6　器具について

§1　確保理論における原則

(A)　直接確保

垂直壁を直登しているトップが，墜落した場合のことを考える．落下距離はザイルの長さの2倍となる．いまザイルの確保端は，しつかりしたものに完全に固定され，墜落者の重量はザイルの他端に集中しているものとする．このような確保法を，ここでは直接確保と呼ぶことにする．空氣抵抗およびザイル重量を無視し，かつザイルは常に全長にわたつて一様に伸びを生じるものと假定すれば，ザイルに生じる張力（いまの場合これは確保端および墜落者が受ける力に等しい）は，落下距離に無關係に一定である．

（證明）　ザイルが墜落者の運動エネルギーを受けて生じる伸びを y で示せば，ザイルの張力 f は伸びの函數であるから，これを

$$f=f(y)$$

と書くことにする．いまザイルの長さ L の場合，落下重量 W の衝撃によつて y_1 の伸びを生じるものとすれば，全落下距離は $2L+y_1$ となり，墜落者が失つた位置エネルギーは $W(2L+y_1)$ である．このときザイルが切斷しないものと假定すれば，この位置エネルギーはザイルを引伸ばす仕事に費されるから，

$$\int_0^{y_1} f(y)dy=W(2L+y_1) \qquad (1)$$

つぎに落下重量はいまと同じであるが，ザイルの長さが n 倍 $(n>1)$ になり，落下距離も n 倍になつた場合を考える．この長さ nL のザイルに生じる張力を，$g(y)$ で示すことにする．墜落の運動エネルギーによつて，このザイルに生じた伸びを y_2 とし，つぎの積分の差を考える．

$$\int_0^{y_2} g(y)dy - \int_0^{ny_1} g(y)dy = \int_{ny_1}^{y_2} g(y)dy$$

まず積分學の平均値の定理を適用して，$g(ny_1)$ と $g(y_2)$ との間の適當な値 $g(y_3)$ を選んで，上式の右邊を

$$= g(y_3)\cdot(y_2 - ny_1)$$

と書きなおす．ここで，g ザイルに ny_1 の伸びを生ぜしめたときの張力は，f ザイルに y_1 の伸びを生ぜしめたときの張力に等しい，すなわち $g(ny_1)=f(y_1)$ なることに注目すれば，

$$\int_0^{ny_1} g(y)dy = n\int_0^{y_1} f(y)dy$$

が成立することは容易に證明出來る．これを上式に代入して，

$$\int_0^{y_2} g(y)dy - n\int_0^{y_1} f(y)dy = g(y_3)\cdot(y_2 - ny_1)$$

左邊に（1）式を適用して，

$$W(2nL+y_2) - nW(2L+y_1) = g(y_3)\cdot(y_2 - ny_1)$$

$$\therefore\quad W(y_2 - ny_1) = g(y_3)\cdot(y_2 - ny_1)$$

上式において，$g(y_3)$ は $g(y_2)$ と $g(ny_1)=f(y_1)$ との間の値をとるから，$g(y_3)>W$ なることは明らかである．（もし $g(y_3)\leqq W$ とすれば，$f(y_1)\leqq W$ または $g(y_2)\leqq W$ が成立し，この場合には落下を阻止することが出來ず，假定に反する．）したがつて上式が成立するためには，

$$y_2 = ny_1$$

$$\therefore\quad g(y_2) = g(ny_1) = f(y_1)$$ （証明終り）

すなわち垂直壁を直登するトップの墜落を阻止することによつて，ザイルに生じる張力は，直接確保の場合には，落下距離に無關係に一定である．

(B) 間接確保

實際の確保においては，以上に述べたような完全な直接確保はありえない．たとえ確保點が完全な剛體に近いような場合でも，ザイルを完全に固定することは出來ないので，張

力によつていくらかの滑り出しはあるはずである．また落下重量はザイルの一端に集中する譯ではなく，墜落者自體の有する彈力が緩衝作用を現し，かつ一般には確保者も出來るだけの緩衝手段をとるはずである．このように，何等かの緩衝作用が含まれる場合を，ここでは一般的に間接確保と呼ぶことにする．

間接確保におけるザイル張力は，一般には直接確保の場合よりも小さい．

（證明）　ザイルに生じる張力を前と同樣 $f(y)$ とし，緩衝部に生じる張力（または壓力，摩擦力等）h もまた緩衝部における歪み（または滑り）y の函數として $h(y)$ とする．このザイルと緩衝部とが直列に連結されているものとし，その合成された特性を $\phi(y)$ で示すことにする．

直接確保の場合にこのザイルに生じる伸びを y_1 とし，間接確保の場合にザイルに生じる伸びを y_2，同じく緩衝部に生じる歪みを y_3 とすれば，間接確保における全體の伸びは y_2+y_3 である．このときザイルおよび緩衝部に與えられた仕事

$$\int_0^{y_2+y_3}\phi(y)dy$$

をザイルおよび緩衝部の特性 $f(y)$，$h(y)$ を用いて書變えると，

$$=\int_0^{y_2}f(y)dy+\int_0^{y_3}h(y)dy$$

$$\therefore\quad \int_0^{y_2+y_3}\phi(y)dy=\int_0^{y_1}f(y)dy+\int_{y_1}^{y_2}f(y)dy+\int_0^{y_3}h(y)dy$$

ここで上式左邊および右邊第一項に（1）式を適用すれば，

$$W(2L+y_2+y_3)=W(2L+y_1)+\int_{y_1}^{y_2}f(y)dy+\int_0^{y_3}h(y)dy$$

$$\therefore\quad W(y_2+y_3-y_1)=\int_{y_1}^{y_2}f(y)dy+\int_0^{y_3}h(y)dy$$

右邊に平均値の定理を適用し，$f(y_1)$ と $f(y_2)$ との間の適當な値 $f(y_4)$，$h(o)$ と $h(y_3)$ との間の適當な値 $h(y_5)$ を用いて，

$$W(y_2+y_3-y_1)=(y_2-y_1)\cdot f(y_4)+y_3\cdot h(y_5)$$

$$\therefore\quad (y_2-y_1)\{f(y_4)-W\}+y_3\{h(y_5)-W\}=0$$

上式において $f(y_4)>W$ なることは明らかである．したがつて $h(y_5)-W$ の正負に應じて，y_2-y_1 の正負，すなわち y_2 と y_1 との大小が定まる．

まず $h(y_5)-W<0$，すなわち緩衝部の平均張力が落下重量よりも小さい場合には，$y_2-y_1>0$ となり，$f(y_1)<f(y_2)$ である．しかるに $f(y_2)=\phi(y_2+y_3)$ であるから，

$$f(y_1) < \phi(y_2+y_3)$$

すなわち緩衝部が存在するにもかかわらず，ザイル張力は直接確保の場合よりも増加する．

つぎに $h(y_5)-W=0$，すなわち緩衝部の平均張力が落下重量に等しい場合には $y_2-y_1=0$ で，

$$f(y_1)=\phi(y_2+y_3)$$

この場合には緩衝部が存在しても，ザイルに生じる張力は直接確保の場合と同じで，全體の伸びが増加し，全落下距離が長くなるだけである．

最後に $h(y_5)-W>0$，すなわち緩衝部の平均張力が落下重量よりも大きい場合に限り，

$$f(y_1)>\phi(y_2+y_3)$$

となり，ザイル張力が直接確保の場合よりも小さくなる．　（證明終り）

以上の第三の場合にのみ，緩衝部が有效に働いたということが出來るが，從來の確保法によるものは常にこの場合に當たる．最近米國において新しい確保法として，Dynamic Belay と稱するものが注目されているが，これを無思慮に用いるときは，以上の第一，第二の無意味な緩衝法に近い場合が起こりうるので，とくに注意を要する．

以上の主要二原則の外に，確保者が承知していなければならない法則を，證明なしで書きならべると，

（1）　確保のときザイルに生じる張力は，落下重量が大きい程大きくなるが，その割合はザイルの衝撃特性 $f(y)$ 等によつて定まるもので，一般的に述べることは出來ない．

（2）　衝撃特性の型が同じザイルにおいては，伸びの大きいもの程ザイル張力が小さくて濟む．

（3）　確保點と墜落者とを結ぶザイルの長さが一定のときは，ザイルの張力は落下の垂直距離が大なる程大きくなる．落下の垂直距離が一定の場合には，確保點と墜落者とを結ぶザイルの長さが短い程ザイル張力は大きくなる．

（4）　同じように作られたザイルにおいては，墜落を阻止しうる最大落下重量は，ザイルの斷面積（または單位長さの重量）に比例して增加する．しかし同一重量の落下に對しては，太いザイル程大きい張力を生じる．

（5）　間接確保においては，緩衝法を適當に用いることによつて，ザイル張力を一層減少せしめることが出來，その理論上の最低限は落下重量に等しい．

（6）　間接確保において，一定の緩衝部がある場合には，ザイル張力は落下距離が大なる程大きくなり，その理論上の最大限は直接確保におけるザイル張力に等しい．

(C) 吟 味

上記の諸原則が成立するためには，ザイルの特性 $f(y)$ 等が増加函數であることが必要である．しからざるときは成立する場合もあり，成立しない場合もある．嚴密にいえば $f(y)$ が増加函數でない場合も有りうるであろう．しかし實際問題としては，$f(y)$ が平均して増加する傾向にあれば以上の議論を適用して差支えなく，ザイルの張力というような大ざつぱな問題においては，それほどやかましく考える必要はないであろう．

空氣抵抗の無視は大した問題とはならない．推算によると，空氣抵抗によつて失われる落下の運動エネルギーは，落下距離 10 m で 1 %，20m で 5 %，40 m で 10%，60 m で 15% 程度であるに過ぎない．ザイル重量の無視についても同様である．30 m ザイルを一杯にくり出したとき（50 m 以上の墜落）でさえも，ザイル重量は普通體重の 5 % 前後に過ぎず，しかもその全重量が一端に集中するわけでもないから，（計算上はザイル重量の 1/2 を墜落重量に附加することになる）この問題もとるに足らない．

つぎに證明中には明記しなかつたが，ザイルの張力と伸びとの關係 $f=f(y)$ 等は，衝撃速度に無關係に一定なることが假定されている．一般の衝撃試驗の結果によると，材料の特性は衝撃速度によつていくらか變わることが明らかにされている．ザイルの場合には問題は一層複雜になる．衝撃はザイルの一端に加えられ，その速度が落下距離その他別の原因によつて變化し，かつ衝撃を受けるザイルの長さも不定であるからである．しかしわれわれの問題としては，それほど精密な解答は必要ないから，この問題はこのままにしておくことにする．

最後にとり上げるのは，ザイルが全長にわたつて一様に伸びるという假定である．實際の場合には，ザイルの一端に與えられた伸びは，波動となつて他端の方向に傳播する．これについて一般的に論じることは困難であるから，次項において，ザイルが彈性體であると假定して計算を行い，これによつて一般の場合を類推することにする．

なおザイルの引張り試驗によつて，ザイルの張力と伸びとの關係は，比較的容易に知ることが出來るものであるが，この靜荷重による試驗結果を，衝撃荷重による試驗（われわれに必要なものはこの方である）に代用出來ないかという問題がある．これについても，結局は實驗によつて比較することによつて，解答を與えられることになろうが，いまこの議論においては，一應靜荷重特性を衝撃荷重特性に代用して，議論を進めて行くことにする．

§ 2 彈性體の場合

ザイルは一般には彈性體ということは出來ない．しかしこれを彈性體と假定して計算すれば，容易に定量的の解答を得ることが出來，これによつて大ざつぱなものではあるが具體的の數値を得られるから，大體の見當をつけるのに便利である．

(A) 直接確保

彈性體の場合には，(1) 式におけるザイル張力 $f(y)$ は伸び率 y/L に比例するから，比例常數 K を用いて，

$$f(y)=Ky/L \tag{2}$$

とし，これを (1) 式に代入して，ザイルに生じる最大張力 F を求めれば，

$$F=\frac{Ky_1}{L}=W\left(1+\sqrt{1+\frac{4K}{W}}\right) \tag{3}$$

K が W に比して十分大きいときは，

$$F\fallingdotseq 2\sqrt{WK} \tag{4}$$

つぎに (2) 式の f にザイルの抗張力を，y/L にそれに對する伸びを代入して，K の値を求めて見る．今日多く使用されるマニラ麻の 12 mm ザイルを例とすれば，公稱抗張力は 1,200 kg 前後であるが，實際に使用する場合には，結び目やカラビーナの使用によつて，これが大體半分になり，新しいザイルに對して 600 kg 程度ではないかと考えられる．このときの伸びを 10% と假定すれば，

$$K=\frac{600}{0.1}=6,000\ \mathrm{kg}$$

いま落下重量を 70 kg と假定して，これを (4) 式に代入すれば，

$$F\fallingdotseq 2\sqrt{6,000\times 70}=1,300\ \mathrm{kg}$$

すなわちザイルの抗張力 600 kg を，はるかに上まわるので，ザイルは簡單に切斷する．しかしザイルが何程の落下重量に耐えうるか，というような問題については，このような大ざつぱな計算では不適當で，むしろ靜荷重試驗より得られるザイルの切斷仕事量から計算すべきであろう．この問題については，§ 6 において論じることにする．

(B) 衝撃によるザイルの振動

いままでの議論においては，ザイルは荷重の與え方に無關係に，常に全長にわたつて一樣に伸びるものと假定したが，實際には伸びおよび張力は，一端から他端に向かつて波動として傳播する．この狀態を彈性體のザイルについて調べて見よう．

ザイルの固定端を原點として下方に x 軸をとり，ザイル上の位置を x，任意の點におけ

る伸びを y, 時間を t とすれば, 波動方程式

$$\frac{\partial^2 y}{\partial t^2}=c^2\frac{\partial^2 y}{\partial x^2}\quad(0\leqq x\leqq L,\ 0\leqq t)$$

が成立する. ただし $c^2=KLg/pW$ で, 式中 g は重力の加速度, pW はザイル重量を示す. いまの場合の境界條件は

$$y|_{x=0}=0$$

$$\frac{W}{g}\cdot\frac{\partial^2 y}{\partial t^2}\bigg|_{x=L}=-K\frac{\partial y}{\partial x}\bigg|_{x=L}$$

初期條件は

$$y|_{t=0}=0$$

$$\frac{\partial y}{\partial t}\bigg|_{t=0}=0\qquad(0\leqq x<L)$$

$$=2\sqrt{gL}\quad(x=L)$$

これを三角級數によつて解き,

$$f(x,t)=K\frac{\partial y}{\partial x}$$

$$=4\sqrt{WKp}\sum_{n=1}^{\infty}\frac{\sqrt{p^2+(\alpha_n L)^2}}{p^2+p+(\alpha_n L)^2}\cos\alpha_n x\sin c\alpha_n t$$

最大の張力は $x=0$, すなわち確保點の附近に生じる.

$$f(0,t)=4\sqrt{WKp}\sum_{n=1}^{\infty}\frac{\sqrt{p^2+(\alpha_n L)^2}}{p^2+p+(\alpha_n L)^2}\sin c\alpha_n t$$

ここに α_n は方程式 $\alpha_n L=p\cot\alpha_n L$ の根で, 絶對値の小さい方から順序に番號をつけるものとする. したがつて $n=1$ のときは $\alpha_1 L$ は非常に小さいから $\sin\alpha_1 L\fallingdotseq\alpha_1 L$ かつ $\cos\alpha_1 L\fallingdotseq 1$ で, $(\alpha_1 L)^2\fallingdotseq p$ となる.

$$\therefore\quad\frac{\sqrt{p^2+(\alpha_1 L)^2}}{p^2+p+(\alpha_1 L)^2}\fallingdotseq\frac{\sqrt{p+1}}{\sqrt{p}\,(p+2)}\fallingdotseq\frac{1}{2\sqrt{p}}$$

つぎに $n>1$ のときには, $\alpha_n L$ は上記方程式により $(n-1)\pi$ よりわずか大きい數値で, n が大になるほど $\alpha_n L$ は $(n-1)\pi$ に近づくものであるから, $(\alpha_n L)^2$ に比して p^2 および p を無視して,

$$\frac{\sqrt{p^2+(\alpha_n L)^2}}{p^2+p+(\alpha_n L)^2}\fallingdotseq\frac{1}{\alpha_n L}\fallingdotseq\frac{1}{(n-1)\pi}$$

したがつて,

$$f(0,t) \fallingdotseq 2v\sqrt{WK}\ \sin c\alpha_1 t + \frac{4v\sqrt{WKp}}{\pi}\sum_{n=2}^{\infty}\frac{\sin c\alpha_n t}{n-1} \qquad (5)$$

右邊第一項は $c\alpha_1 t=\pi/2$ において最大値 $2v\sqrt{WK}$ となり，（4）式と一致する．

第二項以下については，振幅最大の第二項でさえも，第一項に比しては非常に小さなもので，たとえば落下距離 10 m の場合，第二項による最大張力は第一項の最大値の 6 %に過ぎず，落下距離が 100 m でも 18%である．（ただし落下重量 =60 kg，ザイル重量は 10 m につき 1 kg として計算）またザイルは彈性體と異り，張力が減少しても伸びはほとんど減少せずに，伸びつぱなしになるものであるから，通常ありうべき墜落の問題を取扱うには，伸びおよび張力が波動的に傳播することによつて，ザイルに生じる張力はさほど變らないと考えて良い．すなわち，ザイルは衝撃を受けたときでも，全長にわたつて一様に伸びると考えて計算しても，大きな誤りはないであろう．

(C) 間接確保

ふたたび（3）式にもどり，これを利用して間接確保の場合の張力を計算して見よう．この場合 緩衝部における歪みもザイル張力に比例するものと考え，また緩衝部は長さを有せず，緩衝部が存在することによつて落下距離は緩衝部の歪みだけ増加するものとする．

いまある緩衝作用が存在するとして，ザイルの長さ L を適當に選んで，その伸びと緩衝部の歪みとが等しいようにすると，この場合にはザイルの伸びが 2 倍に増加したのと同じことになり，（2）式により K の實效的の値が半分になると考えてよい．つぎに緩衝部はいまと同じで，ザイルの長さだけが n 倍になつたときにも，これと同樣に考えて，伸びが $(n+1)/n$ 倍になるから，K が $n/(n+1)$ 倍になつたと考える．そこで（3）式は

$$F_n = W\left(1+\sqrt{1+\frac{4nK}{(n+1)W}}\right)$$

つぎに，任意の距離の落下による張力を求めるため，くり出されているザイルの長さを l として，$l=nL$ とおけば，

$$F_n = W\left(1+\sqrt{1+\frac{4lK}{lW+LW}}\right)$$

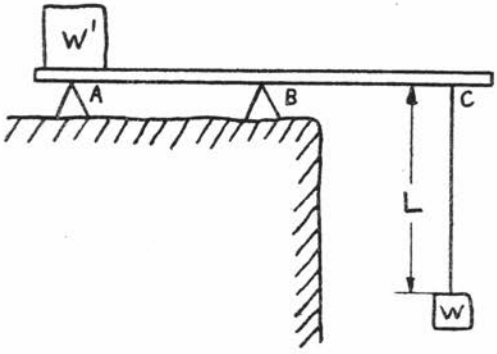
また（2）式により $Lf=Ky$ であるから，いま基準長さ L のザイルに，落下重量 W を靜かにぶら下げたときの伸び（これは假定によりそのときの緩衝部の歪みの量に等しい）を y_0 とすれば，$LW=Ky_0$ である．これを上式に代入すれば，

$$F_n = W\left(1+\sqrt{1+\frac{4lK}{lW+y_0K}}\right) \qquad (6)$$

この式から明らかなように，F_n は落下距離が非常に小さい場合に限り低い値をとり，l の増加とともに急激に増加する．たとえば，装備重量 60 kg のトップが，2 m 垂直に前進して墜落したとする．$K=6,000$ kg と假定して，このときの張力を計算して見よう．確保者はボディ・アンカーを行い，60 kg の靜荷重によつて 30 mm 屈身するものと仮定すれば，上式に $l=2,000$ mm，$y_0=30$ mm を代入して $F_n=820$ kg を得る．これは確保すべくあまりにも大きなザイル張力で，この程度の緩衝作用では，あまり役に立つとはいえない．以上は大ざつぱな近似計算ではあるが，とにかくザイルが切斷するほどの大きな張力が生じるか，あるいはその前に，確保者がスタンスからはたき出されることは明らかである．ボディ・アンカーの緩衝能力を過信することはいましむべきである．

§ 3　模型による實驗

以上の議論を實證的に確めるため，簡單な實驗を行つた．裝置の要點は第 1 圖に示す通



第　1　図

りである．まず梁 AC を支點 B をもつて，平衡を保つように支え，つぎに梁の任意の位置 A にもう一つ支點をおき，$AB=BC$ なるような點 C に，落下せしむべき錘 W を，試驗すべき紐によつてつり下げる．このため梁の平衡が失われるから，A の上に適當な錘 W' をおく．

實驗の操作としては，錘 W を C までもち上げて落下させる．（垂直登攀における墜落に擬するならば，W は紐の長さ一杯に C よりも上方にもち上げるべきであるが，操作の都合上上記のように行つた．）このとき紐に生じる張力によつて，W' は上向きの力を受

けるが，W' の重量を適當に加減することによつて，梁が支點 A からごくわずか浮くように調節しておけば，紐に生じる張力は大體 W' に等しい．

實際の裝置としては，小型の臺秤を利用し，支點 A を電氣接點とする回路を作り，つねに電流計に電流を通じておくようにした．衝撃によつて A 點がわずかでも離れようとすると，接點の電氣抵抗が大になり，電流計の針が動くことによつて，これを知ることが出来る．

この裝置において梁 AC が剛體であるならば，裝置は直接確保の狀態になり，AC が彈性體であるならば，これは間接確保の實驗裝置となる．いまの場合，AC は眞鍮の目盛棒であるから，麻紐のように伸びの悪い紐の場合には，間接確保の結果を示したが，ゴムのように伸びのよい紐の場合には，梁はこれに對して相對的に剛體に近いから，大體直接確保における議論を實證したような結果となつた．

(A) 麻紐の場合

試驗片としては，第1表備考に示すような包裝用の麻紐を使用，結果は H に示す通りである．紐の張力增加の傾向は（6）式によるものと大體似ている．

第 1 表

種別	L mm	W' gr	$2W'/W$	備考
麻紐 (H)	50	1,900	84	$W=45$ gr 試驗には終始同一の紐を用い，L の大なる方より測定を始めた． 紐の抗張力≒12 kg，伸び≒5%（試驗片長さ 170 mm にて），K≒240 kg
	85	2,200	98	
	140	2,500	111	
	243	3,300	147	
	335	4,000	178	
	540	5,000	222	
	745	6,000	266	
	1,100	7,000	311	
	1,430	7,300	324	
	1,735	7,400	329	
ゴム紐 (G_1)	60	610	9.8	$W=125$ gr 紐の抗張力 $=4\sim10$ kg, $K=2,700$ gr（$L=1,430$ mm のとき W の靜荷重により測定）
	120	620	9.9	
	220	630	10.1	
	390	630	10.1	
	800	630	10.1	
	1,340	630	10.1	
ゴム紐 (G_2)	65	750	6.5	$W=230$ gr $K=2,000$ gr（$L=1,420$ mm のとき W の靜荷重により測定）
	175	750	6.5	
	350	760	6.6	
	580	765	6.7	
	910	785	6.8	
	1,100	790	6.9	

この實驗においては，落下距離は紐の長さに等しいが，落下重量Wが半分すなわち22.5 gr であつたと考えれば，W' は$W/2$ が紐の長さの2倍落下したときの張力に大體等しいから，この見地より表に $2W'/W$ なる一項を入れ，紐の張力と落下重量との比を示した．これにより，伸びの悪い紐によつて直接確保を行うと，張力が落下重量の 300 倍以上にも達することがわかる．

つぎには同じ紐を使つて，紐が1本の場合と，2本の場合との相違を調べた．紐が2本になれば，同一の張力で伸びが小さくなるから，(3) 式における K が大になり，(3)式によつて張力が大になることが推察される．實驗の結果もこれを明らかにした．紐の長さ 910 mm で，同じ距離を落下させたのに對して，紐が2本のときは $W'=3,500$ gr で，1本のときは $W'=3,000$ gr であつた．紐が2本の場合その長さが不同であるならば，張力は1本の場合にくらべて何等増加することはない．これは二重ザイル使用に際して注意すべきことで，トッブが墜落したとき，同時に2本のザイルに張力が生じないように，一方のザイルをいくらかたるませておく必要がある．

(B) ゴム紐の場合

試驗片としては，第1表備考に示すような，斷面の形が底邊 2 mm 高さ 2.5 mm の二等邊三角形をなす黒色のゴム紐で，紐の長さ 1,400 mm に對しその重量は 9 gr であつた．實驗の結果は第1表 G_1 および G_2 に示す通りで，落下距離 L が増加しても，張力 W' はほとんど増加しない．

G_1 と G_2 との實驗を比較すると，W が 125 gr から 230 gr に 1.84 倍増加したのに対し，最終の張力は 630 gr から 790 gr まで 1.25 倍増加した．1.25 は 1.84 の 0.37 乗である．しかるに彈性體は(4)式により，張力が落下重量Wの 0.5 乗に比例するものであるから，ゴム紐はこの實驗の範圍においても，彈性體であるとはいえないわけである．なお G_1 と G_2 との兩實驗に對し，同一の紐を試驗片として供したが，第1回と第2回との間には約1月の間隔をおいた．

第2回實驗後，このゴム紐について (2) 式における比例常數Kを測定した．このとき $W=230$ gr，$L=1,120$ mm として，衝擊による場合 $W'=800$ gr で $K=1,170$ gr であつた．$W=800$gr の靜荷重による場合には $K=1,020$ gr を得た．すなわち同一の張力に對して，衝擊による場合の方が伸びが少い．

§ 4 實技上の問題

(A) 傾斜地における墜落

滑落面が摩擦係數が一様な平面であるとすれば，落下の加速度 a は，重力の加速度を g，斜面の傾角を θ，摩擦係數を μ として，

$$a=g(\sin\theta-\mu\cos\theta) \qquad (7)$$

で示される．ある距離を垂直に無抵抗で落下して得る運動エネルギーを100とすれば，傾斜地を同一距離落下して得るエネルギーは $100\,a/g$ である．これを（7）式により計算して示すと第2表のようになる．

第 2 表

傾角	摩擦係數				
	0	0.1	0.3	0.5	0.7
20°	34	25	6	0	0
40°	64	57	41	26	11
60°	87	82	72	62	52
80°	98	97	93	90	86

つぎにはふたたびザイルを彈性體と假定して，（3）式の W の代りに，Wa/g を代入すると，つぎのようになる．これは直接確保に對するもので，$W=70$ kg，$K=6,000$ kg と假定してある．

a/g (%)	5	10	20	50	100
F (kg)	293	416	593	952	1,365

これと第2表とを對比すれば，傾角が20°程度の緩斜面であろうとも，斜面の摩擦が小さい（たとえば堅氷雪）ときには，直接確保を行つてはザイル切斷の可能性がある．またボディ・アンカー程度の緩衝手段では，數 m の墜落を支えることも困難であろう．

第2表によれば，60° 程度の急斜面における滑落によつて，ザイルに生じる張力は，ほとんど垂直墜落の場合に匹敵する．また摩擦係數が小さい場合には，40° 程度の緩斜面でも，摩擦によつて大して運動エネルギーが吸收されない．したがつてこれらの場合には，垂直壁に對すると同樣の態度をもつてのぞまなければならない．

傾斜が一樣な場合については以上のようであるが，斜面がコンケーヴの場合には，同一垂直距離の落下によつて得る速度はいくらか小さく，コンヴェックスの場合には反対に大きくなる．しかし実際の墜落の場合には，このような些細な力學上の比較よりも，墜落者が自ら墜落を阻止せんとする確保動作が大切で，力學的には當然失敗しそうな確保法によつて，無事墜落が阻止しえた例があるのは，この墜落者の自己確保による所が大きかつたものであろう．

以上舊來の確保法の立場から，斜面の傾斜角というものが，大して確保を容易にしないものであることを明らかにしたが，後述の制動確保によるときは，傾斜がゆるくなるということは非常な利益になる．これは§5において明らかになるであろう．

(B) トラヴアース中の墜落

垂直壁の水平トラヴァース中にトップが墜落したとする．このときザイルにたるみがないものとすれば，墜落者は振子のように振られ，その圓周速度は確保點の眞下において最大となり，ザイルの長さをLとすれば$\sqrt{2gL}$である．このときの遠心力は $2W$ となるから，ザイルの長さに無關係である．したがつてザイルに生じる張力は，この遠心力に墜落重量 W を加えたもの，すなわち $3W$ である．

この場合には，ザイルは何等衝擊的の力を受けることなく，しかもザイルの伸びが如何に悪い場合でも，張力は $3W$ を越えない．したがつて外に問題がなければ，直接確保を行つても安全であるということになるが，しかし墜落者の圓周速度が十分大きくなつた後に，ザイルが（とくに墜落者に近い部分が）何等かの障害にひつかかつたとすれば，ザイルには大きな張力が生じ，場合によつては垂直墜落と同程度のザイル張力を生じ，切斷する可能性は十分にある．したがつて確保法においても直接確保に近い方法は避けるべきである．また墜落者が確保點の眞下附近で岩等に激突したとすれば，このときの衝突速度は，ザイルの長さだけ垂直墜落したときの落下速度と同じであるから，重大な結果を生じるであろう．水平トラヴァース中の墜落によつて生じるザイル張力は，一般には落下重量の3倍以下であるが，場合によつては垂直墜落と同等の確保困難および危險が生じることを記憶しておく必要がある．

斜トラヴァース中よりの墜落に關しては，まず下降中の墜落は，確保が一層容易になるだけであるから，問題にしないで，斜上方へ登行する場合について考える．このときトップが墜落すれば，最初にザイルがたるみ始め，ある距離落下したときにザイルが急に緊張し，それ以後は振子になるわけである．この場合最も危險なのはザイルが緊張する瞬間で，このときザイルには衝擊的張力が生じ，しかもその方向は斜であるから，舊來の確保法によるときは，確保者がスタンスからはたき出される可能性が至つて大きい．この張力の大きさは§1の原則に從う．ふたたびザイルを彈性體と假定し，$W=70$ kg，$K=6,000$ kg とすれば，水平方向に 45° 上向きのトラヴァースより墜落して生じるザイル張力は 770 kg（直接確保）である．すなわちザイル切斷の可能性は十分ある．トラヴァースの確保といえども，舊來の方法に從うときは，案外困難なものである．またザイルのたるみ

は，確保に際して非常に有害なものであるから，水平および斜下方へのトラヴァースのときも，出來るだけたるみを少くする必要がある．

つぎに墜落者が水平の位置から落下し始めて，確保點の眞下に達する所要時間を計算すると $1.854\sqrt{L/g}$ となる．もし垂直距離 L だけ落下したとすれば，所要時間は $\sqrt{2L/g}$ であるから，兩者の比は 1.31 に過ぎず，墜落を始めてから，確保者が何等かの手段をとろうとするような暇はないはずである．

以上の議論を實證するために，第1圖の裝置を利用して實驗を行つて見た．まず紐が水平になるように錘 W を横にもつて行き，そこで手をはなして，W が圓弧を描いて落下するようにし，そのときの W' を測定した．紐は前記の麻紐を使用し，$W=95\,\mathrm{gr}$ のとき

$$W'=285\,\mathrm{gr}=95\times3\,\mathrm{gr}\qquad(L=665\,\mathrm{mm})$$

$$W'=270\,\mathrm{gr}=95\times2.84\,\mathrm{gr}\quad(L=1,615\,\mathrm{mm})$$

を得た．また W が落下する途中で，紐が何等かの障害にひつかかると，そのとき強い張力が生じて，W' がはね上げられることも明らかに認めた．

(C) 固定綱としてのザイル

固定綱には一般には衝撃がかかることがないと考えられているため，古ザイルやいい加減な補助ザイルが使用されていることがある．しかし固定綱の受ける荷重は單なる靜荷重ではなく，むしろ衝撃的荷重を受ける場合が多い．これは實際の使用狀況を考えれば明らかなことで，使用者の腕や身體が相當有效な緩衝作用を有するけれども，使用者が小距離ずつの墜落をするのと同じような場合が多いから，荷重としてはむしろ衝撃として取扱わなければならない．

いま長さ L の固定綱において，垂直距離 h だけ墜落したとすれば，直接確保に對しては（3）式がつぎのようになる．

$$F_h=W\left(1+\sqrt{1+\frac{2Kh}{WL}}\right)\tag{8}$$

隊員の裝備重量を 90 kg（24 貫）とし，$K=6,000\,\mathrm{kg}$ とする．ザイルの抗張力 F_h を，古ザイルとして 300 kg とすれば，$h/L\fallingdotseq0.03$ を得る．$L=10\,\mathrm{m}$ とすれば落下距離 $h=0.3\,\mathrm{m}$ で，このザイルは切斷の可能性がある．岩登りの下手な者にとつては，この1尺程度のずり落ちはたびたびありうることで，固定綱だからといつて油斷は出來ない．

固定綱はかならずしも垂直壁に使用されるわけではないが，緩傾斜の岩場といえども，部分的には垂直またはオーヴァーハングと見なされる所が多い．またかかる部分において

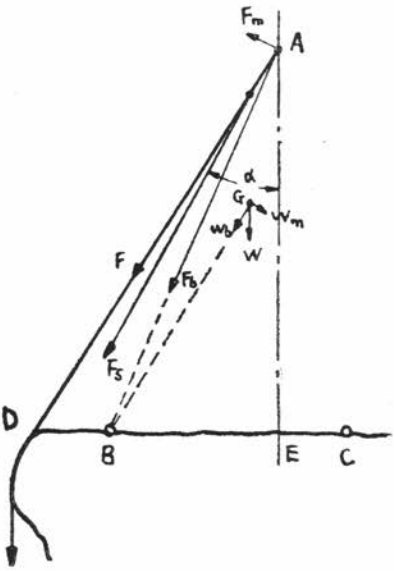
は，使用者の側にとつても，握力の問題に注意を拂わなければならない．手袋を使用して1本のザイルをただ握るだけでは，せいぜい 20 kg 程度の摩擦力しか生ぜず，狀況の悪いときには 10 kg 以下となろう．したがつてこのような場合には，面倒でも正規の懸垂姿勢をとらなければならぬ．なお以上の議論はそのまま懸垂の問題に對しても適用される．

(D) 確保姿勢について

確保の姿勢としては，わが國においては，肩確保法が廣く用いられているので，それについて力學的に檢討して見よう．

まず上方への確保法（トップがハーケンを使用した場合）としては，肩確保はほとんど居をなさず，確實にアンカーが行われていたとしても，確保者は宙につり上げられ，肩確保本來の效果は失われる．

下方への確保として肩確保を圖解すると第2圖のようになる．A はザイルがかかるべき肩，B および C は足の壓力中心，G は確保者の重心である．AD をザイルとして，これに F なる張力が生じた場合を考える．AD が B と C との間を通れば，一般には安定した確保が行えるが，通常これは望めないことである．F を AB 方向およびこれと直角な方向に分解し，F_b および F_m とすれば，モーメント $F_m \times \overline{AB}$ は，確保者を B を中心として反時針方向に回轉せしめようとする．つぎに確保者の體重 W を GB およびこれと直角な方向に分解し，W_b および W_m とすれば，モーメント $W_m \times \overline{GB}$ は，確保者を B を中心として時針方向に回轉せしめようとする．



第 2 圖

したがつて確保者がザイル張力によつて，回轉せしめられないための條件は，

$$F_m \times \overline{AB} < W_m \times \overline{GB} \qquad (9)$$

つぎに F と W との合力を F_s とし，F_s が垂直線となす角を α とし，また靴と岩との摩擦係數を $\tan\lambda$ とすれば，確保者が F の水平分力によつて，左の方へ滑走せしめら

れないための條件として，

$$\alpha < \lambda \tag{10}$$

肩確保を成功させるための第一條件は，以上の（9）および（10）式を同時に滿足せしめることである．肩確保によつて，ある程度以上の距離を墜落するトップを阻止するためには，いかに少く見積つても，500 kg 以上の張力に耐えなければならないであろう．$\overline{AB}$ と $\overline{GB}$ との比は大體 3：2 で，およそ一定しているから，（9）式を滿足せしめるためには，體を後に强くそらせて，F_m を小さくする必要がある．しかし實際には靴が邪魔になつて $\angle DAB$ はある程度以下に小さくすることは出來ず，またこのようにすると，α が大きくなつて，（10）式が滿足せしめられなくなる．すなわち互に矛盾するような條件を滿足せしめなければならないことになる．張力が至つて小さい場合（たとえば後述の制動確保におけるような場合）以外には，この肩確保が成功するためには，靴を適當な凹角にひつかけて，體をひどく後に反らせなければならない．またこのようなことが可能な場合にも，筋力が落下による大張力に耐えるかどうかが問題で，これに耐えたとしても，ザイルの方がまた危い．すなわちトップに對する確保法としては，單なる肩確保は，極めて好條件の墜落以外にはほとんど役にたたない．

かつて筆者は 40° 程度のスラブを，約 20 m 滑落したトップを，アンカーなしの肩確保で止めた例を目擊したことがある．しかしこれとても決して容易なものではなく，確保者が引きずられて 1 尺も滑走したが，さいわい足場も廣く，確保者が 2 人がかりであつたから確保しえた．このような實例を見た者は，肩確保が相當有效なもののように誤解しがちであるが，この例を力學的に推算して見るに，ザイル張力は大きく見ても 300 kg 以下であろうと想像された．したがつて確保者 1 人平均 150 kg 以下の力に耐えただけのことである．このときもし確保者が滑走せずに，足場にこらえていることが出來たとしたら，ザイル張力は增大し，確保者は回轉せしめられ，確保はむしろ失敗に歸し，悲慘な結果を生じたであろう．確保者が適當にスリップしたことが，むしろ好結果を生じたわけである．

以上の議論は，第 2 圖の力の系統が一平面上にあるものとして考えたが，B がザイル AD と垂直線 AE とがなす平面上にないとすれば，確保者は垂直軸のまわりに回轉せしめられる．これは經驗の淺いクライマーの確保に良く見る所である．これを防ぐには，肩，前足およびザイルが，大體同一垂直平面上にあるように姿勢をとれば良い．

§ 5　制動確保

間接確保における緩衝手段として，ボディ・アンカー程度の彈力を利用する限り，わずかな墜落距離によつて大きなザイル張力を生じ，確保することは不可能になる．しかし緩衝手段として摩擦を利用することにすれば，緩衝作用は如何程でも大きくすることが出來，ここに述べる制動確保を適當に用いれば，大距離の墜落をも容易に確保しうるであろう．その方法は，墜落によつてザイルに張力が生じたならば，そのときザイルをしつかりとおさえることなく，ある程度ゆるめたままでザイルを滑り出させてやる．いま垂直墜落において，ザイルの張力が f_1 に達した後は，これが一定になるように滑り出させるとすると，ザイルの伸びによつて吸收されるエネルギーを無視して，

$$f_1 y_1 = W(2L + y_1)$$

すなわち

$$y_1 = \frac{2LW}{f_1 - W} \tag{11}$$

なるように，ザイルを長さ y_1 だけ滑らせれば，墜落は阻止されるわけである．このときザイル張力 f_1 として，ザイルおよび確保者が容易に耐えうる程度のものをとれば，確保は安全に行われることになる．

これと同一原理による確保法を，米國においては Dynamic Belay と稱している[1]．米國の著者は $W = 150$ lbs (68 kg) に対して $f_1 = 600$ lbs (272 kg) を推賞している．ザイルの抗張力は後述するように，公称抗張力 1,200 kg のものに對して實用上 500 kg またはそれ以下と考えなければならないが，上述の 272 kg という假定はこれに對して妥當のように思われる．しかしこれは f_1 の値が所望の通り得られ，かつ確保の間，終始一定に保たれた場合にのみいえることであつて，實際にはこのことは非常に困難な問題である．現に Wexler 氏の行つた實驗を檢討するときは，この 272 kg という數字は，一般的には決して安全なものではないことが明らかになる．註(1)の文献 394 頁（岳人 646 頁）における實驗報告によれば，第1回目に落下重量 147 lbs で落下距離 5 ft，滑らせたザイルの長さ（今後これを制動距離と呼ぶことにする）は 7.5 ft である．(11) 式の y_1 に制動距離，$2L$ に落下距離，W に落下重量を代入すれば $f_1 = 245$ lbs を得る．しかるに記事によれば，そのときの張力實測値は 500 lbs であつた．同様にして4回の實驗における張力の實測値と計算値とを對照すれば，

	張力計算値 lbs	張力實測値 lbs
第1回	245	500

第2回	220	<400
第3回	206	<400
第4回	227	500

第 2,3 回目の実験では，動力計の測定可能範囲以下であるから一応これを除外して，第 1,4 回目の實驗においては，實測値は明らかに計算値の2倍を越えている．實際にはザイルの伸びによる緩衝作用もきいてくるから，張力は (11) 式による計算値よりもむしろ小さいはずで，それがこのような結果を示したというのは，確保中の制動力が一定に保たれなかつたことを意味する．この点を考慮すると，制動確保におけるザイル抗張力は，(11) 式による制動力の計算値 f_1 の少くとも2倍以上なければならない．かくして制動力 f_1 に対して 600 lbs という數値をとるということは，新しい優秀なザイルに対してのみ可能なわけであるが，實際の場合には制動力を予期通りの數値になるように操作することは，相當に困難な仕事であるから，この 600 lbs という數値は，一般的にいつて決して安全なものではないと結論される．

以上の検討，ならびに實際に山で用いられるザイルの強度を考慮して，制動力 f_1 としてはまず 200 kg 程度に落着くのではなかろうか．いま計算の便も考え，これを 210 kg とし，$W=70$ kg と假定すれば，(11) 式により $y_1=L$ となる．すなわち垂直壁の直登に對して，トップと確保者との間の距離 L に等しい長さだけ，ザイルを制動しながら繰り出すわけで，この方法によれば，40 m のザイルを使用する場合，一ピッチの最大前進距離を 20 m 以下にとどめれば良いことになる．確實なハーケンおよびカラビーナが使用されているときには，制動用ザイルの長さは，トップが最上部のハーケンより，上方に進んだ距離だけ残せば良い．斜面に傾斜がある場合には，たとえばいまこれを 40° とし，摩擦が全くないものとしても，墜落の加速度は垂直の場合の 64%(第2表參照) になるから，このときは落下重量 70 kg が 45 kg に減つたとも考えられ，制動距離は垂直墜落のときの55% で濟む．また $y_1=L$ なるような制動を行うとすれば，制動力は 135 kg 程度で良いわけである．直接確保またはボディ・アンカー程度の間接確保の場合には，傾角が小さくなつてもザイル張力はそれほど小さくならないが，制動確保の場合には，傾斜がゆるくなることは非常に有利である．

つぎに問題となるのは，この制動力を如何にして得るかという點である．米國の著者はこれに對して尻確保を推賞し[2]，かつ前掲書の結論において，$y_1=\frac{2}{3}L$ とせよとしている．しかしこの結論は，著者の實驗においてすでに否定されている．前掲實驗における落

下距離と制動距離とを對照すると，

	落下距離 ft	制動距離 ft	y_1/L
第1回	5	7.5	3
第2回	5	10	4
第3回	8	20	5
第4回	12	22	3.7

すなわち y_1/L の値は，推賞される數値 2/3 よりはるかに大きなものであるが，單なる尻確保によるときは，被服の摩擦係數および人間の握力から計算しても，また確保姿勢の安定性から考えても，$y_1=\frac{2}{3}L$ を望むことは不可能なことは明らかである．

これを可能ならしめるためには，摩擦を人體のみに頼らず，ザイルをいつたん岩・樹木・カラビーナ等にからませた後に，これをボディ・アンカーすれば良い．ザイルを適當な摩擦物體にからませれば，大張力のザイルをわずかな力をもつて支えることが出來るのである．いま摩擦係數 μ なる物體にザイルをからませ，ザイルの墜落側に f_1 なる張力を生ぜしめるようにするためには，ザイルの確保側を次式による f_0 なる力で制動すれば良い．

$$f_0=f_1e^{-\mu\theta} \tag{12}$$

ただしここに θ はザイルの接觸角で，ザイルを物體にからませたためにザイルが方向を變えた角度である．$e^{-\mu\theta}$ の値を μ および θ に應じて計算すれば第3表のようになる．$e^{-\mu\theta}$ の

第　3　表

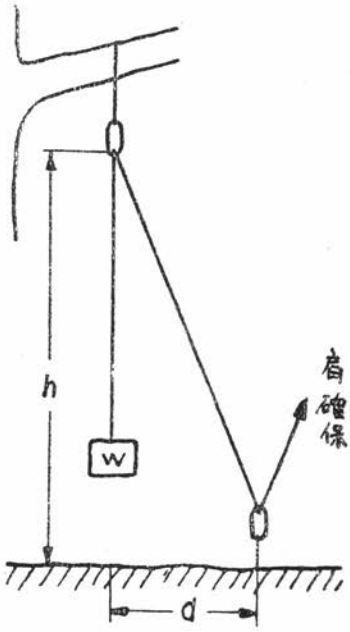
接觸角 θ	摩擦係數 μ				
	0.1	0.2	0.3	0.5	0.7
45°	0.92	0.85	0.79	0.68	0.58
90°	0.85	0.73	0.62	0.46	0.33
180°	0.73	0.53	0.39	0.21	0.11
360°	0.53	0.28	0.15	0.043	0.012
540°	0.39	0.15	0.059	0.0090	0.0014
720°	0.28	0.081	0.023	0.0019	0.00015

値は指數函數の性質として，$\mu\theta$ の値が大になるほど急激に減少するものである．換言すると，摩擦係數の小なる場合には，接觸角を增加しても確保側張力 f_0 をさほど小さくすることは出來ないが，摩擦係數が大なる場合には，わずかの接觸角の增加により，f_0 を非常に小さくすることが出來る．しかしこの場合，もし確保側を必要以上の大きな力で制

動したならば，墜落側のザイル張力が過大になり，制動距離は短くなるが，直接確保の狀態に近づくわけで危險である．

したがつて實技上の問題において最も重要な點は，摩擦力が適當であるかどうかを判斷し，墜落側のザイル張力を所望の値になるように操作することであろう．筆者の實驗においては，2個のカラビーナを使用した肩確保によつて，大體目的を達せられたが，ザイルの握り方のわずかな相違によつて制動距離が相當に變つた．これはザイルの狀態，ことに水や氷雪がついている場合に，とくにはなはだしい影響があるであろう．機に應じて岩角や樹木を利用することも必要であろうが，一般的には，一定の摩擦力を得るような方法を會得しておくことの方が大切であろう．

筆者の計畫により，日大山岳部によつて行われた制動確保の實驗は第3圖に示す通りである．落葉松の大木に捨繩によりカラビーナをかけ，同じく根を利用して下にもカラビーナを設ける．ザイルは図のように2個のカラビーナを通し，一端に墜落者 W をアンザイレンせしめ，他端は肩確保によつて制動する．はじめに墜落者を上のカラビーナまでつり上げる．つぎに墜落者を自力でカラビーナの所に止まらせておいて，確保者は所要の墜落距離だけザイルをくり出し，ここで墜落者は手をはなして落下する．確保者は肩へまわしたザイルを，皮手袋（または軍手）をはめた片手で握つて制動した．（この場合は左手であつた．）その結果は第4表に示す通りである．なお第1回には $h=4,610$ mm, $d=620$ mm, 第2回には $h=6,540$ mm, $d=1,480$ mmであつた．手袋は實驗番號24, 25 のものだけ軍手で，その外は皮手袋を使用した．



第 3 圖

確保において，衝撃が來る前からザイルを強く握つているときは，實驗番號 3, 13 等に

第 4 表

	實驗番號	落下距離 H(m)	制動距離 y_1(m)	墜落者體重(貫)	$\frac{H}{y_1}+1$	確保者
第一回	1	1.5	0.85	16.0	2.76	A
	2	1	0.70	〃	2.43	〃
	3	2	0.09	〃	23.2	〃
	4	1.5	0.98	〃	2.53	〃
	5	1.5	1.08	〃	2.39	〃
	6	0.5	0.62	16.5	1.81	B
	7	0.7	1.80	〃	1.39	〃
	8	1	0.75	〃	2.33	C
第二回	9	1	0.12	〃	9.33	B
	10	1	0.90	〃	2.11	〃
	11	1	0.21	〃	5.76	〃
	12	1	1.03	〃	1.97	〃
	13	2	0.06	〃	34.3	A
	14	2	0.75	〃	3.66	〃
	15	2	1.26	16.5	2.59	〃
	16	2.3	1.75	〃	2.31	〃
	17	3	0.85	〃	4.53	〃
	18	1	0.15	12.0	7.66	〃
	19	2	1.27	12.0	2.57	〃
	20	2	0.92	〃	3.18	〃
	21	2	0.14	15.5	15.3	〃
	22	2	0.40	〃	6·00	〃
	23	3	0.51	15.0	6.88	〃
	24	3	0.99	〃	4.03	〃
	25	3.5	0.51	〃	7.86	〃

現れているように，ザイルはわずかしか滑らない，むしろザイルが滑りはじめてから，はじめて強く握りしめるべきであろう．また第2回の實驗においては，くり出されているザイルの長さが長いから，ザイル自體の緩衝性も相當強く感じられた．したがつて，ザイル長さに比して，落下距離が比較的長くなる實際の垂直墜落の場合には，y_1/L が一層大きくなりやすいことが予想される．なお實驗番号 23～25 のものは，墜落者が墜落しながら確保側ザイルをつかんだもので，そのためか落下距離が大きい割に y_1/L が小さく，したがつて $\frac{H}{y_1}+1$ が大きい．

墜落者の側についていえば，ザイル張力が一般の確保法に比して非常に小さいから，胴に受けるショックも大したことなく，ザイルを強くしめて結ぶ限り，危険は感ぜられなかつた．しかし普通に行われているようなゆるいしめ方では，衝撃を受けたとき，ザイルが肋骨の方にずり上つて危険である．なおズボンの下に，厚い腹巻のようなものをつけることは，非常に有効であつた．

つぎに行つた實驗においては，落下物體として 70 kg の砂袋を用いた．このときは人體で實驗したときよりも重量大きく，墜落物體自體の緩衝性も小さいためか，確保の際の手ごたえは，前2回の實驗のときよりも強いように感じられたが，操作に慣れて來たため，所期の制動距離を得ることは容易になつて來た．その結果は第5表に示す通りで，手袋は

第　5　表

	實驗番號	落下距離 H(m)	制動距離 y_1(m)	$\frac{H}{y_1}+1$	確保法	確保者
第三回	26	4	3.7	2.08	肩確保	A
	27	〃	2.0	3.00	〃	〃
	28	〃	2.0	3.00	〃	B
	29	〃	2.75	2.46	〃	〃
	30	〃	2.25	2.78	〃	C
第四回	31	〃	3.9	2.02	手確保	A
	32	〃	3.9	2.02	肩確保	〃
	33	〃	1.8	3.22	背確保	〃
	34	〃	2.6	2.54	〃	〃
	35	〃	3.5	2.14	〃	〃

全部皮手袋を使用したものである．第3回における確保法は前回と同じであるが，第4回には第4圖のように，カラビーナを2回熔接した二重カラビーナを1個だけ使用した．實驗番號 31 のものは手確保（カラビーナの下方において兩手でザイルを握るだけの操作）で，32號は上方に對する肩確保姿勢であつて，ともに結果は良くない．33～35號は背確保で，上方からぶら下がつているザイルを，右わきの下を前から後にまわし，ついで背をまわしたザイルを左のわき腹の所で左手で握つて制動した．この方法では，最大制動力は一般には確保者重量程度ということになるが，二重カラビーナを用いれば，これで十分である．

第 4，5 表における $\frac{H}{y_1}+1$ は，(11)式により確保時のザイル平均張力を示す目安とな

る數値であるが，この數値によつて，確保操作が適切であつたかどうかという判定も，一應出來るわけである．たとえば落下重量が 70kg とすると，ザイル平均張力を 250 kg 以下にとめるためには，$\frac{H}{y_1}+1$ が3.5を越えないようにするのが望ましい．また 20 m の垂直墜落は，$y_1=10$ m で確保するのが目標であるが，y_1 は大きくとも 13 m 程度でとめたいものである．そのためには$\frac{H}{y_1}+1$ が2.5以上なることが必要で，結局$\frac{H}{y_1}+1$ の値が 2.5～3.5 の範圍におさまれば，まず操作良好ということになろう．落下重量が小さい場合には，この範圍は広くなり，落下重量 60 kg に對して$\frac{H}{y_1}+1=2.5$～4，50 kgに對しては$\frac{H}{y_1}+1=2.5$～5 で差支えないであろう．

第　4　圖

以上の實驗においては，確保者は必ず手袋を使用した．裸手で制動すれば，一層強い制動力が得られるかもしれないが，これは火傷の危險があるから，避けなければならない．軍手・毛糸手袋で 12 mm の乾燥マニラ麻ザイルを握つたときの制動力（動摩擦によるもの）は，筆者の實驗によれば 15 kg 前後である．皮手袋の場合はいくらか制動力が大きいようであるが，それほど大きくはならない．またザイルが細くなると，制動力は急激に小さくなり，ザイルが濡れているときは大きくなる．

§6　器具について

(A)　ザイル

ザイルを直接確保に使用するときは，いかに弱いものであるかということは，すでに§2において述べた．ここではなお一層實際的の資料によつてザイルの耐衝撃能力を調べて見よう．

いま 12 mm の大麻ザイルの抗張力を 600 kg（結び目やカラビーナを使用したものとして）とし，そのときの伸びを15%，このザイル 1 m を切斷するに要する仕事を22 kgmとすれば[3]，このザイルによる最大の墜落，すなわち 2m の墜落によつてこのザイルを切

斷すべき落下重量は，（1）式により $W=22/2.15 \fallingdotseq 10$ kg で，70 kg の落下重量を確保するためには，このザイルを7本以上要することになる．實際これだけのザイルがいるかどうかは，實驗したわけではないから確言しかねるが，つぎのような實驗が報告されている[4]．すなわち 12 mm のマニラ麻ザイル（新品）の一端を，ハーケンにかけたカラビーナに，他端を 67kg のコンクリート人形に，ボーリン結びによつてアンザイレンし，ザイル長さ 2.82 m の場合，落下距離 1.42 m でこのザイルは切斷している．この落下距離は垂直登攀時の墜落の場合の 1/4 であるから，$67 \div 4 \fallingdotseq 17$ kg の落下重量が，ザイル長さの2倍の距離を落下すれば，このザイルは切斷することを示す．あるいは 67 kg の重量がこのような墜落をすれば，少くとも4本のザイルを切斷することを意味する．

もしアンザイレンにおいて一般の結び方を用いず，アイ・スプライスのような適當な方法を用い，かつカラビーナのようなザイルの强度を低下させる要素がないとすれば，ザイルの强さをもう少し大きくとることが出來る．一例として 12 mm のマニラ麻ザイルをとり，抗張力 1,200 kg，そのときの伸びを 15%，1 m あたりの切斷仕事量を 68 kg とすれば[5]，W は 32 kg である．またナイロン製ザイル（結び目なし）では伸び 55%，1 m あたりの切斷仕事量 306 kgm であるから[6]，$W=120$ kg．この場合にのみ普通體重者の墜落を直接確保によつて阻止しうる可能性がある．しかしザイルの張力は相當大きなものになるであろうから，アンザイレンには特別の工夫が必要であろう．また普通の結び目やカラビーナを使用する場合には，この $W=120$ kg は成立せず，その場合には體重の大きい墜落者に對しては，やや危險を生じるかも知れない．

直接確保，あるいは舊來のボディ・アンカーのような，緩衝能力の小さい間接確保を論じるに際しては，ザイルの切斷仕事量は最も重要な要素であるが，制動確保においては，ザイルの抗張力が主要な問題となり，切斷仕事量はむしろ二次的に考えて良い．ザイルの抗張力は，結び目を使用することによつて大體半減するが，このことは古くから知られている[7]．また抗張力はカラビーナの使用によつても低下する．したがつて實技上の抗張力としては，新品に對してその 50% をとらなければならないが，ザイルはわずかの期間の使用により，抗張力のかなりの低下が現れ[8]，かつ製品の完全な均一性ということも望めないから，比較的新しいザイルに対して，實技上の抗張力は 40 % 以下と考えるべきであろう．12 mm のマニラ麻ザイルの抗張試驗値は通常 1,200 kg 程度であるから，實技上はこれに対して，500 kg 以下と考えなければならない．

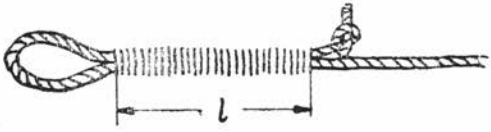
アンザイレンに際しては，トップおよびラトスは捨繩等によつてしつかりと帶をしめ，

これにアイ・スプライスとカラビーナ（確實な品であることを要する）によつてザイルをとりつけるのが良い．こうすると強度の點のみならず，着脱が早いという便が得られる．また中間者はブルージック結びによつてザイルに連結する．これによつて，トップと中間者あるいは中間者とラストの間のザイルの長さを，容易に變更しうる便があるので，實技上からもまことに便利である．これは近頃英國において Alternative Method of Roping と稱して應用されている[9]．この場合注意すべきは，ブルージック結びは，比較的細い綱でないと操作が確實に行われないから，細い綱によるブルージック結びを，その強さに應じて 2～3 個用いる必要がある．しかしこの場合には，二重ザイルの場合に述べたこととは反対に，各補助綱に同時に張力が作用するように留意することが必要で，そのためには余り短くない方が良い．

ザイルの強度試驗は多くの人によつて行われているが，その大部分は，ザイルの最大抗張力が現れるような方法で行われているようである．筆者の行つた實驗は，なるべく使用狀態に近いような條件を與えたもので，結果は第6表に示す．供試ザイルは登山用に作られたものではないが，われわれが登攀に十分使用しうると認めて常用しているもので，新品ではないがまだ十分剛さの殘つている，いわゆる比較的新しいものである．ただし1號は捨繩として使用することも禁ぜられたほどの，くたくたの古ザイルである．1～4號は兩端をブーリン結びにしたもの，5～8 號は第5圖に示すような簡易アイ・スプライスで，目玉の所にはシンブルをはめ，ザイル

第　6　表

實驗番號	結び方	抗張力 kg	備考
1	ブーリン	370	老朽ザイル
2	〃	450	
3	〃	540	
4	〃	620	
5	アイ・スプライス	700	$l=25$ mm
6	〃	700	〃 50
7	〃	740	〃 100
8	〃	800	〃 150



第　5　圖

の末端に結び目をつくり，l の部分は 25 mm のピッチをもつて，木綿紐で分割巻きしたものである．實驗の結果は 1～4 號は結び目で切斷した．5～8號はアイ・スプライス部のザイルが互に滑り，シンブルが回轉して，その突角によつて痛んだ部分が切れたようである．しかし抗張力は $l=50$ mm のものでも，明らかにブーリン結びよりは大きかつた．實驗の觀察から判定して，l は丁寧に作れば 150 mm で十分であるように思われたが，200 mm 以上にした方がより安全である．

ブーリン結びの場合には，結び方によつて切斷のしかたが異り，强度にも關係するように思われたが，少數の實驗例から結論することは遠慮する．

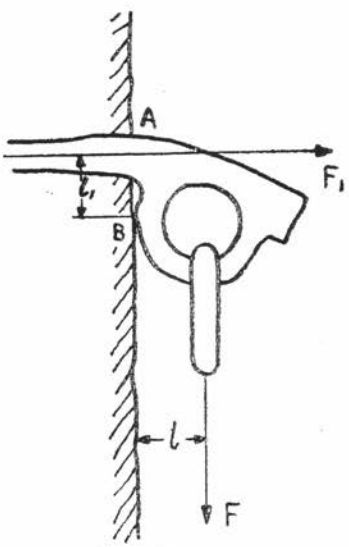
(B) ハーケン

ハーケンの使用はトップ墜落の場合，落下距離を減少せしめるのみならず，最上部のハーケンと確保點との間のザイルを，緩衝部として作用せしめるから，ザイル切斷の可能性を大いに減じる．ハーケンを適當に使用すれば，普通ザイルによる直接確保さえ可能である．しかしこれはハーケン自體が確實な場合に限られる．

まずハーケンの强さについて考えると，第6圖 A 部の巾を b，厚さを h，カラビーナと岩壁との距離を l，材料の抗張力を σ とすれば，このハーケンの首を曲げるに要する力 F は，

$$F=\frac{\sigma b h^2}{6\,l} \qquad (13)$$

いま普通ありふれた横型ハーケンの寸法として，$b=10$ mm，$h=6$ mm，$\sigma=40$ kg/mm²，$l=20$ mm とすれば，$F=120$ kg である．この程度の力は，普通體重の人がザイルに突然ぶら下がるだけで得られるであろう．ハーケンは首が曲がつただけでは，必ずしも切損するわけではないが，脆い材料の場合には危險な狀態になる．縱型ハーケンの場合には，强度はいくらか增すが，抜けやすいということが缺點である．



第 6 圖

ハーケンは以上のように弱いものではあるが，破損による事故は割合少いようである．その理由は，ハーケンが墜落の衝擊を受けたとき，破損する前に抜けてしまうという所に

あるのではなかろうか．第6圖において，ザイル張力 F によつてハーケンの首が下に曲がり，B 部が岩面に接觸したとする．こうなるとハーケン自體が挺子の作用をして，ザイル張力 F はハーケンを引き抜こうとする力 F_1 に變換される．F_1 は

$$F_1=\frac{l}{l_1}F \tag{14}$$

であるから，普通のハーケンのように l_1 が小さく，l が大きいような形のものでは，F_1 が非常に大きくなり，ハーケンは容易に抜けることになる．

このような缺點を改めるために設計したものが，**第7圖**に示すようなハーケンである．このハーケンは抜けにくい點ばかりでなく，强度においても，同寸法の普通ハーケンよりすぐれている．すなわちこのハーケンの受ける力は大體剪斷力のみであるから，抗剪力40 kg/mm² の材料を用いるとして，1,600 kg（横型）の力に耐えることになる．

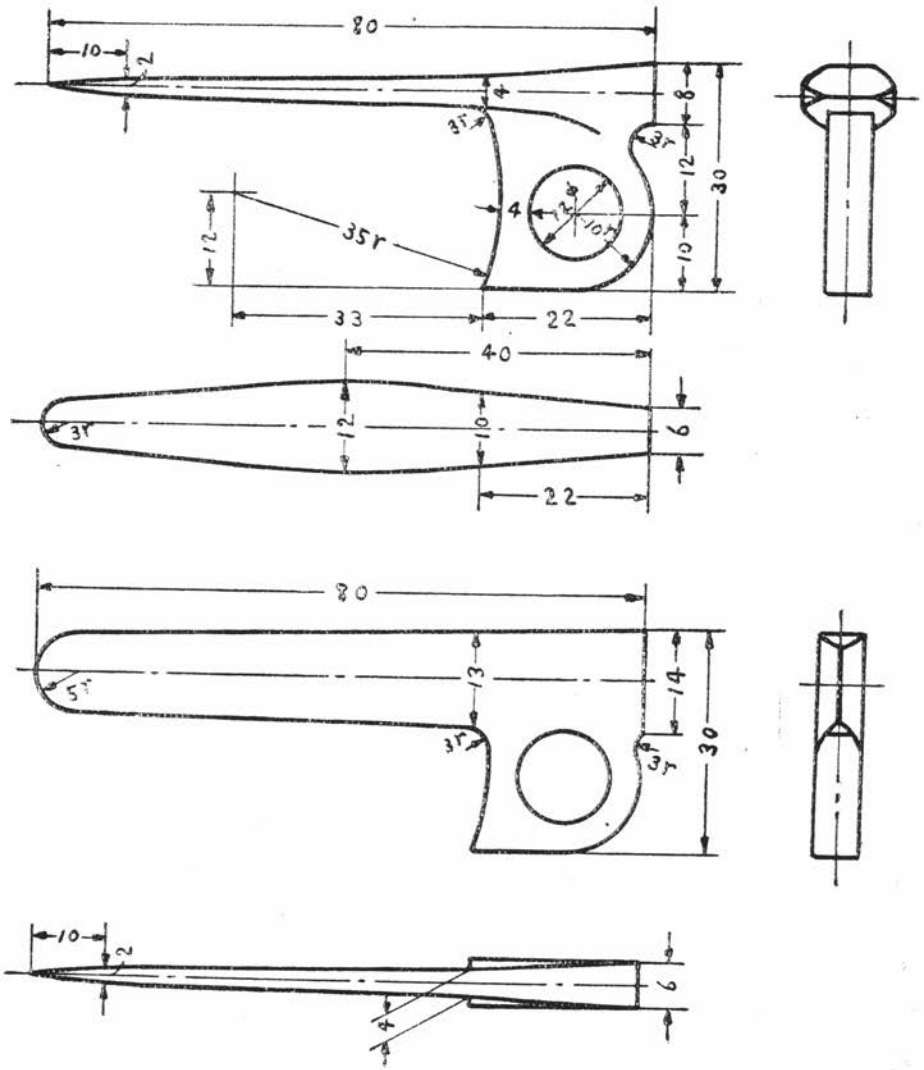
縱型ハーケンの缺點は，ザイル張力によつて下にずり落ち易いことで，一度ずれば，容易に抜ける可能性が大きくなるから，なるべく下へずらないようなクラックを選ぶべきである．

打ち込みに際し，ハーケンが歌うかどうかが，ハーケンがきいているか，きかないかを判斷する目安とされているが，これはあてにはならない．ハーケンが歌いながらクラックがだんだんひろがるような岩質もあれば，音が悪いにもかかわらず，なかなか抜けにくい場合もある．またクラックは年々氷の膨脹・收縮によつて擴大されるためか，古ハーケンは大抵ゆるんでいるので，打ち直しの必要がある．また舊型の普通ハーケンを用いるときには，ハーケンの首の形に合わせて岩を缺き，第6圖における l_1 を大きくし，l を小さくして F_1 を小さくするようにつとめるべきである．また所謂リングつきのハーケンは如何に弱いものであるか，ちよつと考えれば誰にでもわかる．信頼しうるカラビーナによるべきで，このようなハーケンを使つてはならない．

(C) カラビーナ

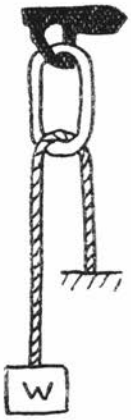
一般のカラビーナにおける弱點は，蝶番のピンおよびかみ合わせ部である．いま蝶番のピンが，カラビーナの受ける張力の 1/2 の剪斷力を受けるものと假定する．張力を F とすれば，これに耐えるピンの直徑は，ピンの抗剪力を σ，剪斷面を2個所として，少くとも次式による D よりも太くなければならない．

$$D=\sqrt{\frac{F}{\pi\sigma}} \tag{15}$$


80
10
2
4
3r
8
12
30
35r
12
4
12φ
10r
10
33
22
40
3r
12
10
6
22
80
5r
13
14
3r
3r
30
10
2
4
6

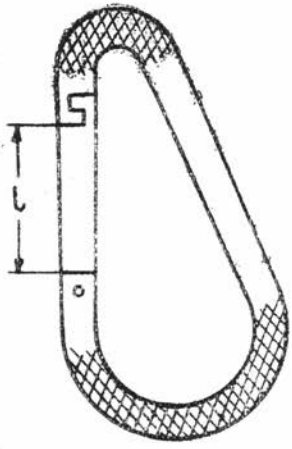
第　7　圖

いま 12 mm のマニラ麻ザイルを使用するとして，その抗張力はカラビーナを使用した場合公稱抗張力の大體 1/2であるから， 600 kg 程度と考えれば良いであろう．しかしザイルを第8圖のような方法で使用すれば，カラビーナは2本のザイルの張力を受けることになり，2倍近くの張力を考えなければならない．これに安全率を考えれば，カラビーナの受ける力は 2,000 kg 位に達するものとしなければならないであろう．このときピンの材料として，抗剪力 40 kg/mm² の炭素鋼を使用するものとすれば $D=4$ mm となる．



第 8 圖

一般市販カラビーナを調べて見るに，その大部分は以上に論じたピンの強度のみならず，ピンをはめる本體各部の寸法，かみ合わせ部の寸法等，まじめに強度計算して設計したものとは思われない．その外スプリングが弱くて，衝撃を受けたとき口を開いて伸びてしまうものも多い．これはわが國のみの問題ではないらしく，これに對してイタリーの著者は，とりあえず1個のハーケンに對して，同時に2個のカラビーナを使用するようにすすめているが[10]，カラビーナを使用するほどの危險な登攀に對しては，少くともこの程度の心づかいは必要であろう．最近の市販品には，衝撃によつて口が開かないように，安全裝置をつけたものが多くなつたので結構である．ことに D 型カラビーナは，後記切斷實驗に示すように，安全裝置なしでは使いものにならないであろう．安全裝置なしの既製品を，簡單に安全にするには，カラビーナよりもわずか太い金屬パイプを，第9圖の l よりも少し短い位に切り，これをはめておけば良い．このパイプがかみ合わせ部または蝶番部のいずれかの上にある限り，かみ合わせが開くことはない．このパイプをぐらぐらせぬように固定するには，これをカラビーナの曲線部の方向に押しつけるだけで十分で，むしろこのような原始的な方法の方が，風雪時の使用のような場合には，確實な結果を得られるかもしれない．



第 9 圖

最近のカラビーナは，ザイルの滑りが良いようにピカピカに磨いてあるものが多くなつた．しかし第9圖

にハッチングを施した部分は，制動確保における摩擦力増大という意味で，荒れている方が良い場合もあるであろう．とくにナイロン製ザイルのように摩擦の少いものに對しては，ローレットあるいはやすり目等をつけておいた方が良いかも知れない．また全體の形としては，圖のように一方の曲率半徑を小さくして，內側の半徑をザイル直徑程度にしておけば，一層摩擦力が大きくなるし，あるいは凹角に打つたハーケンに使用する場合に，便利なことがあるであろう．なおカラビーナの巾は，二重ザイルの使用を考慮しないならば，なるべく狹い方が，かみ合わせがはずれたときの强度が大である．

筆者の行つたカラビーナの引張り試驗は第7表に示す通りで，1～7 号は *A*・*B* 兩運動

第　7　表

實驗番號	型	抗張力 kg	發賣店	破　損　狀　況
1	O	1,420	A	蝶番ピン剪斷
2	O	1,670	〃	かみ合わせ部切斷
3	O	1,360	〃	蝶番ピン剪斷
4	D	960	〃	かみ合わせ部はずれる
5	D	1,180	〃	〃
6	O	1,650	B	蝶番ピン剪斷
7	D	1,240	〃	かみ合わせ部はずれる
8	O	450	不明	〃
9	O	400	〃	〃

具店より提供を受けた普通販賣品で，8～9號は古くからわれわれに傳えられたものの中から，一見いかにも弱そうな2點を選んだもので，すべて安全裝置はつけてない．結果は寸法測定から豫想されたように，ピンが剪斷されたのが多く，1個だけかみ合わせ部が切斷した．*D* 型および 8，9 號の *O* 型は，ピンが剪斷する前にかみ合わせ部が變形し，これがはずれて伸びてしまつたものである．一日も早く，安心して生命をあずけられるような器具が，一般の手に入れられるようになることが望まれる．

（註）

（1） Arnold Wexler, "The Theory of Belaying," *The American Alpine Journal*, 1950. 「岳人」43～45 號「確保の理論」

（2） R. M. Leonard and A. Wexler, "Belaying the Leader," *Sierra Club*

Bulletin, XXXI (Dec. 1946) 「岳人」41 號の「リーダーの確保」はこれの抄譯.

(3) Ing. Giulio Ravizza : ≪Per un Centro di Studi Alpinistici≫, in *Rivista Mensile Club Alpino Italiano*, N. 1-2, 1951, pag. 28

(4) A.A.J., 1950, pp. 387 「岳人」43 號 569 頁.

(5) A.A.J., 1950, pp. 384 「岳人」43 號 568 頁.

(6) A.A.J., 1950, pp. 384 「岳人」43 號 568 頁.

(7) Mountain Craft, 1920, pp. 96

(8) Mountain Craft, 1920, pp. 93

(9) J.E.Q. Barford, Climbing in Britain, *Pelican Books*

(10) R.M.C.A.I., N. 1-2, 1951, pag. 25-26

健康をまもる

日本新薬の医薬品

世界的
蛔虫駆除薬
（日本薬局方）

サントニン

10錠 100錠
1000錠
（集団用）

狭心症
喘息治療剤

コルフィリン

5錠 25錠
注射（2 c.c.）

眠りには
催眠鎮静剤

プロバリン

30錠
100錠

新脳溢血
高血圧予防剤

ミリカ

30錠
100錠

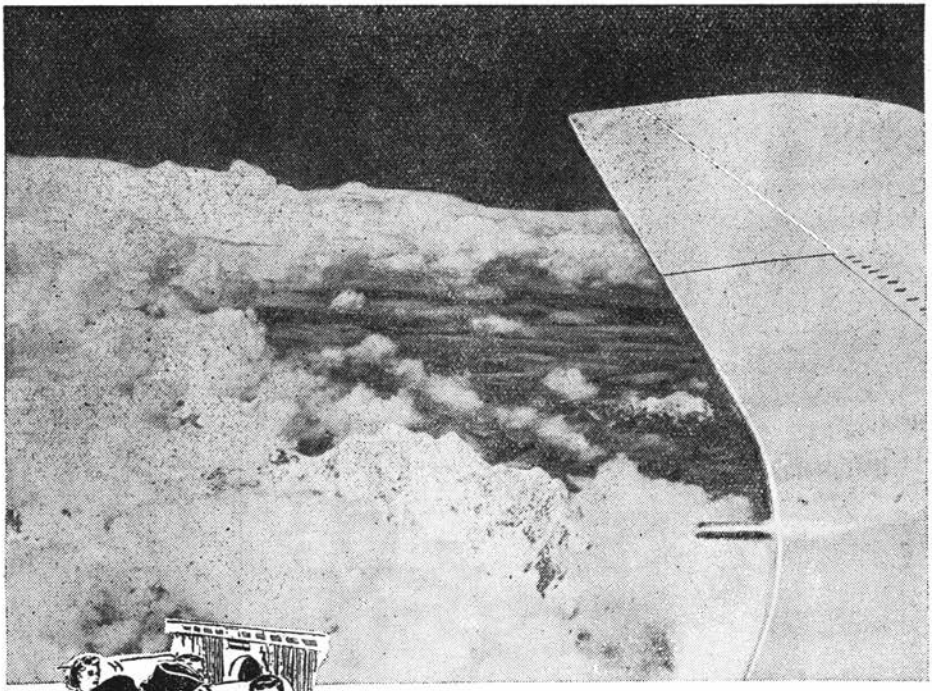
新緩下剤

エバール

10錠
50錠

製造発売元 日本新薬株式会社

本　社　京都市中京区壬生下溝町三八
支　店　東京都中央区日本橋室町四ノ二
大　阪・札　幌・富　山



ヒマラヤを望む
高度1万2千米！

空の色は濃紺に落ち……
ヒマラヤの峰を掠める高層雲もこの高さからではまるで地表にはりついているようです。この成層圏こそBOACコメットジェット旅客機の常用高度です。

36人乗り、完全にプレッシャライズされ、振動と燥音の無いBOACコメットは巡航時速八〇〇粁を出す世界で最も速い旅客機です。

現在東京—ロンドン間に就航、毎火曜23時30分東京発、両都市を一日半で結んでおります。

尚、コメット機は割増なしの普通料金で御利用になれます。

FLY B·O·A·C

東京支社 千代田区有樂町一丁目 三信ビル 電話 (57) 3906・6350
大阪支社 東区内本町橋詰町31 バスワニビル三階 電話(94)2101～4

天　幕（夏·冬用各種）

リュックサック

マット（ヘヤーロック）

シュラーフサック

ウインドヤッケ

オーバーシュー　等

製造販賣

日本山岳會ネパールヒマラヤ登山隊の天幕その他は弊店にて製作納入致しました

各大學實業山岳部御用

吉田喜義商店

東京都杉並区中通町一（荻窪驛北口下車）

電話荻窪（39）0990番（呼出）

土木建築　設計施工

株式會社 安藤組

取締役社長 安藤清太郎

本社 東京都中央區槇町一丁目七番地

電話京橋(56) 代表8686 直通6430-2

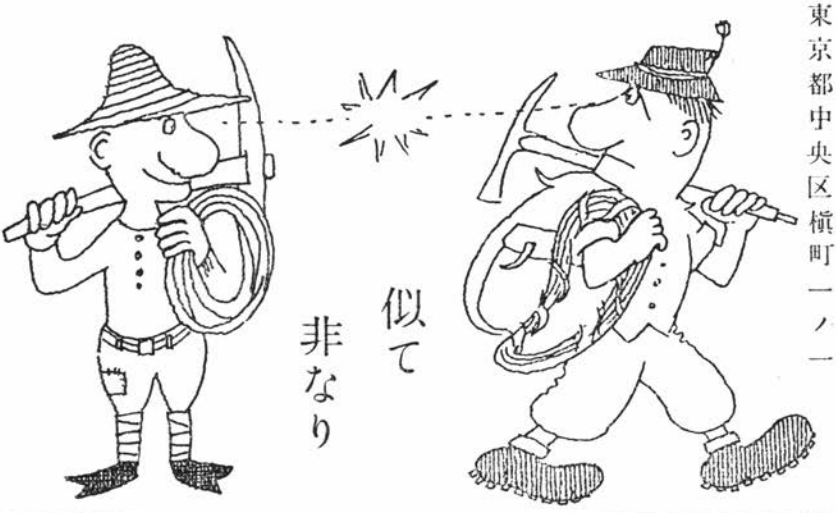
支店 大阪・名古屋・静岡・水戸・仙臺

山とスキー用具せんもん 秀山荘

プライス・リスト進呈

tel.(56)1861

東京都中央区槇町一ノ一



レストラン

フローラ

（日本山岳会御用）

日本橋・室町・三井別館地階

電 (24) 2 2 7 8

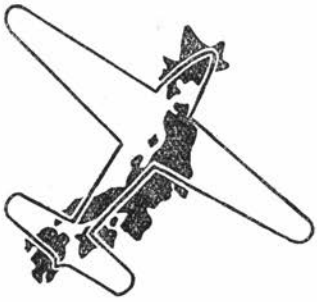
スキー靴　登山靴

専　門　製　造

森　田　靴　店

東京都千代田區神田神保町三ノ一二
電話九段 (33) 6 6 9 6 (呼出)
専　修　大　學　前

登山に航空寫眞を御利用下さい



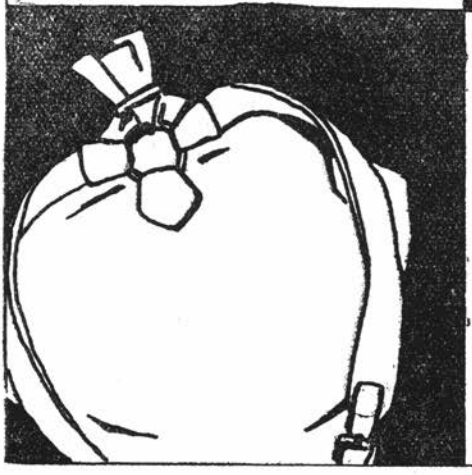
マナスル山岳圖は弊社にて寫眞測量したものです

株式會社 寫眞測量所

東京都文京區湯島四ノ一　電話小石川（92）4639

取締役社長　柴田秀雄

キスリング
サブザック



一澤帆布加工所

京都市東山區東大路
古門前上ル西側

電話祇園（6）2502

資本金 四拾壹億六千萬圓

東京瓦斯株式會社

取締役社長 高田五郎

東京都港區芝海岸通一—一五

電話 (43) 代表 〔一一一一 四一一四〕

NRC-HM-1型（登山専門用）

上の寫眞はヒマラヤ登山用に特に設計製作されたポータブルラジオ。大きさは 270mm×150mm×350mm 重さは約2キロで，小型輕量特に耐濕耐熱耐震に設計し，高周波一段6球スーパーです。受信波數は 3.5 メガサイクル～9 メガサイクル， 535～1605 KC の2バンド氣象ニュース聽取と隊員の慰安に重責を果した。

新型NRCのP-133A

本機は旅行・山岳用に適するよう堅牢且つ輕量に設計したもので，電池の壽命は長持するため，特殊な配線路にしてあります。重量 3 kg（電池付） 大きさ 213 mm×185 mm×90 mm，又，從來のキヤビネツトはプラスチツク製のものが多く，破損しやすいが，本機はスチールケースですから，絶體に破損のおそれがなく，塗裝は合成樹脂のハンマートーンで，素晴しい色調に仕上げました。

中島無線株式會社營業所

東京都千代田区神田須田町一丁目二八番地
電話神田 (25) 3494・5847　振替東京56983番

地圖・磁石・そして……

明治バター

明乳・ペニシリン　明治乳業

通

汐留航空營業所？

電話一つで！

丁寧。スピーディー

航空に關する一切の御相談は

汐　留　へ。

旅客 ― 渡航手續から羽田出發迄親切に

貨物 ― 通關手續から輸出發送迄迅速に

其の他！動植物檢査なども行ひます

輸入 ― 羽田から一通關そして皆樣のお店迄。迅速に

東京都港區芝汐留無番地

日本通運株式會社汐留支店

汐留航空營業所

代表番號 4916―(5)
〃 4931―(10)
電話銀座 (57) 〃 5176―(5) 直通 (57) 4029
〃 5786―(5)
〃 9161―(5)

定評ある

スキー靴　山靴

PRICELIST進呈

ヒマラヤ遠征隊御用

山友社

高橋靴店

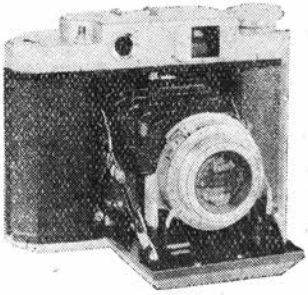
新宿区三栄町三

TEL四谷(35) 1912

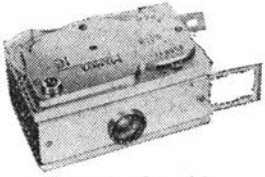
信頼の出来るマミヤ製品

マミヤフレツクス
オートマツト

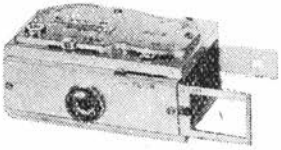
マミヤシツクス Ⅳ 型



マミヤフレツクス
Ⅱ 型



マミヤ—16

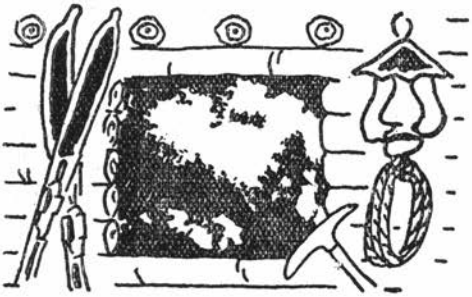


マミヤ・スーパ—16

マミヤ光機株式会社

東京都文京区本郷一の七

登山とハイキング用品



CAIRN印
登山用具

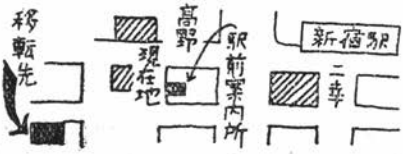
IGLU印
冬山服装

DYNAMIC印
スキー用具

輸入登山スキー用具各種取揃え

店内案内

半地下室	製靴工場（登山靴・スキー靴）
一　階	スポーツ衣類全般
中二階	野球道具及その他運動用品
二　階	登山用具・「岳人ルーム」



新宿駅前
かずみ

TEL(35)2959～2960

山とスキー用品

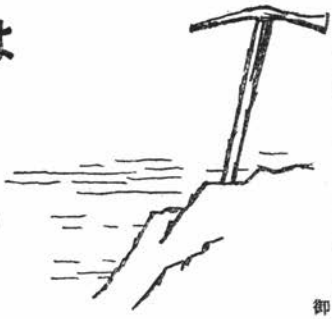
テント、ルックサック
コヘル、ランクン
ピッケル、アイゼン
ザイル、登山靴
コンバインド スキー
ニュー カンダハー
トンキン ストック
アノラック、スキー靴

山本運動具店

京都市中京區柳馬場四條上ル
TEL. 本局 2298

比良・望武小屋
北山・芦火荘の鍵連絡所

登山と旅行は



人生を明るくする

豐富な資料と経験に裏づけされた交通公社
交通公社はあらゆる御旅行の相談相手です

御斡旋は無手數料です

海外旅行のサービス
旅程と費用の作成
切符と旅館の予約

日本交通公社

石油の輸入と販賣

SI

出光興産

社長 出光佐三

本社 東京銀座東四丁目

PRICE LIST 進呈
登山とスキー具
イワタ
東京 中央区日本橋江戸橋1/7
TEL(27)
7686

業界隨一の 設備・技術・実績

千代田梱包

社長 菅谷頼道

KATMANDU
VIA CALCUTTA
JHE 1953

日本山岳会マナスル登山隊装備梱包ハ当社ニテ行イマシタ

包装設計より船積迄の綜合一貫作業

千代田梱包工業株式会社

本社 東京都中央区京橋2丁目2番地
TEL.(56)0091・1202・5757・7727・8088
支店 大阪市此花区梅町3丁目2番地
TEL.(46)1187・1696
工場 深川工場・墨田工場・大阪工場

世界交通界の生きた事典

鉄道・自動車・航空・観光各界日日の
動きは本紙を読めば一目で判ります。

日刊 交通新聞

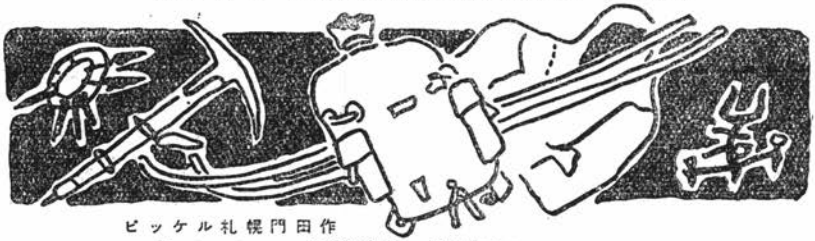
発行所　財団法人　交通協力会

東京都千代田区丸ノ内三ノ四　交通ビル
TEL　千代田(27)604・605・1064・1065
振替口座　東京　58712番

片桐のキスリング型ルックサック

キスリング型ザック

No.3	小型	1.65×2.3	¥2,600.00
No.4	中型	1.8 ×2.5	¥2,700.00
No.5	大型	2.0 ×2.8	¥2,800.00
No.6	特大	2.2×2.8	¥2,900.00



ピッケル札幌門田作

尺モノ	¥3,300.00	尺1寸モノ	¥3,400.00
リング	¥250.00	皮サック	¥450.00
アイゼン門田作各号共八本爪			¥3,300.00

放出羽根入寝袋入荷しました

山とスキー用具は全般に御用命承ります

東京都文京区
湯島天神町三の十九

片桐

電話下谷(83)1794番

片桐盛之助

東京駅八重州口より五分

吳服橋 龍名館

中央區日本橋吳服橋際
電話(27)〔二〇一一・二〇一二
五二五九

神田 龍名館本店

登行に…

項上を征服する
最後の頑張りは
心臓です。
2～3時間前に
3～6錠をのんで
置けば疲れを知
らずに登ることが
出来ます。
(詳細説明書進呈)

アゼスチン

心臓薬(製法特許)

五〇錠 一〇〇円・一〇〇錠 二〇〇円

第一製薬 東京日本橋・大阪福岡

登山にスキーに

東京田辺

お忘れなく御用意下さい!!

サロメは山やスキーツアーに忘れられぬ常備薬で思わぬ時の捻挫、打撲などにすばらしい効めを発揮します。その他筋肉の疲れに**サロメ**のマッサージ療法は廣く岳人間に定評があります。

すりこみ薬

サロメチール

20瓦：¥100

R. K. Mizuno Co., LTD. OSAKA・TOKYO

本店・大阪　淀屋橋　　支店・東京　神田小川町

日本山岳会編

マナスル

1952～3年

まえがき　槇有恒

本文

本計畫實施に至るまで　松方三郎

一九五二年踏査隊　今西錦司

一九五三年登山隊　三田幸夫

附錄

裝備・食糧・氣象・雪崩・動植物・地誌・医學的考察・寫眞・經費

寫眞八〇葉　地圖數葉

B5判　本文約150頁　寫眞50頁

表紙クロース裝　特裝本　豫價600圓

（11月中發行豫定）

毎日新聞社

技報堂理工學優良圖書案内

東京都港区赤坂溜池5　振替口座東京10

有機合成化學協會 編	有機化學ハンドブック	1,500 圓	〒50 圓
醫學博士 兒玉桂三他 編	生物化學ハンドブック	1,800 圓	〒50 圓
窯業協會 編	窯業工學ハンドブック	1,600 圓	〒50 圓
東京工業大學統計工學研究會 編	統計工學ハンドブック	1,900 圓	〒50 圓
有機合成化學協會 編	有機合成最近の進歩	上700 圓 下850 圓	〒各30
G. W. ウイーランド 永井芳男他 譯	共鳴理論 その有機化學への應用	500 圓	〒30 圓
農學博士 太田暢人 著	合成殺虫・殺菌・除草劑	450 圓	〒30 圓
工學博士 菱山衡平 著	理論・應用 近世染色學	750 圓	〒30 圓
佐々木林治郎 住木論介 著	食品製造要覽	450 圓	〒30 圓
工學博士 山内俊吉 編	耐火物の研究	450 圓	〒30 圓
工學博士 野口尚一 編	機械工作 最新機械工學圖集	1,000 圓	〒30 圓
工學博士 内丸最一郎 著	喞筒	700 圓	〒30 圓
〃	送風機及壓縮機	500 圓	〒30 圓
工學博士 横道英雄 著	鐵筋コンクリート橋	1,300 圓	〒30 圓
上野陽一 著	改裝 能率ハンドブック	1,600 圓	〒30 圓
中小企業廳 編	計數管理	350 圓	〒30 圓
上田武人 譯	動作時間標準法	400 圓	〒30 圓
上野陽一 著	監督者のありかた	300 圓	〒30 圓

★御申込みは最寄書店又は直接本社へ★

「山岳」投稿規定

一、投稿は誰でも自由である。日本山岳會員である必要はない。
一、原稿の採否は山岳編集委員會で決定する。
一、原稿は返却しない。
一、研究並に紀行には、その概要を付けること。
一、紀行には成るべく概念圖を添付すること。
一、寫眞は光澤印畫紙に燒付け、必ず説明を付けること。
一、地名、人名、數字、外國語は特に明確に記し、特殊な地名、人名等には必ず振假名を付けること。
一、編集者は原稿の一部を削除又は訂正することがある。
一、校正は編集者に一任されたい。

送り先　東京都千代田區神田駿河臺四ノ六
日本山岳會「山岳」編集部

編集委員
田邊主計
成瀬岩雄
田中栄蔵
望月達夫

一九五三年八月二十日發行
定價　四〇〇圓

發行所　東京都千代田區神田駿河臺四ノ六　日本山岳會
編集兼發行者　日本山岳會内　望月達夫
印刷者　東京都港區赤坂溜池五　株式会社　技報堂

東京都千代田區神田駿河臺二ノ一
發賣所　株式會社　茗溪堂
電話神田(25)二〇四四番
振替口座東京二四七二三番

本誌掲載の記事、寫眞及地圖の無斷轉載を禁ずる。

02. 7. 3

岳人

月刊山岳雑誌

良心的で
気のきいた
専門雑誌です！

①毎月一日発売です

②各書店・百貨店・運動具店などで売つています。

③バックナンバーは品切れの号もありますから本社へ御問合せ下さい

④月々確実に入手されるには月極めで本社刊行物課へ申込んで下さい

⑤6ヶ月以上前納御注文には送料本社負担

中部日本新聞社
名古屋市中区御幸本町二ノ二四
振替名古屋五八五四三番

定価70円 〒4円

好日山荘

山とスキー具専門店

新　輸　入

ノールウエー・エリクセンスキー一式

スエーデン・スベアガソリン、バーナー

石油バーナー

新　製　品

東洋レーヨン、ナイロン・ザイル

ビブラム(ゴム底)、登山靴

冬山新型天幕、其の他登山用品

東京・中央区・銀座西二ノ五　海野治良

振替口座東京113657番・電話京橋(56)3600番

大阪・北区・堂ビル前・協和銀行ビル三階　西岡一雄

大賀寿二

神戸・生田区・三宮町一ノ三二ノ一　島田真之介

振替口座神戸21352番

The Journal of

The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XLVIII 1953